

東京国立文化財研究所年報

1999年度

東京国立文化財研究所

— 美術部 —



黒田清輝筆「風景(グレー)」カンヴァス・油彩 1892年 (22頁参照)

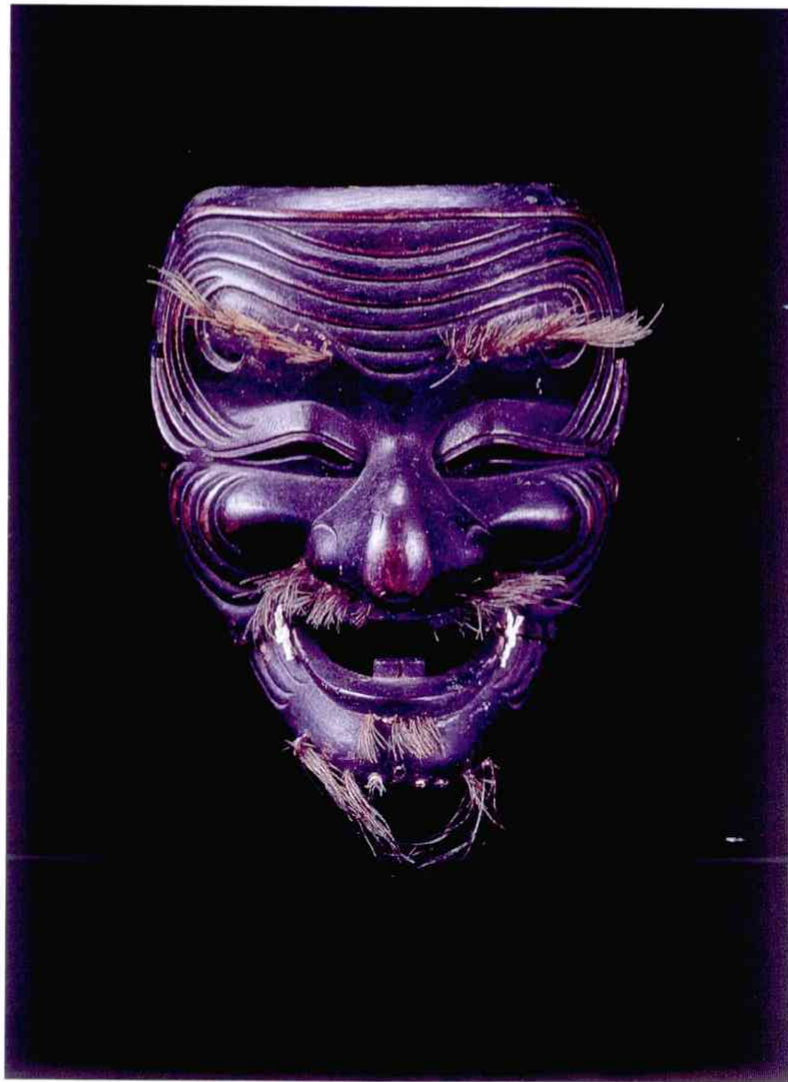


グレ・シュル・ロアン ガヌの塔 (1999年12月) (22頁参照)



黒田清輝巡回展 大分市美術館 (123頁参照)

— 芸 能 部 —



三番叟（黒色尉）伝春日作 三井文庫蔵（23頁参照）

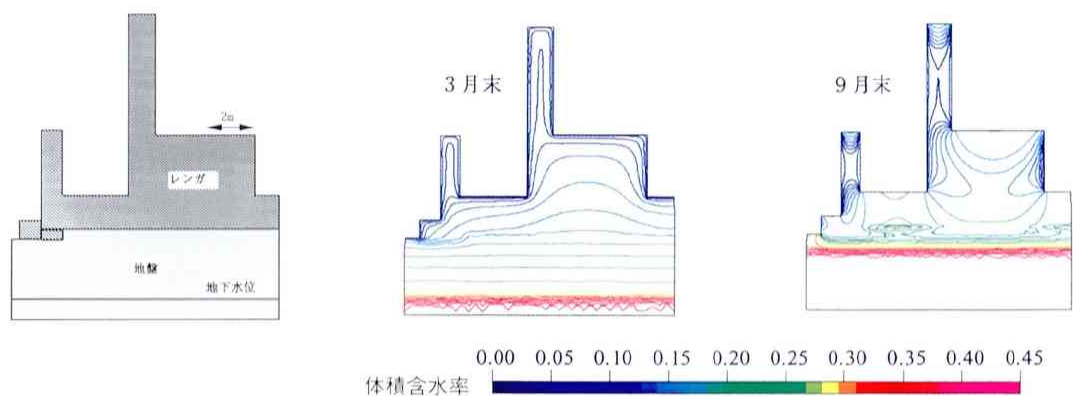


芸能部公開学術講座
藤間蘭黄氏による実演「一人椀久」
（矢来能楽堂にて）（115頁参照）

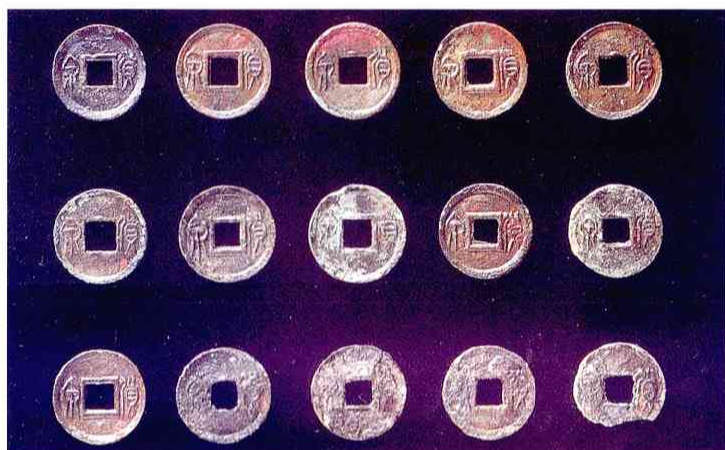


芸能部公開学術講座
観世喜之氏による実演「隅田川」
（矢来能楽堂にて）（115頁参照）

— 保存科学部 —



アユタヤの歴史的レンガ構造物中の体積含水率分布計算結果 (61頁参照)



鉛同位体比が測定された貨泉(上)および流水文銅鐸(右) (27頁参照)

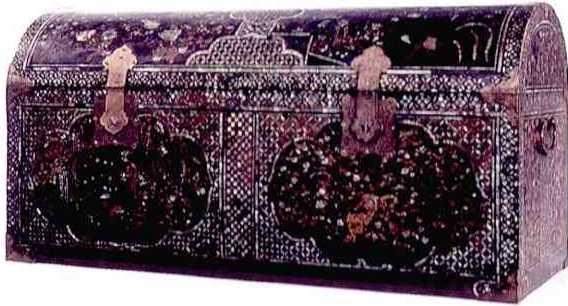


IPMの研修および研究交流が行われたロンドンの自然史博物館 (58頁参照)



低酸素濃度処理による文化財害虫の殺虫実験 (26頁参照)

— 修復技術部 —



フランス・ギメ美術館所蔵 樹下鳥獸蒔絵螺鈿洋櫃



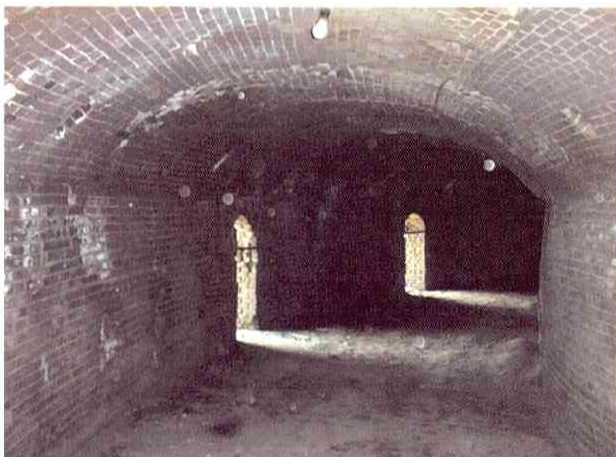
海外における洋櫃螺鈿部分の修理
修理部から貝ではなく、ビスマスが検出された(橘の部分)



巖島神社全景



巖島神社における漆手板曝露試験



重要文化財・旧下野煉化製造ホフマン式煉化焼成輪窯 内部



内部破損状況3D解析画像



ホームページにおける黒田記念館の紹介

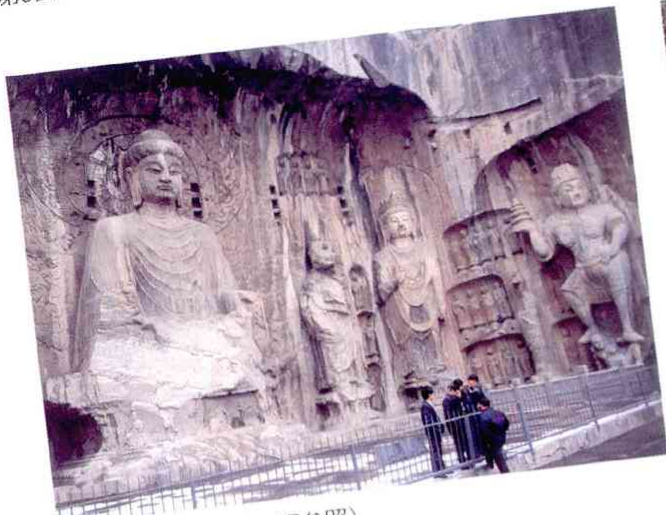


文化財に関する写真資料の作成

— 国際文化財保存修復協力センター —



第9回アジア文化財保存セミナー (86頁参照)



中国・龍門石窟 (41頁参照)



バキスタン・ラニガト遺跡 (41頁参照)



パナマ・歴史地区カスコ・アンティグオ (41頁参照)



インドネシア・ボロブドゥール遺跡 (41頁参照)

緒 言

当研究所が研究所の諸活動を年度ごとに報告する「年報」を作るようになって3年目になる。研究所や研究者の諸活動の目的と過程の情報を可能な限り公開することでは、公的機関として当然の勤めであるが、それは研究所や研究者が妥当な評価を求め得る根拠を明らかにすることであり、そうすることが外部の批判を受けとめることができ、研究所の諸活動の改善と活性化に結びつけることができるはずであると考えている。因みに、当研究所はこの年報に基づき外部有識者による研究評価を受け、また別に、同様に外部有識者によって構成される諮問委員会を開き、機関としての活動報告や、評価会の評価報告を行って機関活動に資すべき意見の聴取を行っている。活動内容の改善という点ではまだ及ばぬことがあり、先年度の問題点を繰り返した部分も存するが、この点は職員がみな認識しているところであり、次年度においては必ず改善される見通しを得ている。

研究所の研究の中期計画は従来通り維持されている。その中で研究活動が二三新しい動きがあった。その一つは受託研究として行われた「国宝・源氏物語絵巻」の自然科学的方法を用いた調査研究で興味深い成果を得たことがある。このような調査研究は私は研究所の技術力を生かした特色ある研究であると機関研究の一角に位置づけるように勤めて来たところであり、平成12年度以降においてその実現を図りたいと考えている。

また国際的研究交流の実施は当研究所の特色の一つであるが、平成5年度から日独学術研究交流として行われて来た漆工芸品の材料、構造に関する研究の分厚い立派な研究報告書がドイツで上梓された。因みに、日独学術研究交流は研究課題を改めて第2期とし、更に5ヶ年間継続することになった。日韓共同研究として行われてきた環境汚染の文化財に対する影響と、その対策としての修復技術の研究は5ヶ年の予定を終了したが、この研究が日韓間の研究交流として韓国においても注目されることになり、平成12年度以降、第2期研究交流の課題として継続されることで実質的な合意を見た。環境汚染の文化財に対する影響は将来的には東アジア地域の問題として各国の研究機関と連携して研究すべき問題であると認識している。敦煌莫高窟の保存のため、敦煌研究院と行っている研究交流は平成11年度から第3期の研究交流に入った。課題は、修復技術に関する事項と若手研究者の研修が中心となるが、第3期の期間内にその成果を見ながら敦煌研究院との研究交流に更に発展した場面を開きたいと思っている。

国際的な支援、ないしは協力に関しても新しい動きがあった。当研究所はかねてより中国河南省の龍門石窟研究所の劉所長から保存科学研究者の受け入れを要請されていたが、平成12年度からこれを受け入れることとしたことから、急に龍門石窟の保存にユネスコ信託基金が利用されることになり、この事業に当研究所が機関として関わることになった。また、パナマからは世界文化遺産カスコ・アンティグォの保存計画の案についても相談があり、調査に赴いている。当研究所の国際文化財保存協力センターの将来の在り方を示唆しているように思う。

2000（平成12）年11月

東京国立文化財研究所
所長 渡 邊 明 義

目 次

緒 言

1. 機 構

1. 組 織 図	1
2. 組織の概要と職員	2
(1) 庶務課	2
(2) 美術部	2
第一研究室	2
第二研究室	2
(3) 芸能部	2
演劇研究室	3
音楽舞踊研究室	3
民俗芸能研究室	3
(4) 保存科学部	3
化学研究室	3
物理研究室	3
生物研究室	3
(5) 修復技術部	3
第一修復技術研究室	4
第二修復技術研究室	4
第三修復技術研究室	4
(6) 情報資料部	4
文献資料研究室	4
写真資料研究室	4
(7) 国際文化財保存修復協力センター	5
企画室	5
環境解析研究指導室	5
保存計画研究指導室	5

2. 研究活動

1. 各部の研究活動	6
美術部	6
芸能部	7
保存科学部	8
修復技術部	9
情報資料部	10
国際文化財保存修復協力センター	11

2. 研究一覧	13
中長期研究計画一覧	13
受託研究一覧	13
文化財保存修復に関する国際交流促進事業一覧	14
文部省科学研究費補助金による研究一覧	14
凡例	14
3. 中長期研究計画	15
4. 受託研究	43
5. 文化財保存修復に関する国際交流促進事業	49
6. 文部省科学研究費補助金による研究	53

3. 個人の研究業績

.....	69
-------	----

4. 事業

1. 研究集会など	85
(1) 国際研究集会	85
(2) アジア文化財保存セミナー	86
(3) 各種の研究協議会	88
(4) 研究会・講演会など	91
2. 調査指導など	98
(1) 所外経費による調査指導	98
(2) その他の調査指導	103
3. 研修	108
(1) 「漆の保存修復」国際研修	108
(2) 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修	109
(3) 資料保存地域研修	111
(4) 海外学術調査員および研究者のための保存修復講座	111
(5) 博物館学実習	112
4. 文化財修復協力	113
(1) 在外日本古美術品修復協力事業	113

5. 講座など	114
(1) 公開学術講座	114
(2) 夏期学術講座	116
6. 大学院教育	117
7. 出版	118
(1) 定期刊行物	118
1) 美術研究	118
2) 芸能の科学	118
3) 保存科学	118
4) 日本美術年鑑	119
(2) シンポジウム等の報告書	119
8. 公開・出品	123
(1) 公開	123
1) 黒田記念室	123
2) 資料閲覧室	123
(2) 黒田清輝巡回展	123
(3) 所蔵作品等の貸与	123
9. 年度内主要事業一覧	125

5. 研究交流

1. 職員の海外渡航	126
2. 招へい研究員等	129
(1) 海外	129
(2) 国内	133
3. 海外研究者等の来訪	145
(1) 来訪研究員	145
(2) 表敬訪問	145

6. 主な所蔵資料

1. 図書資料	146
(1) 美術関係図書	146
(2) 芸能関係図書	146
(3) 保存科学・修復技術関係図書	146

2. その他	147
(1) 美術関係資料	147
(2) 芸能関係資料	147
(3) 保存科学・修復技術関係資料	147

7. 研究所関係資料

1. 設立の経緯	148
2. 年代別重要事項	148
3. 歴代所長（昭和5年～平成11年）	151
4. 名誉研究員	152
5. 1999（平成11）年度予算等	153
6. 関係法規	155
7. 施設（新館）の概要	158

1. 機 構

1. 組 織 図

東京国立文化財研究所

TOKYO NATIONAL RESEARCH INSTITUTE OF CULTURAL PROPERTIES



2. 組織の概要と職員

所 長 渡 邊 明 義 (美術史)

(1) 庶務課

課 長	白 井 国 明		
課長補佐	長谷川 洋 一		
庶務係長	小 関 仁 志	会計係長	庄 司 義 則
庶務主任	飯 田 猛 繼	会計係員	真 鍋 浩 二
事務補佐員	松 本 洋 子	事務補佐員	村 上 浩 子* ²
事務補佐員	小 林 芽 生* ¹	事務補佐員	堀 江 祐 子
事務補佐員	竹 岡 祐 子	事務補佐員	工 藤 幸
事務補佐員	堀 内 朋 美* ³	事務補佐員	田 島 由紀子* ⁴
労務補佐員	菊 地 廣 吉		

* 1 平成12年 1 月31日辞職

* 2 平成11年 8 月31日辞職

* 3 平成11年 9 月16日採用

* 4 平成12年 2 月 1 日採用

(2) 美術部

日本・東洋の古美術、ならびに日本の近代・現代美術とこれらに関連する西洋美術について基礎的な調査研究をすすめ、その成果の公表を行っている。

第一研究室 江戸時代までの日本美術および東アジア地域の美術に関する調査研究、ならびに資料収集、成果の公表を行っている。

第二研究室 明治以降の日本近代美術とこれに関連する西洋美術および日本近世の洋風美術の調査研究、ならびに現代美術の動向に関する資料の収集と調査をすすめ、その成果の公表を行っている。

美術部長	宮 島 新 一 (日本絵画史)
主任研究官	山 梨 絵美子 (日本近代絵画史)
主任研究官	岡 田 健 (東洋彫刻史)
第一研究室長	中 野 照 男 (東洋絵画史)
第二研究室長	田 中 淳 (日本近代絵画史)
同 研究員	塩 谷 純 (日本近代絵画史)
調 査 員	青 木 茂 (日本近代絵画史)

(3) 芸能部

伝統芸能を対象に、諸芸能の史的展開・理念・構造・技法・演出に関する実際的な調査研究をすすめ、その成果を公表している。

演劇研究室 歌舞伎・浄瑠璃など古典演劇の演技演出について、歴史的な考察と現在の伝承への提言のための基礎的な調査研究をすすめている。

音楽舞踊研究室 古典音楽・舞踊・能・狂言の技法、演出について伝承と文献の両面から調査研究をすすめている。

民俗芸能研究室 民俗芸能・民俗行事を実地に調査し、それらの芸能史的位置づけや保存伝承に資するための基礎的な研究を行っている。

芸 能 部 長	星 野 紘 (民俗芸能)
主任研究官	高 桑 いづみ (日本音楽史)
演劇研究室長	鎌 倉 恵 子 (日本近世演劇)
音楽舞踊研究室長	羽 田 昶 (日本中世演劇)
民俗芸能研究室長	中 村 茂 子 (民俗芸能)
調 査 員	児 玉 竜 一 (近世演劇)
調 査 員	石 井 倫 子 (中世芸能)
調 査 員	串 田 紀代美 (民俗芸能)

(4) 保存科学部

文化財の材質・構造やそれを取り巻く環境を様々な科学的方法で調べて、保存の現場や美術史、考古学など歴史研究に役立つ研究とその成果の公表を行っている。

化学研究室 古代の金属製文化財を構成する材料の化学組成や材料産地、および絵画・彫刻・建築などに用いられた彩色材料の歴史的変遷に関して、各種X線分析装置や質量分析計などを用いて研究を進めている。

物理研究室 温湿度、空気汚染などを測定して文化財公開施設における保存環境を評価し、文化財の劣化を防止するための研究と、X線、赤外線などを用いた非破壊調査手法の開発を行っている。

生物研究室 生物が原因となった文化財の劣化の機構を調べ、防除する研究を行っている。現在は特に、環境に被害を与えることの少ない防除法の開発に力を入れている。

保存科学部長	三 浦 定 俊 (物理計測)
主任研究官	佐 野 千 絵 (光化学)
主任研究官	木 川 り か (生物化学)
化学研究室長	平 尾 良 光 (無機化学)
研 究 員	早 川 泰 弘 (分析化学)
物理研究室長	石 崎 武 志 (地球科学)
生物研究室長事務取扱	三 浦 定 俊 (物理計測)
調 査 員	山 野 勝 次 (応用昆虫学)
客員研究員	藤 村 貞 夫 (計数工学)

(5) 修復技術部

歴史的な文化財の修復に関する調査研究、科学的修復方法の開発研究とその応用をすすめ、その公表を行ってきたが、社会的環境の変化によって保護の必要が生じた近代の文化遺産の保存・修復研究も行っている。さらに、文化財保護の国際協力として、文化財修復の国際研修や在外日本古美術品の修復協力などを実施し、国際的な責務を果

たしている。

文化財は複合的な材質で製作される例が多く、以下の研究室も、修復に際して主に問題とすべき材質別に3室としているが、実際の修復上の問題に対処するためには、室をまたがって取り組む場合が多い。とくに、近代の文化遺産には、修復技術部の3研究室だけでなく各部が連携して担当している。

第一修復技術研究室 文化財の修復に際して、木材、漆などの損傷や修復技術、またそれらを修復資材として扱うことを主な研究課題として取り組んでいる。第一研究室が研究対象とするおもな文化財には建造物や漆工芸品などがある。

第二修復技術研究室 文化財の修復に際して、紙、布またその他の天然・人工有機材質などの損傷や修復技術、またそれらを修復資材として扱うことを主な問題として取り組んでいる。修復資材として必要な合成樹脂もこの室で扱う。第二研究室が研究対象とするおもな文化財には、絵画、文書、衣装、民俗具に加えて建造物などがある。

第三修復技術研究室 文化財の修復に際して、金属、石材その他無機材質などの損傷や修復技術、またそれらを修復資材として扱うことを主な問題として取り組んでいる。第三研究室が研究対象とするおもな文化財には、建造物・考古資料・美術工芸品などがある。

修復技術部長	増田勝彦 (装漬技術)
第一研究室長	加藤寛 (漆芸技法)
第二研究室長	川野邊涉 (高分子化学)
技術補佐員	井口智子
第三研究室長	青木繁夫 (考古学)
研究員	早川典子 (有機化学)
技術補佐員	大森信宏*
客員研究員	松田史朗 (腐食工学)

* 平成11年5月15日採用

(6) 情報資料部

文化財に関する研究資料の作成・収集・保管・閲覧等の業務を行い、さらに当研究所各部所掌の研究資料に関する情報の統合化をはかっている。

文献資料研究室 文化財に関する図書・雑誌、調査研究活動によって収集された研究資料各種の整理・保管・閲覧を行っている。また、日本・東洋古美術関係の文献目録の作成とともに文献データベースの開発を行っている。

写真資料研究室 研究用写真資料の作成・収集・整理・保管・閲覧を行うとともに、各研究者の調査活動に協力して研究資料を撮影し、資料の充実を努めている。また、美術史研究への画像処理技術の応用および画像情報のデータベースに関する研究を行っている。

情報資料部長	米倉迪夫 (日本中世絵画史)
主任研究官	井手誠之輔 (東洋絵画史)
主任研究官	勝木言一郎 (東洋絵画史)
文献資料研究室長	鈴木廣之 (日本近世絵画史)
事務補佐員	中村節子
写真資料研究室長	島尾新 (日本中世絵画史)

研究員	津田 徹 英 (日本彫刻史)
専門職員	城野 誠 治 (美術写真)
調査員	玉蟲 敏 子 (日本絵画史)
客員研究員	伊與田 光 宏 (情報工学)

(7) 国際文化財保存修復協力センター

世界の文化財の保存・修復に関する国際的な研究交流、保存事業への協力、専門家の養成、情報の収集と活用などを実施し、文化財保護における国際的な責務を果たしている。

企画室 国際協力事業の企画・運営、諸外国や関係機関との連絡、調整などの事務を行っている。

環境解析研究指導室 世界の文化財の保存・修復に関する調査研究を進め、また国際協力事業の技術的内容についての調査・指導を行っている。

保存計画研究指導室 国際協力の相手国の伝統材料・技術を生かした形での保存・修復計画の立案に寄与するため、経済・社会・文化など、文化財を取り巻くさまざまな環境や、人材養成のあり方などについて、幅広い視点からの調査・研究を行っている。

センター長	齋藤 英 俊 (建築史)
主任研究官	朽津 信 明 (地質学)
企画室長	大久保 政 博* ¹
企画室長	河原 脩* ²
企画係長	山岸 智 幸
(併任)	吉野 貴 子
調査員	松原 美智子
環境解析研究指導室長	西浦 忠 輝 (材質改良学)
保存計画研究指導室長	松本 修 自 (建築史)
研究員	二神 葉 子 (考古科学)
客員研究員	松本 健 (考古学)
客員研究員	宗田 好 史 (地域開発)

* 1 平成11年6月30日転出

* 2 平成11年7月1日転入

2. 研究活動

1. 各部の研究活動

美術部

(1) 美術作品の実証的研究

- 中長期研究計画「明治後期から昭和初期の美術団体、内外博覧会に出品された作品およびその作家の研究」
(4年計画4年次)
- 中長期研究計画「日本における外来の美術の受容についての研究」(5年計画2年次)
- 中長期研究計画「美術に関する基礎資料の研究 —中国日本拓本資料・室町時代水墨画資料・未公開仏教美術原典史料—」(5年計画2年次・1年次・1年次)
- 中長期研究計画「木彫仏像の調査研究」(5年計画1年次)

美術部の研究調査は各時代にわたり、絵画、彫刻、工芸の各分野の作品について、作品そのものと文献資料の両面から実証的な研究を進めている。本年度は、上記4テーマを研究の中心に据え、関連領域の作品を含めて、精力的に調査、研究を行った。調査にあたっては、光学機器等を利用した科学的鑑識法を積極的に活用している。また、近年におけるコンピュータ技術の進展、普及にともない、新たなデジタル画像処理技術をとり入れ、これまで行ってきた光学的作品分析の精度を高める努力をしている。また、美術部では、情報資料部と共同で研究会や協議会等を開催し、当研究所がこれまでに蓄積してきた研究資料の活用を基盤とした研究者間のネットワークづくりをすすめ、日本における新たな美術史研究の方向性を示唆できるようにつとめている。

(2) 美術史学の今日的な課題に関わる研究

- 中長期研究計画「日本における美術史学の成立と展開」(5年計画3年次)
- 中長期研究計画「美術コレクションの収集・展示に関する歴史的比較研究」(5年計画1年次)

美術部ではまた、美術作品および美術に関わる諸現象を社会的な文脈の中で問い直すことによって、美術に関わるさまざまな問題を解き明かす研究を行っている。「日本における美術史学の成立と展開」では、明治20年代以降、国家の制度や機構と密接な関係を維持しながら、日本の文化的ナショナルアイデンティティの構築に寄与してきた美術史学の歴史をふりかえることによって、美術史学の今日的課題と今後の可能性や展望を明確にしつつある。「美術コレクションの収集・展示に関する歴史的比較研究」では、今日の美術館や博物館において重要な機能となっている収集・展示の問題を、美術コレクションの形成史、展示方法や鑑賞の歴史、経済的価値や美術的価値の変遷、収集展示の教育的側面などの視点から多角的に考察し、新たなビジョンの提示を目指している。

(3) 基礎資料の収集と集成

- 「日本近代美術の発展に関する明治後期から昭和初期の基礎資料集成」

美術部は、情報資料部との緊密な協力のもとに、さまざまな作品のデータや研究情報を収集し、今後の研究に資すべき高度な研究資料として整理している。調査研究においても基礎資料の収集を積極的にすすめており、「日本近代美術の発展に関する明治後期から昭和初期の基礎資料集成」では、大正期を中心に各美術団体の展覧会出品目録を収集調査し、これをもとに同時代の美術界の動向を総合的に分析、研究するとともに、その研究成果として『大正期美術展覧会出品目録』(仮称)刊行の準備をすすめた。

(4) 研究成果の公表

調査研究の結果は、機関誌『美術研究』(昭和7年創刊)やその他の学会誌に発表し、研究報告書も随時刊行している。また現代美術の動向に関する資料の収集と研究の成果は、毎年、『日本美術年鑑』(昭和11年創刊)として刊行し

ている。さらに、情報資料部と共同で、毎年1回、公開学術講座を開催し、研究成果の一部を一般に公開している。

(5) 所蔵作品ならびに研究情報の公開

美術部は黒田清輝の遺産に基づいて創立された美術研究所を前身とする。現在も黒田清輝の作品やその他関連資料を保管しており、毎週一回（木曜午後）、黒田記念室（本館二階）においてそれらを公開し、さらに昭和52年以降、毎年一回、他美術館等との共催で、巡回展「近代日本洋画の巨匠 黒田清輝展」を開催している。また、インターネット上の当研究所のホームページに「黒田清輝記念室」を設け、その芸術の理解を深められるように、黒田に関する研究情報の公開を積極的にすすめている。

芸 能 部

芸能部は、日本の伝統芸能を対象に、実際的な調査研究を進めている。研究目標としては、諸芸能の史的展開、理念、構造、技法、演出などに関する基礎研究を行うと同時に、無形文化財・無形民俗文化財の指定、選択等の行政に対応すべく、諸芸能の現状を把握し、保存と継承のあるべき姿を追究するよう努めている。研究の成果は、刊行物（『芸能の科学』『音盤目録』『日本舞踊譜』）、夏期学術講座、公開学術講座、民俗芸能研究協議会などによって公表してきた。

また芸能部では各種芸能の技法を、録音・録画・スチール写真などの形で記録することを、重要な業務としてきた。現地での実況記録ばかりでなく、実技者を当研究所に招き、部員の企画のもとに特別に演技や演奏を依頼して、芸能部の舞台や録音室で行った記録も多い。演じた瞬間に消え去るのが宿命である芸能では、これらの記録はきわめて貴重で、研究資料として部員および所外の研究者の利用にも供している。さらに、求めに応じて書籍、視聴覚メディアなど、各種刊行物に掲載され、あるいは収録された記録もある。とくに東大寺修二会の調査をはじめとする寺事（寺院行事・寺院芸能）の研究は、当芸能部が先鞭をつけた分野であり、その成果の一部であるレコード「東大寺修二会 観音悔過（お水取り）」は、1971（昭和46）年度芸術祭優秀賞を受賞している。技法の記録は、今後も引き続いて行いたいと考えている。

芸能部は、演劇研究室・音楽舞踊研究室・民俗芸能研究室の三室によって構成されている。日本の伝統芸能は、多くの種目が演劇・音楽・舞踊の要素を併せ持っているため、錯綜した諸芸能の相互交流の様相を明らかにするために、広い視野から課題を設定することを心がけている。

○中長期研究計画「無形文化財・無形民俗文化財の伝承に関する研究」（5年計画2年次）

後継者不足、時代感覚の変化に伴う変質など、古典芸能や民俗芸能には様々な問題が山積している。そのような芸能の実態に即して個々の調査を行い、芸能の伝承のあり方について考察するものである。

演劇研究室では、衰退の危機に瀕している上方歌舞伎の変遷についての調査を行い、その一部を『芸能の科学』28に公表した。また小道具類の製作・修理の実体に関する調査にも着手した。

民俗芸能研究室では、盆踊りの調査を通じて、芸能が行われる場所（舞台）の変容についての考察を行った。また能楽とは別系統の「翁」に関する調査研究を行い、その成果を『芸能の科学』28に公表した。さらに学校教育と民俗芸能をテーマに研究協議会を開催した。

○中長期研究計画「翁の技法集成」（7年計画6年次）

「翁」は、現在、能楽師が伝承し上演する演目の中では最も古い芸態を残している。その技法の全容を捉え、全役籍全流儀の譜を収集し、比較総合して「翁」の全体像を把握するのが本研究である。今年度は、山本東次郎家に伝えられている大蔵虎明の自筆伝書「代伝抄」の翻刻を行い、『芸能の科学』28に公表した。

○その他の個人研究

① 「地方に残る雅楽・能楽の古楽器調査」（高桑）

文部省科学研究費補助金による他機関の研究者との共同研究。地方の寺社に残された鼓胴を対象に、雅楽から

能楽に至る楽器の変遷過程を明らかにする。

② 「新史料翻刻による花祭りの芸能史的位置づけ」(中村)

文部省科学研究費補助金による研究。新発見の史料を翻刻し、江戸時代に中断した大神楽の芸態が花祭りへ定着した過程を考察するものである。

保存科学部

保存科学部は文化財の材質・構造・技法及び劣化機構に関する研究を行うとともに、文化財のおかれている保存環境の研究も行っている。またそれらの研究を基に、文化財保存の現場に生かせる技術開発を行っている。すなわち文化財の産地推定など自然科学的手法による歴史的研究と、文化財保存のための科学研究を軸としている。化学研究室は青銅や鉄などの金属製文化財を中心に、各種の分析装置を用いて材料・錆の組成や原料産地などを明らかにする研究を行い、物理研究室は温湿度・空気汚染などを測定して、文化財公開施設における保存環境を評価し、文化財の劣化を防止する研究と、X線・赤外線などを用いた非破壊検査手法の開発を行っている。また生物研究室は生物が原因となった文化財の劣化機構を調べ、防除のための研究を行っている。

研究テーマの設定に当たっては、①行政施策面からの必要性、②学問分野における先端性と発展性、③博物館など保存現場からの要望などを考慮し、化学、物理、生物の研究室ごとに中長期の研究テーマを設定して研究を進めている。

○中長期研究計画「文化財施設の保存(収蔵展示)環境の研究」

行政施策と保存現場からの強い要望に基づいた研究として、物理研究室を中心とした「文化財施設の保存(収蔵展示)環境の研究」がある。この研究は国指定文化財の公開(文化財保護法第53条)に関わる研究として文化庁美術工芸課と密接な連絡を取りながら進めているもので、これまでに室内汚染物質の問題、美術館用免震装置の問題、ハロンに代わる消火剤の問題などを取り上げてきた。当初は一般研究費を利用して研究を行っていたが、1995年度(平成7年度)から特別研究(現在、調査研究等特別推進経費)として予算措置された。

○中長期研究計画「無公害な文化財生物劣化防除法の研究」

オゾン層破壊防止のために行政上の緊急性を持って実施されている中長期研究が、生物研究室を中心にした「無公害な文化財生物劣化防除法の研究」である。1997年のモントリオール議定書締約国会議で、2005年に先進国では臭化メチルの使用を全廃することになり、1999年1月からは使用量の25%削減が始まった。臭化メチルは文化財の殺虫燻蒸に広く利用されている薬剤であるため、文化財の保存に関する研究部を持った唯一の国立研究機関として、臭化メチルに代わる薬剤や代替法について文化財材質や人間の健康への影響も考慮し、関係機関と連絡を取りながら研究を行っている。この研究も当初は一般研究費を用いて行っていたが、1997年度(平成9年度)から特別研究(現在、調査研究等特別推進経費)として措置された。さらに1998年度からは関連した研究が文部省科学研究費補助金を用いて実施されている。

○中長期研究計画「古代東アジアにおける青銅製品の変遷に関する研究」

国際的な学問の広がりや先端性を持って進められている中長期研究が、化学研究室を中心にした「古代東アジアにおける青銅製品の変遷に関する研究」である。この研究では日本国内の青銅試料に関する研究だけでなく、過去に行ったアメリカ、スミソニアン研究機構との共同研究をさらに発展させて、中国の社会科学院と共同で古代中国青銅器に関する研究(文部省科学研究費補助金・基盤研究)を進めている。

○その他

この他、中長期研究計画として上がっていない重要な研究として「文化財保護に関する日独学術交流」に基づいた、彩色文化財の保存に関する研究をあげることができる。この研究は文部省科学研究費補助金(国際学術)により「漆・ニス等伝統的天然樹脂塗膜の劣化と保存に関する研究」(1993~95年度)、「文化財の微量試料分析法の開発」(1996~98

年度)と、主に輸出漆器の保存に関して、修復技術部及び外部の研究者と物理研究室を中心に行ってきた。研究を通じて得られた成果だけでなく、多くの国々の研究者同士の密接なつながりが、在外日本古美術品保存修復協力事業に現在大きく寄与している。1999年度からは「彩色文化財の材料と技法に関する科学的研究」(1999～2001年度)として新たな共同研究が実施されている。

修復技術部

修復技術部は、伝統的修復材料および技法の解明と、新たな修復材料・技術の開発を大きな柱として研究を行っている。文化財修復の現場から生じてくる技術的問題に答える形で研究テーマを設定し、短期間に研究成果を現場に還元する事が多い。

近年、文化財を取り巻く社会的環境の急激な変化に伴って、文化財保存の現場が拡大してきている。即ち、1)文化財の積極的な活用に耐え得る保存・修復技術の開発、2)新たな保護対象である近代の文化遺産などの保存・修復の概念と技術の開発、3)環境悪化による文化財への影響の評価と対策などが強く求められるようになった。

従来の保存・修復技術に加え、さらに過酷な条件下で文化財の維持を可能にする技術、近代の文化遺産ではこれまで対象としてこなかったゴムやコンクリート等の材質や大規模な構造物に対応できる技術、従来見られなかったものの、環境悪化の影響で顕著になった劣化状況に対応できる技術が、それぞれ必要になってきた。

これに加えて、世界文化遺産登録などに見られるような文化財分野での国際協力が進行するにつれ、世界各国から文化財の保存・修復への援助や研修の要請も増大の一途をたどっている。その多くは、現地の特殊事情を勘案した保存・修復技術の開発・研究が必要であり、現地指導も含めて当部の業務の大きな部分を占めている。

以上のような状況から、修復技術部では以下に述べるような研究テーマを設定して研究を実施している。

○中長期研究計画「文化財における環境汚染の影響と保存修復法の開発研究」

酸性雨などの環境要因の悪化によって損傷を受けたり、過酷な立地条件によって損傷の進行している文化財が、環境からどのような影響を受けているかを検討し、その影響を軽減する手段を開発する事を目的としている。

鎌倉市高德院(国宝鎌倉大仏)、奈良市東大寺(国宝金銅八角灯籠)では、大気汚染ガスや酸性雨による汚染程度とその季節的変動および気象との相関関係の調査を行い、その成果の一部は、東大寺の国宝金銅八角灯籠の修復処置法に適用され、また処置後の経年変化観察にも生かされている。平時における種々要因の変動などについて一通り測定したので、今年度末に両地点における測定は終了する。

白杵磨崖仏では、水の存在に関係した劣化が多く観察され、岩体からの湧水量や含水率の変動などの測定、強化剤、撥水剤、水分調整剤の施工状態や耐性、物性などについて現地テストを行っている。

日光地区では、世界文化遺産登録に伴う環境モニタリングとして、将来の環境悪化を早期かつ的確に捉える、広範囲での効率的、最適測定システムを探る事を目指している。現在までに、地区内での環境要素に大きな違いがあること、一部に環境汚染が認められることが判明した。

厳島地区においては、高舞台の修復材料の開発、社殿の丹塗りの改良などに向けて、海水、紫外線など耐候性の高い材料を検討するため、現地暴露試験を行っている。

1995年(平成7年)度から韓国国立文化財研究所と開始した共同研究では、ソウル市内、国宝圓学寺十層石塔の覆屋建立に成果が用いられ、清州市内、龍頭寺址鉄幡竿の錆の防止処置には、東大寺八角灯籠と同様の表面コーティング材が利用された。

この研究は、本年度で共同研究契約が終了するが、研究の継続については双方が合意しているため、平成12年度以降あたらしい方向で研究を行っていく予定である。

○中長期研究計画「近代の文化遺産の修復に関する調査研究」

文化財保護法の改正を伴った、近代の文化遺産保護への取り組みに、研究機関側から支援する体勢を維持するため、平成10年度から特別研究としたものである。

フィールドの一つの煉瓦焼成用輪窯では、水の起源の探索、精密測量やボーリングによる地盤沈下の確認、耐震性

計算等による結果を元に、今後の修復計画と利用計画を関係地方自治体と検討中である。

金属文化財の修復方法の研究では、海中から回収された船舶用エンジンを屋外に公開展示するために保存修復方法の開発を行った。

航空機や鉄道車両、船舶、など交通機関の多くが、その規模の大きさと素材の多様性、異質の材料を同時に処理しなければならない困難さなど、従来とは全く次元の異なる問題点を有しており、これらの問題点がもっとも顕著に現れている航空機の保存修復に関する研究会を海外の専門家を招へいして行い、国内の保存修復現場での研究交流を行った。

また、国内外における近代の文化遺産の保存状況に関する研究会を行った。

本研究には、保存科学部、センターの研究者の他、外部の専門家も参加している。

○中長期研究計画「漆の加熱硬化メカニズムに関する調査研究」

焼き付け漆の技法は、古くから建築金具や金属工芸品の防錆あるいは下地作りとして行われてきた。現在伝承されている焼き付け漆技法の実態を明らかにし、文化財保存技術の観点から、技法を確立することを目的としている。

平成9年度までは、焼き付け漆の塗膜としての物性に視点を置いた研究を行い、加熱温度・時間による差異に注目したが、10年度から、硬化メカニズムに視点を移して研究を行っている。また、文化財修復用技術に求められる硬化膜の安定性について暴露試験を行った。

平成11年度は、18世紀後半の輸出漆器である蒔絵ブランクをもとに、銅板への焼き付け漆の耐候性や蒔絵や螺鈿などの伝統的装飾への対応などを、製作工程の復元を行った。成果については平成12年度『保存科学』誌上で発表する予定である。

○中長期研究計画「近世輸出工芸品の実証的研究」

海外所在の日本工芸品に対する関心の高まりの中で、海外美術館などから、所蔵工芸品に関する問い合わせが開始しているが、従来この分野の研究は国内でも十分に行われておらず、詳しい調査もできていない。「在外日本古美術品修復協力事業」の対象として、近世輸出工芸品が日本に来る機会を捉え、その破損部分から制作技法を調査分析している。本年度は、平成10年度に修復した5件の作品について、日・英両言語による報告書を刊行した。また、この研究に関連する調査を長崎県立美術館および長崎市立博物館で行い、研究の成果をもとに、平成12年1月14日、文化財保存修復研究協議会を「近世輸出工芸品の保存と修復」のテーマで開催した。なお、研究協議会の報告書は平成12年7月30日に刊行した。

このほかに、国際交流研究ないし事業として「敦煌文化財の保存修復に関する日中共同研究」、「紙の保存修復国際研修」、「在外日本古美術品保存修復協力事業」などを担当し、国際文化財保存修復協力センターに協力している。その他、文化財の保存修復を行う上で基本的な情報整備を行うために、当部が関わった修復や重要文化財修復記録のデータベースの一環として、X線写真のデータベースを作成している。

情報資料部

情報資料部は、前身となる美術部資料室が行ってきた美術に関する研究資料の作成・収集・保管・閲覧等の業務を拡大発展させるとともに、当研究所における5部およびセンターの活動に関わる研究資料の情報の統合化を図ることを研究活動の目的としている。当部はこれらの研究資料を広く内外研究者の利用に供し、文化財に関する研究資料センターとしての役割を果たしてきている。

近年の学術情報の増大化と多様化にともない、これらの現況に対応できる資料の効率的活用を図ることが新たな課題となっている。当部では、こうした課題に取り組むため、コンピューターを導入し、研究データの生産・蓄積・活用を一貫したシステムのもとで行う体制を整えてきた。また、逐次、所蔵研究資料のデータ化を進め、その活用の質的向上を図るとともに、出版物とインターネットのホームページ等を通じて研究資料の公開に努めている。また、客員研究員や外部から招へいた研究者を交えた研究会や協議会を開催し、文化財に関する研究情報の共有化について

も提言を行っている。

当部では長期研究計画として「美術情報処理システムの研究—データの共有化を中心として—」(1989～2000)、中期研究計画として「文化財に関する研究文献情報の活用」(1999～2004)、ならびに、「デジタル画像情報の多重化に関する研究」(1999～2004)の、3つの柱を中心にして研究を行っている。

長期研究計画は当部の研究活動の中核に位置づけられる研究で、将来の文化財研究情報の共有化をめぐる環境の変化を視野に入れ、逐次、システムの整備と強化を図ることを目的としている。また、2000(平成12)年度の新営に際して導入されるコンピュータ・システムの再構築作業を進めている。

2つの中期研究計画は長期研究計画にしたがい、情報資料部を構成する文献資料研究室と写真資料研究室がそれぞれ中心となって行っている。

文献資料研究室は、文化財に関する図書・雑誌、調査研究活動によって収集された各種研究資料の整理・保管・閲覧を行うとともに、日本・東洋古美術関係の文献目録の作成と文献データベースの開発を行っている。各年ごとの文献目録は『日本美術年鑑』(美術部)に掲載し、これを一定期間ごとに総合・増補した『日本・東洋古美術文献目録』を刊行している。

写真資料研究室は、美術工芸品を中心とした研究用史料写真の作成・収集・整理・保管・閲覧を行うとともに、当研究所の調査研究活動にかかわるのさまざまな写真撮影を行い、資料の充実につとめている。また、美術研究所の創立以来、蓄積されてきた写真原板のデジタル化をすすめ、中期研究計画「デジタル画像情報の多重化に関する研究」(1999～2004)にしたがって、文化財研究への画像処理技術の応用と画像情報のデータベース化に関する研究を行っている。

国際文化財保存修復協力センター

文化財は人類共有の遺産であり、国家、民族を越えて、その保存・修復に当たらなければならない、そのためには国際協力が不可欠である。この意味で、多くの文化財を有し、文化財保護のための体制が整い、研究、技術の進んでいる我が国が果たす役割はますます増大し、世界各国からの協力要請も年々増加している。

国際文化財保存修復協力センターは、世界各国の文化財の保存・修復に関する国際的な研究交流、保存修復事業への協力、専門家の養成、情報の収集と活用等を実施し、文化財保護における国際的な責務を果たすことを目的として、平成7年4月に、従来の国際文化財保存修復協力室を拡充し発足した。現在では研究所内のみならず、国内・国外の関係機関との連携協力を推進し、世界各国の文化財の保存・修復に関する国際協力の我が国における中心的な存在として、その重要性を高めている。

センターにおいては、在外日本古美術品保存修復事業、「紙の保存修復」国際研修、アジア文化財保存セミナー、国際文化財保存修復研究会、文化財保存のための国際研究集会、日中共同研究—敦煌莫高窟の保存修復などさまざまな国際交流事業およびこれらの事業に伴う海外からの研究者の招へい、職員の海外への派遣を円滑に進めるための企画、連絡調整、調査業務などを行っている。また、国際交流事業を中心とした事業に関する広報活動を行っている。

国際文化財保存修復協力センターは、以下の項目を中長期研究計画として研究を実施している。

○「世界、特にアジア諸国における文化財保存に関する情報の収集と提供」

世界、特にアジア諸国の文化財の保存状態および文化財保護にかかわる組織・機構・人材・活動状況等についての情報を収集し、さらにその問題点を検討することにより、より有効かつ円滑な文化財保存国際協力の実現に貢献することを目的とする。海外の情報のみならず、国内関係機関、研究者に関する情報も収集する。収集した情報は、データベース化し、インターネット上で公開する方法により提供する。

○「屋外石(レンガ)造文化財の劣化と保存修復に関する調査研究【国内】」

屋外の石(レンガ)造文化財の保存は最も重要な課題の一つである。本研究は、屋外石(レンガ)造文化財の劣化原因、過程を地質学、岩石・鉱物学、水理学的に検討するとともに、気象環境と劣化現象との因果関係を考察し、さらには、実際の保存修復処置についての実験ならびに応用研究を行って、保存修復対策についての基礎的データを集

積し、石造ならびにレンガ造文化財の保存技術を向上させることによって、世界各国の文化財の保存に貢献することを目的とする。

○「屋外石（レンガ）造文化財の劣化と保存修復に関する調査研究【海外】」

建造物、遺跡等の屋外石（レンガ）造文化財は世界の主要な文化財であるが、その多くが現在崩壊の危機に瀕しており、保存対策の策定が急務である。本研究は、タイ、パキスタン等において海外の屋外文化財の劣化原因、過程を地質学、建築学、材料学的に検討するとともに、気象環境と劣化現象との因果関係を考察し、実際の保存修復についての実験ならびに応用研究を行って保存修復対策についての基礎的データを集積し、世界各地の屋外文化財の保存技術の向上に貢献することを目的とする。

このほかに、ベトナムの民家建築の保存に関する研究や、ブータンの歴史的建造物、集落の保存に関する研究、欧州における建造物保存修復理念とその実践に関する研究、彩色顔料の分析調査等でも成果を上げている。センターの調査研究は保存科学部、修復技術部との緊密な連携の下に進めている。

2. 研究一覽

中長期研究計画一覽

当研究所における研究活動は、中長期研究計画に基づいて進められている。これは組織としての研究活動の方向性を示すもので、毎年春に、研究に関わる部、センターによって策定されている。本年度における当研究所の中長期研究計画は下記一覽の通りである。

日本における美術史学の成立と展開	15
日本における外来の美術の受容についての研究	16
美術に関する基礎資料の研究—中国日本拓本資料・室町時代水墨画資料・未公開仏教美術原典史料—	18
木彫仏像の調査研究	19
美術コレクションの収集・展示に関する歴史的比較研究	20
明治後期から昭和前期の美術団体、内外博覧会に出品された作品およびその作家の研究	21
「翁」の技法集成	23
無形文化財・無形民俗文化財の伝承に関する研究	24
文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究	25
無公害な文化財生物劣化防除法の研究	26
古代東アジアにおける青銅製品の変遷に関する研究	27
文化財における環境汚染の影響と保存修復法の開発研究	28
近代の文化遺産の修復に関する調査研究	29
漆の加熱硬化のメカニズムに関する調査権究	30
近世輸出工芸品の実証的研究	31
文化財における環境汚染の影響と修復技術の研究協力	32
敦煌文化財の保存修復に関する日中共同研究	33
美術情報システムの研究—データの共有化を中心として—	35
デジタル画像情報の多重化に関する研究	37
文化財に関する研究文献情報の活用	38
世界、特にアジア諸国における文化財保存に関する情報の収集	39
屋外石（レンガ）造文化財の劣化と保存修復に関する調査研究〔国内〕	40
屋外石（レンガ）造文化財の劣化と保存修復に関する調査研究〔海外〕	41
文化財の保存を目的としたレンガの劣化現象と保存対策に関する調査研究	42

受託研究一覽

江戸期銀貨の品位と保存に関する研究(2)—銀貨表面の濃化層の分析を中心にして—	43
装潢材料の物性研究	44
花籠車蒔絵鏡の修復処置研究	45
武者塚古墳出土遺物の保存修復研究	46
金唐革紙分析調査	47
国宝「源氏物語絵巻」の調査研究	48

文化財保存修復に関する国際交流促進事業一覧

スミソニアン研究機構との国際研究交流	49
文化財保護に関する日独学術交流	50
敦煌文化財保存に関する研究協力	51
文化財の保存修復技術に関する国際共同研究—文化財の保存修復に用いられる新材料—	52

文部省科学研究費補助金による研究一覧

研究種目	研究課題	
基盤研究(A)	日本における美術史学の成立と展開	53
〃	中国陝西省唐代石窟造像の調査研究—慈善寺石窟と麟溪橋摩崖仏を中心として—	54
〃	世界の文化財の保存—わが国による国際協力体制構築のための調査・研究—	55
〃	彩色文化財の材料と技法に関する科学的研究	56
〃	早期中国青銅器の原料産地に関する研究	57
〃	文化財の新たな総合的虫菌害防除対策 (IPM) のシステム構築に関する研究	58
基盤研究(B)	タイ国アユタヤ遺跡の保存修復に関する研究	59
〃	古代日本の動物遺体のDNA解析および免疫学的分析	60
〃	石造文化財の劣化機構と保存対策手法の研究	61
〃	下張り文書剥離のための澱粉糊の老化技術	62
〃	屋外環境下での遺跡、石造文化財の保存対策手法の開発	63
基盤研究(C)	極楽浄土を表象するモチーフとしての迦陵頻伽の諸相とその文化的特質 —鳥と人からなる動物を通してみた東西文化の交流とその中国的受容—	64
〃	地方に残る雅楽・能楽の古楽器調査	65
〃	新史料翻刻による花祭りの芸能史的位置づけ—大神楽から花祭りへ—	66
〃	石造、レンガ建造物の劣化にかかわる材料物性の研究	67
奨励研究(A)	菊池容斎についての基礎的研究	68

凡例

課題名・目的・成果・研究組織の順に配列した。

研究代表者には○印をつけた。

必要に応じて備考をつけた。

3. 中長期研究計画

日本における美術史学の成立と展開

(5年計画の第3年次)

目 的

西洋近代の学を範として明治20年前後にはじまった日本の美術史学は、近代国家として西洋に認知されようとする国情を背景として、国家的制度や機構と密接な関係を維持し、日本の文化的ナショナルアイデンティティの構築に寄与してきた。今日、一般的に用いられる美術史の言葉や思考が、こうした美術史学の歴史のなかで形成されてきたことは、美術史研究者が広く認識すべき問題となっている。

本研究はこのような問題意識にたち、明治以来の美術史学の歴史を振り返ることを通じて、美術史学の今日的な課題と可能性を問い直すことを目的とする。

成 果

本研究は美術に関する言説の歴史を振り返ることにもつながるため、基礎となる資料の収集とその整理が必要となる。今年度は、明治初期の博物館・博覧会行政にたずさわった田中芳男、納富介次郎について資料を収集するとともに、1900年パリ万博に際し、日本の美術をはじめ文化・歴史全般を紹介すべく人見一太郎が仏語で著した“Dai-Nippon”等、明治期の海外博覧会に関する出版資料を購入した。

また、日本において「美術」という外来の概念の確立以前に制作された物品が、「美術」として位置づけられる過程を明らかにするため、明治期博覧会等に出品された「古美術品」の出品目録に注目し、北信越、関西、四国地方で開催された明治期博覧会についての現地調査を行った。

本研究に関わる研究会としては、美術・美術史学の制度をめぐる問題についてより多角的に検討すべく、とくに工芸・書道の分野をめぐる研究者を招へいし、研究会と総合討議を行った。

研究組織

○田中 淳、宮島 新一、中野 照男、山梨絵美子、岡田 健、塩谷 純（以上、美術部）、
米倉 迪夫、鈴木 廣之、島尾 新、井手誠之輔、勝木言一郎、津田 徹英（以上、情報資料部）

日本における外来の美術の受容についての研究

(5年計画の第2年次)

目 的

日本には、長い歴史の中でもたらされた中国や朝鮮、欧米の美術品が数多くあるが、一部の作品を除いては、日本にもたらされた経緯など、具体的な状況について明らかにされていないことが多い。またそれらが日本でどのように受け入れられてきたかを時代を追って跡づける作業も不足している。本研究は、そのような中国・朝鮮・欧米の美術の請来と日本での受容の様相を具体的に把握し、文化的な背景を含めて研究しようとするものである。日本に所在する中国・朝鮮・欧米の美術が本来どのような人々によって、いかなる動機で日本にもたらされたかを具体的に把握し、さらに日本における収蔵、流通、鑑賞の歴史を明らかにするとともに、従来不十分であった作品の伝来に関する基礎データを整備する。

成 果

本年度は、基本的な資料を収集するとともに、研究会の開催を通じてテーマの共有化をはかった。

(1) 研究会の開催

日本における外来美術の受容の諸相について研究実績をもつ研究者を招いて、研究会を行い、同時に問題の所在や今後の研究方向、方法などについて討議した。

「日本のセザンヌ」 11月29日

発表者：永井隆則（京都工芸繊維大学助教授）

題 目：1920年代日本の人格主義的セザンヌ像の美的根拠とその形成に関する試論および美術制作の文脈について
コーディネータ：加藤哲弘（関西学院大学教授）、古田浩俊（愛知県美術館学芸員）

従来、セザンヌが日本美術に及ぼした影響については作品を中心に論じられてきたが、それが当時の西洋におけるどのようなセザンヌ評価に基づいたものであったのか、さらにその評価が日本ではどのように変容していったのか、という観点からの、日本におけるセザンヌ像形成に関する研究の成果が報告された。この報告に対し、美学の立場から、美術の分野において「受容」の問題にどのようにアプローチするかという観点からのコメントがあり、比較研究・交流研究といった方法の問題、受容にかかわるメディア、教育、コレクションなどといった枠組みの問題などが提示された。

「東アジア肖像画研究の課題」 12月1日

発表者：趙 善美（韓国・成均館大学校教授）

題 目：朝鮮王朝肖像画の類型及びその社会的機能

コメンテーター：海老根聡郎（東京芸術大学教授）

この研究会は、日本における外来美術受容の問題をより包括的に考えるために、韓国および東アジア地域の肖像画にテーマを限定して開催した。近年、東アジア地域の肖像画研究では、肖像画のもつ社会的機能について関心が高まっている。朝鮮王朝時代にみられる肖像画を制作・奉懸・維持するシステムと家礼との密接な関係は、東アジア地域全般にわたる肖像画研究の課題を提起する。この研究会は、儒教文化と関係のふかい韓国肖像画に関する認識を高める絶好の機会ともなった。

(2) 作品調査

- 1) 静岡県立美術館を皮切りに福岡市美術館等を巡回した「ラファエル・コラン」展に際し、黒田清輝らの師として日本近代洋画に大きななかかわりを持ったフランスの画家コランの作品をまとまった形で調査した。(田中、山梨、塩谷)
- 2) 請来美術研究の一環として、これまで朝鮮王朝時代の肖像画とされてきた「高官像」(滋賀・宗安寺)、「夫婦肖像」(石川・総持寺祖院)を調査し、中国明時代後期の作例であることを確認するとともに、写真撮影を行っ

た（米倉、井手、城野）。なお、調査にあたり韓国成均館大学校教授・趙善美女史（情報資料部・招へい研究員）の協力をえた。請来された宋元仏画・高麗仏画の調査と写真撮影を行った（井手、城野）。

- 「釈迦如来像」(南宋) 静嘉堂文庫美術館
- 「三仏諸尊集会図」趙璠筆(南宋) 京都・満願寺
- 「仏涅槃図」陸信忠筆(南宋) 奈良国立博物館
- 「十八羅漢図」(南宋～元) 奈良国立博物館
- 「阿弥陀三尊像」普悦筆(南宋) 京都・清浄華院
- 「阿弥陀如来像」伝喩弥陀思浄筆(南宋) 京都・金蓮寺
- 「六道図」(南宋) 滋賀・新知恩院
- 「十王経变相図」(南宋) 大阪・弘川寺
- 「涅槃变相図」(南宋) 大阪・叡福寺
- 「阿弥陀如来像」(高麗) 京都・禅林寺
- 「摩利支天像」(高麗) 京都・聖沢院
- 「水月観音像」(高麗) 岐阜・東光寺
- 「変化観音像」(高麗) 京都・個人蔵

(3) 基礎資料の収集

- 1) 中世における日中交流の実態を明らかにする第一段階として、『禅林墨蹟』『続禅林墨蹟』に掲載された墨蹟をはじめ、常盤山文庫、正木美術館、根津美術館所蔵の墨蹟資料について、画像と基礎データのデータベースを作成した（井手、島尾）。
- 2) 請来美術の制作当初の社会的、文化的背景を考察するために、中国浙江省地域(上海、杭州、紹興、普陀山、寧波、新昌、天台山、臨海、雁蕩山、温州)の史蹟、寺院等を探訪し、大徳寺五百羅漢図が施入された恵安院をはじめ、清涼寺釈迦如来像が制作された台州・開元寺の所在を現地で確認した（井手）。

(4) 成果の発表

- 山梨絵美子「日本近代洋画とフランスの出会い（ラファエル・コラン展展評）」（『美術手帖』11月号 1999.11）
- 井手誠之輔「元時代の釈迦三尊像・雑感—東福寺旧蔵本をめぐる—」（『仏画の美術』静嘉堂文庫美術館 1999.10）
- 井手誠之輔「鎌倉仏画における宋風受容の問題」（東方学会 1999.11.5）
- 井手誠之輔「中国・宋元および高麗の仏画」（静嘉堂文庫美術館講演 1999.11.20）
- 井手誠之輔「研究資料 見心来復編『澹游集』編目一覧 附、見心来復略年譜」（『美術研究』373号 2000.3）

研究組織

- 中野 照男、宮島 新一、田中 淳、山梨絵美子、岡田 健、塩谷 純（以上、美術部）、
米倉 迪夫、鈴木 廣之、島尾 新、井手誠之輔、勝木言一郎、津田 徹英（以上、情報資料部）

備 考

一部調査研究等特別推進経費

美術に関する基礎資料の研究

—中国日本拓本資料・室町時代水墨画資料・未公開仏教美術原典史料—

(5年計画の第2年次)

目 的

- (1) 中国・日本拓本資料の整理・研究
- (2) 室町水墨画に関する基礎資料の調査研究
- (3) 仏教美術史に関連する文献資料の原典史料の調査研究

成 果

(1) 拓本資料の点検整理

東京国立文化財研究所には、明治・大正期の美術史家らが収集した中国・朝鮮・日本の金石文・工芸品等に関する拓本(一部模写)が所蔵されている。これらはこれまでも数次の点検作業を経て約550袋分が整理されていたが、今回は全拓本についての調査カードを作成し、貴重な美術資料として活用するための方法を検討している。

本年度までの調査によって、550袋についての整理作業が完了した。その内訳は、龍門石窟造像銘約2,000枚、その他の資料が約2,350枚にのぼり、従来の目録によって概算していた3,000枚をはるかに超えるものであることが判明した。さらに未整理の拓本資料が約250枚存在していて、その整理作業が次年度に残された。

龍門石窟造像銘2,000枚については、『龍門石窟の研究』(東方文化研究所、1941年)および『龍門石窟碑刻題記彙録』(龍門石窟研究所編、1998年)所載の銘文に関するデータ、『龍門石窟総録』(龍門石窟研究所編、1999年)の内容との照合作業に着手した。これによって、龍門石窟研究の基本データが整備されるものと考えられる。

(2) 室町時代水墨画資料

本年度は、佐賀県立博物館・正木美術館・京都国立博物館・前田家(東京)所蔵・所管の渡唐天神像約40点、岩国徴古館・功山寺蔵の高峰頭日像・虚庵寂空像等の頂相・肖像30点を調査し、基礎データを蓄積した。また渡唐天神像については、五山文学に現れる画賛等の資料を収集し、現存作品リストを作成した。

(3) 仏教美術史に関連する文献資料の原典史料の調査研究

未翻刻の仏教美術史料、ならびに、活字化されてはいるが内容的に改めて原本との照合が必要と思われる重要史料について、本年度は以下の内容で調査を行った。

- 1) 京都・東寺蔵宋版一切経のうち『大涅槃經』巻8、31、32、33、35、37の施財捨記の調査ならびに撮影。
- 2) 京都・東寺観智院金剛蔵聖教のうち心覚撰『不動集』(文永3年写)、道喜撰『宝篋印陀羅尼經記』(貞和5年写)、仁海自筆『密教師資付法次第』の調査ならびに撮影。
- 3) 『播磨国書写山円教寺縁起并仏像経論堂舎資財年輪伽微米聖者德行門徒起請等事合拾壹箇条』の兵庫・円教寺本の調査、撮影ならびに東大史料編纂所架蔵写本による比較調査。
- 4) 『招提寺建立縁起』の東大史料編纂所架蔵写本との活字本照合調査。



研究組織

- 岡田 健(1)(3) (美術部)、島尾 新(2)、
井手誠之輔(2)、津田 徹英(3) (以上、情報資料部)

仁海(954~1046)自筆『密教師資付法次第』
(東寺観智院金剛蔵聖教)

木彫仏像の調査研究

(5年計画の第1年次)

目 的

木を用いた仏像は、良質の木材を産した日本の風土とも調和して、多彩な発展をとげた。木彫仏像に関する研究はすでに多年の蓄積によって大きな成果をあげているが、なお重要作品の多くについて、その詳細な調査研究が課題として残されている。同時に、飛鳥時代以来およそ鎌倉時代に至るまでの間、日本へもたらされ、日本の木彫に多大な影響を与えた中国の木彫像についての系統的な研究も進められるべきである。とくに初期の作品においては、日本製・中国製の判別に課題を残すものさえある。本研究はそれらの中国木彫仏像およびとくに平安時代の重要作品に焦点を当て、日本における木彫仏像発展の状況を把握しようとするものである。

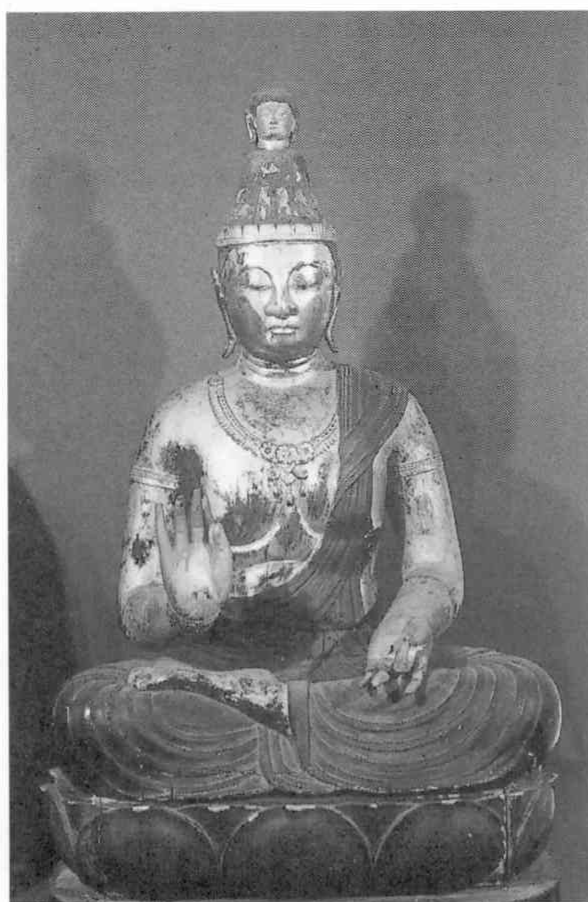
成 果

本年度は以下の作品の調査・撮影を行った。

- (1) 岡山・大通寺 木造不空罽索観音坐像
- (2) 奈良・室生寺 金堂諸像ならびに弥勒堂釈迦如来坐像・伝弥勒菩薩立像
- (3) 千葉・東光院 木造伝七仏薬師像

研究組織

○岡田 健 (美術部)、津田 徹英 (情報資料部)



木造菩薩形坐像 (千葉・東光院蔵 伝七仏薬師像のうち)

美術コレクションの収集・展示に関する歴史的比較研究

(5年計画の第1年次)

目 的

美術コレクションの収集・展示の歴史をふりかえると、じつにさまざまな形態があったことが知られる。今日の美術館・博物館においても、収集・展示は重要な機能となっているが、今後はさらに多様な社会的ニーズへの対応が必要となりつつある。本研究は、収集・展示の問題を、コレクションの形成史、鑑賞の歴史、経済的価値や美術的価値の変遷、教育史などの側面から多角的に考察し、その歴史的展開を踏まえて、収集・展示に関わる新たなビジョンの提示を目指すものである。

成 果

(1) 室町時代絵画コレクションの形成史

室町時代に収集・賞玩の対象となった絵画を総体として室町時代絵画とし、その収集・展示の歴史を現代まで辿る作業の一環として、雪舟画の所蔵変遷に関する資料を蔵帳・画集等から収集し、明治以降について一部をリスト化して考察を加えた。

(2) 寺院近代文書の調査研究

明治維新以後、廃仏毀釈と寺院の経済的困窮によって、多くの社寺から仏像・仏具が流失し、美術工芸品として個人や国立博物館・美術館のコレクションに収集されていく状況の一端を、寺院の近代文書を通して把握しようとした。本年度はその最初として、奈良・興福寺所蔵の近代文書の調査に着手した。

(3) 明治期博覧会出品目録

明治前期に広く全国で開催された地方博覧会の出品目録について資料の収集を行った（なお、この資料収集は、文部省科学研究費助成、基盤研究A(2)「日本における美術史学の成立と展開」と一部重複している）。

研究組織

○宮島 新一、中野 照男、田中 淳、岡田 健、山梨絵美子、塩谷 純（以上、美術部）、
米倉 迪夫、鈴木 廣之、島尾 新、井手誠之輔、勝木言一郎、津田 徹英（以上、情報資料部）

明治後期から昭和前期の美術団体、内外博覧会に 出品された作品およびその作家の研究

(4年計画の第4年次)

目 的

日本近代美術史研究は学会・美術館等を中心に拡大し、かつ多様化してきており、実証的調査研究に基づく作家、作品の史的位置づけの再検討が求められている。本研究は個々の作家、作品について調査研究を行うとともに、美術団体・展覧会活動・美術雑誌等の基礎資料の収集、データベース構築を目的とし、前記の状況に寄与しようとするものである。

成 果

明治後期からは美術団体が急激に増加し、小団体や短命であった団体のなかにも日本近代美術史上、重要な動きを示したものが多数認められる。そのため、これまでに当研究所が所蔵する美術団体出品目録の総リストを作成するとともに、欠けているものを東京都現代美術館等の他機関で複写収集をしてきた。これをもとに、本年度は、下記にあげる他機関の専門家を招き、「大正期美術展覧会等の基礎資料集のための研究協議会」を開催し(11年11月25日)、本研究の成果として刊行する予定である『大正期美術展覧会出品目録』(仮称)のための意見交換と、情報の収集をした。この研究協議会では、とくに欠けている資料の補完が話題となり、とりわけ当研究所が関西地方を中心にした美術団体の資料を充実することが求められた。そのため、本年度に研究協議会出席者の協力をおおぎながら、京都、大阪の関係機関が所蔵する資料収集を開始し、これは次年度も継続する予定である。また、本研究協議会についても、収集した資料の整理が完了した後、次年度に再び開催する予定である。

第1回 大正期美術展覧会等の基礎資料集のための研究協議会

他機関からの出席者：

尾崎正明(東京国立近代美術館企画・資料課長)

水谷長志(// 同課資料係長)

島田康寛(京都国立近代美術館学芸課長)

三木哲夫(国立国際美術館学芸課長)

菊屋吉生(山口大学教育学部助教授)

植野健造(石橋財団石橋美術館学芸員)

本年度は、中長期研究計画の最終年度にあたり、総括と成果の公表をしなければならないが、上記のテーマについては今後も継続性が求められるものの、本年度までに収集した資料をもとに次年度から実質的な公表にむけた作業を開始する予定であり、平成13年度に上記『出品目録』の刊行をめざしたい。また、上記以外の研究テーマについては、今年度も継続し、研究にあたった課題と実績については、下記のとおりである。

- (1) 林忠正宛書簡(約860通)の研究と公刊のための成果として、小山ブリジット氏(武蔵大学教授)に美術部・情報資料部の研究会において林忠正に関する研究発表(11年6月23日)を願い、討議をおこなった。
- (2) 昨年度から、小杉放菴記念日光美術館と共同で開始した木村莊八の未公刊「日記」の研究と公刊については、読みおこしをすすめる一方、木村の多彩な活動と交友から、美術だけではなく、文学、演劇、芸能の他領域の研究者の参加を仰ぐ必要が生じたため、各専門家を交えた研究協議会をおこすべく準備にはいった。
- (3) 黒田清輝宛書簡の整理については、書簡、葉書のファイリング作業と平行して、データ化による人名索引づくりを継続した。

その他個別的な実地調査としては、下記の6件である。

- (1) 萬鉄五郎記念美術館(岩手県和賀郡東和町)において、萬鉄五郎の未公刊書簡の調査と撮影。(11年5月31日、担当：田中)
- (2) 神奈川県立近代美術館において、川上涼花の作品の調査と撮影。(11年7月20日、担当：田中)

- (3) 石川県立図書館、玉川図書館（石川県金沢市）において、博覧会関係資料の調査収集。（11年11月21、22日、担当：山梨）
- (4) 黒田清輝がフランス留学中に、パリをはなれ、制作に専念した地であるグレー・シュル・ロワン村を現地調査し、収集した画像を次年度にインターネットのホームページ上で公開する準備にはいった。（11年12月13～17日、担当：田中、山梨）
- (5) 福岡市美術館において、山崎朝雲等の日本近代彫刻関係資料の調査収集。（12年1月30、31日、担当：山梨）
- (6) 京都市美術館、京都府立総合資料館、大阪市立近代美術館準備室等で、展覧会出品目録の調査収集。（12年3月20～23日、担当：塩谷、調査協力者：菊屋吉生氏）

研究組織

○田中 淳、山梨絵美子、塩谷 純（以上、美術部）

備考

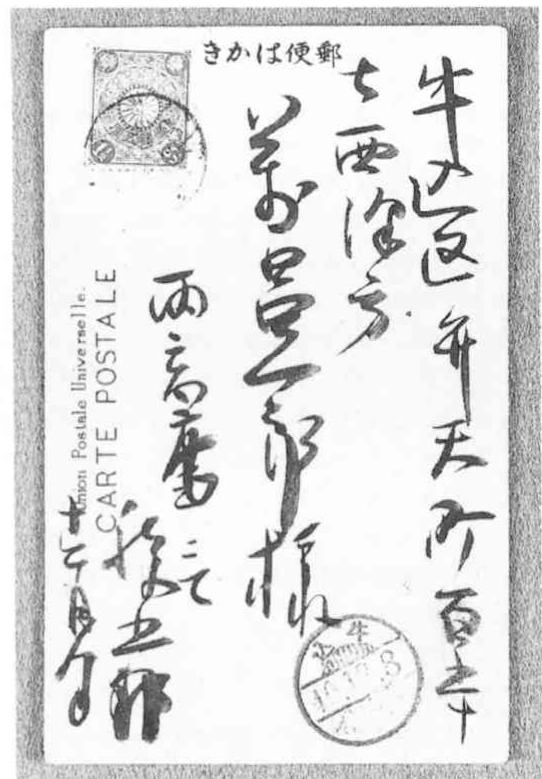
一部調査研究等特別推進経費



萬鉄五郎書簡（1906（明治39）年7月5日）萬ただ子宛



萬鉄五郎書簡（1907（明治40）年12月8日）萬昌一郎宛



「翁」の技法集成

(7年計画の第6年次)

目 的

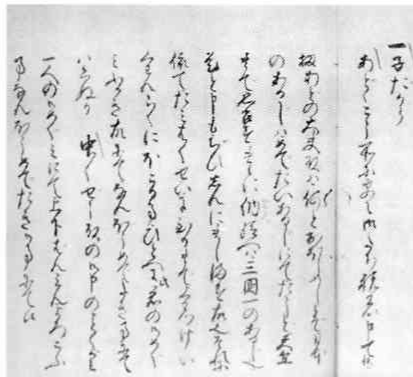
「翁」は、現在、能楽師が伝承し上演する演目の中では最も古い芸態を残している。しかし従来、秘事として扱われ譜は公開されず、流儀差も大きいので、技法の全容を捉えた研究は行われていない。本研究では、全役籍全流儀の譜を収集し、比較総合して「翁」の全体像を把握することを目的とする。

成 果

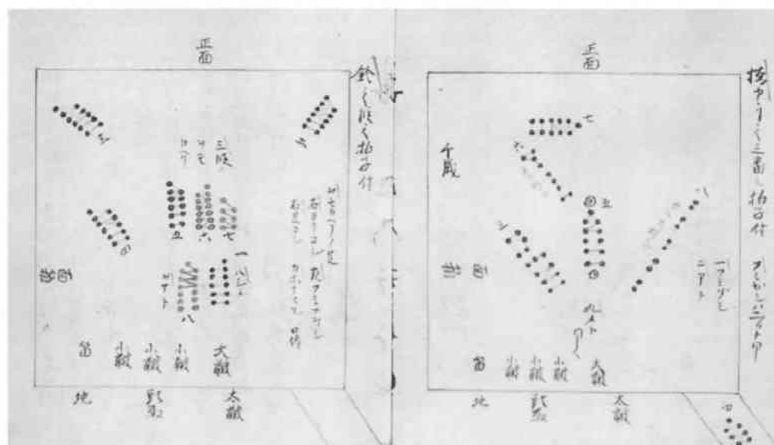
今年度は、山本東次郎家に伝えられている大蔵虎明の自筆伝書「代伝抄」の翻刻を行った。同書は、江戸初期大蔵流三番叟の演出、及び千歳と三番叟のさまざまな問答を記したもので、以前天野文雄（大阪大学）が翻刻した「神道秘密翁大事」（宮城県図書館伊達文庫蔵）と補完関係にあり、資料的価値がたいへん高い。翻刻の結果は『芸能の科学』28に発表したが、今後、現行三番叟の型付けとの比較も行う予定である。

研究組織

○羽田 昶、高桑いづみ、石井 倫子（以上、芸能部）



1 三番叟と千歳の問答（子宝）



2 三番叟の舞図

無形文化財・無形民俗文化財の伝承に関する研究

(5年計画の第2年次)

目 的

古典芸能や民俗芸能については、伝承の困難が指摘されているところであるが、個々の芸能の変遷の歴史や現状などについての調査研究、資料作成を通じて、伝統芸能継承のあり方考察する。

成 果

(1) 民俗芸能の伝承に関する研究(星野、中村)

- 1) 民俗芸能の中で最も一般的な盆踊りについて、今日流行の音頭櫓を取り囲んでの手踊り形式とは異なるお堂や拝殿などでの踊りの考察をおこない、民俗芸能の会場(舞台)が従来の特定の場所から公民館、公園、グラウンドなどの公共の場へ変移する中で、喪失しかけている貴重な芸能のあることの一例を明示した。
- 2) 能楽の「翁」とは別系統の翁猿楽には、〈物語をする翁〉がある。特に、三信遠地域の〈おこない〉に伝承する「松影」が「父の尉」であることを考察し、成果を『芸能の科学』28に公表した。
- 3) 後継者不足解消のために、学校教育の中へ民俗芸能を取り入れるケースが増えている。その現状と問題点について、第2回目の民俗芸能協議会を開催した。

(2) 近代歌舞伎の伝承に関する調査研究(鎌倉、羽田)

- 1) 前年に引き続き、上方歌舞伎について、制作・演出に長年携わった中川芳三氏(前関西松竹株式会社常務取締役、現松竹演劇部顧問)から聞き取り調査を行った。上方歌舞伎衰退の理由として、歌舞伎以外に面白い芸能が排出したこと、観客が歌舞伎を古典芸能として見る意識がなく、その興味は俳優に向けられていたことが挙げられた。この聞き取り調査の一部は『芸能の科学』28に公表した。
- 2) 演技の伝承や演出の変化を検討する上で、貴重な資料となる昭和30年代から40年代の舞台写真(石井雅子氏撮影・所蔵)約1400コマをフォトCD化し、映像の保存と利用の便宜を図った。
- 3) 小道具については、湯川弘明氏(藤浪小道具常務取締役)から聞き取り調査を行った。藤浪小道具株式会社では、明治以来の貴重な小道具類の保管はよくなされているが、製作と既製品の修理に携わる技術者は、21名中、60歳以上が17名で、新たに若手の研修生を募集したが、2名しか集まらず後継者不足が深刻である。

研究組織

○星野 紘、高桑いづみ、鎌倉 恵子、羽田 昶、中村 茂子(以上、芸能部)

備 考

一部調査研究等特別推進経費



歌舞伎小道具制作風景 藤浪小道具株式会社にて



お堂の中で踊られる盆踊り 岡山県真庭郡八束村、川上村の大宮踊

文化財施設の保存（収蔵展示）環境の研究

（5年計画の第5年次）

目 的

各地に博物館・資料館などの文化財施設が建設される中、文化財にとって安全な保存・展示の科学的基準の明示が望まれている。本研究は、温度・湿度・照明・空気汚染をはじめとする広い項目にわたって、関係の研究者の協力を得ながら、その測定方法や評価方法を検討し、文化財の保存と公開活用に資することを目的とする。

成 果

この研究の特色は、博物館・美術館などの現場の抱える問題を基礎的な面から解決することを目的としながら、成果を簡潔な形で現場に活かし、また現場の声を次の第二次の研究に反映させるなど、研究と現場の有機的な結びつきを重視している点である。このため、各地域で資料の保存を担当している学芸員をメンバーとして研究会を催しており、本年度は第10回「博物館館内環境の設計・管理・調査」を行った。

第10回のテーマは特に博物館等文化財公開施設の調査手法に関する研究会で、本年度は最終年度に当たることから、これまでの館内環境の研究成果を取りまとめるためにおこなったものである。当所新館施設を環境調査手法確立のための調査事例と捉え、その設計の目指したところ、研究員側の要求、文化財収蔵施設としての条件設定、建築スケジュール、特に建材の指定など仕様・方式の選択理由、移転前・移転後の調査手法と結果について、各担当者から報告し、予測と結果、環境の評価、調査手法の問題点などについて討議した。たとえばさまざまな情報が提供され、また調査手法が確立されても、設計、施工から移転前の調整まで発注側の人文系担当者が担当することは事実上無理があり、技術系の強いサポートが必要な現状を指摘して本研究会の閉会となった。

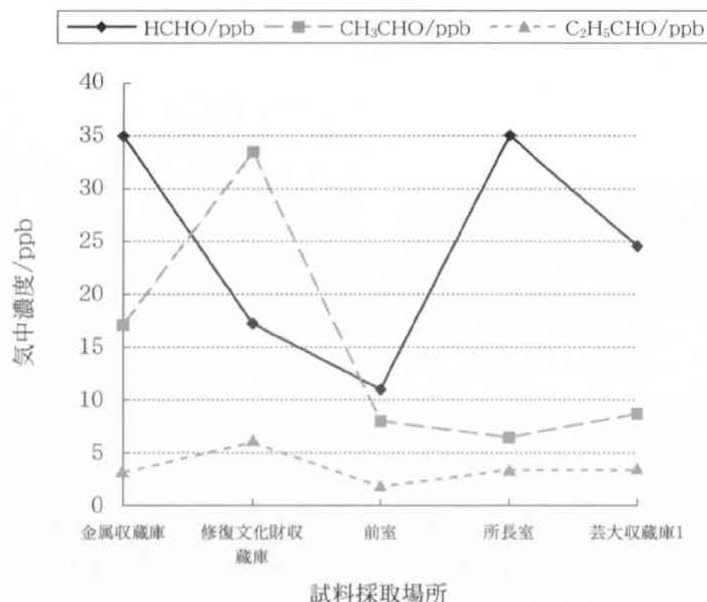
研究組織

○三浦 定俊、平尾 良光、早川 泰弘、石崎 武志、佐野 千絵、木川 りか（以上、保存科学部）、
大塚 英明、森田 稔（以上、文化庁）、中村 康（京都国立博物館）

備 考

一部調査研究等特別推進経費

新庁舎アルデヒド濃度調査結果/移転前



無公害な文化財生物劣化防除法の研究

(5年計画の第3年次)

目 的

オゾン層の保護のため、かねてより文化財燻蒸ガスとして広範に用いられてきた臭化メチルの全廃時期が2005年に前倒しとなることが決まり、これに変わる方法が以前にも増して緊急に求められている。本研究では、化学物質を主とする従来の方法に変わり、文化財材質にも影響が少なく環境や人体への影響も考慮した文化財生物劣化防除法の検討・開発を目指し、具体的な対処法の策定を目指すものである。

成 果

(1) 展示収蔵施設における総合的害虫管理

欧米では害虫、カビなどの生物被害を単独に考えずに総合的な資料保存の一環としてとらえ、きめの細かい対応を行うとする総合的害虫管理 (IPM <Integrated Pest Management>) を博物館等でも採り入れようという動きが既に開始されている。今年度は、国際研究集会を期に国内外の研究者、学芸員等がそれぞれの害虫管理の実例について紹介し、理解を深めた。また、イギリス、タイ、シンガポール、アメリカ、ドイツ、韓国、日本などの国々の担当者との交流を通じて、今後わが国の気候やシステムにおいてどのような形のIPMが可能なのかを検討し、それを策定するための重要な知見を得た。

(2) 新たな虫害防除法に関する基礎研究

低酸素濃度殺虫法、二酸化炭素による殺虫法について、引き続き具体的処理条件を検討した。日本の文化財害虫に耐性および加害形態によって3つのグループに分け、具体的な処理仕様案の充実を図るとともに、各種の学会や国際研究集会などでその成果を発表した。

さらに、欧米、東南アジアなどで書籍などの収蔵品の殺虫法として採用されている低温処理法についても、日本の文化財への適用の可能性を探るため、各種文化財材質に対する物理的影響について実験を進め、その結果を学会や国際研究集会などで発表した。また、新たな防虫剤、防黴剤などの化学物質が文化財材質に与える影響を評価するために、今年度は紙、布などの素材について試験を行い、その一部を国際研究集会で発表した。

研究組織

○三浦 定俊、木川 りか、山野 勝次、佐野 千絵、石崎 武志(以上、保存科学部)、増田 勝彦(修復技術部)

備 考

一部調査研究等特別推進経費



室温 (20°C) における低酸素濃度殺虫処理実験



イギリスの自然誌博物館におけるIPM研修および研究交流

古代東アジアにおける青銅製品の変遷に関する研究

(5年計画の第5年次)

目 的

中国・朝鮮半島・日本など、東アジア地域における青銅製作技術の発達、青銅製品の生産・交流・消費の歴史を化学組成や鉛同位体比測定などの自然科学的な方法を利用して理解することを目的とする。従来の考古学的な理解に加えて、自然科学的な方法を応用し、より幅広く、古代の青銅に関する歴史的な変遷を解明し、具体的には金属資料に含まれる鉛の同位体比の測定から材料の産地を推定し、化学組成から金属の技術的なレベルの発達を理解する。

成 果

本研究は5年間を継続期間として予定した。本年度は第5年次である。資料は各時代の違い、日本、朝鮮半島、中国という地域の違いを反映させようとした。

- (1) 中国における銅資料。本年度は日本に所蔵されている中国資料として西周・戦国・前漢・後漢時代の資料に関して鉛同位体比測定を進めた。これら資料の採取・測定には科学研究費を利用した。
- (2) 朝鮮半島の銅資料。資料採取が非常に難しかったが、湖巖美術館との協力で少ないながらも測定を進めることができた。昨年帯金具資料に関して、鉛同位体比を測定し、その産地推定に関して報告した。今年度は弥生時代並行期の青銅製品、および8世紀を中心とした釉薬の鉛同位体比を測定し、その産地に関して考察した。
- (3) 日本の銅資料。弥生時代資料および古墳時代の資料を中心に測定を進めた。日本の弥生時代資料として、東京国立博物館所蔵の銅剣・銅矛など約50点、各県教育委員会所蔵の銅資料約50点等を初めとし、古墳時代資料を含めて約200点の銅・青銅資料に関して鉛同位体比を測定した。古墳時代の資料として、出土馬具や銅容器など、多様化し始めた青銅製品に対して測定を進めた。資料の提供には各県、あるいは市町村の教育委員会の援助をいただいた。

中長期計画のまとめの時期であるが、古墳時代の資料測定例があまり多くはないため、引き続き年限を延長し、同様の研究テーマで研究を進め、資料数を増やし、できれば化学組成を測定できる資料を採取・分析してからまとめて報告する予定である。

研究組織

- 平尾 良光、早川 泰弘（以上、保存科学部）、井上 洋一（東京国立博物館学芸部企画課展示調整室長）、
難波 洋三（京都国立博物館学芸課考古室長）、柳田 康雄（福岡県教育庁指導第二部文化課文化財保護室長）、
森田 稔（文化庁文化財保護部美術工芸課文化財調査官）

備 考

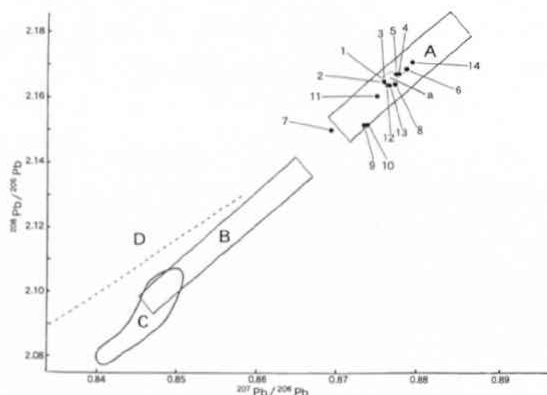
本研究の一部は科学研究費基盤研究一般A：『早期中国青銅器の原料産地に関する研究』に含まれる。また、各県、市町村単位の教育委員会から資料測定の依頼もあり、資料提供などに協力をいただいた。

高塚遺跡出土銅製品の鉛同位体比分布図

岡山市の高塚遺跡は弥生時代後期を主とした遺跡で、銅鐸、貨泉などが出土した。（カラー口絵）
貨泉がまとまって出土したのは珍しい。

領域Aは前漢鏡が分布する範囲である。高塚遺跡から出土した青銅器は、この領域に集まった。

図中番号 1：流水文銅鐸 2：袈裟襷文銅鐸
3：棒状銅製品 4～14：貨泉



文化財における環境汚染の影響と保存修復法の開発研究

(5年計画の第4年次)

目 的

酸性雨などの環境要因の悪化によって損傷を受けたり、過酷な立地条件によって損傷の進行している文化財が、環境からどのような影響を受けているかを検討し、その影響を軽減する手段を開発する事を目的としている。

成 果

平成6年以来観測している、鎌倉市高德院(国宝鎌倉大仏)、奈良市東大寺(国宝金銅八角灯籠)では、観測ステーションにより、大気汚染ガスや酸性雨による汚染程度とその季節的変動および気象との相関関係の調査を継続しているが1998年度までにおける大きな変動は見られず、平時における種々要因の変動などについてのデータを一通り採取したので、今年度末に両地点における測定は終了する計画である。

東大寺八角灯籠の修復が1998年度に終了したが、修復後の経年変化とメンテナンス方法を確立するための調査を行った。本研究の一環として開発した錆防止剤(インクララックとカルナバワックスの併用)の耐久性を見るためにも、経年変化を観察するシステムを開発する必要があると、灯籠の平行投影図に錆等の位置、面積その変化などの他、メンテナンス情報なども合わせて記録し解析も行う事が出来るデータベースを、デジタル画像を元にシステム化した。また、2000年2月に一部塗り替えたカルナバワックスについて、他の箇所との比較を観察中である。

1999年度から観測と現地テストを始めた白杵磨崖仏においては、温度湿度などの基本データに加え、岩体からの湧水量や含水率の変動などのデータが蓄積されつつある。その結果、近年改築された覆屋によって、石仏表面での気温が氷点下になる事がなくなるなど、保存環境は良い方向に向かっていると考えられるものの、塩類の析出や生物の繁茂など、依然として水の存在に関係した劣化が多く観察される。

強化剤、撥水剤、水分調整剤については、様々な樹脂の施工状態や耐性、物性などについて現地テストによって検討を行っている。その結果から、岩体への浸透性によって施工後の状態が大きく異なること、その浸透性には、岩体の差異の他に、施工時期や施工面の違い、施工箇所の周囲環境が大きく影響することが示唆されている。

即ち樹脂処理については垂直面より水平面が効果が現れやすく、撥水剤については、湿度が低い時期に施工した方が効果的であることも観察された。

日光地区においては、世界文化遺産登録に伴って環境モニタリングが義務付けられたので、将来の環境悪化を早期かつ的確に捉える必要が出てきたため、広い範囲での効率的、最適測定システムを探るシステム開発を目指している。そのために、地区内での温度、湿度、雨量、大気汚染ガス濃度などの環境状態を記録している。自然環境としての植生等の記録には、レーザや航空写真を用いた記録方式なども検討している。

現在までに、地区内での環境要素に大きな違いがあること、一部に環境汚染が認められることが判明している。

厳島地区においては、高舞台の修復材料の開発、社殿の丹塗りの改良などに向けて、海水、紫外線など耐候性の高い材料を検討するため、現地暴露試験を行っている。

研究組織

○増田 勝彦、青木 繁夫、川野邊 渉、松田 史朗(以上、修復技術部)、三浦 定俊(保存科学部)、
朽津 信明(国際文化財保存修復協力センター)

備 考

一部調査研究等特別推進経費

近代の文化遺産の修復に関する調査研究

(5年計画の第2年次)

目 的

近代の文化遺産の保存修復に関する様々な問題点を検討するために、いくつかのテーマをあげて研究を行っている。大規模な煉瓦建造物の劣化原因の調査とその対策の立案のために、栃木県野木町所在の重要文化財シモレンホフマン式輪窯の調査を行っている。金属文化財の修復方法の研究では、海中から回収された船舶用エンジンを屋外に公開展示するために保存修復方法の開発を行った。また、国内外における近代の文化遺産の保存状況に関する研究会を行った。

成 果

ホフマン式輪窯では、塩類風化による劣化が進行している。塩類の起源は、建物内に起因していると考えられる。水の起源は、屋根、雨樋などの損傷による雨水の浸入が主因であると考えられる。精密測量やポーリング、などの調査から地盤沈下は認められない。また、耐震性を計算したところかなり小さい値が計算された。この結果より今後の修復計画と利用計画を関係地方自治体と検討中である。

また、第五福竜丸のエンジンが大阪近郊の海中から引き上げられ、船体とともに保存されることが決定した。これに伴って1年間というきわめて短時間で、錆化したエンジンを屋外展示に耐えうるような処置を行う必要が生じた。検討の結果、処理期間が非常に短いために完全な脱塩を行うことはできないので将来における再処理が容易であるようにタンニン酸処理を行うだけにとどめた。屋外展示であるので、今後環境からの影響を追跡しながら保存対策を講じてゆきたい。

近代の文化遺産のうち、航空機や鉄道車両、船舶、など交通機関の多くは、その規模が大きいために保存修復場所の確保とその環境の制御が困難である。また、鉄、銅、アルミなど様々な種類の金属およびゴム、プラスチックなど新しい有機質材料などが複雑に混じり合って用いられている。そのために、個々の材質の保存修復だけを行うことの困難さに加えて、異質の材料を同時に処理しなければならない困難さも含んでいる。以上のような点から従来の伝統的な文化財を保存修復する上での困難さとは全く次元の異なる問題点を有していると判断される。これらの問題点がもっとも顕著に現れているのが航空機の保存修復現場であると考え、平成11年度には航空機の保存修復に関する研究会と、国内の保存修復現場での研究交流を行った。

研究組織

○増田 勝彦、青木 繁夫、川野邊 渉、早川 典子、加藤 寛、井口 智子（以上、修復技術部）、
石崎 武志（保存科学部）、朽津 信明（国際文化財保存修復協力センター）

備 考

一部調査研究等特別推進経費

漆の加熱硬化のメカニズムに関する調査研究

(3年計画の第2年次)

目 的

指定建造物修理報告書に記載されている、建築金物に対する漆の焼付方法には数種類の仕様が見られる。漆の焼付技法は、いまだ具体的な調査が行われておらず、その効果や物性についても未知な分野といえる。すなわち、金属表面と漆膜との密着性や表面硬度などを高めるために行うか、または急速乾燥をさせるための利用であったかなど判然としないのが現状である。

漆塗膜の厚みや温度の違いなどの焼付方法、表面硬度や耐候性などの物性測定から伝統技法調査の一貫して行い、成果を修復現場において活用することを目的とする。

成 果

1996(平成8)年度は、焼付漆を文化財に活用している3工房で、漆の塗布および焼付方法などの調査を行い、条件よっての相違点を検討した。各工房での調査結果から、焼付手板を作成し、塗膜の硬度・光沢・色などの物性を試験した。

1997(平成9)年度は、漆の種類や焼付温度違いによって生じる、物性の変化についての検討を行った。漆の硬化速度は、焼付温度が高いほど短くなる相関を持つ。例えば、120°Cでは240を要する最高硬度が、270°Cでは10分に短縮される。文献上の焼付温度は120°Cから記載があるが工房での調査では、表面温度が240~300°Cであった。また、生漆と素黒目漆を鉄板に塗布し、付着性の試験をおこなった。その結果は、常温硬化(20°C)と高温硬化(240~300°C)で作成した手板では、生漆を270°Cで焼き付けた塗膜がもっとも高かった。

1998(平成10)年度は、120°Cで4時間といった低温焼き付けを含む焼付漆の耐久性について実験を行い、結果について検討した。伝統的技法としての漆の焼き付けの理由は「常温乾燥では金属に対しては付着製が悪く、膜が剥がれてしまうため」であったが、実験の結果、耐久性試験では常温乾燥も含めたすべての焼き付け条件で剥離は起こらなかった。伝統的な焼き付け法は、炭火を使用していたために低温焼き付けを行えなかったが、120°Cで4時間の焼き付けが最もふさわしい結果であった。これら実験で作成した手板は暴露実験を行い、検討材料とする。

1999(平成11)年は、18世紀後半の輸出漆器である蒔絵ブラックをもとに、銅板への焼き付け漆の耐候性や蒔絵や螺鈿などの伝統的装飾への対応など、製作工程の復元を行った。成果については平成12年度『保存科学』誌上で発表する予定である。

研究組織

○加藤 寛、川野邊 渉(以上、修復技術部)、木下 稔夫(東京都立産業技術研究所)、
宮田 聖子(東京芸術大学)

近世輸出工芸品の実証的研究

(5年計画の第3年次)

目 的

海外所在の日本工芸品に対する関心の高まりの中で、海外美術館などから、所蔵工芸品に関する問い合わせが開始している。しかし、従来この分野の研究は国内でも十分に行われておらず、詳しい調査もできていない。

輸出されてから百数十年を経過して、損傷が顕著になってきたことから在外日本古美術品修復協力事業の対象として、近世工芸品が日本に来る機会を捉えて調査を行うものである。

成 果

平成11年度は、ヨーロッパ・ベルリン東洋美術館の漆工品2件およびギメ美術館1件、アメリカ・メトロポリタン美術館から4件の武器器具類を輸入して修復事業を行った。また、クリーブランド美術館蔵の厨子は、3年継続の3年目で修復が最終段階を迎えた。

ベルリン東洋美術館蔵の「花鳥螺鈿食籠」は、今年度、詳細な調査および写真撮影を行い、雁皮紙による仮貼り後クリーニングを行った。「黒漆鼓胴」は、剥落寸前の黒漆塗膜を雁皮紙を貼り付けて仮貼りを行ったあと、全体をクリーニングした。クリーブランド美術館蔵の「大般若経厨子」は、平成9年度よりの継続修理で、昨年度解体修復した厨子本体を、今年度は組立を行い最終的な表面修復をした。

メトロポリタン美術館の「菊紋螺鈿鞍」「鳳凰蒔絵螺鈿矢筒」「南蛮兜」「雑賀鉢」の4点は、今年度本格的な修復を行い完成をした。なお、これらの作品は乾燥した倉庫に保存される見込みなので、二重構造の桐製保存箱を新調し、調湿剤で湿度を維持しながら保管するようにした。菊紋螺鈿鞍は、貝を一枚一枚貼り戻し、欠落箇所を極錆をほどこした。鳳凰蒔絵螺鈿矢筒は、底にある「重広」の螺鈿銘から、富山藩の漆工「杉田重広」の製作であることが分かった。富山県立博物館には江戸時代の杉田細工の作品を収蔵しているが、その中でも重広の製作した硯箱が含まれている。今年度は、剥落した螺鈿平文などの装飾の本格修理を行った。南蛮兜は、鉢の表面の錆部分をクリーニングおよび防錆処理、威糸の部分的な強化を行った。雑賀鉢は、紀州の雑賀衆が着用した実戦用の兜で、鉢、眉庇、腰巻の部分が残っている。今年度は外した塗膜を貼り戻し、さらに欠矢部分に新しい塗膜を作成し貼り付ける。塗り替えをしない鉄製漆塗りの本格的な修復は、日本で最初の例になる。

平成10年度に修復した5件の作品について、カラー図版入りの報告書(日・英文、英文用語集)を刊行した。また、1999年8月に技術的な要望から国際研修「漆の保存と修復」を行い、海外の学芸員や保管担当者に修復技術の基礎を教え、英文のテキストを作成し、関係各機関に配布した。

また、この研究に関連する調査を長崎県立美術館および長崎市立博物館で行い、研究の成果をもとに、平成12年1月14日、文化財保存修復研究協議会を「近世輸出工芸品の保存と修復」のテーマで開催した。なお、研究協議会の報告書は平成12年7月に刊行する予定である。

研究組織

○加藤 寛、川野邊 渉、早川 典子(以上、修復技術部)、朽津 信明(国際文化財保存修復協力センター)、五味 聖(三の丸尚蔵館)、北村 昭斎(漆芸修復家)、室瀬 和美(同上)、勝又 智志(同上)、山下 好彦(同上)、松本 達弥(同上)、田口 善明(同上)、天川 裕(同上)

文化財における環境汚染の影響と修復技術の研究協力

(5年計画の第5年次)

目 的

経済活動の活発化に伴い、アジア諸国は酸性雨などの環境汚染物質による文化財の被害地域として注目されてきており、これはアジアの文化財の保護にとって無視できない問題である。この問題は国境を越えた問題であり、アジア全体の問題でもある。これらの国々と協力して文化遺産の保護を進める必要から、1995年（平成7年）度から韓国国立文化財研究所と共同研究を開始した。

成 果

文化財に対する環境汚染物質の影響を比較研究するためには、測定方法などが共通化されなければならないが、そのためにソウル景福宮や徳寿宮などに観測ステーションを設置し、暴露試験などの行ってきたが、ソウル市内にある国宝圓学寺十層石塔や国宝敬天寺十層石塔などに見られる黒色汚れが、日本側の分析調査により酸性雨などにより溶解した炭酸カルシウムが硫酸化物などの影響で硫酸カルシウムに変化したもので、その過程で煤煙などを巻き込んで黒色の皮殻になったものであることが判明した。この結果を踏まえて国宝圓学寺十層石塔のために覆屋が建てられ、修理については今後検討していくことになった。また、清州市内にある龍頭寺址鉄幡竿の錆を防止するために東大寺八角灯籠に使用したのと同じカルナバワックスが使用され、研究成果が応用された。今後東大寺と同様な方法で経年変化を調査する予定である。

この研究は、本年度で共同研究契約が終了するが、研究の継続については双方が合意しているため、2000年以降あたらしい方向で研究を行っていく予定である。

研究組織

○増田 勝彦、青木 繁夫、川野邊 渉、松田 史郎（以上、修復技術部）、三浦 定俊（保存科学部）、朽津 信明（国際文化財保存修復協力センター）

備 考

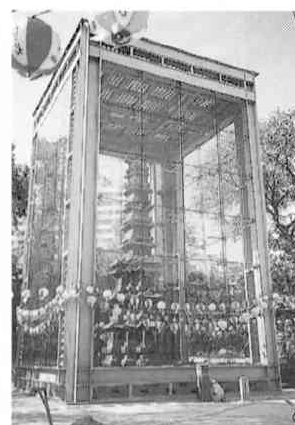
一部調査研究等特別推進経費



圓学寺址十層石塔（国宝第2号）



圓学寺址十層石塔 劣化状態



完成した覆屋

敦煌文化財の保存修復に関する日中共同研究

(3年計画の第1年次)

目 的

昭和61年(1986)、東京国立文化財研究所と敦煌研究院は、莫高窟壁画、彩塑の保存・修復に関する共同研究を開始した。本研究は、保存・修復技術を確立し、将来にわたって理想的な保存・修復が行われる事を最終目標とし、平成2年(1990)12月に正式に合意書を交わした。平成3年(1991)4月から合意書に則って、環境・病害・修復材料の3つの研究班を組織し、日中共同で調査研究を行っている。また、平成8年(1996)からの第2期3ヶ年の共同研究は、修復材料をテーマとして修復技術部が中心となって進めた。

第2期のテーマを展開するため、第3期は、コンピュータ利用修復記録システムの開発を中心に、修復材料の実験、専門用語集の編集を継続している。

本年度は、第3期1年目に当たる。

成 果

昭和61年(1986)～平成2年(1990)

文化庁長官裁定「敦煌文化財保護に関する協力事業実施要項」にもとづき、第1回「敦煌莫高窟壁画保存協力者会議」が10月21日に開かれ、平成2年(1990)までの5ヶ年で、協力者会議を6回開催し、訪中団を7回派遣した。

平成2年(1992)12月26日付けで、当研究所と敦煌研究院の間で、合意書「敦煌莫高窟第194窟、第53窟の保護に関する日中共同研究」が作成された。

第1期、平成3年(1991)～平成7年(1995)

第194窟と第53窟をフィールドとして研究を進めることし、日本側研究者は、年間2回敦煌を訪問し、調査測定、試料採取を行った。主に 温度 湿度 日照などの測定機器の設定、設置、データ読み出し等、また、病害原因研究のための試料採取を行った。計10回の訪中を行うとともに、敦煌研究院保護研究所の若手研究者は、年間2名が3ヶ月間当研究所で研修を行った。協力者会議は、平成6年度(1994)まで3回開催した。

平成5年(1993)10月に、敦煌で開催された国際シンポジウム「Conservation of Ancient Sites on the Silk Road」において、共同研究2件を発表した。

平成8年(1996)2月に、奈良において、国際シンポジウム「敦煌莫高窟の保存と関連の研究」を開催し、4件の発表を行った。

第2期、平成8年度(1996)～平成10年度(1998)

平成8年(1996)11月11日作成の合意書に基づき、第53窟をフィールドとし、修復および修復材料に関する研究を共同テーマとして、年間1回の訪中、敦煌側研究者の当研究所での年間2名の2ヶ月間研修を含み、3ヶ年継続した。

壁画修復の情報記入及び管理をコンピュータによって行う、デジタルカメラと測量技術を組み合わせたシステムの開発を目指して研究を行った。壁画の調査としては、赤外写真撮影およびCCD赤外カメラによる、彩色下の変更や下描きの探索を行ったが第53窟では効果の有る場面を発見できなかった。また、敦煌で実績のある修復技術をビデオ記録し、敦煌壁画の特殊性を究明するための補修用擬土および下地強化のための各種合成樹脂による基礎試験を現地及び東京で継続して行っている。専門用語集編集を敦煌研究院側と研究所側で進めた。調査用機器開発では、足場を設置することなく、高所を調査、撮影するための装置を開発し、第53窟でテスト撮影を行った。

第3期、平成11年～平成13年 3年計画の1年次

現在進行中の第III期では、修復履歴管理データベースの情報としてだけでなく、美術情報その他の図面としても利用が可能な簡易写真測量図化システムの開発と操作研修を行うこととしている。敦煌で実施している壁画修復方法の科学的検討は、修復に使われた合成樹脂が土に浸透した場合の物性を分析する、特に水に対する物性を分析する。修

復方法および修復材料の検討として、修復用合成樹脂の土に対する浸透性、凝集力、接着力などの検討をすること。変色した壁画の画像復元について、壁画彩色顔料の色彩測定、顔料鉱物同定、顔料粒度分布、などの分析調査を反映した画像復元作業を継続する。

以上の他に、研修として、簡易写真測量図化システムの操作、赤外線および紫外線蛍光写真撮影の研修を現地及び日本で行う予定である。

研究組織

○斎藤 英俊（国際文化財保存修復協力センター）、国際文化財保存修復協力センター、修復技術部、保存科学部、美術部、情報資料部

美術情報システムの研究

—データの共有化を中心として—

(12年計画の第11年次)

目 的

人文科学研究における学術データベースの構築例の増大と、パーソナルコンピュータの普及にともなう研究者個人によるデータ生産の日常化とが近年顕著である。一方、多様な目的・種類に有効利用できるデータベースの利用環境が十分に整備されているとは言い難く、データの生産・利用に関する具体的システム像を多角的かつ総合的に検討することが強く求められている。本研究は、こうした視野に立ち、美術史の基礎資料のデータベース化と、広範な研究者による相互利用システムの確立を通じ、資料の共有化と研究支援環境の整備を具体化することを目的とする。

本年度の研究は平成12年度の新営移転にともない新たなシステム環境の検討・構築などを見据えたものである。

成 果

(1) 共有データの生産・蓄積

先年度までの研究を承け、美術史研究において共有の望まれるデータの生産・蓄積を継続した。

1) 文献・図書データ

定期刊行物所載の文献・所蔵図書データの入力を継続するとともに、平成12年度における新営建物での閲覧業務再開に向け、図書台帳と現有図書の照合作業を進めた。

2) 美術史研究資料

近代美術関係展覧会情報、同カタログ・冊子のデータ（第2次、昭和52～61年）を入力し、新営後以後の受け入れ準備を進めた。

3) 画像データ

4ツ切X線写真800枚と4×5インチ・白黒ネガフィルム2,000枚をデジタル化し、CD-ROMを作成した。

4) 近代美術基礎資料の所在調査ならびに収集

明治期展覧会および万国博覧会等に関する資料について、佐賀県立美術館、石川県立図書館、玉川図書館（石川県金沢市）、富山県立図書館、新潟県立図書館で調査・収集を行った。

5) 貴重美術雑誌等のマイクロフィルム・CD化

経年劣化の著しい明治・大正・昭和初期の貴重雑誌から『塔影』を選びCD-ROMを作成した。

6) 芸能関係研究文献目録の作成

芸能関係研究雑誌の中から『能楽画報』について掲載文献をデータ化した。

(2) パイロットシステムの構築

1) データベースの運用・評価

定期刊行物所載文献データベースおよび所蔵図書データベースは継続的に運用中である。

2) ローカルエリアネットワークシステムの整備・運用・評価

マッキントッシュ機とウインドウズ機を併用するネットワーク環境の整備を行うとともに、異機種間のマルチアクセスが可能なデータベースの運用について実験をおこなった。

3) 画像データベース構築のための基礎実験

プロフォトCDマスターに入力した画像について、画質・容量等の諸条件を検討するとともにフィルムスキャナーからの入力条件と画質との関係について実験を行った。

4) インターネット環境におけるホームページの運用・評価

ホームページのカヴァーページと英文ページ全般について、その修正と充実を行った。各部のホームページは自主的に更新されている。黒田記念館のホームページの中に、新たに白馬会関係を中心とするページを作成した。

(3) 「共有化」環境の検討

1) 「共有化」環境をめぐる諸問題についての研究会の開催

関連研究分野の研究者3名を招へいして「東京国立文化財研究所情報システム協議会」(1999年12月17日)を開催した。

2) 文化庁を中心とする文化財情報ネットワークシステムへの対応

ホームページを通じて所蔵資料の公開を進めている。

3) データベースの有効利用

学術情報センター・国文学研究資料館など学術利用を目的とする各種データベースの利用を通じて将来のインターネット環境における所蔵データベースの公開に向けた諸条件を検討した。

(4) 平成12年度の新営にともなう準備

新営以後のローカルエリアネットワークの環境について、そのスペックを検討するとともに、具体的な設計案を協議中である。情報資料部の管理する図書や新営以後に新たに管理すべき図書・カタログ類については、新たなデータ化や既存データと図書類との照合作業を進めている。情報資料部が現在管理している既存データの新たなネットワーク環境における管理と活用の方法・手順については、本研究で作成したパイロットモデルを参照しながら、適宜、協議を行っている。

研究組織

○米倉 迪夫、鈴木 廣之、島尾 新、井手誠之輔、勝木言一郎、津田 徹英、中村 節子(以上、情報資料部)、
田中 淳(美術部)、伊與田光宏(客員研究員)、玉蟲 敏子(調査員)

デジタル画像情報の多重化に関する研究

(5年計画の第1年次)

目 的

文化財から得られるX線写真、赤外写真、顕微鏡写真などの画像には、それぞれ質の異なる多様な情報が含まれている。従来、それらを総合して分析する作業、例えば顔料の推定などは、多くの部分を目視に頼ってきた。しかし、デジタル画像処理技術の進歩によって、個々の画像のもつ情報を重ね合わせて表示・解析するシステムを実現する基礎が整ってきた。本研究では、この技術を基礎に文化財から得られる情報を多重化して表示・解析するシステムを実現する基礎的な条件について、いくつかの作品をサンプルとして具体的に考察する。

成 果

本研究の第1年次である本年は「源氏物語絵巻」(徳川美術館・五島美術館蔵)を対象としてデータの収集と分析を行った。

(1) データの集積

作品の通常写真(カラー・モノクロ)、赤外線写真、透過X線写真、エミシオグラフィー、蛍光写真、顕微鏡写真、また、高解像度のデジタルカメラによる撮影等を行い、データを集積すると同時に最適な撮影形態を追求した。また、あわせて関連資料のデータ集積のため龍香御墨・「葉月物語絵巻」(ともに徳川美術館蔵)について調査・撮影を行った。

(2) 技術的問題とモデル化の検討

収集した画像に、蛍光X線分析など非破壊分析の結果を合わせ、それらを多重化する方法を検討した。具体的には、画像の重ね合わせに際しての収差補正など技術的な問題、顕微鏡等によって得られるミクロの情報と人間の視覚とをいかに連続させるか等のモデルの問題についての研究をおこなった。

(3) 研究の中間報告

研究の方向性の周知化を行うべく徳川美術館ならびに五島美術館と共催でシンポジウム「科学の目でみる国宝源氏物語絵巻」(99年11月20日、於徳川美術館)を開催した。

研究組織

○島尾 新、米倉 迪夫、鈴木 廣之、井手誠之輔、勝木言一郎、津田 徹英、城野 誠治(以上、情報資料部)、伊與田光宏(客員研究員)、三浦 定俊、早川 泰弘(以上、保存科学部)、増田 勝彦(修復技術部)

文化財に関する研究文献情報の活用

(5年計画の第1年次)

目 的

過去10年ほどの間に、文化財に対する関心は著しく多様化した。現在では、人文科学・自然科学といった多分野の研究対象となり、日本にとどまらない地域的な広がりをもつようになった。文化財に関する研究を活性化し、関心の多様化に対応するためには「文献」という形で蓄積されてきた膨大な過去の成果物をいかに適切に活用できるかが第一に問われるが、従来型の分野縦割りの体制ではこれに対応できない。この研究では、美術工芸の分野を中心に、文献についての的確な情報を資料化し、多様な形態で流通をはかり、これによって、現状の課題に応えることを目的にしている。

成 果

本研究の第1年次である本年は、文献についての的確な情報を資料化するための準備として基礎作業を行った。

- (1) 雑誌記事およびジャンル等のコードを改定した。
- (2) これにともないこれまでに収集された情報の整備・点検の一環として現有図書・雑誌類の原本照合作業を進めた。
- (3) 前年度に引き続き戦前に刊行された貴重美術雑誌のCD化を行い、今年度は『塔影』のCD-ROMを作成した。

研究組織

○鈴木 廣之、米倉 迪夫、島尾 新、井手誠之輔、勝木言一郎、津田 徹英、中村 節子(以上、情報資料部)、
中野 照男(美術部)

世界、特にアジア諸国における文化財保存に関する情報の収集

(10年計画の第9年次)

目 的

世界の貴重な文化財の恒久的保存のため、世界の国々に対しその保存に協力する際には、各国の文化財の状況について調査し理解すべきであることは言うまでもないが、同時に、各国における文化財保護体制を把握し理解することが重要である。

本研究は、世界、特にアジア諸国の文化財の保存状態および文化財保護に関わる組織・機構・活動状況について、情報を収集し、さらにその問題点を検討することにより、より有効かつ円滑な文化財保存協力の実施へ貢献することを目的とする。

成 果

国内専門家からの情報収集

昨年度に引き続き、国際文化財保存修復研究会の参加者を中心とした専門家を対象にアンケート調査を行い、保存修復国際協力事業の相手国の実状について調査を行っている。また、文化財保存人材データベース（非公開）のデータ収集、整理を行ってデータの充実・更新をはかるとともに、情報交換のための人的ネットワーク作りを行っている。

海外の専門家からの情報収集

・アジア文化財保存セミナーにおける調査

昨年度に引き続き、アジア文化財保存セミナーにおいて、各国からの参加者（文化財保存の実務に携わる専門家）がそれぞれの年度のテーマに基づき、自国の文化財の保存状況に関する報告を行っている。第9回目にあたる平成11年度のセミナーは、「アジアにおける壁画の保存」のテーマでアジア12ヶ国の文化財保存の専門家と文化財保存に関わる3つの国際機関の代表者を招いて平成11年11月に東京で開催された。セミナーではアジア諸国における壁画の保存の現状と問題点、および今後の保存のための活用のあり方について調査、討議が行われた。セミナーの場で交わされた議論、および討議の結果はConclusion（結論）としてまとめられた。プレプリントについては順次整理し、国際文化財保存修復協力センターのホームページ上で公開している。また、セミナー参加者から提供された各国の文化財保存に関わる研究機関や法律、文化財そのものに関する資料を収集、整理している。

・海外での現地調査

中国、インドネシア、タイ、パキスタン、ベトナム、トルコ、シリア、ドイツなどにおいて遺跡や建造物、町並みなどの現地調査を行うとともに、専門家との協議を通じて、当該国の文化財保存に関する現状や問題点に関する情報を収集している。

その他

インターネットを利用して、世界各国の文化財保存に関わる機関や文化財関連の情報を掲載したホームページの情報を収集している。収集・整理した結果の一部は、国際文化財保存修復協力センターのホームページにおいて「文化財保存関連情報リンク集」として公開している。

研究組織

○齋藤 英俊、西浦 忠輝、松本 修自、朽津 信明、河原 脩、二神 葉子、松本 健、宗田 好史

(以上、国際文化財保存修復協力センター)

屋外石（レンガ）造文化財の劣化と保存修復に関する調査研究 [国内]

(10年計画の第9年次)

目 的

屋外の石（レンガ）造文化財の保存は重要な課題の一つである。本研究は、屋外の石、レンガおよび関連材質造文化財の劣化原因、過程を地質学、岩石学、鉱物学的に検討するとともに、気象環境と劣化原因との因果関係を考察し、さらには実際の保存修復処置についての実験ならびに応用研究を行って、保存修復対策についての基礎的データを集積し、石やレンガ等の文化財の保存技術を向上させることによって、文化財保存に貢献することを目的とする。

成 果

洞窟、磨崖仏等の調査研究を行っているが、北海道余市町、国指定史跡・フゴッペ洞窟において特に詳細な調査を行った。これまでの調査で、塩類の析出とともに、藍藻などの生物の繁茂が問題となっている。これまでは、塩類析出との関連から水の問題を考察することに重点を置いていたが、今年度は光の問題を中心に調査、検討、考察を行った。具体的には、蛍光灯に波長500～600nm以外は通さないフィルターを入れるというものである。全波長を均等に抑えるタイプのフィルターと同じ照度条件で比較するため、洞窟遺跡で観察された微生物を対象に照射実験を行ったところ、明確に有意な成長抑制効果が認められた。今後、この照明を実際に遺跡で応用し、生物成長抑制効果があり、かつ他に不都合が生じなければ、洞窟遺跡の公開方法についての重要な知見が得られることになる。

古瓦を科学的方法により保存修復して、実際の建造物に再使用する研究は昭和50年代始めより行っているが、過去に保存処置され、再使用された古瓦の物性の追跡調査を行った。愛媛県、重文・定光寺観音堂（室町時代末期）は昭和54～55年に解体修理されたが、その時、古瓦の強化、防水処理（撥水性シリコン樹脂の含浸処理）が行われ再使用された。その際、処理された平瓦の一部を東文研の屋上で屋外曝露した。約20年が経過した平成12年2月に曝露台から取り外し、吸水試験を行った。その結果、処理瓦は約20年前の処理直後とほぼ同じ高い防水性（低い吸水率）を維持していることが明らかとなった。

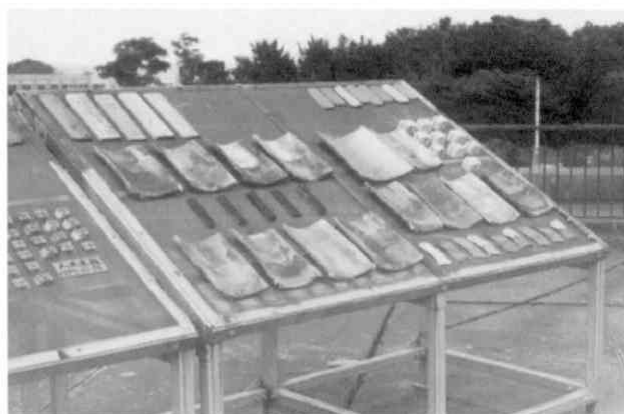
大分県下に残されている石仏群の調査を継続的に行っている。これらの石仏は長い年月の間の風化で表面の損傷が著しいが、当初のものと推定される彩色を確認できたものも少なくない。現在観察される彩色を、分光光度計によって厳密に測定して分類し、当初の顔料のパリエーションをそれぞれの石仏群について推定した。これにより、石仏の保存修復に役立つ重要な知見が得られた。

研究組織

○西浦 忠輝、朽津 信明、松本 健（以上、国際文化財保存修復協力センター）、石崎 武志（保存科学部）、渡辺 邦夫、尾崎 哲二（以上、埼玉大学）、三田 直樹（地質調査所）、大石不二夫（神奈川大学）



フゴッペ洞窟における生物の繁殖
(左：発掘直後、右：現在)



樹脂処理古瓦の屋外曝露
(東文研屋上：1980.9～2000.3)

屋外石（レンガ）造文化財の劣化と保存修復に関する調査研究 [海外]

(10年計画の第9年次)

目 的

屋外石（レンガ）造文化財は建造物、遺跡等世界の主要な文化財であるが、その多くが現在崩壊の危機に瀕しており、保存対策の策定が急務である。本研究は、海外の屋外石（レンガ）造文化財の劣化原因、過程を地質学、岩石学、鉱物学的に検討するとともに、気象環境と劣化原因との因果関係を考察し、さらには実際の保存修復処置についての実験ならびに応用研究を行って、保存修復対策についての基礎的データを集積し、石ならびにレンガ造文化財の保存技術を向上させることによって、世界の文化財保存協力に貢献することを目的とする。

成 果

中国・龍門石窟の保存修復に関する調査を行った。良質の石灰岩の岩崖に5世紀末～8世紀初に2000の洞窟が開かれ、10万體にも及ぶ仏像が彫り出されている。保存状態も比較的良いが、近年の都市化、工業化による劣化現象の加速が指摘されており、緊急の対策が叫ばれている。まず、劣化原因、過程を把握するための環境計測や状況調査、測定を開始すべく検討中である。

パナマ市の歴史地区であるカスコ・アンティグォ（17世紀にスペイン人の居住地として作られた防塞都市）の保存に関する調査を行った。保存修復マスタープランの作成とパイロット事業の実施に向けて本格的な調査研究を開始しつつある。

タイ国のスコータイ遺跡、アユタヤ遺跡等における環境条件と劣化現象についての測定、解析を継続的に行っている。スコータイ遺跡ではスリサワイ寺院、スリチュム寺院での気象観測と解析、スリチュム寺院大仏の保存に関わる水分の影響についての測定とコンピュータシミュレーションを行った。また、トランパントラン寺院の保存修復パイロット事業を行った。アユタヤ遺跡ではラチャプラナ寺院での気象観測と解析を行っており、またマハタート寺院をフィールドとしたレンガ造建造物の劣化と水分の挙動についての調査、測定、解析およびコンピュータシミュレーションを行った。その結果、雨水が滞留する場所が集中的劣化（塩類風化）を起こすことが明らかにされた。これを受けて、実際のレンガ造建造物のミニチュアを造り、水分計を設置して構造物内への雨水の浸透と移動についての測定を開始した。

パキスタン国ガンダーラ遺跡のラニガト遺跡における、雨水の浸透を防止するための粘土によるキャッピング技術について、現場施工と調査を継続して行った。粘土と撥水性シリコン樹脂および強化用アクリル樹脂を併用することにより、良好な結果が得られている。

その他、インドネシアのポロブドゥール、プランバナン遺跡群、トルコの地下宮殿遺跡や石造建造物等の保存修復に関する調査を行った。

研究組織

○斎藤 英俊、西浦 忠輝、朽津 信明、二神 葉子、松本 修自、松本 健、宗田 好史（以上、国際文化財保存修復協力センター）、石崎 武志（保存科学部）、渡辺 邦夫（埼玉大学）、増井 正哉（奈良女子大学）



龍門石窟保存修復調査



トランパントラン寺院保存修復事業

文化財の保存を目的としたレンガの劣化現象と保存対策に関する調査研究

目 的

近年急速に劣化が進んでいる国内外に所在するレンガ造文化財の保存、修復に資するため、レンガの劣化現象と保存対策についての調査、研究を行い、有効な保存対策を開発し国内外のレンガ造文化財の保存技術の向上に貢献することを目的とする。

成 果

栃木県野木町の旧下野煉瓦窯や北海道函館市のペイはこだてなどの煉瓦造建造物における観察と、室内実験とにより、塩類風化の進行プロセスを解明した。塩類風化は、通常は煉瓦壁表面付近における塩類の結晶成長によって直接引き起こされると考えられているが、実際には、煉瓦表面で塩類が最も成長する時期と、表面崩落が顕著に引き起こされる時期とは時間的なずれが観察された。フィールドにおいては、いずれも冬に塩類の析出量が最高に達するが、この時期には壁面崩落量は少なく、これに遅れて春から夏にかけての塩類が減少する時期に、壁面崩落量は最大に達する。これは、室内実験においても確認され、乾燥条件で煉瓦表面に塩類が成長するときには煉瓦の崩落はそれ程見られず、その塩類が表面に析出したものを湿潤状況に移し、塩類が減少していくときに、顕著な崩落が引き起こされた。このことから、塩類風化は、冬場の乾燥条件の下で表面に析出した塩類が、春になって湿潤条件に移り変わる際に潮解現象を起こし、それに伴って煉瓦が塩類に吸着されてこれと一緒に崩落することによって引き起こされている面が大きいと考えられる。このことから、文化財の塩類風化を防ぐには、その文化財の置かれている環境条件、とくに湿度条件をコントロールすることによって、上記のような現象をなるべく軽減していくことが対策として考えられる。

海外においては、タイ国のアユタヤ遺跡を中心に調査、研究を行っている。アユタヤ遺跡の中心であるマハタート寺院におけるレンガの著しい塩類風化には、地下水よりも雨水の影響が大きいと判断されたため、それに対する具体的な対策を検討している。実際の遺跡の近傍に、実際の建造物の縮小模型をレンガで2つ作成し、片方の上面に撥水処理を施し、もう片方はそのままにして、その後の経過を観察することとした。それぞれの縮小模型建造物に水分計を設置し、一定時間ごとの含有水分の変化をモニターしている。これにより、雨水の遮断が建造物自体の水分コントロールに有効であるかどうか、そして、その水分コントロールが、建造物の劣化防止に有効であるかどうかを観察する。これにより、縮小模型建造物に対してこの方法が有効であることが確認されれば、劣化の著しい実際の文化財に対する有効な保存対策として、提唱することができると考えられる。

研究組織

- 西浦 忠輝、朽津 信明、斎藤 英俊、二神 葉子、松本 健（以上、国際文化財保存修復協力センター）、石崎 武志（保存科学部）渡辺 邦夫（埼玉大学）、尾崎 哲二（埼玉大学）、三田 直樹（地質調査所）



レンガの塩類風化実験



アユタヤ遺跡マハタート寺院の実験用縮小模型建造物

4. 受託研究

江戸期銀貨の品位と保存に関する研究(2)

—銀貨表面の濃化層の分析を中心にして—

目 的

日本銀行金融研究所貨幣博物館が所蔵する江戸期銀貨の品位に関する分析研究の一貫として、銀貨表面に極薄層として存在すると考えられる銀の濃化層の検出を試み、銀貨の色揚げに関する理解を深めることを目的とする。さらに、これらの調査結果と銀貨の劣化についての関係を考察し、所蔵資料の活用と研究ならびに保存管理に資する。

成 果

江戸期に製造・流通された銀貨の中から、銀品位の異なる豆板銀資料3点を選定し(享保豆板銀64%、元文豆板銀46%、天保豆板銀26%)、オージェ電子分光分析装置により表面層の元素濃度分布を測定した。Arイオンビームで資料をスパッターしながら、 $\phi 0.06\mu\text{m}$ の電子ビームを入射し、表面から3~5 μm 程度の深さまで銀および銅の濃度分布を測定した。その結果、3資料とも表面では銀濃度が高く、内部にいくに従って濃度が低下する(銅濃度は表面で最も低く、内部にいくほど増加する)結果を得ることが出来た。享保豆板銀(銀品位64%)について得られた測定結果を下に示した。最表面には腐食生成物が存在していると考えられたが、その直下(約500nm=0.5 μm の深さ)では銀濃度72%(銅濃度は28%)という値であり、公称品位よりもはるかに高い値を示した。また、深さ方向に進むに従って銀濃度が徐々に低下(銅濃度は増加)していることが明らかになり、色揚げを立証するデータを得ることができた。

また、オージェ電子分光分析装置による測定の際にSEM観察を同時に行ったところ、銀濃度が高い相と銅濃度が高い相の2相から成る共晶組織を形成していることを見出すことができた。

研究組織

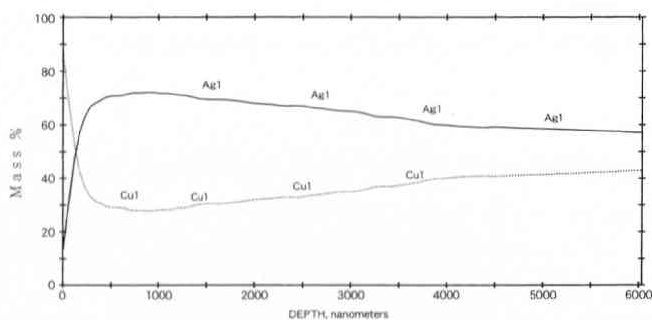
○三浦 定俊、早川 泰弘(以上、保存科学部)

備 考

当受託研究は日本銀行金融研究所より依頼された。



江戸期に流通した豆板銀



享保豆板銀の深さ方向分析結果

装潢材料の物性研究

目 的

古糊は、装潢の際に伝統的に用いられてきた修復材料の一つであり、小麦粉デンプンである生麩糊を数年以上、一定の環境下に保存することにより得られる。伝統的に、古糊は大寒の時期に炊かれた生麩糊を原料とし、陶器の瓶等に入れた後、表面に汲みおき水を張って保存する。保存場所は地下の土蔵であることが多い。保存期間は各工房により異なるが、一般的には10年前後で古糊として用いられるようになる。保存中の古糊は、多少の差異はあるものの、表面に微生物による膜層が形成される。また、この保存中に毎年大寒の時期に表面の形成膜を除去し、汲みおいた水を張る「水替え」という作業を行う工房もある。

このような古糊は装潢文化財の修復に数多く用いられているにも関わらず、その化学的な組成や、求められる物性を与えている要因についてはほとんど解明されてきていない。本研究では、従来研究されてこなかった古糊の化学組成や物性に焦点を当てて行った。また、生麩糊および古糊などの試料は株式会社岡墨光堂より提供を受けた。

成 果

古糊と生麩糊について化学組成と物性を比較した。化学組成に関しては赤外線吸収スペクトル、熱分解ガスクロマトグラフィーおよびゲルパーミエーションクロマトグラフィーによる分析を行い、物性に関しては粘度測定により検討した。

赤外線吸収スペクトル、熱分解ガスクロマトグラフィーについては、大きな違いは見られなかった。試料に用いたのは、生麩糊と古糊の固形成分のみであったため、この結果のみにて二者の組成の相違を論じることはできないが、接着に大きく関与する高分子成分の組成としては、著しい違いは生じていないことが示唆された。分子量測定に関しては二者に大きな違いが生じている。古糊は生麩糊に比べて著しく分子量が小さい結果となった。これは、従来推定されてきた微生物によるデンプンの分解を裏付けている。

また、この結果を受けた同モル濃度における粘度測定においても、古糊は生麩糊と比べてはるかに小さい値を持ち、ニュートン流体に近い挙動を示している。

これらより、古糊は、生麩糊のデンプンが分解されて低分子量となったものであり、分解されたもののうち接着に関与するであろう成分は、生麩糊と同じような糖類に属するものであることが示唆された。

また、今後はデンプンの分解に伴って生じる低分子量成分について評価や、古糊の質の不均一性に関する評価も必要であろう。

研究組織

○川野邊 渉、早川 典子（以上、修復技術部）

備 考

当受託研究は株式会社岡墨光堂より依頼された。

花籠車蒔絵鏡の修復処置研究

(1) 資料名等

花籠車蒔絵鏡 一对 安芸市歴史民俗資料館蔵
幅12.0cm 長さ29.7cm 高さ25.0cm 江戸時代(18~19世紀)

(2) 修理概要

本作品は、平成10年度修復した「花籠車蒔絵鞍」と組をなす作品で、平成11年5月から12年3月までの11ヶ月間、修復技術部第1アトリエ内で修復・研究を行った。

(3) 資料の品質形状等

本作品は、黒漆塗りで鏡の外面に花籠車の文様が蒔絵で装飾されている。サスガ、紋板、柳端を鉄で、踏み込み部分を木をくり抜いて木地としている。文様は、菊、水仙、椿、牡丹など7種類の花を入れた車付きの籠を描く。加飾は、鳩胸部分を中心に花籠車文様を平蒔絵および高蒔絵で、細部を付描で表す。

(4) 破損状況

- ・鏡の表面全体に埃による汚損が見られる。
- ・紫外線の劣化と見られるマイクロクラックが表面全体に広がっている。
- ・木地の収縮により鉄部分との間に亀裂が生じている。
- ・木地と鉄を接合した際の釘痕が浮き上がっている。
- ・各稜部に打痕が認められる。

(5) 修復の考え方

修復は、原則として塗り直しなどを行わず現状維持とする。ただし、打痕や亀裂など部分的な形状復帰はオリジナルと同素材技法で行った。素材は、日本産漆材料を厳選し、適宜使用した。また、大きな修復方針の変更がある場合には、修理者は当研究所の担当者と打ち合わせを行い、指示を受けることとした。

(6) 修理工程

- ・修復の為の調査および修復前の写真撮影を行った。
- ・塗膜の亀裂部分に雁皮紙を使って仮止めを行い、表面全体のクリーニングを行った。
- ・表面のマイクロクラックに生漆を含浸して表面の強化を行った。
- ・麦漆を使って塗膜の圧着を行った。
- ・漆下地を使って打痕などの剥落部分の復元を行った。
- ・塗膜の欠失部分に極錆を付けて塗膜の保護を行った。
- ・生漆を使って塗膜表面の強化を行った。

(7) 記録および写真撮影

本修復ではすべての工程で写真撮影を行い、報告書を作成した。報告書は当該館へ提出したほかに、平成12年7月、研究協議会報告書「近世輸出土芸品の保存と修復」に日英両言語で掲載した。

(8) 分析およびX線撮影

本作品の搬入時にX線撮影を行い木地構造および素材の調査を行った。また、剥落した平文は、蛍光X線分析を保存科学部の早川泰弘研究員に依頼し、微量の銅を含む銀製であることの結果を得た。

研究組織

○加藤 寛(修復技術部)、山下 好彦(修復家)、レイモンド・リーベンプルグ(来訪研究員)

武者塚古墳出土遺物の保存修復研究

目 的

武者塚古墳は、7世紀の円墳である。この古墳では毛髪や刀の鞘などの有機物がよく保存されていた。これらは保存科学部の指導で、保存環境を制御する方法で保存を行ってきたが、刀が腐食したり、鞘の木材が腐朽し、漆膜が暴れたりして環境制御だけでは保存することが不可能になっていた。このようなことから3ヶ年計画で修復研究を実施することになり、本年度はその2年度目にあたる。

成 果

本年度は大刀の修復を行った。この大刀は鞘の漆膜がよく残っている。刀身については鞘の木質は、ほとんど残っていなかったが、鞘に塗られた漆膜は比較的よく残っていた。その漆膜は、新しく制作した鞘に移植された。漆膜の接着はホットメルト樹脂を使用した。刀身は脱塩処理後気化性防錆剤を使用して錆を防止する処置を行った。

研究組織

○青木 繁夫（修復技術部）

備 考

当研究は茨城県新治村より依頼された。

金唐革紙分析調査

目 的

金唐革紙は近代の洋風建築に用いられた装飾的な壁紙である。近代の洋風建築の代表的な例である旧岩崎邸の修理が行われるようになったことにより、金唐革紙の復元のため、使用されている塗膜顔料・金属箔紙質等について分析調査を行い、より効果的な復元技法の確立を目的とする。

成 果

前回報告で分析を行った壁紙試料に加えて、今回は追加調査として、洋館2階北隅室の金唐革紙1種、撞球室壁紙3種の試料を分析した。今回の分析目的は、表面に塗布された塗料の分析、金属箔使用の有無、紙質である。塗料の分析は、各種溶媒によって表面より試料を溶解し、それぞれの層のバインダーをFT-IRによって分析した。また、クロスセクションを作成して塗膜層の構造を検討した。同時にX線分析顕微鏡による金属元素の同定を行った。金属箔の存在の有無についても各試料のクロスセクションを作成しX線分析顕微鏡による金属元素の同定を行った。紙質分析は、顕微鏡写真と染色法によって繊維の同定を行った。

その結果、今回分析した試料すべてが、紙質分析により和紙を原料としてグランドパルプや化学パルプを用いた漉き返しの紙を用いていることから国内で生産されたと判断される。また、着色については、鉄を主体とする顔料の使用の可能性が指摘できるが、当時の顔料の標準的な使用状況が不明な現段階ではどのように用いられたものであるのか特定できない。すべての試料において金属箔の存在が確認できなかった。今回分析を行った試料は、典型的な金唐革紙の製作技法を用いていないと判断される。

研究組織

○川野邊 渉、井口智子（修復技術部）、朽津信明（国際文化財保存修復協力センター）

備 考

当研究は清水建設株式会社より依頼された。

国宝「源氏物語絵巻」の調査研究

目 的

徳川美術館と五島美術館が所蔵する国宝「源氏物語絵巻」について、X線撮影などの光学的調査を行い、作品研究の基礎的知見を得ると同時に、将来の修理のための情報を得ることを目的とする。

成 果

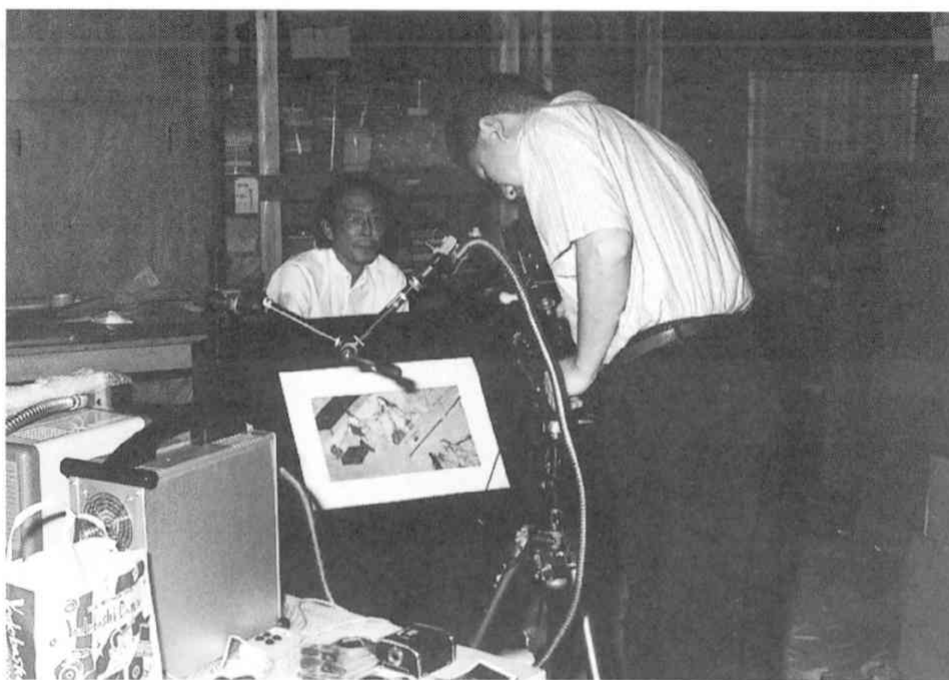
「源氏物語絵巻」19面について、通常撮影および赤外線写真の撮影を行い、さらにまた、X線および顕微鏡写真・蛍光写真の撮影、さらには蛍光X線での非破壊による顔料の元素分析を行った。その結果、肉眼による目視だけでは得られない数多くの情報を得ることができた。

研究組織

○米倉 迪夫、島尾 新、井手誠之輔、津田 徹英、城野 誠治（以上、情報資料部）、三浦 定俊、早川 泰弘（以上、保存科学部）、増田 勝彦（修復技術部）

備 考

当受託研究は財団法人徳川黎明会徳川美術館ならびに五島美術館より依頼された。



五島美術館での調査・撮影

5. 文化財保存修復に関する国際交流促進事業

スミソニアン研究機構との国際研究交流

目 的

アメリカのスミソニアン研究機構は、フリア・サックラー美術館のように東洋の美術品を集めた美術館や文化財の科学的研究を行っているミュージアム・サポートセンターなど様々な博物館、美術館、研究所を持つ、世界最大の文化財研究機関である。その研究者と文化庁の博物館・研究所の研究者が、文化財保存に関する共同研究を行うことを目的とする。

成 果

本研究の始まりには次のような経緯がある。昭和63年（1988年）5月に文化庁の大崎仁長官とスミソニアン研究機構のアダムス長官（いずれも当時）が、文化財の保存技術について日米が提携することで合意し、奈良国立文化財研究所、東京国立博物館、国立歴史民俗博物館等の協力を得て、東京国立文化財研究所を中心に共同研究を開始した。平成11年度は佐野主任研究官が文部省在外研究員として渡米し、フリア・サックラー美術館で染織品の保存に関する共同研究を行った。

なお本研究は当初より科研費（国際学術研究）を用いて主要な研究を行ってきたが、研究代表者であった西川杏太郎所長（当時）が平成7年3月に退官したため、代表者を奈良国立文化財研究所沢田正昭埋蔵文化財センター長に交替した。平成8～10年度「陶磁器文化の交流に関する科学的研究」に引き続き、平成11年度からは「アジア地域における陶磁器の流通に関する自然科学的研究」を行っている。

研究組織

○三浦 定俊（保存科学部）、町田 章、沢田 正昭、西村 康、巽 淳一郎、村上 隆（以上、奈良国立文化財研究所）、齋藤 孝正（文化庁）、二宮 修治（東京学芸大学）、L.V.ツェルスト、R.L.ピショップ、P.B.ヴァンディバー、L.A.コート、P.R.ジェット（以上、スミソニアン研究機構）



唐津における陶磁器片の調査



ミュージアムサポートセンター（ワシントン）

文化財保護に関する日独学術交流

目 的

日本とドイツ両国は、古い歴史と多くの文化財を持っている点だけでなく、第二次大戦の惨禍から急速に復興し高度に産業化された社会を作り上げた反面、古来の文化や文化財が衰退や破壊の危機に晒されている点も共通している。本研究は互いの国の文化財保護に関する知識や経験を交換し、それぞれの国の文化財保護に資することを目的としている。

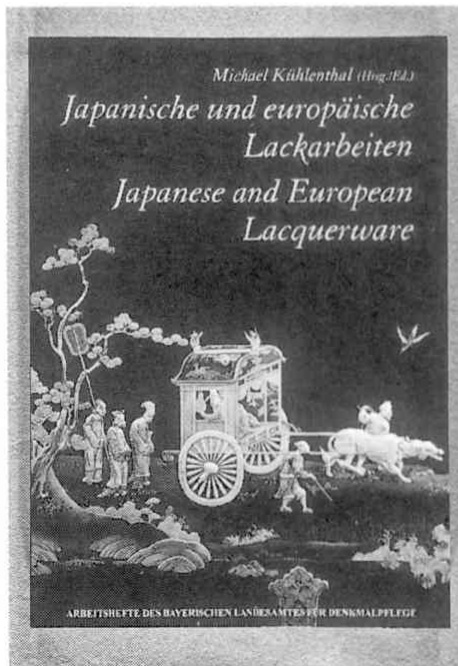
本研究の背景には次のような経緯がある。日本とドイツの間では、昭和49年（1974年）に科学技術に関する学術交流のための協定書が調印され、医学・物理学などを中心に日独学術交流が行われてきたが、平成2年（1990年）の第13回日独科学技術合同交流委員会においてドイツ側から「文化財保護に関する日独学術交流」の提案があり、平成4年（1992年）から交流が開始された。日本側では東京国立文化財研究所が、ドイツ側ではミュンヘンのバイエルン州立文化財研究所が、それぞれ事務局となって共同研究を行っている。また建造物の保護に関する学術交流は、ドイツ側ではヘッセン州文化財保護局が中心となっている。

成 果

平成6年度～11年度にかけて実施した漆工品の保存に関する研究成果をまとめ、英・独2カ国語でバイエルン州立文化財研究所から出版した。また平成11年3月にミュンヘンで東文研とICOMOSドイツ国内委員会などが共催した、国際シンポジウムの論文集の編集を行った。詳細については文部省科学研究費補助金(基盤研究)「彩色文化財の材料と技法に関する科学的研究」の項目を参照。

研究組織

- 三浦 定俊 (保存科学部)、渡邊 明義 (所長)、石崎 武志、佐野 千絵、早川 泰弘 (以上、保存科学部)、加藤 寛 (修復技術部)、斉藤 英俊、松本 修自 (以上、国際文化財保存修復協力センター)、岡田 健 (美術部)、津田 徹英 (情報資料部)、沢田 正昭 (奈良国立文化財研究所)、宮腰 哲雄 (明治大学)、北村 昭彦 (漆芸家)、M.ペツェット、M.キューレンタール、K.ヴァルヒ (以上、バイエルン州立文化財研究所)、E.エマーリン (ミュンヘン工科大学)、G.エンデルス (ヘッセン州文化財保護局)



日独共同編集による日本と西洋のラッカーに関する研究論文集



バイエルン州立文化財研究所における研究調査

敦煌文化財保存に関する研究協力

目 的

敦煌莫高窟の壁画の保存と修復を目的として、東京国立文化財研究所と敦煌研究院保護研究所の交流を図る。

昭和61年（1986）「莫高窟壁画、彩塑の保存・修復に関する共同研究」を開始後、平成2年（1990）12月作成の合意書に基づき、第1期共同研究は、平成3年（1991）4月から5年間、環境・病害研究を中心に行った。現在は、平成8年（1996）11月11日作成の合意書に基づき、第53窟をフィールドとし、第2期3ヶ年共同研究として、修復および修復材料をテーマに、修復技術部が中心となって進めた。本年度から開始した第3期は3ヶ年とし、1)修復材料としての合成樹脂に関する実験を継続、2)修復のための記録作製と保管活用のシステムを、写真測量技術とコンピュータを結合させたドキュメントシステムとして開発、3)修復関連用語集の語彙の拡充、を柱とした。

本年度は、第3期1年目に当たる。

成 果

第3期共同研究。平成11年度（1999）～平成13年度（2001）

現地で行った壁面図作成のための測量と撮影、国内における図面化作業は、日本側を中心として行ったが、修復用合成樹脂の実験は、現地での実験とともに、年間2名2ヶ月間招へいする敦煌側研究者が当研究所で、主に実施している。選定した修復用合成樹脂についての物性試験を行った後、敦煌側から提供された、修復材料としての泥土に対して、合成樹脂を含浸した場合の土の物性などについて実験を行った。

壁画の保存と修復に必要な語句を集めた、日中英の術語集の作成は、第2期で開始し、日本側で日本語、敦煌側研究員が中国語を担当して進めた。第3期では、英語の語彙に進み完了する計画である。当初予定した語彙数を上回る語彙が採録されている。

研究組織

○斎藤 英俊（国際文化財保存修復協力センター）、国際文化財保存修復協力センター、修復技術部、保存科学部、美術部、情報資料部

文化財の保存修復技術に関する国際共同研究

—文化財の保存修復に用いられる新材料—

目 的

本国際共同研究は、文化財保存・修復の最先端技術について、この分野の先進研究所であるベルギー王立文化財研究所と研究を行うと同時に、東南アジアの中で、実際上の問題を多く抱えつつも、一応の研究体制の整っているタイ国政府芸術総局とも研究を行うものである。本研究は三国間の協力事業として、文化財の保存技術の向上をめざし、もって世界の文化遺産の保存に貢献することを目的とする。

成 果

東南アジアで建造物、遺跡等屋外の文化財の保存、修復に用いられている合成樹脂についての調査を、タイ国政府芸術局考古部と共同で行った。タイ東北部のクメール石造遺跡、アユタヤ遺跡、スコータイ遺跡では、現地調査と現場実験を行った。東南アジア地域では屋外文化財への雨水の影響が甚だ大きく、防水性を重視した処理が必要である。また、生物劣化も大きな問題である。

欧米で石造文化財の保存修復に多く用いられている合成樹脂についての、成分分析、物性評価については、ベルギー王立文化財研究所で系統的に行われている。石材の材質や気象環境が欧米とは大きく異なる東南アジア地域において、欧米で開発、応用されている新材料が有効に応用し得るかどうかという観点から、ベルギー王立文化財研究所の研究資料を基に、評価実験を行っている。東南アジアでは、高等生物(草、木)、微生物の影響が大きく、この点の考察が重要である。

東南アジア地域で、博物館、美術館の収蔵品を中心とした、屋内に保存されている文化財の保存、修復に用いられている合成樹脂についての調査を、タイ国立博物館保存部と共同で行っている。伝統材料としての天然樹脂もかなり用いられており、合成樹脂との使い分けや、その根拠などについても調査、検討、考察を行っている。

1999年3月にバンコクで開催したセミナー [First Seminar on Thai-Japanese Cooperation in Conservation of Monuments in Thailand] の成果をまとめた英文の本 [Conservation of Monuments in Thailand] を作成すべく、日タイ共同で編集作業を行い、原稿を完成した。

日本側を中心とした論文は下記の5編である。

N.Miyamoto; Remarks on the Conservation Methodology between Thailand and Japan.

T.Nishiura, T.Ishizaki, Chiraporn A., Kitcha Y.; Conservation Treatment for the Giant Buddha of Wat Sri Chum in Sukhothai, Thailand.

N.Kuchitsu, T.Ishizaki, T.Nishiura; Salt Weathering of the Brick Monuments in Ayutthaya, Thailand.

T.Ishizaki, N.Kuchitsu, T.Nishiura et al; Numerical Analysis of the Water Regime in Historical Brick Buildings and Monuments in Thailand.

T.Nishiura et al; Conservation of Excavated Monument in Syria.

研究組織

- 西浦 忠輝、斎藤 英俊、二神 葉子、
- 朽津 信明、松本 修自
- (以上国際文化財保存修復協力センター)、
- 石崎 武志 (保存科学部)、大石不二夫 (神奈川大学)



タイ・カンボジア国境のカオブラヴィハーン遺跡

6. 文部省科学研究費補助金による研究

日本における美術史学の成立と展開

(4年計画の第3年次)

目 的

西洋近代の学を範として明治20年前後にはじまった日本の美術史学が、その成立当初から、国家的制度や機構と密接な関係を維持し、国民が共有しうる美的価値と歴史の体系を形成してきたことを、近年の研究成果は明らかにしている。それは近代国家として西洋に認知されようとする国情を背景として、日本の文化的ナショナルアイデンティティの構築をめざすものであった。今日、一般的に用いられる美術史の言葉や思考が、こうした美術史学の歴史のなかで形成され、意識化されない制度として働いていることは、美術史研究者が広く認識すべき問題となっている。

本研究は、このような問題意識にたち、日本における美術史学成立期以来の資料を収集するとともに、1)美術行政・美術教育と美術史学、2)「作品」概念の成立とその社会的機能、3)日本におけるアジア美術研究、4)美術史家の美術批評と創作、5)近代の言説と日本美術史観の形成という5つの観点から美術史学の歴史に分析を加え、美術史学の今日的な課題と可能性を問い直すことを目的とする。

成 果

(1) 資料収集

明治初期の博物館・博覧会行政にたずさわった田中芳男(飯田市美術博物館)、納富介次郎(佐賀県立美術館)について資料を収集した。また1900年パリ万博に際し、日本の美術をはじめ文化・歴史全般を紹介すべく“Histoire de L'art du Japon”に先立ち人見一太郎が仏語で著した“Dai-Nippon”等を購入し、明治期の海外博覧会に関する出版資料の収集に努めた。

(2) データ化

北信越、関西、四国地方で開催された明治期博覧会についての現地調査を行い(新潟県立図書館、富山県立図書館、石川県立図書館、福井県立図書館、金沢市立玉川図書館、飯田市立図書館、三重県立図書館、堺市博物館、金刀比羅宮、愛媛県立図書館)、関連資料を収集、次年度におけるデータ化の準備をした。

(3) 分析・報告

前年度に引き続き『京都日の出新聞』(明治25年～27年)の美術及び文化財関連記事を収集、冊子化したほか、各分担者の専門分野にしたがって個々の美術史言説が形成される背景を分析した。

(4) 研究会の開催

美術・美術史学の制度をめぐる問題についてより多角的に検討すべく、今年度はとくに工芸・書道の分野をめぐる研究者を招へいし、研究会と総合討議を行った(於東京国立文化財研究所)。

平成11年7月28日 山崎剛「明治時代の工芸品を見る その地域性に留意して」、大熊敏之「絵画性と彫刻性の相克 近代工芸にみられるレリーフ表現の位相をめぐる」

平成12年2月9日 筒井茂徳「書は芸術かI」、名児耶明「書は芸術かII」

研究組織

○米倉 迪夫(情報資料部)、宮島 新一、中野 照男、田中 淳、山梨絵美子、岡田 健、塩谷 純(以上、美術部)、鈴木 廣之、島尾 新、井手誠之輔、勝木言一郎、津田 徹英(以上、情報資料部)、玉蟲 敏子(調査員)、三輪 英夫(九州大学)、金子 一夫(茨城大学)、北澤 憲昭(跡見女子大学)、佐藤 道信(東京芸術大学)、安達 直哉(東京国立博物館)、高木 博志(京都大学)、長岡 龍作(東北大学)、横溝 廣子(東京芸術大学)、古田 亮(東京国立近代美術館)、小林 純子(沖縄県立芸術大学)

中国陝西省唐代石窟造像の調査研究

—慈善寺石窟と麟溪橋摩崖仏を中心として—

(2年計画の第2年次)

目 的

中国陝西省は、秦漢以来、長安（現在の西安）に国都が置かれ、中国の政治、文化の中心地として重要な役割を果たしてきた地域である。その陝西省北部の黄土高原の各所に北魏時代、唐時代、さらに北宋時代の仏教石窟寺院が点在している。本研究は、そのうち唐時代に開かれた石窟寺院の仏教彫刻について、美術史および考古学の方法から現地調査とそれにもとづく研究をおこない、長安を中心として展開した唐時代の仏像様式を理解するとともに同時代（7～9世紀）の日本における仏像様式との比較検討におよぶことを目的としている。なお本研究は、第1年次は東京芸術大学において文部省科学研究費の補助を受け開始したが、代表研究者（水野敬三郎）の定年退官に伴い、岡田健を代表者に替え、東京国立文化財研究所において継続実施した。以下に、2年間の成果をまとめて記す。

成 果

(1) 現地調査 第1年次（平成10年）8月23日～9月13日、第2年次（平成11年）8月28日～9月18日の日程で中国へ赴き、中国側研究分担者とともに麟游県慈善寺石窟および同県麟溪橋摩崖仏についての現地調査を実施した。具体的内容は以下の通り。

- 1) 慈善寺石窟 3窟および10龕のすべてについて、調書作成、写真撮影、作図を実施し、全作業を終了した。
- 2) 麟溪橋摩崖仏 全部で19龕。足場を架設。全龕の調査を完了した。

また、本調査と関連して、麟游県内の関係遺跡、唐時代石窟寺院、および陝西省内の唐時代・北宋時代の石窟寺院等を調査した。さらに、同時代の他地域の仏像様式と比較検討のため、河南省洛陽龍門石窟および周辺の小石窟について調査を実施した。

(2) 資料の整理 2年間で収集した資料については、

- 1) 日中双方がそれぞれの言語で調査ノートを整理した。
- 2) ①4×5ポジ52枚②6×6カラーポジ272枚、③6×6カラーネガ261枚、④35mmカラーネガ1,652枚を撮影、整理した。
- 3) 陝西省石窟寺院に関する文献資料リストを作成した。

(3) 中国側研究分担者の招へい 第1年次は平成11年2月21日から3月11日の日程で陝西省考古研究所張建林氏を日本へ招へいし、第2年次は同年11月16日から11月23日の日程で西北大学王世和氏、同王建新氏を日本へ招へいした。

(4) 報告書の作成 本調査については、年度最後に科学研究費報告書を作成、発刊した。このほかに、日中共同の学術出版をめざし、現在別途原稿の作成等準備をすすめている。

研究組織

○岡田 健（美術部）、津田 徹英（情報資料部）、水野敬三郎（東京芸術大学）、浅井 和春（青山学院大学）、副島 弘道（跡見学園女子大学）、東野 治之（奈良大学）、加島 勝（東京国立博物館）、長岡 龍作（東北大学）、瀬山 里志（サントリー美術館）、王 世和、王 建新、冉 万里（以上西北大学）、張 建林（陝西省考古研究所）、張 燕（北京市文物研究所）、王 麟昌、魏 益寿（以上麟游県博物館）

世界の文化財の保存

一わが国による国際協力体制構築のための調査・研究一

(4年計画の第2年次)

目 的

人類共通の遺産である文化財の保存に対し、この分野で進んだ技術を有するわが国の役割は大きく、諸外国からの協力依頼も数多く寄せられている。このような背景の下、かなりの数の国際協力事業が行われている。しかし文化財の種類、材質は多様であり、保存修復に携わる研究者の専門分野も広範囲にわたり所属学会も異なるなどの理由から、意見交換の場が得難く、情報交換や人的ネットワークづくりが遅れており、事業を実施する中で得られたノウハウが他の事業に有効に生かされていない現状がある。また、専門家、実務者からも事業についての情報を得たいという要請が多く出されていた。

本研究では、日本が行った、また現在行っている文化財保存国際協力事業の実態を総合的に調査、研究し、問題点を明らかにして、解決方法を検討、考察する。また、事業を行っている（または行った）研究者間の情報交換のためのネットワークを構築する。このことにより、文化財保存国際協力事業が適切かつ効率的に行えるようにあり、人類共通の貴重な文化遺産の保存に寄与すると同時に、わが国の文化面での国際貢献に役立てることが本研究の目的である。

成 果

海外における調査

インドネシア、タイ、パキスタンにおいて、現地専門家との協議や現地での調査を通じて、文化財保存修復事業についての現状や問題点のレビューを行った。

国際文化財保存修復研究会の実施および成果の刊行

「国際文化財保存修復研究会」を平成11年10月、平成12年3月の計2回実施した。研究会には文化財保存修復国際協力事業に積極的に携わっている日本国内の専門家、実務家が多数参加し、専門家による国際協力事業の事例紹介と、発表に関する質疑応答・討議という形で進められた。文化財の保存修復に関する技術的問題についての議論はもちろん、事業の運営上、財政上の問題を含めた総合的な議論が行われた。また、研究会における報告・討議内容をまとめた「国際文化財保存修復研究会報告書」を2回刊行した。さらに、これまでの研究会の場で提起された、事業に関する問題点やその解決の事例を整理し、「我が国による文化遺産保存国際協力事業の現状と問題点(1)―国際文化財保存修復研究会からの知見―」を文化財保存修復学会第21回大会で発表した。

データベースの構築、データ収集

文化財保存修復に携わる主として国内の専門家・技術者について、昨年度来作成しているMicrosoft Accessによるデータベースの更新を行った。また、日本の専門家が行った文化財保存修復国際協力事業に関するデータを収集した。さらに、GIS(地理情報システム)を利用した地図情報と組み合わせたデータベース構築のために、現地調査を行っているタイの遺跡の情報、特にGPSによる位置情報のデータを収集した。

研究組織

- 西浦 忠輝、斎藤 英俊、松本 修自、朽津 信明、二神 葉子（以上、国際文化財保存修復協力センター）、
松本 健（国士舘大学イラク古代文化研究所）、井上 洋一（東京国立博物館）

彩色文化財の材料と技法に関する科学研究

(6年計画の第1年次)

目 的

伝統的な絵画、彫刻、建造物などの文化財に用いられている彩色文化財の技法と材料について、美術史など歴史研究者、伝統的彩色技術者、自然科学者が共同して科学的層位分析を行い、その保存と修復に貢献することを目的とする。特に、多くの彩色文化財は後世補修を受けているので、文化財の保存修復においてはそのオーセンティシティを考えるために、当初の彩色だけでなく後世の補彩について材料と技法を明らかにすることも重要な課題としている。

成 果

平成11年度は、7月から8月にかけて南ドイツ（バイエルン地方）の中世彩色木造彫刻をドイツ側研究者と共に調査した。調査を行ったのはバドトルツの近くの礼拝堂、エルパッハの修道院、バンツ修道院、巡礼者教会、ロットインの教会などにある彩色木彫像の他、バイエルン州立文化財研究所の修復工房、ミュンヘンのエルンスト修復工房、ノイパウエル修復工房、ツンハンマー修復工房などで彩色文化財の修復方法について、実際の修復作品を前に討議を行った。また8月にはフランスの洞窟壁画の彩色技法について調査を行い、建造物彩色については12月にマイセン、ヴィースバーデンなどで調査を行った。ドイツ側研究者は日光東照宮、滋賀県の西明寺、京都の西本願寺、奈良の浄瑠璃寺などの彩色文化財の調査を3月に行った。併せて東京の明珍修復工房、京都国立博物館の修理所などを訪問し、日本の修復技術者と共に討議を行った。また日本の古墳壁画の彩色についてフランス研究者が12月に来日し、日本側研究者と研究討議を行った。この他、我が国の文化財については試料採取が困難なために、現場で試料を採取しないでそのまま顔料分析できるようポータブル蛍光X線装置を開発したが、その装置の性能について実験室で試験を行い、コリメータで絞って照射面で $\phi 2\text{mm}$ 程度のX線ビームにしても主要元素については十分な分析精度ができることを確認し、この研究成果を日本文化財科学会で発表した。またこの研究の成果を徳川美術館との源氏物語絵巻物の共同研究に生かして成果を得ることができた（関連の項を参照）。

研究組織

○渡邊 明義（所長）、三浦 定俊、石崎 武志、佐野 千絵、早川 泰弘（以上、保存科学部）、加藤 寛（修復技術部）、岡田 健（美術部）、津田 徹英（情報資料研究部）、斎藤 英俊、松本 修自（以上、国際文化財保存修復協力センター）、沢田 正昭、木村 勉（以上、奈良国立文化財研究所）、田淵 俊夫、長澤 市郎（以上、東京芸術大学）、神庭 信幸、後藤 文子（以上、東京国立博物館）、宮腰 哲雄（明治大学）、M. キューレントール、K. ヴァルヒ（以上、バイエルン州立文化財研究所）、E. エマーリン（ミュンヘン工科大学）、S. エンデレス（ヘッセン州立文化財保護局）



エルパッハの修道院における彩色木彫像の調査



ノイパウエル修復工房における18世紀当初の木彫像の調査

早期中国青銅器の原料産地に関する研究

(3年計画の第1年次)

目 的

中国における金属器文化の発展は東アジア地域における文化の発展の重要な足跡の一つである。中国における青銅器文化の発展を理解することは中国文化および日本文化の本質に迫る重要な研究である。古代中国青銅器に関する研究は従来は考古学の分野で行なわれてきたが、本研究では自然科学的な方法およびその結果を歴史の理解に加え、今までとは異なった自然科学的な視野を考古学へ導入し、歴史の流れをより深く理解することを目的としている。

成 果

本年度は中国湖北省文物局や上海博物館・河南省博物館、また北京大学や香港中文大学などと連携して研究できるように中国側と折衝をすすめた。また実際の資料に関しては日本の泉屋博古館および東京国立博物館の東洋課が所蔵する資料に関して、資料採取および鉛同位体比と化学組成の測定をすすめた。

中国から研究者を招請し、鉛同位体比測定および早期中国青銅器の発展に関して、討議を行った。中国側研究者と測定および討議を続けることができたことは日本と中国の学術交流として有意義であった。

日本の研究者が上海・武漢・北京を訪れ、各所の研究グループと交流・遺跡の見学を行った。武漢では商時代中期の盤龍城遺跡を見学し、出土青銅器の展示および修復現場を見学した。普通には見られない所藏品および修理現場を見学できたことは今後の研究に大きな成果であった。上海博物館では青銅器類の所蔵量が12万点と非常に多く、共同研究の意義が充分にあることを理解した。

研究組織

○平尾 良光、早川 泰弘 (以上、保存科学部)、森田 稔 (文化庁)、井上 洋一 (東京国立博物館)、
三輪 嘉六 (日本大学文学部)、金 正耀 (中国社会科学院世界宗教研究所)、
鄭 光 (中国社会科学院考古研究所)



盤龍城遺跡全景 中国商時代中期(紀元前約1500年)の揚子江中流域にあった交易拠点



盤龍城遺跡から出土した青銅器

文化財の新たな総合的虫菌害防除対策（IPM）のシステム構築に関する研究

（4年計画の第2年次）

目 的

文化財の虫や菌などによる生物被害は全国いずれの場所においても起こり、またその進行は著しく速いため、生物被害の防除は極めて重要な問題である。しかしオゾン層の保護のため、文化財燻蒸ガスとして広範に用いられてきた臭化メチルの全廃時期が2005年に前倒しになることが国際的に決定したため、これに変わる方法の導入が現場から強く要請されている。しかしながら、臭化メチルの効果を完全に代替できる適当な薬剤は、世界的にみても未だないというのが現状である。そこで、虫・菌などの生物被害を単独に考えずに総合的な資料保存の一環としてとらえ、害虫とエコロジーに対する知識を総合的に活用してきめの細かい対応を行おうという総合防除対策（IPM〈Integrated Pest Management〉）が世界的に着目されている。本研究は、このような観点から、臭化メチル燻蒸に文化財の害虫対策を全面的に頼ってきた我が国の従来の体制を、環境や人体への影響も考慮した総合的な資料保存体制へ移行することを目指し、具体的な対処法を検討・開発する。そのために現場のスタッフとともに、収蔵庫のデザイン、掃除の仕方、被害のモニタリングの方法、被害作品の隔離スペースの設置など具体的な項目について検討を行い、システムのモデル作りを行うことを目的とする。

成 果

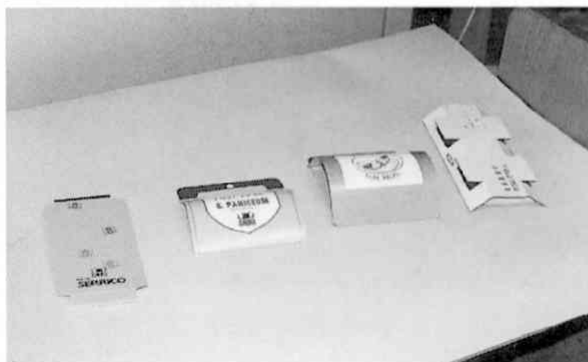
(1) 害虫ハンドブックの製作 IPMの一環として、現場で学芸員の方々が被害のもととなった害虫を同定し、また的確に対処するための助けとなる文化財害虫ハンドブックを編纂中である。加害材質一覧、各害虫の特徴のほか、防除法についても記述する予定である。

(2) 臭化メチル燻蒸の代替法の整理 低酸素濃度処理、二酸化炭素処理、温度処理、新規燻蒸剤や防虫・防菌剤などについて、各方法のおおまかな使い分けを一覧として整理し、学会誌に発表した。今後IPMのプログラムを策定するうえでの基礎資料として活用する。

(3) 現場におけるIPMプログラムの実践 ガス燻蒸ができない収蔵庫において、害虫駆除の計画を立案して実行した。現在、引き続き、モニタリングを行い、IPMプログラムに反映して有効な管理ができるように、その効果を確認している。

研究組織

○三浦 定俊、木川 りか、山野 勝次、佐野 千絵、石崎 武志（以上、保存科学部）、青木 睦（国文学研究資料館・史料館）、長谷川孝徳（石川県立歴史博物館）



モニタリングに使用する昆虫用トラップ類



IPMプログラムの一環としての収蔵庫清掃風景

タイ国アユタヤ遺跡の保存修復に関する研究

(3年計画の第2年次)

目 的

人類共通の遺産である文化財の保存のための国際協力を行うについては、十分な調査、研究と当事国との緊密な連携が必要不可欠である。本研究は、世界を代表するレンガ造遺跡であり、ユネスコの世界文化遺産に登録されているアユタヤ遺跡の保存修復について、日・タイ共同で研究し、その恒久的な保存のための国際協力事業の推進に資することを目的とするものである。

成 果

ラチャプラナ寺院に設置した無電源（電池稼働）自動環境計測システムにより環境条件（大気温度、大気湿度、雨量、日照強度、レンガ表面温度、レンガ内部温度）の計測を継続的に進めており、1999年のデータの解析処理を行った。その結果、1年中最高気温が30°Cを超えること、雨は雨季の末期に多く、短時間に集中して降ることなどが明らかとなった。

マハタート寺院近くの一角に設置したレンガ造柱を用いたシミュレーション実験を継続的に行った。構築柱の含有水分量と土中の水分量および地下水位の変化を測定し、その結果を解析中である。

マハタート寺院の一角の特にレンガの劣化の激しい部分において、詳細な観察と含有水分の変化についての測定を継続的に進めている。また、この部分における水分の動きについて、コンピュータによるモデル解析を行い、部分的に水分量が高まることが確認された。この現象を防止するために上層部分を撥水処理することを検討中である。この目的のために、マハタート寺院内に新たに実験用レンガ構築物を造り、水分センサーを取り付けての測定を開始した。

マエナンプルエム寺院の修復パイロット事業を行うべく、各種の事前調査を行った。特に当初の漆喰が残っている獅子像の防水性漆喰による保存法について検討した。

アユタヤ遺跡において今までに行われた保存修復対策についての資料収集と追跡調査を行った。

関連調査として、スコータイ遺跡および東北部のクメール石造遺跡の劣化と保存修復についての調査も行った。また併せて、関連の文献資料等の収集も行った。

研究組織

- 西浦 忠輝、斎藤 英俊、朽津 信明、二神 葉子、松本 修自（以上、国際文化財保存修復協力センター）、石崎 武志（保存科学部）、今津 節生（奈良県立橿原考古学研究所）、チラポン・アラニャナク、シリチャイ・ワンチャレオントラクル（タイ国立博物館）



ラチャプラナ寺院における環境計測



マエナンプルエム寺院

古代日本の動物遺体のDNA解析および免疫学的分析

(4年計画の第1年次)

目 的

本研究では、古代日本の動物遺体の遺伝子DNAを調べることによって、家畜等の伝播経路等について有力なデータを得るための基礎的な系をつくることを目的としている。古代試料のDNA分析においては、DNAの保存状態が非常に悪いこと、細菌やカビ、人間を含めた現世の生物のコンタミネーションを避けられないことなどの制約がある。そこで、本研究では、古代試料中に多量に含まれる細菌やカビなどの汚染微生物の遺伝子の中から、目的の生物種の遺伝子を単離するための基礎的研究を行い、実際の試料に応用することおよびDNA分析を補完する意味で免疫学的分析を併用し、より信憑性の高い分析系を作ることを目指す。

成 果

これまでの研究において、古代試料中に含まれる細菌やカビなどの汚染微生物の遺伝子の中から、目的の生物種の遺伝子を単離するための方法の確立に取り組んできた。その結果、個々の生物の遺伝子に特徴的な遺伝子配列を利用することにより、一部の古代試料からその生物種の判別に有効なデータが得られる場合があることがわかってきた。解析するDNA領域をうまく設定すれば、さらにはその生物の地域的な分布等についても知見を得られるものと推測される。

そこで、本年度はある古代試料からDNA増幅を試み、地域的な分布等についても知見を得ようと試みた。しかし、その試料からDNA抽出を行う過程で、試料にもともと含まれる色素がDNAとともに共沈し、これがPCRによるDNA増幅を阻害することが判明した。検討により、この色素によるDNA増幅の阻害を緩和する条件がわかったが、現在のところ、この古代試料より有意なDNA増幅がみられていない。そこで、プライマーの設計を再検討するとともに、より効率のよい増幅条件を検討している。

研究組織

○木川 りか (保存科学部)

石造文化財の劣化機構と保存対策手法の研究

(3年計画の第1年次)

目 的

世界遺産に登録されているタイのアユタヤ、スコタイのレンガ建造物や、日本の磨崖仏などの石造文化財の材料は、多孔質体と呼ばれる空隙のある材料からなっている。そのため、タイなどの雨季乾季のある地方では、表面からの蒸発に伴う表面からの塩類の析出などの原因による塩類風化が生ずる。また、寒冷地においては、材料中の水分の凍結、融解による凍結劣化などが大きな問題となっている。これらの文化財に対して適切な保存対策手法を構築するためには、材料中の年間を通じた水分分布、水分移動状況を正しく把握する必要がある。本研究では、これら文化財中の水分分布、水分移動に関するコンピューターによるシミュレーション手法を開発し、これを個々の現場に適用することにより適切な保存対策手法をたてることを主な目的としている。

成 果

図1に現在観測を行っているタイ、アユタヤのワットマハタット (Wat Mahathat) と呼ばれるレンガ建造物の東西方向で切った断面図を示す。図中のAで示したところが塩類風化の激しいところで、乾期には塩類の析出が見られる場所である、一方Bで示したところは乾季でも塩類の析出があまり見られず、塩類風化の影響が少ないところである。気象条件などのデータを用い有限要素法 (Hydrus-2D) により、水分分布の解析を行った。雨季の終わりの9月では、蓄えられた水が、表面の水の蒸発と共に表層へ流れてくる(図2)。A点では、表面付近に大きな含水率の勾配があり水の流れが大きいものに対して、B点では、含水率の勾配が小さく水の流れが小さいことがわかる。この解析では、特に、レンガの塩類風化による劣化の大きい所とレンガ材料内の水分移動の大きい場所とを関係付けることができた。

研究組織

○石崎 武志、三浦 定俊 (以上、保存科学部)、朽津 信明 (国際文化財保存修復協力センター)、
溝口 勝 (東京大学)、登尾 浩助 (岩手大学)、マルチヌス・バンゲニヒテン、ユッカ・シムネック (米国塩類研究所)、ピーター・ハウブル、ジョン・グルネワルド、ルドルフ・プラーゲ (以上、ドレスデン工科大学)

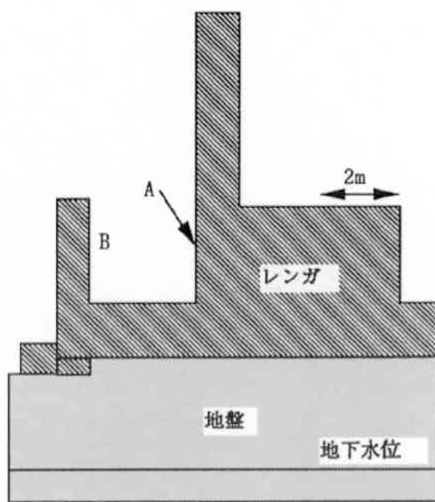


図1 レンガ建造物の東西断面の模式図

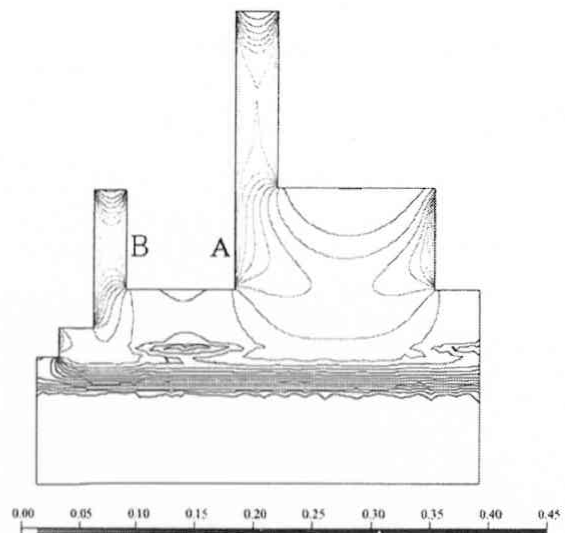


図2 レンガ建造物中の体積含水率分布

下張り文書剝離のための澱粉糊の老化技術

(2年計画の第2年次)

目 的

襖、屏風等の下張り文書の史的価値の認識が高まるにつれて、下張りを安全に短時間に剝離する技術が求められている。本研究は、澱粉糊の接着力の低下を利用して、下張り文書の剝離技術に応用しようとするものである。

成 果

本年度は、蒸気発生器による(昨年度購入)、文書剝離実験を行った。下張り紙に見られる和紙2枚を小麦澱粉糊で張り合わせてサンプルとし、箱に密閉し、蒸気を導入した後、剝離の容易さをテストしたところ、やや紙の損傷を少ない状態で剝離することが可能となったので効果ありと判定した。そこで、縦170cm、横50cm、厚さ30cmの箱を作成し、下張りを有する屏風下地を箱内に置き、箱に接続したホースを通じて蒸気を導入してテストを行った。蒸気導入を開始してから、剝離に効果を期待できる蒸気が箱内に充満し、下張り紙に浸透するまで、1時間以上を要し、また下張り全体が加熱されているため、取扱まで冷却が必要になるなど、実作業上不利な点が確認された。

昨年の実験では、加水加熱法が、実際の剝離作業には最も良い成績を示しているため、剝離に関しては、当初計画を変更する事とした。しかし、加熱による紙の劣化が懸念されていたため、加水加熱処置後の楮紙の紙力低下を測定した。熱湯95°Cに楮紙を浸し、5分経過後に引き上げ、自然乾燥したサンプルの、引張力を測定した。その結果、コントロールと比較して、紙力低下が認められなかった。

海外文献に於いても同様な実験結果が出ており、和紙洋紙ともに、手漉紙では、熱湯による紙力低下がみられないとするのが妥当である。

本研究の結論としては、加水加熱法即ち、刷毛による加水とアイロンその他による加熱を利用することが、現時点では最も有効な手段であることを確認した。

そこで、研究分担者を中心として、下張り紙を剝離し、文書を整理、記録する方法の検討を行いフォーマットを作成した。またその仕様に従って、江戸時代屏風の下張り文書の加水加熱法による剝離と整理法フォーマットに基づく剝離文書の整理を行った。

研究組織

- 増田 勝彦、川野邊 渉(以上、修復技術部)、田良島 哲(文化庁文化財保護部美術工芸課)、
青木 睦(国文学研究資料館史料館)

屋外環境下での遺跡、石造文化財の保存対策手法の開発

(3年計画の第1年次)

目 的

寒冷地では、北海道開拓の村の明治時代の歴史的建造物の漆喰壁が、冬季の凍結、融解により剝離したり、岩手県志波城跡の築地塀の表面が劣化するなど、屋外の環境で公開されている遺跡や石造文化財などは、様々な影響を受け、劣化する。本研究では、これらの環境条件と劣化過程のメカニズムに関する研究を進めると共に、その保存対策手法の開発を目的とする。

成 果

本年度は、北海道開拓の村の歴史的建造物と岩手県志波城の築地塀で、年間を通じた降水量、風速、日射などの気象条件を観測する装置を設置すると共に、建造物の材料表面での水分測定、温度測定を行った。図1は、北海道開拓の村の漆喰壁が冬季の凍結により剝離した様子の写真である。また、図2は、岩手県志波城跡の築地塀の調査の様子を示した写真である。本年度は、当研究所において、「寒冷地の遺跡、石造文化財の劣化と保存」というテーマで研究会を開催し、日本の各地の遺跡、石造文化財、歴史的建造物の劣化と保存対策に関する研究発表を行うと共に、本研究テーマに関して討論を行った。今後は、劣化状況の非破壊での調査手法の開発や、様々な環境因子の材料の劣化過程に与える影響の評価、保存対策手法の開発等を中心に研究を進めていく予定である。

研究組織

○石崎 武志、三浦 定俊、早川 泰弘 (以上、保存科学部)、青木 繁夫、川野邊 渉 (以上、修復技術部)、朽津 信明 (国際保存修復協力センター)、小林 幸雄、小林 孝二 (以上、北海道開拓記念館)、土谷富士夫 (帯広畜産大学)、登尾 浩助 (岩手大学)、武田 一夫 (鴻池組技研)、高見 雅三 (北海道立地質研究所)

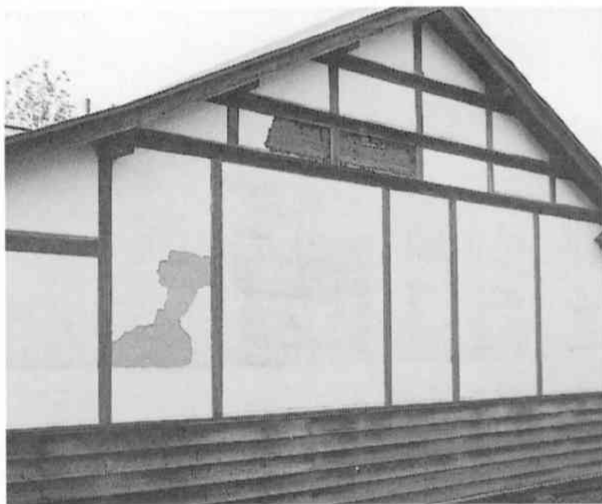


図1 北海道開拓の村の漆喰壁の剝離状況



図2 岩手県志波城の築地塀近くでの気象観測装置の設置作業

極楽浄土を表象するモチーフとしての迦陵頻伽の諸相とその文化的特質

—鳥と人からなる動物を通して見た東西文化の交流とその中国的受容—

(3年計画の第2年次)

目 的

迦陵頻伽とは、人の頭をもち、鳥の脚や翅を有する想像上の動物である。その形態はインドのキンナラや中国の鳳凰にも類似する。それらは極楽浄土の世界に棲んでおり、ときに美しい声で仏法を説き、ときに楽器を演奏するという。この想像上の動物について、絵画の分野では主に阿弥陀浄土変相や観経変相の中の図像として、工芸の分野では華鬘などの図柄として、建築の分野では斗キョウ飾りとして、そして音楽や芸能の分野では雅楽の曲目や舞踊として取り入れられてきた。

なぜ迦陵頻伽がこれほどまでに多方面の芸術の領域にわたって取り入れられたのであろうか。この問に対する答えはいまだに十分でない。その原因は迦陵頻伽に対する研究が美術史や工芸史においても音楽・芸能史においても必ずしも多くないことに由来する。

そこで、本研究は迦陵頻伽をメディアとした東西文化の交流や中国側の受容形態を明らかにすることを目的とする。そして迦陵頻伽が極楽のイメージやムードを構成するモチーフとしてはたしてきた役割や文化的特質について検討を試みたい。

成 果

3ヶ年計画の第2年次に当たる本年度は、研究活動の重点を迦陵頻伽等の作例データの収集とその分析に置いた。

(1) 美術・工芸・建築に表れた迦陵頻伽

1) 迦陵頻伽等の作例データの収集とその分析

昨年度に引き続き、迦陵頻伽等の作例についてリストアップをすすめ、それに対する分析をすすめた。また勝木がクチャ地方の石窟壁画に取材し、中央アジアのガルダに関するデータの収集と分析を行い、その研究成果の一部を公表した。さらに服部がガンダーラ地方を中心に西北インドの飛天の作例を調査し、その研究成果の一部を公表した。

2) 場の象徴としての迦陵頻伽の役割

飛天や迦陵頻伽などは、尊像として必ずしも高い地位を得ていないが、その空間を象徴する上で重要なモチーフであることが少なくない。勝木と服部が、これらの尊像がどのようにして場としての「極楽」や「虚空」を象徴するようになったのかを考察し、その研究成果の一部をそれぞれ公表した。

(2) 音楽・芸能に表れた迦陵頻伽

1) 舞楽迦陵頻に関するデータの収集

樋口が四天王寺聖霊会とよばれる寺院儀礼を取材し、仏に献納された舞楽迦陵頻について調査をすすめた。

2) 美術資料にみえる楽器の調査

樋口が敦煌壁画に取材し、飛天の持物としての楽器を調査し、その研究成果の一部を公表した。

研究組織

○勝木言一郎(情報資料部)、樋口 昭(埼玉大学)、服部 等作(神戸芸術工科大学)

地方に残る雅楽・能楽の古楽器調査

(3年計画の第3年次)

目 的

地方の寺社には未調査の楽器が多く残され、最良とは言えない保存状況の中で朽ち果てようとしている。そのなかには従来知られていなかった特異な形態のものもあり、今日の規格に整う以前の過渡期の姿を留めたものも少なくない。本研究では鼓胴を対象を絞り、雅楽から能楽に至る楽器の変遷過程を明らかにすることを目的とする。

成 果

今年度も、昨年度に引き続き地方の寺社に残された鼓胴の現地調査をおこなった。

なかでも興味深かったのは、沼名前神社蔵の鼓胴である。この研究グループでは雅楽から能楽の大鼓胴に至る過渡期の遺物を何点か発見してきたが、今まで発見した鼓胴は黒漆を施しただけの簡素な加飾であった。ところが沼名前神社の鼓胴は、黒漆の上に蒔絵も施しており、過渡期の鼓胴を能楽用に転用したと認められるものであった。この鼓胴の形態は大鼓然としているのだが、法量は完成期の小鼓に近く、小鼓が大鼓から派生した可能性もうかがわせる貴重な遺品である。

また、春日大社に所蔵される沈金蒔絵小鼓胴の調査もおこない、前年調査した大倉家伝来名品中の沈金蒔絵大鼓胴と一対であることも判明した。大鼓の所蔵者と小鼓の所蔵者は同時期に舞台に立つ演奏家で、楽器も揃えていたわけである。

そのほか丹波篠山能楽資料館では、大鼓風の座をもつ小鼓胴など、希少価値のある鼓胴を調査した。調査結果は報告書として作成した。

研究組織

○高桑いづみ (芸能部)、加藤 寛 (修復技術部)、勝木言一郎 (情報資料部)、樋口 昭 (埼玉大学教育学部)

沼名前神社蔵の鼓胴

①



③



②



④



新史料翻刻による花祭りの芸能史的位置づけ

—大神楽から花祭りへ—

(3年計画の第2年次)

目 的

花祭りに関する文書史料(祭文・呪文類)を所蔵している7集落(愛知県北設楽郡豊根村4・東栄町3)の新史料を翻刻、その内容を分析して、それらが花祭り次第中どのような目的で使用されていたかを追究する。そのことによって、江戸時代末期に中断した数集落集合の式年祭である大神楽から各集落の花祭りへと定着した過程を明らかにし、花祭りの芸能史的な位置づけをおこなうことを目的とする。

成 果

2年目の今年度は、初年度に収集した御園・大入の重要と思われる古文書約30点について、武井正弘氏の協力を得て翻刻・註釈・解題を完了した。完了した文書について、伊藤善夫氏の協力を得て版下を作成する作業を進め、校正の段階である。

古文書調査と併行して、東栄町各地・豊根村各地の現行花祭り調査、過去の花祭り・大神楽に関する伝承について聞き取り調査を実施し、収集した古文書類および聞き取り調査による資料を基に、大神楽から花祭りへ伝承された芸能に関する論考2本、「霜月祭りにみる翁猿楽の影響—花祭りの「しずめ」—」および「花祭りの鬼—その成立過程に関する研究—」をまとめた。前者は、現行花祭りの次第中最も重要な演目とされている「しずめ」が、江戸時代の大神楽において「土公神祭」と並行して行われていたことから、花祭り伝承の各地に所蔵されてきた「土公神祭文」の内容を比較検討することで、「しずめ」の成立と役割の変容について検証した。後者は、鬼の芸能として知られている花祭りの鬼が、古代の宮廷の追儺や寺院の修正会・修二会の結願行事や村々のおこないに伝承した鬼の諸相を基盤として、廃絶した大神楽の鬼から現行花祭りの鬼へと定着する過程について考察した。

研究組織

○中村 茂子(芸能部)

愛知県北設楽郡豊根村上黒川 花祭り

①ねぎ



③おきな



②みこ



石造、レンガ建造物の劣化にかかわる材料物性の研究

(2年計画の第1年次)

目 的

石造文化財や歴史的レンガ建造物の構成材料である多孔質な石材やレンガ材料は、寒冷地では凍結、融解による劣化、タイ、パキスタンなどの気温の高い地域では塩類風化による劣化が顕著である。これらの劣化過程を調べると、多孔質中の熱、水分、塩分移動が重要な役割を演じている。この水分移動速度は材料中の不飽和透水係数、水分特性曲線などの材料の物性値に大きく依存している。そのため、この塩類風化や凍結劣化のプロセスを定量的にシミュレーションなどによって評価するためには、これらの物性値を精度良く求めることが必要である。本研究では、特に多孔質材料の不飽和透水係数、水分特性曲線を精度良く求める手法について研究を行う。

成 果

タイアユタヤのレンガ材料の水分特性曲線を、吊り下げ法、加圧板法、蒸発法、サイクロメータ法の4つの方法で測定した。そのうちの、蒸発法の実験装置を図1に示す。

蒸発面から2 cm下の側面に間隙水の圧力を測るためのテンシオメータと熱伝導ポテンシャル計 (HDS) を埋設して、レンガの水ポテンシャルの経時変化をデータロガーで1時間毎に測定し、電子天秤の上に置いたレンガ試料の質量変化から、蒸発面における水分フラックスを算出した。レンガの質量変化は、コンピュータで1時間毎に記録した。実験終了後、Simunekら (1998) が開発した数値モデルHYDRUS-1Dを使って、測定した水分ポテンシャルと水分フラックスの経時変化を生じさせるようなレンガの水分特性曲線と透水係数を蒸発法によって求めた。ここで、水分ポテンシャルとは多孔質体中の水の圧力状態を示すパラメータであり農学の分野で良く用いられる。例えば、水分ポテンシャルが $-1000\text{cmH}_2\text{O}$ とは、多孔質体中の水の圧力が $1000\text{cmH}_2\text{O}$ の負圧と釣り合うだけ大気圧より低くなっていることを示している。また、体積含水率とは、単位体積中に含まれる水の体積である。蒸発法の測定結果を他の手法による結果と共に図2に示す。蒸発法による結果は、水分ポテンシャルが高い場合に、加圧板による結果より小さくなった。今後は、これらの測定法の特徴を把握し、測定法の改良を進めていく予定である。

研究組織

○石崎 武志 (保存科学部)、朽津 信明 (国際文化財保存修復協力センター)、溝口 勝 (東京大学)、
登尾 浩助 (岩手大学)

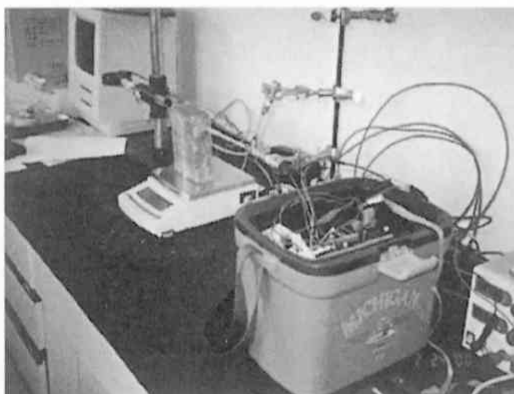


図1 実験装置の概要

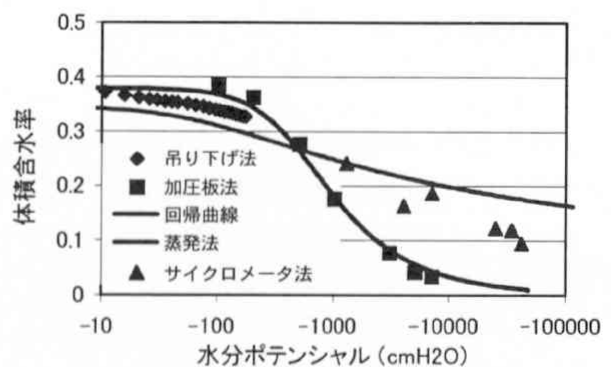


図2 水分特性曲線の測定結果

菊池容斎についての基礎的研究

(2年計画の第1年次)

目 的

幕末から明治初年にかけて活躍した画家・菊池容斎については、幕末の俗気を帯びた画家、もしくは忠孝・攘夷思想を鼓舞した勤王画家、という両極の評価が災いし、とくに戦後は研究対象として疎んじられる傾向にあった。しかし近年、明治期に洋画・日本画を問わず流行した歴史画の先駆者であるという位置づけが定着しつつあり、新出作品の紹介などもあってその注目度を高めている。そうした動向をふまえながら、本研究では容斎についての基礎的研究であることを旨とし、作品調査を中心にその実像に迫ることを目的とする。

成 果

(1) 作品調査

日本国内にある菊池容斎の作品52点を調査した。その成果は展覧会「菊池容斎と明治の美術」(平成11年10月24日～12月5日 於練馬区立美術館)に反映させ、図録に主要作品の解説、落款・印章一覧等を掲載した。

(2) 作家研究

上記展覧会図録のテキストとして、「容斎断章」と題した菊池容斎のモノグラフを試みた。内容は以下の通り。

1) 「菊池容斎之碑」を読む

容斎伝の基礎資料ともいべき墓碑(「菊池容斎之碑」)の全文註釈を行う。

2) 作品にみる容斎

上記の作品調査に基づき、容斎の重層的な画風を分析する。

3) 容斎をめぐるネットワーク

容斎の交遊関係から、その画業と水戸学や医学との関わりを考察する。

4) 菊池容斎、その後

容斎が没後どのように評価され、位置づけられたのかを諸文献を通して追う。

(3) 東京国立博物館所蔵資料の調査

東京国立博物館には菊池容斎に関する資料109点が一括所蔵されており、その調査を行った。容斎が所持していたと思われる書物やその著書『前賢故実』の画稿等、容斎を研究する上で重要な資料が含まれており、なかでも『前賢故実』画稿は容斎が人体モデルを使って人物画を描いていたことをあらためて実証するものとなった。

(4) 容斎関係文献の収集

菊池容斎に関する明治期以降の文献を収集、文献目録を作成し上記展覧会図録に掲載した。またこれに基づいて、上記の通り容斎に対する没後の評価の変遷をテキストの中で祖述した。

研究組織

○塩谷 純 (美術部)

3. 個人の研究業績

凡例

氏名

- (1) 公刊図書等
- (2) 報告書
- (3) 論文
- (4) 解説、翻訳等
- (5) 学会発表
- (6) 講演会、研究会発表

青木 繁夫 AOKI Shigeo (修復技術部)

- (2) (報告) 921台湾中部大震災の文化財被害 (青木繁夫、三輪嘉六) 921台湾中部大震災文化財 被害調査報告書 99.11
- (3) (論文) 象眼のある鉄器・鉄剣 (青木繁夫) 『週刊朝日百科 日本の国宝』109 pp.280-281 99.4
- (5) (発表) 千葉県加曾利貝塚遺跡における遺構保存を目的とした環境調査 (II) (朽津、青木) 文化財保存修復学会21回大会 99.6
- (6) (発表) 文化財における台風被害について 風災害研究会 日本風工学会 99.7.22
- (6) (発表) 史跡・加曾利貝塚住居跡の保存について 考古資料保存研究会 99.8.21
- (6) (発表) 敦煌壁画はなぜ残されてきたのか 府中市生涯学習講座 府中市生涯学習センター 99.11.9
- (6) (発表) 921台湾中部大地震の文化財被害 文化財保存修復学会例会 99.12.7
- (6) (発表) 文化財の活用における問題点 群馬県博物館協議会 99.12.15
- (6) (発表) 遺構保存のために新材料 文化財保存修復学会セミナー 00.1.8
- (6) (発表) 建築金具の保存 日本建築セミナー 00.1.15
- (6) (発表) 遺跡の保存 韓国保存学会研究大会特別講演 00.2.18
- (6) (発表) 遺跡保存の問題点 遺跡保存研究会 00.3.10

石井 倫子 ISHII Tomoko (芸能部)

- (4) (解説) 能・狂言鑑賞入門 『日本の伝統芸能』1999年度テキスト 日本放送出版協会 99.4
- (6) (講演) 国立能楽堂公開講座「戦国時代の能」 国立能楽堂大会議室 99.10
- (6) (講演) 世阿弥忌・研究セミナー シンポジウム「逢坂物狂」をめぐって 奈良商工会センター会議室 99.8.8

石崎 武志 ISHIZAKI Takeshi (保存科学部)

- (1) (著書) 地盤の凍結と凍土の工学的性質、地盤工学ハンドブック、地盤工学会編 pp.1726-1732 99.10
- (3) (論文) Dissociation Condition Measurements of Methane Hydrate in Confined Small Pores of Porous Glass. (Uchida, Ebinuma and Ishizaki) Journal of Physical Chemistry B, Vol. 103 No.18 pp.3659-3662 99.8
- (3) (論文) Frost deterioration process of stone and brick building materials during freezing. Proc. 10th International Symposium for Building Physics, Vol.2 pp.827-832
- (3) (論文) Salt weathering of the brick monuments in Ayutthaya, Thailand. (N. Kuchitsu, T. Ishizaki, and T. Nishiura) Engineering Geology 55 pp.91-99 99.8
- (3) (論文) Vegetation structure in gullies developed by the melting of ice wedges along Kolyma River, northern Siberia, (Tsuyusaki, Ishizaki, and Sato) Ecological Research, 14 pp.385-391 99.9
- (3) (論文) タイ国スコタイ遺跡の大仏中の水分移動解析 (石崎、西浦、シムネック、バンゲニヒテン) 『保存科学』第39号 pp.43-50 00.3

- (3) (論文) 展示公開施設の館内環境調査報告—平成10年度—(石崎、佐野、三浦) 『保存科学』第39号 pp.87-91 00.3
- (5) (発表) タイ国スコタイ遺跡のスリ・チュム寺院大仏中の水分移動解析(石崎、西浦、シムネック) 日本文化財保存修復学会 第21回大会 99.6.5
- (5) (発表) タイ国アユタヤの歴史的レンガ建造物中の水分移動解析、(石崎、朽津、西浦、シムネック) 日本文化財学会第16回大会 99.6.26
- (5) (発表) ガラス粉粒体中におけるアイスレンズの成長と含水比の関係(武藤、渡辺、溝口、石崎)、1999年度日本雪氷学会全国大会 99.10.16
- (5) (発表) Use of Advanced Numerical Techniques to Evaluate the Water Regime of Historical Brick Monuments. (Ishizaki, Mizoguchi, Sinumek and Genuchten) 91 st Annual Meeting of Soil Science Society of America 99.11.2
- (6) (発表) Evaluation of Physical Effects of Thermal Methods on Materials of Artifacts, Integrated Pest Management in Asia for Meeting the Montreal Protocol, the 23rd International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property Held by Tokyo National Research Institute of Cultural Properties 99.9 27-29
- (6) (発表) 寒冷地における石造文化財、レンガ建造物の劣化と保存対策 1999年博物館保存科学研究会「野外展示の環境とその保存対策 北海道立開拓記念館 99.10.6
- (6) (発表) Numerical Analysis of Water Regime of Historical Brick Buildings and Monuments in Thailand (Ishizaki, Kuchitsu, Nishiura, Simunek and Genuchten) Seminar Deterioration of Stone Monuments, Historical Tombs, Cave Sites, and Brick Buildings and Their Protective Measures, Tokyo National Research Institute of Cultural Properties 99.12.2
- (6) (発表) 屋外環境下での遺跡、石造文化財の劣化と保存、平成11年度保存科学部研究会「寒冷な環境下での遺跡、石造文化財の劣化と保存」東京国立文化財研究所 00.3.29

井手 誠之輔 IDE Seinosuke (情報資料部)

- (3) (論文) 請来された宋元仏画の諸相「東洋美術史研究の展望」国際交流美術史研究会第16回国際シンポジウム報告書 pp.131-144 99.3
- (3) (論文) 境界美術のアイデンティティ—請来仏画研究の立場から— 東京国立文化財研究所編『語る現在、語られる過去—日本の美術史学100年』平凡社 pp.169-183 99.5
- (3) (論文) 元時代の釈迦三尊像・雑感—東福寺旧蔵本をめぐって— 『仏教の美術』静嘉堂文庫美術館 pp.11-21 99.10
- (3) (論文) 研究資料 見心来復編『澹游集』編目一覧 附、見心来復略年譜 『美術研究』373号 00.3
- (4) (報告) 第2セッション報告 東京国立文化財研究所編『語る現在、語られる過去—日本の美術史学100年』平凡社 pp.207-221 99.5
- (4) (翻訳) 呉同著・湊信幸翻訳監修『ボストン美術館蔵唐宋元絵画名品集』解説39点 大塚巧芸社 00.3
- (5) (学会発表) 鎌倉仏画における「宋風」受容の問題 東方学会 99.11.5
- (6) (講演) 中国・宋元と高麗の仏画 静嘉堂文庫美術館『仏教の美術』展特別講演 99.11.20

岡田 健 OKADA Ken (美術部)

- (2) (報告書) 平成11年度科学研究費補助金(基盤研究(A)(2)) 研究成果報告書「中国陝西省唐代石窟造像の調査研究—慈善寺石窟と麟溪橋摩崖仏を中心として—」
- (6) (講演) 中国美術史における阿修羅像『興福寺仏教文化講座』 00.3.16

勝木 言一郎 KATSUKI Gen'ichiro (情報資料部)

- (3) (論文) 東アジアの芸術・芸能と仏教における地獄と極楽と接点『アジア遊学』10号 pp.2-22 99.11
- (3) (論文) 石鼓廟地獄図壁画の図像について『アジア遊学』14号 pp.59-89 00.3

- (3) (論文) 古代クチャ地方でつくられたガルダの図像について—キジル石窟・クムトラ石窟を中心に—『アジア遊学』14号 pp.86-110 00.3
- (4) (その他) フリートーク 天女をめぐる『アジア遊学』14号 pp.2-27 00.3
- (4) (その他) インタビュー—天女談義—川面稜一先生・荒木かおり先生を囲んで—『アジア遊学』14号 pp.138-153 00.3

加藤 寛 KATO Hiroshi (修復技術部)

- (2) (講演・論文) The Restoration of Urushiware for Export with Animal Glue and Urushi 「International Course on Conservation of Urushi 1999」 99.8.14 東京国立文化財研究所
- (2) (論文) Looking for Japanese Lacquerware Abroad 「International Course on Conservation of Urushi 1999」 99.8.14 東京国立文化財研究所
- (2) (論文) 野郎形兜 『在外古日本美術品修復協力事業』修理報告書工芸品 00.3.31 東京国立文化財研究所
- (3) (論文) アジアで漆の木を探す 季刊『銀花』第119号 99.9.30 文化出版局
- (3) (論文) 海外で漆器を探す 『海を渡った文化財』—様々なすがたとわご— 99.11.30 第13回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会
- (3) (論文) The Restoration of Urushiware for Export with Animal Glue and Urushi 『Japanese and European Lacquer ware』 00.3 バイエレン州立文化財研究所
- (3) (論文) Historical Study on the Restoration of Urushi ware 『Japanese and European Lacquerware』 00.3 バイエレン州立文化財研究所
- (3) (解説) Glossary of Urushi terms (三浦、加藤、松原) 『Japanese and European Lacquerware』 00.3 バイエレン州立文化財研究所
- (3) (論文) 能楽鼓胴の成立について 芸術文化雑誌『紫明』第6号 00.3.15 能楽資料館
- (3) (論文) 鼓胴をめぐる2、3の問題 『保存科学』第39号 pp.64-77 00.3.31 東京国立文化財研究所
- (3) (論文) 能楽鼓胴に関する美術的所見 『地方に残る雅楽・能楽の古楽器研究』 00.3.31 平成9、10、11年度科学研究費補助金研究成果報告書 研究代表者 高桑いづみ
- (5) (発表) 中国の螺鈿 漆工史学会 99.11.6 徳川美術館
- (6) (講演) 茶道の漆器について(二) 日本茶道会 99.4.18 市川市立博物館
- (6) (講演) 漆芸品修復の歴史について 第5回漆文化財修復技術講座 00.1.15-16 木曾地域産業振興センター
- (6) (講演) 法隆寺献納宝物と献茶 草月流講演会 99.9.15 東京国立博物館法隆寺宝物館
- (6) (講演) 輸出漆器について 江戸東京博物館定期講演会 99.10.22 江戸東京博物館

鎌倉 恵子 KAMAKURA Keiko (芸能部)

- (3) (聞き書き) 上方歌舞伎の変遷—中川芳三氏に聞く—『芸能の科学』28号 pp.97-125 00.3

川野邊 渉 KAWANOBE Wataru (修復技術部)

- (3) (論文) 高分子化学から見た漆の世界 『International Cours on Conservation of Urushi 1999』 99.8.14 東京国立文化財研究所
- (3) (論文) 第五福竜丸エンジンの保存処理について(川野邊、宮尾、田島、西口) 『保存科学』第39号 pp.59-63 00.3
- (3) (論文) 九州装飾古墳の緑と「青」について—福岡県下の例—(朽津、川野邊) 『保存科学』第39号 pp.24-32 00.3
- (3) (論文) 外装用漆塗装法の耐候性向上に関する試み(井口、川野邊、加藤、板垣、館川) 『保存科学』第39号 pp.51-57 00.3
- (3) (論文) 煉瓦建造物の劣化状況調査(川野邊、朽津) 『産業遺産』未来につなぐ人類の技 東京国立文化財研究所 99.9.25
- (3) (論文) Survey of the Condition of Deterioration of a Brick Construction (Kawanobe, Kuchitsu)

“Conservation of Industrial Collections” Tokyo National Research Institute of Cultural Properties

- (3) (報告) 文化財と高分子『高分子』48 573 929 1999
- (3) (解説) 東京国立文化財研究所 修復技術部 第二修復技術研究室『成型加工』11(12) pp.972-975 1999
- (6) (講演) 合成樹脂の建造物への応用 平成11年度文化財建造物主任技術者講習会(普通コース) 00.9.30 文化庁建造物課
- (6) (講演) 漆文化財の劣化と修復 第6回漆文化財修復技術講座 00.2.26 木曾地域産業振興センター
- (6) (講演) 高分子化学から見た漆の世界「漆の保存修復」国際研修 99.8.23 東京国立文化財研究所

木川りか KIGAWA Rika (保存科学部)

- (3) (論文) 大谷古墳出土馬甲に付着した毛皮の獣毛の形態およびDNA分析による生物種調査『和歌山市立博物館研究紀要』14 pp.25-28 99.10
- (3) (論文) 文化財の生物被害対策の現状—臭化メチル燻蒸の代替対応策について—(木川、三浦、山野)『文化財保存修復学会誌』44 pp.52-69 00.03
- (5) (発表) 低酸素濃度および二酸化炭素による殺虫：日本の文化財害虫についての実用化(木川、実宝、山野、三浦、後出、木村、富田) 第21回文化財保存修復学会大会 99.6.5-6
- (6) (発表) Low Oxygen Atmosphere and Carbon Dioxide Treatments for Eradication of Insect Pests in Japan (Kigawa, Yamano, Miura, Zippo, Miyazawa, Maekawa, Nochide, Kimura, and Tomita) Integrated Pest Management in Asia for Meeting the Montreal Protocol, the 23rd International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property Held by Tokyo National Research Institute of Cultural Properties 99.9.27-29
- (6) (講演) 紙資料の虫害防除の今後について 平成11年度地域史料保存調査研修会 和歌山県立文書館 99.11.11
- (6) (講演) 低酸素濃度および二酸化炭素による文化財害虫の殺虫法 第21回文化財(書籍・古文書等を含む)の虫菌害保存対策研修会 財文化財虫害研究所 99.7.1-2

串田紀代美 KUSHIDA Kiyomi (芸能部)

- (3) (論文) 中級後期日本語教育におけるコース・デザイン(共同執筆)『ICU夏期日本語教育論集』16号 国際基督教大学 00.3
- (6) (解説) 日報を読んで—すき間うめる記事期待 「新潟日報朝刊」 99.10.26
- (6) (解説) 日報を読んで—文化の価値基準簡明に 「新潟日報朝刊」 99.11.23
- (6) (解説) 日報を読んで—教育・文化の改革願う 「新潟日報朝刊」 99.12.21
- (6) (解説) 日報を読んで—文化を創する紙面 「新潟日報朝刊」 00. 1.18
- (6) (解説) 日報を読んで—差別人権 議論の場を 「新潟日報朝刊」 00. 2.15
- (6) (解説) 日報を読んで—権力に評価下す姿勢を 「新潟日報朝刊」 00. 3.14

朽津信明 KUCHITSU Nobuaki (国際文化財保存修復協力センター)

- (3) (論文) 史跡・吉見百穴における蒸発岩(朽津、尾崎)『地質学雑誌』pp.266-272 99.4
- (3) (論文) Salt weathering of the brick monuments in Ayutthaya, Thailand. (Kuchitsu, Ishizaki, and Nishiura), Engineering Geology, 55, pp.91-99 99.12
- (3) (論文) 九州装飾古墳の緑と「青」について—福岡県下の例—(朽津、川野邊)『保存科学』第39号 pp.23-32 00.3
- (3) (論文) 大分県下の石仏の彩色について(朽津、山田)『保存科学』第39号 pp.33-42 00.3
- (3) (論文) 輸出漆器の修理材料の分析(II)(早川、朽津)『保存科学』第39号 pp.78-86 00.3
- (3) (論文) 加曾利貝塚における遺構保存を目的とした環境調査(II)(朽津、青木)『貝塚博物館紀要』27 pp.47-55 00.3
- (3) (論文) 彩色材料分析報告『重要文化財 正法寺庫裏・惣門・附鐘楼堂 保存修理報告書』岩手県水沢市 pp.

190-194 00.3

- (3) (論文) 綿貫観音山古墳等顔料試料分析結果報告『綿貫観音山古墳Ⅰ』群馬県教育委員会、(勸)群馬県埋蔵文化財調査事業団 pp.406-408 00.3
- (5) (学会発表) 顔料鉱物の可視光反射スペクトルに関する基礎的研究(朽津、黒木、井口、三石) 文化財保存修復学会第21回大会 99.6.5
- (5) 千葉市・加曾利貝塚遺跡における遺構保存を目的とした環境調査(Ⅱ)(朽津、青木) 日本文化財科学会第16回大会 99.6.26-27
- (5) (学会発表) 塩類風化の進行プロセスについて—重要文化財・旧下野煉瓦窯における観察から— 日本地質学会第106年学術大会 99.10.10
- (5) (学会発表) 史跡・フゴッペ洞窟の劣化と保存(Ⅲ) —含水率変化の計測—(朽津、安田、山形) 日本応用地質学会平成11年度研究発表会 99.10.27
- (5) (学会発表) 史跡・フゴッペ洞窟の劣化と保存(Ⅳ) —崩落危険度評価—(安田、山岸、小林、朽津) 日本応用地質学会平成11年度研究発表会 99.10.27
- (5) (学会発表) 塩類風化の進行プロセスについて—重要文化財・旧下野煉瓦窯における観察から— 第3回岩石の風化に関するシンポジウム 00.3.6
- (6) (講演) 地球科学と文化財研究、かわさき市民アカデミー 99.12.2
- (6) (講演) 世界の石造・土構造文化財の塩類風化の現状と遺跡保存 第4回地圏環境・防災に関する公開セミナー 00.1.19

児 玉 竜 一 KODAMA Ryuichi (芸能部)

- (3) (論文) 市村座切抜帳(共編)『歌舞伎 研究と批評』23号 99.6
- (3) (論文) 六代目菊五郎の舞踊と身体『舞踊学』31号 99.10
- (3) (論文) 六代目菊五郎の研究へ『舞踊学』31号 99.10
- (4) (解説) 六代目尾上菊五郎展関連企画—六代目菊五郎の芸 早稲田大学演劇博物館 99.6
- (4) (解説) 六代目尾上菊五郎展関連企画—映画『鏡獅子』をめぐる 早稲田大学演劇博物館 99.6
- (4) (解題) 雑誌第一次『演劇界』『歌舞伎 研究と批評』24号 99.12
- (5) (学会発表) 六代目菊五郎と日本舞踊 舞踊学会シンポジウム及び基調講演 99.6
- (5) (学会発表) 六代目菊五郎の周辺(共同討議) 楽劇学会例会 99.9
- (6) (講演) 六代目尾上菊五郎展関連企画—六代目菊五郎と東京歌舞伎 早稲田大学演劇博物館 99.7
- (6) (講演) 日本舞踊・歌舞伎の能撮取 東京国立文化財研究所芸能部公開講座 99.11

斎 藤 英 俊 SAITO Hidetoshi (国際文化財保存修復協力センター)

- (1) (編集)『皇室の名宝 御所と離宮』p.32 朝日新聞社 99.5
- (2) (報告書)『プータンの歴史的建造物・集落保存のための基礎的研究』(斎藤、宮澤、伊東、木村、鈴木、糸永、川口、加藤、武内、中園、山田、水谷) 科学研究費補助金研究成果報告書【本文編】p.312【図版編】p.212 00.3
- (3) (論文) Katsura Villa『Architecture and Art: Cultural Heritage Sites』pp.46-49 Getty Education Institute For The Arts 99.6
- (4) (解説) 江戸時代の御所と別荘『皇室の名宝 御所と離宮』pp.170-171 朝日新聞社 99.5
- (4) (解説) 離宮の錆金具『皇室の名宝 御所と離宮』p.188 朝日新聞社 99.5
- (4) (解説) 桂離宮『皇室の名宝 御所と離宮』pp.189-193 朝日新聞社 99.5
- (4) (解説) 桂離宮の庭園『皇室の名宝 御所と離宮』p.194 朝日新聞社 99.5
- (4) (解説) 修学院離宮『皇室の名宝 御所と離宮』pp.195-196 朝日新聞社 99.5
- (4) (解説) 修学院離宮の庭園『皇室の名宝 御所と離宮』p.197 朝日新聞社 99.5
- (4) (解説) 国際協力への取組み『文化庁月報』pp.8-9 ぎょうせい 99.10
- (6) (講演) ベトナムの全国家調査「第5回ホイアン町並み保存国際シンポジウム：ベトナムにおける文化財の保存について」 昭和女子大学国際文化研究所 99.11.4

- (6) (講演) 文化財をととしての国際協力 全国国宝重要文化財所有者連盟講演会 99.12.2
- (6) (発表) 文化財の分野における日本の国際協力「日本・モンゴル文化フォーラム」国際交流基金 99.12.9
- (6) (講演) 近世宮廷文化サロンの文芸と遊興の場 昭和の暮らし博物館講演会 00.2.12
- (6) (講演) ヴェニス憲章とオーセンティシティ 「ホイアン文化財修復セミナー2000」 ベトナム・ホイアン市 00.3.19
- (6) (講演) ベトナムの民家調査の目的と方法 「ベトナム木造建築文化財保存越日シンポジウム2000」 ベトナム・ハノイ市 00.3.22
- (6) (講演) 温泉津の歴史と魅力 温泉津町教育委員会講演会 00.3.26

佐野 千絵 SANO Chie (保存科学部)

- (1) (著書) A Study on the Deterioration of Urushi (Oriental Lacquer) by Micro FT-IR ATR Spectroscopy -Strategies for the Judgement of Urushi in Ancient Cultural Properties (Jin, Sano and Kumanotani) "Japanese and European Lacquerware-Adoption・Adaption・Conservation" Ed.Michael Kuhlenthal pp.149-159 00.3
- (3) (論文) 展示公開施設の館内環境調査報告—平成10年度—(石崎、佐野、三浦) 『保存科学』第39号 pp.87-91 00.3
- (5) (発表) 天然染料染色絹布のキセノンランプ劣化による変退色について(斎藤(麻)、小原、馬越、佐野、谷田貝、生野、斎藤(昌)) 文化財保存修復学会第21回大会 99.6-5-6.6
- (5) (発表) Discoloration of Pigments during Exhibition in A Temporary Display Case(Koyano, Koyano, Sano and Preusser) ICOM-CC 12th Triennial Meeting Lyon 99.8.29-9.3
- (5) (発表) Chemical Effects of Allyl Isothiocyanate on The Pigments Used for Japanese Paintings (Sano, Hayakawa and Miura) ICOM-CC 12th Triennial Meeting Lyon 99.8.29-9.3
- (5) (発表) Chemical Changes of Inorganic pigments under The Influence of Formaldehyde (Koseto, Sano and Miura) ICOM-CC 12th Triennial Meeting Lyon 99.8.29-9.3
- (6) (発表) Chemical Effects of Various Insecticides and Fungicides on Museum Materials; Reviews Cited from Western Papers and Case Studies to Japanese Antiques, Integrated Pest Management in Asia for Meeting the Montreal Protocol, the 23rd International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property Held by Tokyo National Research Institute of Cultural Properties 99.9.27-29
- (6) (講演) 文化財の科学調査、指定文化財修理技術者講習会(京都) 99.10
- (6) (講演) 文化財の保存と環境、武蔵大学 99.11.15

塩谷 純 SHIOYA Jun (美術部)

- (3) (論文) 容斎断章『没後120年 菊池容斎と明治の美術』練馬区立美術館 pp.11-23 99.10
- (6) (講演) “写意”と“理想”と“こゝろもち”—明治中期の日本画と言説 第33回美術部・情報資料部公開学術講座 於東京都美術館 99.10.22

島尾 新 SHIMAO Arata (情報資料部)

- (3) (論文) 雪舟画伝来考近代編(稿)『天開図画』2号 雪舟研究会 pp.45-63 99.3
- (3) (論文) 「近代」の雪舟『東洋美術史研究の展望』国際交流美術史研究会第16回国際シンポジウム報告書 pp.11-22 99.3
- (3) (論文) 日月の図像学「日月四季花鳥図屏風」再論『美術史論壇』9号 pp.125-136 99.9
- (4) (論説) 多様化するまなざし『谷口財団70年の歩み・学術研究と国際シンポジウム』 pp.130-131 99.11
- (4) (論説) 一禅僧の見た日中交流『世界美術全集東洋編・元』月報 小学館 99.10
- (4) (解説) 渡唐天神図『皇室の至宝 東山御文庫御物』1 毎日新聞社 99.4
- (4) (解説) 孔門十哲図屏風、ほか『皇室の至宝 東山御文庫御物』2 毎日新聞社 99.8
- (4) (解説) 薄に小鳥図、ほか『皇室の至宝 東山御文庫御物』3 毎日新聞社 99.12

- (6) (講演) 雪舟と室町時代の水墨画 於四日市市立博物館 99.5.22
- (6) (講演) 室町時代の画と詩—雪舟筆「破墨山水図」について— 第33回美術部・情報資料部公開学術講座 於東
京都美術館 99.10.22
- (6) (基調報告) 新知見と今後への課題 徳川美術館・五島美術館・東京国立文化財研究所共催シンポジウム「科学
の目でみる国宝源氏物語絵巻」於徳川美術館 99.11.20
- (6) (講演) 雪舟画の表情「破墨山水図」の詩と画 雪舟研究会 於山口県立美術館 00.3.19

城野 誠治 SHIRONO Seiji (情報資料部)

- (6) (基調報告) 特殊撮影法による画像再現の試み 徳川美術館・五島美術館・東京国立文化財研究所共催シンポジ
ウム「科学の目でみる国宝源氏物語絵巻」於徳川美術館 99.11.20

鈴木 廣之 SUZUKI Hiroyuki (情報資料部)

- (3) (論文) 想像の「江戸」と帝国の美術史 『美術フォーラム21』創刊号 pp.120-126 99.11
- (4) (論説) 日本の前近代美術史の現状と問題点 北澤憲昭、木下長宏、イザベル・シャリエ、山梨俊夫編『美術の
行方、美術史の現在：日本・近代・美術』平凡社 pp.43-45 99.8
- (5) (研究発表) “Museology and Museography in the Meiji Period(1868-1911),” presented for a panel discus-
sion, entitled “Nationalism and Art Research,” at the Getty Research Institute for the History of Art and
the Humanities, Los Angeles, November 9, 99

高桑 いづみ TAKAKUWA Izumi (芸能部)

- (2) (報告書) 地方に残る雅楽・能楽の古楽器研究 科学研究費補助金研究成果報告書 00.3
- (3) (論文) 仁和寺蔵『今様之書』と乱拍子 鏡仙472号 99.4
- (3) (論文) 「恋の祖父」の古演出『芸能の科学』28号 pp.1-22 00.3
- (3) (論文) 室町時代の謡と囃子 武蔵野女子大学能楽資料センター紀要No.11 00.3
- (3) (論文) 能の囃子『芸能双書』NO.26 pp.23-37 00.3
- (4) (解説) 太鼓の世界—その歴史と音楽— 花伝の会特別公演パンフレット 99.8
- (4) (翻刻) 資料紹介「代伝抄」『芸能の科学』28号 pp.53-95 00.3
- (5) (学会ラウンドテーブル) 「実践としての研究」パネラー 東洋音楽学会第50回大会 99.10.17
- (5) (学会発表) ミッシングリンクの発見 東洋音楽学会第428回定例研究会 00.2.5
- (6) (講演) 能の音楽「囃子」 法政大学エクステンションカレッジ「能楽講座」 99.5.22
- (6) (講演) 狂言の技法 芸能部夏期学術講座 98.7.5-8
- (6) (講演) 能の囃子 石川県立能楽堂芸能講座 99.9.11
- (6) (講演) 室町時代の謡と囃子 武蔵野女子大学能楽資料センター公開講座 99.9.30
- (6) (講演) 能の音楽「囃子のしくみ」 財団法人塩尻市文化振興事業団能楽入門講座 00.2.12
- (6) (講演) 声と息 鏡仙会「公開講座 能の演技—憑く・狂う—」 00.3.28

田中 淳 TANAKA Atsushi (美術部)

- (6) (批評) 豊かな多様性と沈潜と「戦前期」とらえなおす 三重、愛知で2展覧会『中日新聞』 99.10.6 (夕)
- (6) (解説) 20世紀 日本人の美の遺産 3、4、7、8『朝日クロニクル 週刊20世紀』47、48、51、52号 各pp.38-39
99.12.26-00.2.6

津田 徹英 TSUDA Tetsuei (情報資料部)

- (3) (論文) 新出・光明院大威徳明王像について『金沢文庫研究』303号 pp.13-40 神奈川県立金沢文庫 99.10
- (3) (論文) 僧形八幡神像の成立と展開—神護寺八幡神像と東寺八幡三神像をめぐって—『密教図像』18号 pp.
47-68 密教図像学会 99.12
- (3) (論文) 中世千葉氏による道教の真武神図像の受容と『源平闘諍録』の妙見説話 野口実編『千葉氏の研究 第

二期関東武士研究叢書5』名著出版 pp.167-180 00.3

- (4) (随筆) 放下僧の上演にさきがけて 横浜市金沢区主催『称名寺薪能』パンフレット 99.5.1
- (5) (研究会発表) 室生寺金堂諸仏私見 彫刻史研究会 於東京国立博物館 99.6.5
- (5) (基調報告) 千葉氏の妙見信仰をめぐる二、三の問題 千葉市美術館秋期特別展『房総の神と仏』シンポジウム 於 千葉市美術館 99.11.13

中野 照 男 NAKANO Teruo (美術部)

- (6) (講演) シルクロードの仏教遺跡—敦煌莫高窟の壁画保存にかかわって— 千葉市民文化大学 (勸千葉市文化振興財団) 99.10.29
- (6) (講演) シルクロードの仏教遺跡—西域北道の遺跡と美術— 千葉市民文化大学 (勸千葉市文化振興財団) 99.11.5
- (6) (講演) 仏教美術とシルクロード 神栖町中央公民館 00.2.27

中村 茂 子 NAKAMURA Shigeko (芸能部)

- (3) (論文) 三信遠地域の〈おこない〉に伝承した翁猿楽の特色 『芸能の科学』28 pp.24-51 00.3
- (4) (解説) 民俗芸能の継承—21世紀へ「奈良新聞」 99.7.2
- (4) (解説) 祭りが創る歴史と文化 神奈川テレビ アクセスNOW 99.8.14
- (4) (解説) 近畿・東海ブロック民俗芸能大会 奈良県大和高田市サザンカホール 99.10.3
- (4) (報告) 学校教育における民俗芸能 『音楽鑑賞教育』2月号 No.378 00.2
- (4) (報告) 東京花祭り見学記 『音楽鑑賞教育』3月号 No.379 00.3

西浦 忠 輝 NISHIURA Tadateru (国際文化財保存修復協力センター)

- (2) (編集) トルコ共和国ゴールディオンMM古墳の現地調査報告書 99.4
- (3) (論文) Salt weathering of the brick monuments in Ayutthaya, Thailand (Kuchitsu, Ishizaki & Nishiura) 『ENGINEERING GEOLOGY』No.55 pp.91-99 99.4
- (3) (論説) 岩のみほとけの心を現代に：国宝白杵石仏の保存修復 「文化財の保存と修復—何をどう残すのか？」 文化財保存修復学会編 クバプロ pp.73-86 99.11
- (3) (論文) タイ国スコータイ遺跡のスリチュム寺院大仏の保存修復 特集=アジアの世界遺産を護る 『建築雑誌』Vol.115 No.1452 pp.22-25 00.3
- (3) (論文) タイ国スコータイ遺跡の大仏中の水分移動解析(石崎、西浦、シムネック、ヴァンゲニヒテン) 『保存科学』第39号 pp.43-50 00.3
- (4) (監修) シリア 「世界遺産を旅する：トルコ・中近東・ロシア」 近畿日本ツーリスト pp.82-91 99.4
- (4) (解説) 感動的な遺跡に出会える国シリア 「世界遺産を旅する：トルコ・中近東・ロシア」 近畿日本ツーリスト p.77 99.4
- (4) (論説) 我が国による文化遺産保存国際協力事業の現状と問題点—国際文化財保存修復研究会からの知見—(西浦、二神) 『JAPAN ICOMOS INFORMATION』第4期 第8号 pp.17-21 99.11
- (4) (解説) 第9回アジア文化財保存セミナー 「TOBUNKEN NEWS」No.1 00.3
- (5) (発表) 我が国による文化遺産保存国際協力事業の現状と問題点—国際文化財保存修復研究会からの知見—(二神、西浦) 第21回文化財保存修復学会大会 99.6.5-6
- (5) (発表) 伝統的土壁工法を応用した遺跡保存法の開発—パキスタン・ラニガト遺跡の保存処理—(西浦、増井、海老澤) 第21回文化財保存修復学会大会 99.6.6
- (5) (発表) タイ国スコータイ遺跡のスリ・チュム寺院大仏中の水分移動解析(石崎、西浦、シムネック) 第21回文化財保存修復学会大会 99.6.6
- (5) (発表) 沖縄県、重文・園比屋御嶽石門の保存修復処置と15年経過後の状態 日本文化財科学会 第16回大会 99.6.25-26
- (5) (発表) タイ国アユタヤの歴史的レンガ建造物中の水分移動解析(石崎、朽津、西浦、シムネック) 日本文化

財科学会 第16回大会 99.6.26

- (6) (発表) Conservation Treatment for the Giant Buddha of Wat Sri Chum in Sukhothai, Thailand; Seminar on Conservation at the Turkish Central Laboratory for Restoration and Conservation, Istanbul 99.4.7
- (6) (講演) 保存科学 東京農工大学博物館学講座 99.8.3-4
- (6) (講演) タイ国石(レンガ)造遺跡の保存修復一日・タイ国際共同研究の経緯、現状、問題点 第6回国際文化財保存修復研究会 99.10.14
- (6) (講演) アジア文化遺産と適正保存修復技術の開発 上智大学コミュニティカレッジ「過去と未来を結ぶ世界文化遺産—アジアの文化遺産と21世紀—」 99.11.4

羽田 昶 HATA Hisashi (芸能部)

- (3) (資料紹介) 代伝抄『芸能の科学』28号 pp.55-95 00.3
- (4) (解説) 鱸庖丁、二人袴 友枝昭世の会第5回公演パンフレット 99.4
- (4) (解説) 堂本正樹『僕の新作能』をめぐって 能劇の座第10回パンフレット 99.11
- (6) (講演) 能の囃子 名古屋能楽友の会 99.4.20
- (6) (講演) 狂言の演出 東京国立文化財研究所芸能部夏期学術講座 99.7.5-8
- (6) (講演) 能と歌舞伎舞踊の囃子 東京国立文化財研究所芸能部公開学術講座 99.11.16

早川 典子 HAYAKAWA Noriko (修復技術部)

- (3) (論文) Relationship between Morphology of Microphase-Separated Structure and Phase Restructuring at the Surface of Poly [2-hydroxyethyl methacrylate-block-4-(7'-octenyl) styrene] Diblock Copolymers Corresponding to Environmental Change, (Senshu, Kobayashi, Ikawa, Yamashita, Hirao, Nakahama) "Langmuir" 15 5 1763-1769 99.5
- (3) (論文) 輸出漆器の修理材料の分析(早川(典)、朽津)『保存科学』第39号 78-86 00.3
- (6) (講演) 「漆の化学組成と分析」(第6回漆文化財修復技術講座 00.2.26 木曾地域産業振興センター)

早川 泰弘 HAYAKAWA Yasuhiro (保存科学部)

- (3) (論文) 蛍光X線分析法による天正大判の表面変色に関する調査(早川(泰)、三浦、田尻)『文化財保存修復学会誌』43 pp.96-105 99.3
- (3) (論文) Applications of Micro XRF for the Analysis of Traditional Japanese Ainu Glass Beads and Other Artifacts (Sugihara, Satoh, Y.Hayakawa, Saito, Sasaki) 『Advances in X-ray Analysis』42 pp.161-169 00.3
- (3) (論文) ポータブル蛍光X線分析装置による国宝源氏物語絵巻の顔料分析(早川(泰)、平尾、三浦、四辻、徳川)『保存科学』第39号 pp.1-14 00.3
- (3) (論文) 三の丸尚蔵館所蔵「網干図屏風」の顔料同定(早川(泰)、三浦)『保存科学』第39号 pp.15-23 00.3
- (4) (解説) ヒスイ勾玉の原産地を探る—硬玉製勾玉に含まれる微量元素の測定— むきざいNOW 第174号(科学技術庁無機材質研究所) 99.3
- (4) (解説) 『文化財を探る科学の眼4—古墳・貝塚・鉄器を探る—』(平尾、山岸編) 国土社 pp.6-8 99.6
- (5) (発表) 蛍光X線分析法による天正大判の表面変色の分析(早川(泰)、三浦、田尻) 第60回分析化学討論会 99.5.15
- (5) (発表) ポータブル蛍光X線分析装置の開発と文化財試料への適用(早川(泰)、平尾、三浦、田村、杉原、佐藤、四辻、徳川) 日本文化財科学会第16回大会 99.6.26
- (5) (発表) アイヌ玉の考古化学的研究(2)(斉藤(亜)、早川(泰)、平尾、中井、佐々木) 日本文化財科学会第16回大会 99.6.26
- (5) (発表) 蛍光X線分析法による文化財試料の分析 第3回分析化学東京シンポジウム 99.9.2
- (5) (発表) ポータブル蛍光X線分析装置の開発と国宝源氏物語絵巻の分析(早川(泰)、平尾、三浦、田村、杉原、佐藤、四辻、徳川) 日本分析化学会第48年会 99.9.8

- (5) (発表) ポータブル蛍光X線分析装置の開発と文化財試料への適用(田村、杉原、佐藤、早川(泰)、平尾、三浦、四辻、徳川) 第35回X線分析討論会 99.11.4
- (5) (発表) Multi-element Analysis of Early Chinese Bronze Objects by ICP-AES/MS (Y.Hayakawa, Hirao, Jin, and Zheng) 2000 Pittsburgh Conference 2000.3.14
- (6) (講演) 可搬型蛍光X線分析装置による文化財試料の測定 中国科学院自然科学史研究所講演会「文化財の科学的調査」中国科学院自然科学史研究所 99.10.26
- (6) (講演) 蛍光X線による顔料成分の直接分析について 徳川美術館公開シンポジウム「科学の目でみる国宝源氏物語絵巻」 徳川美術館 99.11.20

平尾良光 HIRAO Yoshimitsu (保存科学部)

- (1) (編集) 『青銅の流通と鑄造』平尾良光編、鶴山堂(東京) 99.2.26
- (1) (編集) 古墳・貝塚・鉄器を語る 『文化財を語る科学の眼-4』平尾、山岸編 国土社(東京) 99.6.3
- (1) (編集) 城郭・寺社・橋梁を語る 『文化財を語る科学の眼-6』平尾、松本編 国土社(東京) 99.11.17
- (2) (報告書) 古代東アジア青銅器の変遷に関する考古学的・自然科学的研究 平成8~10年度文部省科学研究費国際学術研究成果報告書 99.3.30
- (3) (著書) 古代日本青銅器の鉛同位体比(平尾、榎本) 『古代青銅の流通と鑄造』鶴山堂(東京)平尾良光編 pp.29-161 99.2.26
- (3) (著書) 弥生時代青銅器と鉛同位体比(平尾、鈴木) 『古代青銅の流通と鑄造』鶴山堂(東京)平尾良光編 pp.163-208 99.2.26
- (3) (著書) 福田型銅鐸の鉛同位体比(平尾、鈴木) 『古代青銅の流通と鑄造』鶴山堂(東京)平尾良光編 pp.315-325 99.2.26
- (3) (論文) カマン・カレホユックの第12次調査(1997年)で出土した鉛製品の鉛同位体比(榎本、平尾) 『アナトリア考古学研究』8 pp.263-273 99.3.13
- (3) (論文) ICP-AES/MSによる中国二里頭遺跡出土青銅器の多元素分析(早川(泰)、平尾、金、鄭) 『保存科学』38号 pp.98-107 99.3.31
- (3) (論文) 鉛同位体比法を用いた産地推定「考古学と年代測定学・地球科学」『考古学と自然科学4』松浦、上杉、藁科編 同成社(東京) pp.314-349 99.4.10
- (3) (論文) 古代中国青銅器の鉛同位体比 『日本中国考古学会会報』9 pp.1-23 99.10.16
- (3) (論文) 景初4年銘竜虎鏡の鉛同位体比(平尾、榎本、早川(泰)) 『辰馬考古資料館考古学研究紀要』3 pp.52-58 (1999) (2000年5月18日配布) 00.5.18
- (3) (報告) 山梨県長田口遺跡から出土した銅製品の自然科学的調査(平尾、瀬川) 「山梨県中巨摩郡箱形町長田口遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第82集』山梨県教育委員会編 pp.219-223(1993) (1999年に配布) 99.6.17
- (3) (報告) 東京都八王子市中郷遺跡から出土した小銅鐸の鉛同位体比(平尾、鈴木) 『東京都八王子市中郷遺跡』八王子市中郷遺跡発掘調査団編 pp.119-122 (1998) (1999年に配布) 1999.5.27
- (3) (報告) 下り松遺跡から出土した銅製品(早川(泰)、榎本、平尾) 「一般国道50号結城バイパス改築工事地内埋蔵文化財調査報告書」『下り松遺跡・油内遺跡(下巻)』茨城県教育財団文化財調査報告 第145集 茨城県・茨城県教育財団編 pp.435-445 99.3.26
- (3) (報告) 前田村遺跡から出土した和鏡の自然科学的研究(平尾、早川(泰)、榎本) 「伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書4」『前田村遺跡G・H・I区(下巻)』茨城県教育財団文化財調査報告書 第146集 茨城県・茨城県教育財団編 pp.883-896 99.3.26
- (3) (報告) 熊の山遺跡出土の天部立像および耳環に関する自然科学的調査(早川(泰)、榎本、平尾) 「(仮称)島名・福田坪地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 III」『熊の山遺跡(下巻)』茨城県教育財団文化財調査報告書 第149集 茨城県・茨城県教育財団編 pp.589-598 99.3.26
- (3) (報告) 加茂政所遺跡出土銅釧の鉛同位体比(平尾、榎本) 「加茂政所遺跡 高松原古才遺跡 立田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 第138集』岡山県教育委員会編 pp.1132-1140 99.4.22

- (3) (報告) 名古屋市三王山遺跡から出土した銅釧・銅鐻の自然科学的研究(平尾、榎本) 「三王山遺跡(1～5次)」 『埋蔵文化財調査報告書 第30集』名古屋市教育委員会編 pp.160-166 99.5.21
- (3) (報告) 茨城県結城郡千代川村岡・本田屋敷遺跡出土の小銅仏に関する自然科学的研究(早川(泰)、榎本、平尾) 『村史紀要千代川村の生活 第5号』千代川村史編さん委員会編 pp.62-76 99.7.12
- (3) (報告) 北九州市から出土した小型倣製鏡についての鉛同位体比(平尾、鈴木) 「光照寺遺跡1」 『北九州市埋蔵文化財調査報告書 第233集』北九州埋蔵文化財センター編 pp.98-100 99.11.12
- (3) (報告) 重留遺跡出土広形銅矛の理化学的分析と保存処理(塚本、金城、菅井、平尾、鈴木) 「重留遺跡第2地点」 『北九州市埋蔵文化財調査報告書 第230集 付編』北九州埋蔵文化財センター編 pp.1-12 99.11.12
- (3) (報告) 浄福寺2号遺跡出土銅釧の鉛同位体比(馬淵、平尾) 「東広島ニュータウン遺跡群II(本文編)」 『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第97集 V付編』 pp.12-14 (1993) (1999年に配布) 99.11.12
- (3) (報告) 多功南原遺跡から出土した青銅製遺物についての自然科学的研究(平尾、早川(泰)、鈴木) 「多功南原遺跡一住宅・都市整備公団宇都宮市計画事業多功南原地区埋蔵文化財発掘調査一<理化学分析編>」 『栃木県埋蔵文化財調査報告書 222号』栃木県教育委員会編 pp.107-120 00.3.15
- (3) (報告) 鳴沢遺跡群五里田遺跡出土金属資料の自然科学的分析(塚本、菅井、平尾、鈴木、大澤) 「鳴沢遺跡群五里田遺跡」 『佐久市埋蔵文化財調査報告書 第74集』 pp.138-143 (1999) (2000年4月10日配布) 00.4.10
- (3) (報告) 柳井茶臼山古墳出土の玉類に関する蛍光X線分析結果(早川(泰)、平尾) 「史跡柳井茶臼山古墳一保存整備事業発掘調査報告書一」 柳井市教育委員会編 pp.168-174 (1999) (2000年7月21日配布) 00.7.21
- (4) (解説) 鉛同位体比から見た古代日本の青銅器(平尾、鈴木) ぶんせき1999-11 pp.930-936 99.11.11
- (5) (発表) アイヌ玉の考古化学的研究(斎藤(亜)、早川(泰)、平尾、中井、佐々木) 日本文化財科学会大16回大会 99.6.26
- (5) (発表) トルコ共和国のカマン・カレホック遺跡から出土した鉛製品の鉛同位体比(榎本、平尾) 日本文化財科学会大16回大会 99.6.26
- (5) (発表) 福田型銅鐸の鉛同位体比(平尾、鈴木) 日本文化財科学会大16回大会 99.6.26
- (5) (発表) 藤ノ木古墳と観音山古墳出土の銅製品の鉛同位体比(平尾、榎本) 日本文化財科学会大16回大会 99.6.27
- (5) (発表) ポータブル蛍光X線分析装置の開発と文化財資料への適用(早川(泰)、平尾、三浦、田村、杉原、佐藤、四辻、徳川) 日本文化財科学会大16回大会 99.6.26
- (5) (発表) ポータブル蛍光X線分析装置の開発と国宝源氏物語絵巻の分析(早川(泰)、平尾、三浦、田村、杉原、佐藤、四辻、徳川) 日本分析化学会第48年会 99.9.8
- (5) (発表) ポータブル蛍光X線分析装置の開発と文化財資料への適用(田村、杉原、佐藤、早川(泰)、平尾、三浦、四辻、徳川) 第35回X線分析討論会 99.11.4
- (6) (発表) カマン・カレホックの第12次調査(1997年) で出土した鉛製品の鉛同位体比(榎本、平尾) 中近東文化センター 99.3.14
- (6) (講演) 鉛同位体比法を用いた青銅材料の産地(平尾、早川(泰)、金) 国際日本文化研究センター 99.9.20
- (6) (講演) 蛍光X線を用いた文化財資料の非破壊測定 九州シンクロサイクロトン推進委員会講演会 99.3.5
- (6) (講演) 古代中国青銅器の鉛同位体比 泉屋博古館講演会 99.4.16
- (6) (講演) 文化財のための自然科学 文化庁指定品等取扱講習会 99.7.11
- (6) (講演) 古代中国青銅器の成立 朝日カルチャーセンター 99.8.7
- (6) (講演) 古代中国青銅器の鉛同位体比 中国科学院自然科学史研究所 99.10.27
- (6) (講演) 文化財のための自然科学 文化庁指定品等取扱講習会 99.11.8
- (6) (講演) 文化財のための自然科学的調査法 文化財建造物保存事業技術者養成所研修会 99.11.15
- (6) (講演) 日本で出土した古代銅器の鉛同位体比 第5回『和の国』連続国際シンポジウム 99.12.7

二 神 葉 子 FUTAGAMI Yoko (国際文化財保存修復協力センター)

- (4) (論説) 我が国による文化遺産保存国際協力事業の現状と問題点—国際文化財保存修復研究会からの知見—(西浦、二神) 「JAPAN ICOMOS INFORMATION」 第4期 第8号 pp.17-21 99.11

- (4) (翻訳) 甦った王妃ネフェルタリ (N.アグニュー、前川信) 「日経サイエンス」2月号 日経サイエンス社 pp.66-72 00.2
- (4) (解説) 第6回国際文化財保存修復研究会 「TOBUNKEN NEWS」No.1 pp.1-2 00.3
- (5) (発表) 我が国による文化遺産保存国際協力事業の現状と問題点(1)―国際文化財保存修復研究会からの知見―(二神、西浦) 第21回文化財保存修復学会講演会大会 京都造形芸術大学 99.6.5-6
- (6) (講演) 夏休み地球カレッジ1999 名古屋市科学館 99.7.25
- (6) (講演) 夏休み地球カレッジ1999 アクロス福岡 99.7.31

星野 紘 HOSHINO Hiroshi (芸能部)

- (4) (解説) 民俗芸能とは何か④ 獅子舞 「音楽文化の創造」No.14 99.6.1
- (4) (解説) 民俗芸能とは何か⑤ 人形まわし 「音楽文化の創造」No.15 99.9.1
- (4) (解説) チベット族の輪踊り 「国際民俗芸能フェスティバル 青森公演」プログラム 99.10.17
- (4) (解説) 記録作成の方法 「民俗音楽」25 00.3
- (4) (解説) 民俗芸能普及伝承への大きな貢献 「かながわの民俗芸能」64 00.3
- (6) (講義) 芸能文化史「博物館職員講習」文部省・国立教育会館社会教育研修所 99.7.7
- (6) (発表) 第10回地芝居サミット パネルディスカッション“子供へのアプローチ”和歌山県清水町 (社)全日本郷土芸能協会 99.9.5
- (6) (発表) System of Protection for Intangible Cultural Property and Intangible Folk-Cultural Property in Japan (Country Report) 「ユネスコ無形文化財制度に関する国際ワークショップ」韓国 99.10.15
- (6) (解説) チベット族の輪踊り 慶応大学アートセンター 99.10.20
- (6) (解説) チベット族の輪踊り 「国際民俗芸能フェスティバル 山梨公演」文化庁・山梨県教育委員会 99.10.23
- (6) (解説) 杉野原の御田植え「第49回全国民俗芸能大会」 勸日本青年館 99.11.27
- (6) (発表) シンポジウム“伝統芸能の伝承”「文化振興会議」文化庁・埼玉県教育委員会 00.1.25
- (6) (発表) Present situation of participation in the Data Bank project-Japan 「2000年アジア太平洋地域セミナー」ACCU 00.2.8

増田 勝彦 MASUDA Kastuhiko (修復技術部)

- (3) (解説) 高松塚古墳壁画の保存修復 「海外の日本美術品の修復」海を渡った文化財―様々なすがたとわざ―第13回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編 クバプロ pp.114-122 99.1
- (3) (解説) 敦煌文化財の保存修復に関する日中共同研究 「文化財の保存と修復」文化財保存修復学会編集 クバプロ pp.65-72 99.11
- (3) (解説) 敦煌文化財の保存修復に関する日中共同研究 「文部時報」文部省 pp.38-39 00.1
- (3) (解説) “Conservation of Wall Paintings in Japan”、Preprint of 9th Seminar on the Conservation of Asian Cultural Heritage —Conservation of Wall Paintings in Asia— pp.44-47 99.5
- (3) (解説) 電子線で劣化した絹が歴史的絵画の修理に利用されている 「Isotope-News」社団法人日本アイソトープ協会 pp.10-11 99.7
- (3) (解説) 高松塚古墳壁画の修復『週刊朝日百科―日本の国宝109』朝日新聞社 pp.275-277 99.4.4
- (4) (コラム) 揉みから紙と保存会のこと 「百万塔」104号 勸紙の博物館 99.10
- (4) (コラム) 風化する震災体験、「文化財は守れるのか? 阪神淡路大震災の検証」文化財保存修復学会編 クバプロ p.87 99.6.5
- (6) (講演) 修復技術 文建協 研修 99.11.15
- (6) (講演) 絵画の保存と修理 朝日カルチャーセンター公開講座「伝統技術と保存科学―古美術保存の現状―」 00.3.11
- (6) (講演) ドウサと和紙の劣化 日本美術家連盟研修会 00.1

松原 美智子 MATSUBARA Michiko (国際文化財保存修復協力センター)

- (3) (論文) Glossary of Urushi Terms 「International Course on Conservation of Urushi 1999」 東京国立文化財研究所 pp.13-23 99.8
- (3) (論文) Glossary Japanese and European Lacquerware (Miura, Kato and Matsubara) (Ed. Michael Kühnenthal) 「Arbeitshefte des Bayerischen Landesamtes für Denkmalpflege」 pp.588-600 2000.2
- (4) (翻訳) 第1、2章 (中川武監修) 「Annual Report on the Technical Survey of Angkor Monument 1999 (アンコール遺跡調査報告書1999)」 日本国政府アンコール遺跡救済チーム pp.21-25 33-90 99.7
- (4) (翻訳) 「Contemporary Japanese Decorative Art in Traditional Style (アジア友好日本古美術展「現代日本の伝統工芸展」図録)」 文化庁 pp.1-16 99.12
- (4) (翻訳) Foreign Taste in Urushiware Manufactured for Export Japanese and European Lacquerware (Kaori Hidaka) (Ed. Michael Kühnenthal) 「Arbeitshefte des Bayerischen Landesamtes für Denkmalpflege」 pp.31-46 2000.2
- (4) (翻訳) Historical Study on the Restoration of Urushiware Japanese and European Lacquerware (Hiroshi Kato) (Ed. Michael Kühnenthal) 「Arbeitshefte des Bayerischen Landesamtes für Denkmalpflege」 pp.49-60 2000.2
- (4) (翻訳) Restoration of Ancient Japanese Urushi Art Objects Japanese and European Lacquerware (Shosai Kitamura) (Ed. Michael Kühnenthal) 「Arbeitshefte des Bayerischen Landesamtes für Denkmalpflege」 pp.61-72 2000.2
- (4) (翻訳) Similarities between a Silver *Heidatsu Gosu* in the Shosoin Treasures and a Tang Dynasty Container at the Linden-Museum, Stuttgart Japanese and European Lacquerware (Shosai Kitamura) (Ed. Michael Kühnenthal) 「Arbeitshefte des Bayerischen Landesamtes für Denkmalpflege」 pp.73-80 2000.2
- (4) (翻訳) The Restoration of Urushiware for Export with Animal Glue and Urushi Japanese and European Lacquerware (Hiroshi Kato) (Ed. Michael Kühnenthal) 「Arbeitshefte des Bayerischen Landesamtes für Denkmalpflege」 pp.81-84 2000.2
- (4) (翻訳) Ryukyu Urushiware Japanese and European Lacquerware (Masako Miyasato) (Ed. Michael Kühnenthal) 「Arbeitshefte des Bayerischen Landesamtes für Denkmalpflege」 pp.85-92 2000.2
- (4) (翻訳) The Restoration of Ryukyu Urushiware: A Vermilion Urushi Bowl with Birds, and Animals Flowers in *Hakue* Japanese and European Lacquerware (Yoshihiko Yamashita) (Ed. Michael Kühnenthal) 「Arbeitshefte des Bayerischen Landesamtes für Denkmalpflege」 pp.93-101 2000.2
- (4) (翻訳) A Study on the Structure of the Coating Film of Urushiware at the Linden Museum, Stuttgart Japanese and European Lacquerware (Fumio Okada) (Ed. Michael Kühnenthal) 「Arbeitshefte des Bayerischen Landesamtes für Denkmalpflege」 pp.135-148 2000.2
- (4) (翻訳) On the Publication of the Restoration Report (Akiyoshi Watanabe) 「在外日本古美術修復協力事業 修理報告書 工芸品 I」 東京国立文化財研究所 p.2 2000.3
- (4) (翻訳) On the Restoration of Craft Works in Foreign Museums (Hiroshi Kato) 「在外日本古美術修復協力事業 修理報告書 工芸品 I」 東京国立文化財研究所 pp.4-52 2000.3
- (4) (翻訳) Color Captions 「在外日本古美術修復協力事業 修理報告書 工芸品 I」 東京国立文化財研究所 pp.15-18 2000.3
- (4) (翻訳) On the Restoration of the “*Makie Raden* Tray with Eagle Pattern” in the Collection of the Peabody Essex Museum (Yoshiaki Taguchi and Hikaru Gomi) 「在外日本古美術修復協力事業 修理報告書 工芸品 I」 東京国立文化財研究所 pp.28-35 2000.3
- (4) (翻訳) On the Restoration of Exported Urushiware with Animal Glue and Urushi (Hirotschi Kato and Wataru Kawanobe) 「在外日本古美術修復協力事業 修理報告書 工芸品 I」 東京国立文化財研究所 p.42 2000.3
- (4) (翻訳) On the Restoration of “*Sakura Makie Kikyoku*” (Kiyomi Okukubo) 「在外日本古美術修復協力事業 修理報告書 工芸品 I」 東京国立文化財研究所 pp.51-58 2000.3

- (4) (翻訳) On the Restoration of “*Makie Hyomon Saddle*” in the Collection of the East Asian Art Museum in Cologne (Yoshihiko Yamashita) 「在外日本古美術修復協力事業 修理報告書 工芸品Ⅰ」 東京国立文化財研究所 pp.71-76 2000.3
- (4) (翻訳) On the Restoration of “*Sasui-rokaku Makie Vases*” in the Collection of the National Museum of Art, Dresden (Yoshihiko Yamashita) 「在外日本古美術修復協力事業 修理報告書 工芸品Ⅰ」 東京国立文化財研究所 pp.87-92 2000.3
- (4) (翻訳) On the Restoration of a *Yaro-gata* Helmet in the Collection of the Metropolitan Museum (Masami Ozawa) 「在外日本古美術修復協力事業 修理報告書 工芸品Ⅰ」 東京国立文化財研究所 pp.99-102 2000.3

松本修自 MATSUMOTO Shuji (国際文化財保存修復協力センター)

- (1) (編著) 古代住居・寺社・城郭を探る 『文化財を探る科学の眼6』(平尾良光と共編) 48p 国土社 99.11
- (3) (論文) 遺跡建造物の保存修復、その理念と実践—ギリシャ・アクロポリスを中心として—(上) 「文建協通信」56号 pp.2-15 00.1
- (4) (解説) 門を通して建築物をみる 「古代住居・寺社・城郭を探る」 pp.27-28 99.11
- (4) (解説) 保存修復の材料の歴史 「古代住居・寺社・城郭を探る」 pp.44-46 99.11
- (6) (講演) “Architectural Conservation in Japan” Politecnico di Torino, Italy 99.6.14
- (6) (講演) “Outline of the Japanese Architecture and its Conservation” Freie Universität Berlin, Germany 99.7.5
- (6) (講演) “Authenticity, Integrity, and Dignity—Principal Triangle of Architectural Conservation—” Brandenburgische Technische Universität Cottbus, Germany 99.7.7
- (6) (講演) “Reliability in the Process of Restoration—Another Principle of Architectural Conservation—” International Conference on the Restoration of the Medieval Monasteries in Moldavia Putna, Romania 99.10.9
- (6) (講演) “Horyu-ji, prominent historic structures of wood and a cradle of modern restoration principles in Japan” Italy-Japan Conference “Conservation of the Ancient Timber Load Bearing Structures” Firenze, Italy 00.3.6

三浦定俊 MIURA Sadatoshi (保存科学部)

- (1) (編集) “Japanese and European Lacquerware—Adoption • Adaption • Conservation” Michael Kühenthal Ed. Bayerisches Landesamt für Denkmalpflege, München 00.3
- (3) (著書) 「研究の始まり—忘れられた塗りの技術—」『海を渡った文化財—様々なすがたとわご—』第13回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編 pp.40-47 99.11
- (3) (論文) 美術工芸品の地震対策 「建築防災」第263号 pp.25-30 99.12
- (3) (論文) 臭化メチルの使用規制について 「文化財の虫菌害」第38号 pp.3-8 99.12
- (3) (論文) 古文化財研究と光技術 「第24回光波センシング技術研究会講演論文集」 pp.21-28 99.12
- (3) (論文) 文化財の生物被害対策の現状—臭化メチル燻蒸の代替対応策について—(木川、三浦、山野) 「文化財保存修復学会誌」第44号 pp.70-79 00.3
- (3) (論文) ポータブル蛍光X線分析装置による国宝源氏物語絵巻の顔料解析(早川、平尾、三浦、四辻、徳川) 『保存科学』第39号 pp.1-14 00.3
- (3) (論文) 三の丸尚蔵館所蔵 網干図屏風の顔料同定(早川、三浦) 『保存科学』第39号 pp.15-23 00.3
- (3) (論文) 展示公開施設の館内環境調査報告—平成10年度—(石崎、佐野、三浦) 『保存科学』第39号 pp.87-91 00.3
- (4) (解説) 鎌倉大仏の科学調査—修理と保存の新しい局面 週刊朝日百科『日本の国宝』第109号 pp.274-275 99.4
- (4) (解説) 光学的調査法 『日本の美術』400号 pp.74-79 99.9
- (4) (解説) 「永仁の壺」の材質鑑定 「SUT BULLETIN」第17巻第1号 pp.19-23 00.1

- (4) (解説) ドウサと紙の劣化 「連盟ニュース」(日本美術家連盟) 第387号 pp.1-2 00.2
- (5) (発表) 速見御舟の絵画技法(小谷野、米田、東定、小谷野、三浦) 文化財保存修復学会第21回大会 99.6.5-6
- (5) (発表) 低酸素濃度および二酸化炭素による殺虫:日本の文化財害虫についての実用化(木川、実宝、山野、三浦、後出、木村、富田) 文化財保存修復学会第21回大会 99.6.5-6
- (5) (発表) 電解式除湿器を用いた展示ケース内の安定型低湿度制御(香林、酒寄、宮地、木村、山内、三浦、竹内、花田) 文化財保存修復学会第21回大会 99.6.5-6
- (5) (発表) 世界の文化財倫理綱領の現状 文化財保存修復学会第21回大会 99.6.5-6
- (5) (発表) ポータブル蛍光X線分析装置の開発と文化財試料への適用(早川、平尾、三浦、田村、杉原、佐藤、四辻、徳川) 日本文化財科学会第16回大会 99.6.26-27
- (5) (発表) Humidity Control for Display Cases in Museums Using a Solid-state Water Removal Device (Yamauchi, Ohya, Sakayori, Koubayashi, Takeuchi, Hanada and Miura) ICOM-CC 12th Triennial Meeting Lyon 99.8.29-9.3
- (5) (発表) Chemical Effects of Allyl isothiocyanate on The Pigments Used for Japanese Paintings (Sano, Hayakawa and Miura) ICOM-CC 12th Triennial Meeting Lyon 99.8.29-9.3
- (5) (発表) Chemical Changes of Inorganic Pigments under the Influence of Formaldehyde (Koseto, Sano and Miura) ICOM-CC 12th Triennial Meeting Lyon 99.8.29-9.3
- (5) (発表) Conservation Scientist as a Field Worker, University Postgraduate Curricula for Conservation Scientists, ICCROM ポローニャ 99.11.26-27
- (6) (発表) Methyl Bromide Phase out: Controversial Points for the Future Pest Control, Integrated Pest Management in Asia for Meeting the Montreal Protocol, the 23rd International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property Held by Tokyo National Research Institute of Cultural Properties 99.9.27-29
- (6) (発表) Low Oxygen Atmosphere and Carbon Dioxide Treatments for Eradication of Insect Pests in Japan (Kigawa, Yamamoto, Miura, Zippo, Miyazawa, Maekawa, Nochide, Kimura, and Tomita), Integrated Pest Management in Asia for Meeting the Montreal Protocol, the 23rd International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property Held by Tokyo National Research Institute of Cultural Properties 99.9.27-29
- (6) (講演) 展示環境の科学 第1回指定文化財(美術工芸品)企画・展示セミナー(東京)99.7.12、(京都)99.11.8
- (6) (講演) 保存科学 文化財建造物保存技術者養成研修(東京) 99.11.15
- (6) (講演) 生物被害対策の今後 公開承認施設連絡協議会(東京) 00.1.13

山 梨 絵美子 YAMANASHI Emiko (美術部)

- (3) (論文) 五百城文哉再考 五百城文哉展(水戸市立博物館・小杉放菴記念日光美術館) 図録 pp.8-9 00.2
- (3) (論文) 「高村光雲 その時代と作品—仏師から彫刻家へ」 「高村光雲年譜」 『高村規全撮影 木彫高村光雲』 中教出版 pp.212-226, pp.228-239 99.9
- (4) (解説) 黒田清輝展から 大分合同新聞 99.9.16
- (4) (評論) 日本近代洋画とフランスの出会い(ラファエル・コラン展展評) 『美術手帖』11月号 pp.111-114 99.11.1
- (4) (解説) 原田直次郎「靴屋の阿爺」解説(和・英) 大蔵省印刷局 凹版美術集
- (4) (評論) 書評・大竹伸朗著「すでにそこにあるもの」 『週刊ポスト』9月10日号(1505号)
- (5) (発表) 日本近代における「工芸」概念の成立 美学会全国大会シンポジウム 99.10.3
- (6) (講演) 黒田清輝と林忠正 武蔵大学 99.11.29

山 野 勝 次 YAMANO Katsuji (保存科学部)

- (3) (論文) 5種のシフルトリン製剤の防蟻効力試験 「文化財の虫菌害」37号 pp.7-14 99.6
- (3) (論文) 薬剤混入防蟻板の野外効力試験 「文化財の虫菌害」37号 15-19 pp.99.6

- (3) (論文) 文化財の生物被害対策の現状—臭化メチル燻蒸の代替対応策について—(木川、三浦、山野) 「文化財保存修復学会誌」Vol.44 pp.52-69 00.3
- (3) (報告) 平塚市美術館生物被害調査 99.3.7
- (3) (報告) 国立歴史民俗博物館生物被害調査 00.3.27
- (4) (論説) <巻頭言> 乾材シロアリの防除対策の確立を 「しろあり」116号 pp.1-2 99.4
- (4) (解説) 「第19回文化財虫菌害燻蒸処理実務講習会」報告 「文化財の虫菌害」38号 pp.42-44 99.12
- (4) (解説) 燻蒸施工こぼれ話 『文化財の虫菌害』37号 pp.32-35 99.6
- (4) (解説) 野外シロアリ試験こぼれ話 「しろあり」118号 pp.27-28 99.10
- (5) (発表) 低酸素濃度および二酸化炭素による殺虫—日本の文化財害虫についての実用化—(木川、実宝、山野、三浦、後出、木村、富田) 文化財保存修復学会第21回大会 99.6.5
- (6) (発表) Low Oxygen Atmosphere and Carbon Dioxide Treatments for Eradication of Insect Pests in Japan (Kigawa, Yamano, Miura, Zippo, Miyazawa, Maekawa, Nochide, Kimura, and Tomita), Integrated Pest Management in Asia for Meeting the Montreal Protocol, the 23rd International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property Held by Tokyo National Research Institute of Cultural Properties 99.9.27-29
- (6) (講演) 文化財害虫の生態と防除対策 第21回文化財(書籍・古文書等を含む)の虫菌害保存対策研修会 文化財虫害研究所 99.7.1
- (6) (講演) 文化財虫菌害燻蒸処理仕様書ならびに危害防止措置規定について 第19回文化財虫菌害処理実務講習会 文化財虫害研究所 99.10.7
- (6) (講演) 昆虫学の基礎的知識 昆虫による文化財の被害と防除 文化財の殺虫燻蒸 第21回文化財虫菌害防除作業主任者の能力認定試験とその講習会 文化財虫害研究所 99.2.2

米 倉 迪 夫 YONEKURA Michio (情報資料部)

- (3) (論文) 掛幅伝絵研究の課題—法然上人伝絵の場合—『仏教文学』24号 pp.15-26 仏教文学会 00.3
- (5) (学会発表) 掛幅伝絵研究の課題 仏教文学会全国大会 99.6.5
- (6) (講演) 鎌倉時代の肖像画 神奈川県立金沢文庫春期特別講演会 99.5.16
- (6) (基調報告) 温故知新 東京国立博物館法隆寺宝物館開館記念シンポジウム—博物館・美術館におけるマルチメディアの活用— 於東京国立博物館平成館講堂 99.7.27
- (6) (講演) 日本肖像画の諸相 香川県美術工芸研究所平成10年度美術講演会 00.1.29

渡 邊 明 義 WATANABE Akiyoshi (所長)

- (1) (著書) 古代絵画の技術 『日本の美術』401号 至文堂 99.10
- (6) (講演) Wallpainting of Asia: Their conservation, restoration and international cooperation (アジアの壁画: その保存修復と国際協力) 第9回アジア文化財保存セミナー基調講演 99.11.16
- (6) (講演録) 文化財と国際交流 『「海を渡った文化財」第13回「大学と科学」公開シンポジウム講演集』 99.11.30

4. 事業

1. 研究集会など

(1) 国際研究集会

「文化財の保存および修復に関する国際研究集会」は1977(昭和52)年度から毎年行われ、1999年で第23回を迎えた。本年度は保存科学部が担当した。

名 称 第23回 文化財の保存および修復に関する国際研究集会
アジアの文化財生物被害防除対策の今後—2005年臭化メチル全廃を控え—
日 時 1999年9月27日(月)～9月29日(水)
会 場 国立社会教育会館社会教育研修所(東京都上野公園内)
主 催 東京国立文化財研究所

プログラム

9月27日(月)

13:45～14:00 開会挨拶 渡邊 明義(東京国立文化財研究所長)

〈基調講演〉

14:00～14:50 新井 英夫(東京国立文化財研究所名誉研究員)

文化財の生物劣化研究の展開

〈セッションⅠ: アジアにおける防除法の歴史と将来への見通し〉

14:50～15:40 チラポーン・アラニアナーク(タイ、国立博物館)

タイにおける生物被害防除法: 薬剤を使用する方法、使用しない方法

15:40～16:20 石川 登志雄(京都府教育庁)

日本における生物被害防除法の歴史

16:20～17:00 三浦 定俊(東京国立文化財研究所)

臭化メチルの全廃に向けて

18:00～20:00 レセプション(於/上野精養軒)

9月28日(火)

〈セッションⅡ: IPM(総合的害虫管理)、新たな防除法〉

10:00～11:00 デイビッド・ピニガー(イギリス、害虫管理コンサルタント)

IPM(総合的害虫管理): 博物館資料と建物の実用的な害虫対策として

11:00～12:00 前川 信(アメリカ、ゲティ保存研究所)

低酸素濃度処理および温度処理による博物館害虫の殺虫法について

13:30～14:10 ゲルハルト・ピンカー(ドイツ、害虫防除コンサルタント)

二酸化炭素による建物等大型文化財の殺虫処理

14:10～14:50 デモンストレーション

15:20～16:00 木川 りか(東京国立文化財研究所)

低酸素濃度および二酸化炭素による殺虫: 日本の文化財害虫についての実用化

16:00～16:40 石崎 武志(東京国立文化財研究所)

温度処理法の文化財材質に対する物理的影響の評価

9月29日(水)

- 10:00~10:40 佐野 千絵(東京国立文化財研究所)
燻蒸、殺虫薬剤の文化財への影響評価—化学的な面を中心に
〈セッションⅢ:害虫管理の実際〉
- 10:40~11:20 ロー・ヘン・ノイ(シンガポール、文化財局)
シンガポール国立博物館における害虫管理法の歴史的概要
- 11:20~12:00 李 午熹(韓国、湖岫美術館)、韓 成熙(韓国、文化財管理局)
韓国における文化財の生物劣化対策
- 13:30~14:10 長谷川 孝徳(石川県立歴史博物館)
石川県立歴史博物館における虫菌害対策
- 14:10~14:50 長屋 菜津子(愛知県美術館)
愛知県美術館における虫菌害対策
- 14:50~15:30 川越 和四、規矩地 耕一郎(イカリ消毒株式会社)
企業による博物館等のIPMプログラムの援助:
モニタリングの現状と予防処理における忌避剤の利用
- 〈総合討議〉
- 16:00~16:50

1999年9月27日より3日間にわたり、国立社会教育研修所において開催された。今回の主題は、現在文化財の保存分野で緊急の課題である今後の害虫対策についてである。文化財の殺虫燻蒸に長らく使用されてきた臭化メチルの2005年全廃を控え、文化財の害虫対策は大きな変革期を迎えている。そのなかで、欧米ではIPM(総合的害虫管理)を中心とする害虫予防策への移行がはかられているが、気候の異なるアジア地域では欧米の方法をそのまま適用できないのも事実であり、今後どのような方法論が必要なのかを探るのが狙いであった。

今回の研究集会では、日本、韓国、タイ、シンガポールなどのアジア各国の現行の防除対策の取り組みを伝える発表とともに、欧米で普及し始めたIPMの取り組みの具体例や、新たな文化財の殺虫法についての発表が行われ、国内外からのべ180の参加者を得て、活発な討議が繰り広げられた。さらに、これまであまり知られていなかった日本国内の美術館や博物館で実施されつつある独自のIPM、害虫管理の取り組みが紹介される貴重な機会を得た。発表、討議のほかにも、今回はデモンストレーションの時間を設け、虫害防除に関する方法や機器の展示、およびビデオによる新しい殺虫法の紹介なども行われた。

欧米とアジアの違いはもとより、アジアのなかでも、東南アジアのタイ・シンガポールなどと、東アジアの日本・韓国などでは、気候や国状がかなり異なり、取り組みの内容はそれぞれである。しかし、逆に共通していえることは、文化財の害虫の発生の原因を探り、適切な対処を早期に打っていくことで、毒性の強い薬剤のみに頼らずに文化財を害虫から守る方法論をそれぞれの地域で追求し始めていることである。

日本においては2005年の臭化メチル全廃を前に、一日も早い対応が必要である。わが国の気候条件を考えると、ガス燻蒸という方法論は、非常事態の対処法としてはとっておかねばならない選択肢であるが、もはや世界情勢からみても、予防の方法論といくつかの代替策を普及していくことがわが国にとっても急務である。

(2) アジア文化財保存セミナー

人類共通の貴重な遺産である文化財を保存し、継承していくためには国際協力が不可欠である。特にアジア地域においては、その必要性和緊急性が叫ばれている。

本セミナーは、アジアの文化財保存に関する種々の問題について報告と協議を行なうものである。日本およびアジア各国間の相互理解を深め、国際協力の推進に貢献することを目的とする。1999年度はその第9回となる。

第9回 アジア文化財保存セミナー

主 題 アジアにおける壁画の保存
日 時 1999 (平成11) 年11月14 (日) ~19日 (金)
場 所 国立オリンピック記念青少年総合センター (セミナー)、日光 (サイトセミナー)
主 催 東京国立文化財研究所
協 力 (財) 日光社寺文化財保存会

趣 旨

アジア地域には多くの貴重な壁画が残されている。これらは主に建造物の壁や古墳内の壁に描かれており、美術的に優れているばかりでなく、歴史資料として極めて重要なものである。しかし、それらは時間の経過とともに、様々な要因により劣化状態にあるものが多い。従って、これら貴重な壁画を後世に伝えるためには、保存修復処置を行うことや保存環境を整えることが不可欠であり、そのための技術を向上させていくことが緊急の課題である。セミナーでは、壁画の保存と修復に関する技術的な諸問題、および、どこまで復元するのか等の保存哲学、社会学について、アジア諸国の実状を報告し合い、よりよい方向に向けての協議を行うものである。尚、本セミナーで対象とする壁画は、アジア地域の伝統的なものうち建造物、石窟寺院あるいは墳墓 (いずれも遺跡を含む) で、土壁、板壁に下地を塗ってから描かれた絵画とする。岩に直接描かれた、あるいは刻まれた、いわゆるロックアートは含めないものとした。

セミナーは、壁画の保存にたずさわっているアジア諸国および国際機関の専門家による事例報告と、出席者による討議という形式で行った。

内 容

11月14日 (日) サイトセミナー (日光)

11月15日 (月) サイトセミナー (日光)

11月16日 (火) セミナー (国立オリンピック記念青少年総合センター)

13:30~14:00 開会式

主催機関挨拶

東京国立文化財研究所長 渡邊明義

文化庁挨拶

文化庁文化財鑑査官 村上詔一

出席者紹介等

14:00~15:00 基調講演「アジアの壁画：その保存修復と国際協力」

東京国立文化財研究所長 渡邊明義

15:30~16:30 基調講演「壁画保存のための憲章」

イコモス名誉議長 ローランド・シルバ

16:30~17:10 「インドにおける壁画の保存」

インド国立文化財研究所 アツル・K・ヤダヴ

17:10~17:50 「バングラデシュにおける保存の実際」

ダッカ大学助教授 ショワツ・ザーマン

18:30~20:00 懇親会 (国立オリンピック記念青少年総合センター)

11月17日 (水) セミナー (国立オリンピック記念青少年総合センター)

9:40~10:20 「日本の壁画の保存」

東京国立文化財研究所・修復技術部長 増田勝彦

10:20~11:00 「韓国における伝統的壁画保存の現状」

韓国国立文化財研究所 金 思憲

11:00~11:40 「キジル石窟壁画の顔料に関する研究」

敦煌研究院 蘇 伯民

13:00~13:40 「ルアン・プラバンのパフワク寺院の壁画の保存」

ラオス博物館考古局・次長 ボーンホーム・チャントマツ

13:40~14:20 「記念建造物木造部材の金彩色漆の保存」

ベトナム文化財保存センター・副所長 レ・タン・ヴィン

14:20~15:00 「タイにおける壁画の保存」

タイ国芸術総局 ヴィラチャイ・ヴィラスクサワディ

15:30~16:10 「南スラウェシにおける壁画の保存：トラジャの伝統的家屋の木壁の場合」

南・南東スラウェシ地域歴史考古遺産事務所長 グナルディ・M・フム

16:10~16:50 「マレーシアの壁画に関する予備調査」 マレーシア博物館考古局 サニム・ビン・アーマド
16:50~17:30 「大気汚染と壁画の保存：アジアの遺産に対する評価と初期警告システム」
ユネスコ（推薦） ウェスレイ・K・フォーエル（米）

11月18日（木）セミナー（国立オリンピック記念青少年総合センター）
9:40~10:20 「ブータンにおける壁画の保存」 パロ国立博物館 ギュエム・シェリン
10:20~11:00 「ネパールにおける壁画の保存」 ネパール中央文化財修復研究所 オム・プラカシュ・ヤダヴ
11:00~11:40 「現場での壁画の保存：保存技術者にとっての一つの挑戦」
イクロム（推薦） マウロ・マッティニ（伊）
11:40~12:30 総合質疑応答
14:00~15:30 総合討議（I）
16:00~17:30 総合討議（II）

11月19日（金）
10:00~11:45 総合討議（III）
11:45~12:00 閉会式
主催者挨拶 東京国立文化財研究所長 渡邊明義
海外出席者代表挨拶 イコモス名誉議長 ローランド・シルバ

(3) 各種の研究協議会

1) 文化財保存修復研究協議会

本協議会では、保存修復に関する研究成果を発表し、関係の専門家とともに協議することを目的として、毎年テーマを定めて開催している。1999年度が第29回にあたる。保存科学部、修復技術部、国際文化財保存修復協力センターが交替で担当しているが、1999年度は、修復技術部が担当した。外務省をはじめ博物館・大学関係者などを含む32名の参加を得た。

主 題 近世輸出工芸品の保存と修復
会 場 東京国立文化財研究所 別館会議室
日 時 2000（平成12）年1月14日（金）
参加者 32名

主 旨

欧米の美術館・博物館の保管する日本工芸品に対する関心の高まりの中で、海外からの日本工芸品に関する保存と修復に対する問い合わせが出はじめている。しかし、従来この分野で詳しい調査が行われておらず、保存と修復に関する研究も十分とはいえない。今回、輸出工芸品に関する歴史的研究および実践的修復の最新情報を報告し、今後の保存と修復の課題を提示したい。

プログラム

10:00~10:05 開会挨拶（所長）
10:05~10:10 主旨、内容説明
10:10~11:00 「工芸品の輸出について」—長崎商館長日記を中心に—
神戸市立博物館 勝盛 典子
鶴見大学文学部教授 石田 千尋
11:00~12:00 「海外での輸出工芸品の保管状況について」
修復技術部 加藤 寛

昼 食

- 13:30～14:30 「クリーブランド美術館蔵 大般若経厨子の修復について」
漆芸修復家 北村 昭齋
- 14:30～15:20 「メトロポリタン美術館 鳳凰蒔絵螺鈿矢筒の修復について」
目白漆芸文化財研究所 室瀬 和美
- 15:20～16:00 「ケルン東洋美術館蔵 瓢箪蒔絵螺鈿鞍の修復について」
漆芸修復家 山下 好彦
- 16:00～16:40 「メトロポリタン美術館蔵 黒漆兜の修復について」
漆芸修復家 田口 善明
- 16:40～16:55 総括（修復技術部長）
- 16:55～17:00 閉会挨拶（所長）

なお、研究協議会の報告書はA4版、96頁、約20頁のモノクロ図版および作図、近世輸出品の歴史的考察と保存修復についての報告を含み、平成12年7月30日に発行した。

2) 民俗芸能研究協議会

第2回 学校教育と民俗芸能

目 的

伝統文化を再評価する風潮が一般的となっている今日、民俗芸能伝承地では過疎や高齢化、少子化の波の中で、その継承保存が困難となっている。そのような状況の中で、各芸能の保存団体、教育委員会、公民館、学校などが協力して、民俗芸能継承のために、さまざまな尽力がなされている。

第2回目は「学校教育と民俗芸能」をテーマに、長年、学校教育の中に民俗芸能を取り入れ、授業を続けてこられた教育者の事例報告と、さまざまな立場の11名のアドバイザーによる、研究協議会を行った。

開催日時

日 時 1999（平成11）年12月7日（火）9:30～17:00

会 場 江戸東京博物館会議室

事例報告

- | | |
|----------------------------|---|
| I 「子供達が継承する本海番楽」 | 秋田県鳥海町役場 高橋 建 |
| II 「ふるさとの文化に学ぶ伝承活動」 | 岩手県盛岡市乙部中学校 佐賀明子 |
| III 「佐渡の伝統文化に学ぶ児童生徒の現状」 | 新潟県佐渡郡小木小学校 濱田 毅 |
| IV 「淡路人形浄瑠璃を核にした特色ある学校づくり」 | 兵庫県立三原高等学校 中西英夫 |
| V 「椎葉村における学校教育と民俗伝承」 | 宮崎県椎葉民俗芸能博物館 永松 敦
宮崎県椎葉村尾前神楽保存会 尾前亀蔵 |

総合討議 司会 星野 紘、中村茂子

成 果

伝承者・学校・地域社会・行政が、それぞれの立場で以下のような方策を確認した。

1. 明確な目標を設定する。
2. 先の四者の共通理解が必要である。
3. 地域に伝承芸能がない場合は、新作に取り組むことも可能である。その場合は、目標を明確にし、学校の立場や状況によって異なってよい。
4. 軌道修正をしつつ終始柔軟に取り組む。
5. 地域に精通したアドバイザーの存在は不可欠である。



3) 国際文化財保存修復研究会

目 的

人類共通の遺産である文化財を守るためには、国家、民族を越えて保存修復に当たらなければならない、国際協力は不可欠である。世界、特にアジア地域の文化遺産の保存修復のために日本が果たすべき役割は大きく、海外の文化財の調査研究、保存修復事業への協力が多く行われている。しかし、社会体制、経済状況等が異なる中で文化遺産の保存修復を行う際には、様々な問題に直面しているのが現状である。

本研究会は、海外の文化財の調査研究、保存修復事業に携わるさまざまな分野の国内の専門家を招き、文化財保存修復の国際協力事業に関するさまざまな問題点について議論し、その解決に向けて方策を探ることを目的とする。また、本研究会は情報ネットワーク構築の一環としても位置づけている。

なお、平成11年度は第6回、第7回の研究会を実施した。

第6回国際文化財保存修復研究会

日 時： 1999（平成11）年10月14日（木） 10：30～16：15

会 場： 東京都美術館講堂

出席者数： 約90名

「ヴェトナム、フエの保存修復の経緯、現状、問題点（Ⅰ）」 早稲田大学 中川 武

「ヴェトナム、フエの保存修復の経緯、現状、問題点（Ⅱ）」 日本大学 重枝 豊

「タイ国石（レンガ）造遺跡の保存修復：日タイ国際共同研究の経緯、現状、問題点」

東京国立文化財研究所 西浦忠輝

総合討議

第7回国際文化財保存修復研究会

日 時 2000（平成12）年3月24日（水） 10：30～17：50

会 場 東京国立文化財研究所セミナー室

出席者数 約70名

内 容

「エジプト、アブ・シール南丘陵遺跡の保存修復」—石像建造物に関する保存修復案作成に向けての問題点—

早稲田大学古代エジプト調査室 吉村作治

早稲田大学工学部 中川 武

日本学術振興会特別研究員 柏木弘之

日本学術振興会特別研究員 齋藤正憲

「エジプト博物館における王族ミイラの保存、展示プロジェクト」

アメリカ・ゲティ保存研究所 前川 信

○「ギリシャにおける遺跡の保存修復」

熊本大学工学部 伊藤重剛

「レバノンにおける遺跡の発掘と保存修復」

国土館大学イラク古代文化研究所 松本 健

総合討議

(4) 研究会・講演会など

1) 総合研究会

総合研究会では毎年4、6、10、12、2月に各部・センターが順番に研究発表を行っている。

期 日	題 目	所 属	発 表 者 名
99. 4.13	ブータンの歴史的建造物と集落	国際文化財保存修復協力センター	斎 藤 英 俊
99. 6. 8	意匠研究会（遂初会）について —明治期“理想画”の研究に向けて—	美術部	塩 谷 純
99.10.12	民俗芸能に伝承する翁猿楽 —三信地域のおこないを中心に—	芸能部	中 村 茂 子
99.12.14	青銅器の鉛同位体比から見た古代中国王朝 の変遷	保存科学部	平 尾 良 光
00. 2. 8	博物館コレクションにおける絵画と表装の 関係	修復技術部	増 田 勝 彦

2) 美術部・情報資料部

期 日	題 目	所 属	発 表 者 名
99. 4.28	アントニオ・フォンタネージ再考	美術部	山 梨 絵 美 子
99. 5.28	親鸞の面影—中世真宗肖像彫刻研究—	情報資料部	津 田 徹 英
99. 6.23	フランスにおける林忠正の活動 —1890年代から1900年のパリ万国博覧会 まで—	武蔵大学	小山ブリジット
99. 7.28	明治時代の工芸品を見る —その地域性に留意して—	文化庁文化財保護部	山 崎 剛
	絵画性と彫刻性の相克 —近代工芸にみられるレリーフ表現の位 相をめぐって—	宮内庁三の丸尚蔵館	大 熊 敏 之
99. 9.27	「竜虎」以後—橋本雅邦とその周辺—	美術部	塩 谷 純
99.11.19	日本のセザンヌ —1920年代日本の人格主義的セザンヌ像の 美的根拠とその形成に関する思想および 美術制作の文脈について—	美術部招へい研究員・京都工芸繊維大学	永 井 隆 則
	「1920年代の人格主義的セザンヌ受容とそ の思想的背景」をめぐって	関西学院大学	加 藤 哲 弘
99.12. 1	朝鮮王朝時代肖像画の類型及び社会的機能	情報資料部招へい研究員・成均館大学校	趙 善 美
99.12.22	明治期におけるミュゼオロジー —ゲティ研究所の紹介をかねて—	情報資料部	鈴 木 廣 之
00. 2. 9	書は芸術か I	書道家 五島美術館	筒 井 茂 徳 名 児 耶 明
	書は芸術か II		

3) 芸能部

期 日	題 目	所 属	発 表 者 名
99.11.26	中国の祭祀舞踊について —四川省瑞公戯について—	中国四川省川劇学会々長	張 中 学
00. 3.21 ～24	無形の文化遺産の保存に関する国際ワーク ショップ開催のための準備打合わせ会	ユネスコ本部無形文化遺産課長 韓国国立民俗博物館専門委員 中国舞踏家協会専門学術委員 ロシア国立民俗芸術の家伝統芸術部長	愛 川 紀 子 梁 鐘 承 金 濤 イワナ・ウラディミ ローヴァ・コズロヴァ

4) 保存科学部

1999 (平成11) 年 5 月 7 日 (金)

「無公害な文化財生物劣化防除法の研究」 平成11年度 第1回研究会

場 所 東京国立文化財研究所 別館会議室

愛知県美術館における生物被害対策

長屋菜津子 愛知県美術館

日本における生物被害防除法の歴史

石川登志雄 京都府教育庁文化財保護課

IPMと収蔵庫のクリーニングについて

青木 睦 国文学研究資料館・史料館

温度処理法、低酸素濃度法の実際〈処理仕様と実習〉

石崎武志、木川りか 保存科学部

総合討議

1999 (平成11) 年12月2日 (木)

「石造文化財、古墳、洞窟遺跡の劣化と保存対策」

場 所 東京国立文化財研究所別館会議室

開会挨拶

三浦定俊 保存科学部

セッション1 (座長 三浦定俊)

石造文化財、レンガ建造物中の水分塩分移動

石崎武志 保存科学部

韓国での古墳の保存に関する研究

徐満哲 韓国、公州大学

洞窟遺跡の劣化と保存

ジャック・ブリュネ フランス、歴史記念物研究所

セッション2 (座長 石崎武志)

ドイツに於ける歴史的レンガ建造物の保存について

ピーター・ハウブル ドイツ、ドレスデン工科大学

レンガ建造物中の熱、水分移動シミュレーション手法の開発

ジョン・グルネワルド ドイツ、ドレスデン工科大学

歴史的建造物の部材の劣化機構について

渡辺一正 建設省建築研究所

総合討論

1999 (平成11) 年12月3日 (金)

「多孔質体中の水分移動機構と物性値の測定手法」

場 所 東京大学農学生命科学研究科会議室

開会挨拶

溝口 勝 東京大学農学生命科学研究科

土壌中の水分、塩分移動機構について

C. ダークセン オランダ、ワゲニンゲン大学

多孔質体中の水分特性、不飽和透水係数の測定方法の開発

ルドルフ・ブラーゲ ドイツ、ドレスデン工科大学

TDRプローブを用いた多孔質体の熱、水分特性の測定
総合討議

登尾浩助 岩手大学農学部

1999 (平成11) 年12月20日 (月)

「無公害な文化財生物劣化防除法の研究」平成11年度 第2回研究会
場 所 東京国立文化財研究所 別館会議室

臭化メチルの使用規制と今後の進め方について
IPMについて一施設と管理
虫菌害対策 簡易マニュアル化の試み
文化財修復における虫菌害対策の実状と今後の問題点
総合討議

三浦定俊 保存科学部
佐野千絵 保存科学部
長谷川孝徳 石川県立歴史博物館
日高真吾 元興寺文化財研究所

2000 (平成12) 年3月14日 (火)

文化財施設の保存 (収蔵展示) 環境の研究会
題 目 博物館館内環境の設計・管理・調査
場 所 東京国立文化財研究所新営施設 3階 保存科学研究室D

東京国立文化財研究所新営庁舎文化財収蔵施設の紹介
新営庁舎文化財収蔵施設の温湿度制御に関する調査
新営庁舎文化財収蔵施設の空気環境調査—移転前調査
山梨県立美術館の館内環境の現状と問題
化学吸着フィルターの利用と問題点
空調ダクトを発生源とした孢子等による汚染
総合討議

本多 豊 アーキビジョン
石崎武志 保存科学部
佐野千絵 保存科学部
高野早代子 山梨県立美術館
呂 俊民 竹中工務店技術研究所
岩波 洋 大林組エンジニアリング本部

2000 (平成12) 年3月29日 (水)

「寒冷な環境下での遺跡、石造文化財の劣化と保存」
場 所 東京国立文化財研究所セミナーホール

開会挨拶
屋外環境下での遺跡、石造文化財の劣化と保存
気候変動と遺跡保存の新たな取り組みについて
北海道開拓の村における建造物とその保存対策

大分県の石造文化財の劣化と保存対策
岩手県、史跡志波城の劣化と保存対策

とちぎ大平原地区田園空間博物館構想について
多孔質材料の凍結劣化と耐凍性評価法
サーモグラフィを用いた多孔質体中の水分移動評価法
総合討論

三浦定俊 保存科学部
石崎武志 保存科学部
福田正己 北海道大学低温科学研究所
小林孝二、小林幸夫 北海道開拓記念館
中島宏一 北海道開拓の村
山田拓伸 大分県立歴史博物館
似内啓邦、津島知弘 盛岡市教育委員会
武田一夫 鴻池組技研
土谷富士夫 帯広畜産大学
高田忠彦 (株)シリックス
溝口 勝 東京大学農学生命科学研究科

5) 修復技術部

「近代の文化遺産」に関する研究会

修復技術部では、平成10年11月に開催した国際研修集会「近代の文化遺産の保存と活用」(東京国立文化財研究所主

催)を受けて、平成11年度は航空機に焦点を当てて研究調査を実施した。この1年では材料や修復方法の問題点と共に、どのように航空機を文化財として評価し、遺していくのかという問題点について考える研究会を開催し、アメリカ、オランダ、ドイツ、日本における取り組みの実例を発表していただいた。研究会および研究調査の内容をまとめたものとして平成12年に「航空機の保存修復」を刊行する予定である。

第1回研究会 1999(平成11)年4月28日(水)

場 所 東京国立博物館セミナー室

ポール・E・ガーバー施設と「愛知M6A1 晴嵐」の修復について ポブ・マクレーン (Mr. Robert M. McLean Jr.)
スミソニアン研究機構スミソニアン航空宇宙博物館ポール・E・ガーバー保存修復施設修復担当官

参加者数 51名

第2回研究会 1999(平成11)年9月22日(水)

場 所 東京都美術館講堂

博物館における航空機保存について ロバート・ミケシュ (Mr. Robert C. Mikesh)

アビエーションライター、元スミソニアン研究機構国立航空宇宙博物館上級学芸員

オランダ空軍航空博物館について バス・クルガー (Mr. Bas Kreuger)

オランダ空軍航空博物館学芸員

グラード式単葉機のレプリカ作製について 早川博康 グラード復元の会代表

参加者数 119名

第3回研究会 2000(平成12)年3月28日(火)

場 所 東京国立文化財研究所会議室

ガーバー施設における航空機・宇宙船の取り扱いと修復手順と問題点 アン・マッコムス (Ms. Anne C. McCombs)

スミソニアン研究機構国立航空宇宙博物館ポール・E・ガーバー施設 修復担当官

参加者：12名

第3回 在外日本古美術修復技術研究会

現在、文化庁及び当研究所で進めている「在外日本古美術修復協力事業」で、海外の美術館保管の日本工芸品が修復のために里帰りをしている。これらの工芸品を対象として、近世輸出工芸品の歴史的な背景や材料技法の検討を行うために、9月20日(月)に第3回在外日本古美術修復技術研究会を開催した。研究会の目的は、里帰りをしている作品の調査会ならびに検討会を開催し、従来あまり知られていない近世輸出工芸品の実体を明らかにすることであった。さらに、関連資料を保管する美術館・博物館での調査をおこない、現在、国内に残されている一部の作品リストも作成した。

1999(平成11)年9月20日(月) 13:30~17:00

東京国立文化財研究所ならびに東京国立博物館修復アトリエで在外日本古美術品の調査。

1999(平成11)年9月21日(火) 10:00~17:00

東京国立文化財研究所別館会議室において第3回在外日本古美術修復技術研究会を開催。

会議出席者 下川達弥 長崎県立美術館副館長
石川充宏 高知大学教授
高橋隆博 関西大学教授

	小野田一幸	神戸市教育委員会文化財課文化財係
	勝盛典子	神戸市立博物館学芸員
	岡 泰正	神戸市立博物館学芸員
	赤石敦子	足立美術館学芸員
	小林和香	安芸市歴史民俗資料館学芸員
	小池富雄	徳川美術館学芸員
	五味 聖	宮内庁三の丸尚蔵館学芸員
	田川真千子	輸出漆器研究家
修復メンバー	小沢正美	武器武具修復家（東京国立博物館修理室）
	室瀬和美	目白漆芸文化財研究所
	勝又智志	目白漆芸文化財研究所
	山下好彦	目白漆芸文化財研究所
	松本達弥	目白漆芸文化財研究所
	田口善明	漆芸修復家（東京国立文化財研究所）
	天川 裕	修復助手（東京国立文化財研究所）
研究会担当	加藤 寛	東京国立文化財研究所 修復技術部

また、この研究会に関連して、平成11年12月に長崎県立美術博物館、長崎市立博物館を訪れて、近世輸出工芸品の調査を行った。この調査で新史料の発見や長崎螺鈿の歴史的な展開などが明らかにされた。この調査での報告の一部は、平成12年度に刊行予定の『研究協議会報告書』や『保存科学』に復元的研究として発表している。調査の実施は以下の通りである。

第2回 在外日本古美術修復技術研究会関連調査会

調査日時 1999（平成11）年12月16日（木）～18日（土）

用務先 長崎県長崎市

用務箇所 および長崎市内漆器関連調査

調査日程 12月16日（木） 10：00から長崎県立美術博物館

12月17日（金） 10：00から長崎市立博物館

12月18日（土） 多久市歴史資料館 多久聖廟

調査メンバー	加藤 寛	東京国立文化財研究所修復技術部
	五味 聖	宮内庁三の丸尚蔵館学芸員
	永島明子	京都国立博物館
	高橋隆博	関西大学教授
	小池富雄	徳川美術館普及課長
	金子皓彦	東京女学館短期大学教授
	北村 繁	漆芸修復家（奈良国立博物館）
	室瀬和美	目白漆芸文化財研究所（東京国立博物館）
	勝又智志	目白漆芸文化財研究所（東京国立博物館）
	山下好彦	目白漆芸文化財研究所（東京国立博物館）
	松本達也	目白漆芸文化財研究所（東京国立博物館）
	田口善明	漆芸修復家（東京国立文化財研究所）
	北村昭斎	重要無形文化財保持者（螺鈿）
	赤石敦子	足立美術館学芸員

遺構保存研究会

遺構を発掘直後の状態で展示活用することが全国で行われているが、土壌水分の蒸発による崩壊や生物被害などの発生しているところが多く、その保存には困難を極めている。遺構の土壌条件に大きな差があるために成功例があっても、成果を一般化することが難しい研究会の目的は、遺構保存の現状を検討し、その問題点について共有し、遺構の特徴と展示活用のニーズにあった保存方法を討議することにある。

主 題	遺構保存の現状	
日 時	2000（平成12）年3月10日（金）10：00～17：00	
会 場	千葉市加曽利貝塚博物館	
参加者数	35名	
発 表	青森県三内丸山遺跡の保存の現状	中村美杉（青森県教育委員会）
	仙台市富沢遺跡の保存の現状	竹田幸司（仙台市教育委員会）
	群馬県月夜野町矢瀬遺跡の保存の現状	三宅敦気（月夜野町教育委員会）
	横浜市三殿台遺跡の保存の現状	今井康博（横浜市教育委員会）
	長岡市藤橋遺跡の保存の現状	駒形敏郎（長岡市立科学博物館）
	加曽利貝塚遺跡の保存の現状	村田六郎太（加曽利貝塚博物館）
	西都原古墳の保存の現状	飯田博之（宮崎県教育委員会）
	吉野里遺跡の保存の現状	細川金也（佐賀県教育委員会）
	鴻廬館遺跡の保存の現状	池崎穰二（福岡市教育委員会）
	遺跡保存処理の歴史と将来への展望	青木繁夫（東京国立文化財研究所）

6) 国際文化財保存修復協力センター

文化財建造物耐震補強研究会

平成7年の兵庫県南部地震以降、文化財建造物保存修復の最重要課題の一つとなった耐震対策について、実際の修理工事における耐震補強の実例を中心に、現状の問題点と今後の方向を討議した。

日 時	1999（平成11）年11月26日（金）	
会 場	東京国立博物館資料館セミナー室	
出席者数	70名	
事例報告1.	正法寺庫裏（水沢市）	窪寺 茂、山田繁男
事例報告2.	彦部家住宅（桐生市）	高木裕雄樹、古川 洋
事例報告3.	冷泉家住宅（京都市）	塚原十三雄、西澤英和
事例報告4.	山口県旧県会議事堂（山口市）	木村和夫、長谷川哲也
見 学	国会図書館支部上野図書館改修工事免震レトロフィット	
	パネルディスカッション「歴史的建造物の構造補強の考え方」	
司会	清水真一、巖 文成、内田昭人、木林長仁、西澤英和	
総括	坂本 功	

第2回センター保存計画研究会

「保存計画」とは、実際の保存修復事業の計画立案にかかわることばかりでなく、社会背景や経済条件、人的資源や教育の問題に至るまで、およそ保存修復を成立させるあらゆる要素が対象となる。本研究会は、保存をデザインする conservation design という観点から、衆知を集めて関連する広くさまざまな問題を検討する機会である。なお、第一回は昨年度（平成11年1月29日）に、「文化財保存修復の教育カリキュラム」と題して開催している。

日 時	2000（平成12）年3月21日（火）	
会 場	東京国立文化財研究所セミナー室	

主 題 「建造物保存修復の伝統と現在—フランスとイギリス—」

フランスの建造物保存の伝統と現在—修復事例を中心に—

フィリップ・ウダン 歴史的記念建造物修復監督

イギリスの建造物保存の理念と実践—歴史的概観—

ピーター・パーマン ヨーク大学保存センター長 教授

台湾中部地震文化財被災対策研究会

目 的

1999年9月21日未明に発生した台湾中部地震（台湾921集集大震災）では、死者2,000人以上、倒壊家屋13,000棟余という甚大な被害を及ぼしたが、歴史的建造物、美術工芸品等の文化財にも深刻な被害を及ぼした。

これらの被災文化財の保護に関し、台湾の文化財保護の中心機関である「国立文化資産保存研究中心籌備處」より東京国立文化財研究所長宛に協力依頼がなされたことを受けて、当該地震による被災状況の情報収集、および協力等の対応措置に関する検討等を行うために関係する研究者・専門家を招き研究会を開催した。

この研究会は自然災害等に対する文化財危機管理に関する調査研究活動であり、また、「世界、特にアジア諸国における文化財保存に関する情報収集と提供」活動の一環と位置づけられており、研究会で得られた台湾中部地震に関する情報は、インターネット等を通じて、各方面へ提供を行った。

第1回 台湾中部地震文化財被災対策研究会

日 時 1999（平成11）年10月22日（金）15：00～18：00

会 場 東京国立文化財研究所別館会議室

出席者数 23名

内 容

樂山文教基金會執行長の丘如華氏およびすでに台湾の被災状況等の調査を行った村上裕道（兵庫県教育委員会）、坂本勇（東京修復保存センター）、青木睦（国文学研究資料館）百橋明穂（神戸大学）、内田俊秀（京都造形芸術大学）の各氏から、台湾の文化財に関する法令、組織、被災状況、現在の対応状況等に関して報告があり、今後必要な情報や対応措置に関して討議した。

第2回 台湾中部地震文化財被災対策研究会

日 時 1999（平成11）年11月29日（月）15：00～18：00

会 場 東京国立文化財研究所別館会議室

出席者数 24名

内 容

文化財修復学会として11月15日から20日の間、台湾において調査を行った青木繁夫（東京国立文化財研究所）、若林邦民（財団法人文化財建造物保存技術協会）、高木裕雄樹（同）氏により美術工芸品、歴史的建造物に関する破損状況、応急措置や保存・修復の進捗状況について報告があり、今後の専門分野における協力の方向と可能性について討議した。

2. 調査指導など

(1) 所外経費による調査指導

公費・文部省科学研究費補助金・受託研究費などの所内の経費によらずに調査指導を行った事例は下記の通りである。

氏名	調査先	目的
青木 繁 夫	奈良国立博物館	天神山古墳出土品修理委員会出席
青木 繁 夫	奈良国立博物館	天神山古墳出土品修理委員会出席
青木 繁 夫	群馬県立博物館	文化財保存修復会講師
青木 繁 夫	宮崎県西都原古墳	西都原古墳の保存調査
青木 繁 夫	神戸大学文学部	コア・カリキュラム研究プロジェクト研究会出席
青木 繁 夫	奈良国立博物館	天神山古墳出土品修理委員会出席
青木 繁 夫	元興寺文化財研究所	重文・湯舟坂2号墳出土品調査
青木 繁 夫	宮崎県西都原古墳	西都原古墳群遺構保存指導
青木 繁 夫	奈良明日香村高松塚古墳	高松塚古墳保存点検
石崎 武 志	福島県柳津町	銀山跡の煉瓦煙突の保存に関する調査
石崎 武 志	山梨県立美術館	山梨県立美術館環境調査
石崎 武 志	沖縄県立埋蔵文化センター	沖縄県立埋蔵文化センター館内環境調査
井手 誠之輔	京都国立博物館	高麗仏画の調査研究
井手 誠之輔	奈良国立博物館	情報資料・写真資料の整備に関する調査研究
白井 国 明	奈良国立文化財研究所	独立行政法人化に関する打合せ
加藤 寛	オランダ他	在外日本古美術品協力事業に関する事前調査・協議
加藤 寛	名古屋市立博物館他	近世漆工芸基礎資料の研究に伴う調査
加藤 寛	石川県立美術館他	近世漆工芸基礎資料の研究に伴う調査
加藤 寛	国立歴史民俗博物館	資料買い取りに伴う監査委員会出席
加藤 寛	高知市高知グリーン会館	土佐山内家宝物資料館資料購入審査会出席
加藤 寛	京都市高津古文化館他	近世漆工芸基礎資料の研究に伴う調査
川野邊 涉	京都科学・本社	第五福竜丸エンジンの修復指導
川野邊 涉	広島県厳島神社	大鳥居他の保存対策の検討
川野邊 涉	栃木県日光市	文化財周辺的环境測定 の指導
川野邊 涉	奈良県唐招提寺	木造建造物の劣化調査
川野邊 涉	国立民族学博物館	共同研究会出席
川野邊 涉	京都市法界寺	法界寺の修復技術の検討
川野邊 涉	京都市さわの道玄工房	西楽寺の修復技術の検討
川野邊 涉	京都市法界寺	法界寺の修復技術の検討
川野邊 涉	栃木県日光市	文化財周辺的环境測定 の指導
川野邊 涉	中華人民共和国	文化財保護に関する意見交換及び関係機関視察

氏名	調査先	目的
川野邊 涉	広島県厳島神社	大鳥居他の保存対策の検討
川野邊 涉	京都市さわの道玄工房	西楽寺の修復技術の検討
川野邊 涉	栃木県日光市	文化財周辺の環境測定の指導
川野邊 涉	京都科学・本社	第五福竜丸のエンジン修復の指導
川野邊 涉	インドネシア	木造建造物修復に関する研究交流
川野邊 涉	那覇市首里城	木造建造物塗装に関する調査
川野邊 涉	山口県小野田市	セメント釜保存修復に関する調査
河原 脩	オランダ他	在外日本古美術品協力事業に関する事前調査・協議
木川 りか	奈良市東大寺	東大寺法華堂及び戒壇院の虫害調査
木川 りか	和歌山県きのくに志学館	地域資料保存調査員研修会講師
木川 りか	奈良明日香村高松塚古墳	高松塚古墳壁画の保存点検
朽津 信明	北海道余市町	史跡・フゴッペ洞窟保存調査委員会出席
朽津 信明	北海道余市町	史跡・フゴッペ洞窟保存調査に係る照明影響調査に伴う指導
朽津 信明	北海道余市町	史跡・フゴッペ洞窟保存調査委員会出席
朽津 信明	北海道余市町	史跡・フゴッペ洞窟保存調査委員会出席
朽津 信明	大分県臼杵市	脆弱遺物の保存処理・保管対策方法等に関する指導
朽津 信明	宮崎県西都原古墳	西都原古墳の保存調査
朽津 信明	北海道余市町	史跡・フゴッペ洞窟照明影響調査
小関 仁志	奈良国立文化財研究所	独立行政法人化に関する打合せ
斎藤 英俊	岐阜県白川村教育委員会	白川村伝建審出席及び現状視察
斎藤 英俊	奈良国立文化財研究所	アンコール文化遺産に関する検討委員会出席
斎藤 英俊	岐阜県白川村教育委員会	白川村伝建審出席及び保存地区修理・修景の指導
斎藤 英俊	岐阜県白川村教育委員会	白川村伝統的建造物群保存地区保存審議会出席
斎藤 英俊	パナマ他	パナマのカスコ・ピエホ街区の保存協力に関する事前調査及び協議
佐野 千絵	京都国立博物館	修理技術者講習会の講師
佐野 千絵	鎌倉市教育委員会	作品の保存状況調査
塩谷 純	小杉放菴記念日光美術館	「黒田清輝 101年目の日光」展の撤去立ち会い
島尾 新	徳川美術館	国宝・源氏物語絵巻の調査
島尾 新	徳川美術館	国宝・源氏物語絵巻の調査
島尾 新	徳川美術館	国宝・源氏物語絵巻の調査
島尾 新	徳川美術館	国宝・源氏物語絵巻の調査
島尾 新	静岡大学	歴史的絵画資料情報の分析とモデル他に関する調査
城野 誠治	徳川美術館	国宝・源氏物語絵巻の調査
城野 誠治	奈良国立博物館	情報資料写真資料の装備に関する調査撮影
高桑 いづみ	滋賀県山口憲氏宅ほか	文化財を支える用具・原材料の調査
高桑 いづみ	京都府堀安右衛門氏宅ほか	文化財を支える用具・原材料の調査

氏名	調査先	目的
田中 淳	小杉放菴記念日光美術館	「黒田清輝 101年目の日光」展の展示指導
津田 徹英	徳川美術館	国宝・源氏物語絵巻の調査
津田 徹英	徳川美術館	国宝・源氏物語絵巻の調査
津田 徹英	徳川美術館	国宝・源氏物語絵巻の調査・撮影
津田 徹英	徳川美術館	国宝・源氏物語絵巻の調査・撮影立会い
中野 照男	四街道市教育委員会	四街道市文化財審議会出席
長谷川 洋一	奈良国立文化財研究所	独立行政法人化に関する打合せ
早川 典子	広島県厳島神社	大鳥居の保存対策の検討
早川 典子	栃木県日光市教育委員会	文化財周辺の環境測定の指導
早川 典子	京都市法界寺	法界寺壁画修復のための調査
早川 典子	栃木県日光市	文化財周辺の環境測定指導
早川 典子	栃木県日光市	文化財建造物の外装塗装の調査
早川 典子	沖縄県那覇市首里城	木造建造物の塗装に関する調査
早川 典子	京都市岡墨光堂	文化財修復材料の研究
早川 典子	大分県臼杵市	磨崖仏の修復材料に関する研究
早川 泰弘	徳川美術館	国宝・源氏物語絵巻に関する自然科学的調査
早川 泰弘	徳川美術館	国宝・源氏物語絵巻に関する自然科学的調査
早川 泰弘	徳川美術館	国宝・源氏物語絵巻に関する自然科学的調査
早川 泰弘	徳川美術館	国宝・源氏物語絵巻に関する自然科学的調査
平尾 良光	トルコ	アナトリアの遺跡出土の銅、青銅製品の調査
平尾 良光	京都国立博物館	指定文化財セミナー講師
平尾 良光	和泉市久保惣博物館	青銅器の調査
平尾 良光	福岡大学	青銅器の調査
平尾 良光	広島県立歴史博物館	青銅資料の採取
平尾 良光	京都国立博物館	青銅資料の採取
星野 紘	大韓民国	ユネスコ第2回人間国宝制度に関する国際ワークショップに出席
星野 紘	大阪府堺市	西暦2000年世界民族芸能祭第2回国内演者招聘検討会議出席
星野 紘	山梨県甲府市	平成11年度国際民俗芸能フェスティバル指導及び講師
星野 紘	中華人民共和国	平成12年度国際民俗芸能フェスティバル招聘芸能事前調査
増田 勝彦	京都国立博物館	京都国立博物館文化財保存修理所運営委員会出席
増田 勝彦	中華人民共和国	敦煌莫高窟壁画保存修復共同研究第3期打合せ及び成果発表
増田 勝彦	アメリカ	ボストン美術館保存部門整備長期計画の内、日本絵画担当修復専門家教育に関する協議
増田 勝彦	アメリカ	在外日本古美術品保存修復協力事業に関する事前調査・協議
増田 勝彦	京都国立博物館	法界寺壁画修復調査
増田 勝彦	イタリア、ポルトガル	在外日本古美術品保存修復協力事業に関する事前調査・協議
増田 勝彦	山口県防府市阿弥陀寺	山口県指定版本大般若経保存修理委員会出席

氏名	調査先	目的
松本修自	愛媛県松山市教育委員会	史跡来住廃寺調査指導委員会出席
松本修自	ルーマニア	モルダヴィアにおける中世修道院の修復に関する国際会議出席
松本修自	松山市史跡来住廃寺跡	遺跡保存調査指導
松本修自	松山市埋蔵文化財センター	史跡来住廃寺調査検討委員会出席
三浦定俊	イタリア	イクロム財政事業計画委員会、FPC・AAB合同委員会出席
三浦定俊	北海道余市町	フゴッペ洞窟保存調査委員会出席
三浦定俊	名古屋市愛知県立美術館	愛知県立美術館運営会議出席
三浦定俊	鹿児島県隼人町	史跡隼人塚整備保存のための指導
三浦定俊	岩手県平泉町中尊寺	新讚衛蔵環境調査
三浦定俊	北海道余市町	フゴッペ洞窟保存のための調査
三浦定俊	イタリア	イクロム財政事業計画委員会、FPC・AAB合同委員会出席
三浦定俊	奈良市西の京薬師寺	薬師寺玄奘三蔵院保存会議出席
三浦定俊	京都国立博物館	指定文化財企画展示セミナー講師
三浦定俊	奈良市西の京薬師寺	薬師寺玄奘三蔵院保存会議出席
三浦定俊	京都国立博物館	指定文化財企画展示セミナー講師
三浦定俊	岩手県平泉町中尊寺	新讚衛蔵環境調査
三浦定俊	イタリア	イクロム国際セミナー講師
三浦定俊	大分県別府市別府大学	石造文化財保存に関する調査研究
三浦定俊	奈良市西の京薬師寺	薬師寺玄奘三蔵院保存会議出席
三浦定俊	岩手県平泉町中尊寺	金色堂、新讚衛蔵環境調査
三浦定俊	奈良市西の京薬師寺	薬師寺玄奘三蔵院保存会議出席
三浦定俊	奈良国立文化財研究所	保存科学研究集会講師
三浦定俊	イタリア	イクロムへの日本人文化財専門家派遣に関わる打合せ
三浦定俊	国立民族学博物館	標本資料の保存に関する指導・助言
三浦定俊	イタリア	イクロム財政事業計画委員会、理事会、総会出席
宮島新一	名古屋市名古屋城	名古屋城本丸御殿障壁画復元模写の指導
宮島新一	京都市泉涌寺	調査
宮島新一	奈良国立博物館	資料調査
宮島新一	名古屋市名古屋城	名古屋城本丸御殿障壁画復元指導
宮島新一	奈良国立博物館	天平展図録作成
宮島新一	名古屋市名古屋城	名古屋城本丸御殿障壁画復元指導
宮島新一	奈良国立博物館	研究調査
山梨絵美子	大分市美術館	黒田清輝巡回展の展示指導
山梨絵美子	大分市美術館	黒田清輝巡回展の撤去立会い
米倉迪夫	名古屋市徳川美術館	国宝・源氏物語絵巻調査
米倉迪夫	名古屋市徳川美術館	国宝・源氏物語絵巻の調査
米倉迪夫	奈良市談山神社他	中世絵画資料調査

氏 名	調 査 先	目 的
米 倉 迪 夫	名古屋市徳川美術館	国宝・源氏物語絵巻の調査
米 倉 迪 夫	奈良国立博物館	情報資料・写真資料の整備に関する調査研究
渡 邊 明 義	大韓民国	共同研究文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究及び文化財保護に関する協議等
渡 邊 明 義	奈良国立文化財研究所	独立行政法人化に関する打合せ

(2) その他の調査指導

1) 文化財の材質に関する調査

金属製文化財を中心に、その材質やさび・付着物等に関する化学組成および構造解析の測定、さらには材料の産地推定等に関する調査を行った。

総依頼件数 52件 約400試料 (1999.04~2000.03)

分析内容内訳 (1資料あたり複数箇所分析あり)

蛍光X線分析 (XRF)	: 約300測定
ポータブル蛍光X線分析 (P-XRF)	: 約40測定
鉛同位体比測定 (PBIR)	: 約300測定
X線回折分析 (XRD)	: 約50測定
ICP-発光分光分析/質量分析 (ICP)	: 約30測定

(1)	1999.04	国際日本文化研究センター	「中国雲南省出土青銅器等」10点	(XRF, PBIR)
(2)	1999.04	東京国立博物館修理室 半田九清堂	「紺紙金銀泥描」1点	(XRF)
(3)	1999.04	早稲田大学	「銅鏡」2点	(PBIR)
(4)	1999.04	元興寺文化財研究所	「出土銅製品」14点	(XRF, ICP, PBIR)
(5)	1999.04	東京国立博物館	「弥生時代青銅器」49点	(PBIR)
(6)	1999.04	神戸市立博物館	「江戸期ガラス製品」1点	(PBIR)
(7)	1999.04	神戸芸術工科大学	「金属製品」38点	(XRF)
(8)	1999.05	共立女子大学	「中国出土ガラス製品」2点	(XRF, PBIR)
(9)	1999.05	東京国立博物館修理室	「銅椀」1点	(PBIR)
(10)	1999.05	東京国立博物館	「布・塗料」2点	(PBIR)
(11)	1999.05	中国社会科学院	「中国出土青銅資料」5点	(PBIR)
(12)	1999.05	中国社会科学院	「中国出土銅製品」2点	(XRF, ICP)
(13)	1999.05	東京国立博物館	「青銅製品」2点	(XRF)
(14)	1999.06	元興寺文化財研究所	「出土銅製品」2点	(PBIR)
(15)	1999.06	愛知県埋蔵文化財センター	「銅鐸」1点	(XRF, XRD, PBIR)
(16)	1999.06	国立近代美術館	「油彩画」1点	(P-XRF, XRF)
(17)	1999.06	東京国立博物館	「中国出土青銅器」1点	(XRF)
(18)	1999.07	福島県教育庁	「出土銅製品」4点	(XRF, PBIR)
(19)	1999.07	東京国立博物館修理室	「出土金属器」7点	(PBIR)
(20)	1999.07	韓国湖巖美術館	「韓国出土陶磁片」4点	(PBIR)
(21)	1999.07	東京国立博物館修理室	「出土ガラス製品」10点	(PBIR)
(22)	1999.08	元興寺文化財研究所	「出土銅製品」45点	(PBIR)
(23)	1999.08	元興寺文化財研究所	「出土金属器」1点	(PBIR)
(24)	1999.08	東京国立博物館	「出土金属器」16点	(PBIR)
(25)	1999.08	東京国立博物館	「出土銀製品」1点	(PBIR)
(26)	1999.08	東京国立博物館	「編鐘」7点	(XRF, XRD)
(27)	1999.08	文化庁	「江戸期文書」1点	(XRF)
(28)	1999.09	目白漆芸文化財研究所	「螺鈿矢筒」1点	(XRF)
(29)	1999.09	東京税関	「金属塊」50点	(XRF)
(30)	1999.10	東京国立博物館	「中国北方銅製品」33点	(XRF, PBIR)
(31)	1999.10	東京国立博物館修理室	「出土金属器」13点	(PBIR)
(32)	1999.10	東京国立博物館修理室	「出土金属器」1点	(PBIR)
(33)	1999.11	元興寺文化財研究所	「出土銅製品」13点	(PBIR)

(34)	1999.11	馬の博物館	「馬具」29点	(PBIR)
(35)	1999.11	福岡市教育委員会	「銅製品」2点	(PBIR)
(36)	1999.11	東京国立博物館	「中国出土青銅器」25点	(XRF, PBIR)
(37)	1999.11	埼玉県立博物館	「銅鐸」1点	(XRF, XRD, PBIR)
(38)	1999.11	長崎県	「銅矛」1点	(ICP, PBIR)
(39)	1999.11	東京国立博物館	「金属粉末」3点	(XRF, XRD)
(40)	1999.12	韓国湖巖美術館	「韓国出土銅製品」9点	(PBIR)
(41)	1999.12	中近東文化センター	「トルコ出土金属製品」172点	(XRF, PBIR)
(42)	1999.12	元興寺文化財研究所	「銅鏡」10点	(ICP, PBIR)
(43)	1999.12	目白漆芸文化財研究所	「漆資料」1点	(XRF)
(44)	1999.12	群馬県埋蔵文化財調査事業団	「出土陶製品」1点	(XRF)
(45)	1999.12	山形県埋蔵文化財センター	「銅鏡片」1点	(XRF)
(46)	1999.12	福岡県教育庁	「銅鏡片」3点	(PBIR)
(47)	2000.01	文化庁	「銅剣」1点	(XRF, PBIR)
(48)	2000.01	浦添市美術館	「琉球漆器」3点	(XRF)
(49)	2000.02	倉吉市教育委員会	「出土金属製品」2点	(XRF, XRD)
(50)	2000.02	文化庁	「銅鏡他」2点	(XRF)
(51)	2000.03	東京国立博物館	「銅鏡」1点	(P-XRF)
(52)	2000.03	大垣市教育委員会	「出土銅製品」	(PBIR)

2) 美術館・博物館等館内の環境調査

国宝・重要文化財などの指定品および東京国立博物館収蔵資料の借用に関して館内環境調査を行い、報告書を作成・提出した。

岩手	萬鉄五郎記念美術館	京都	細見美術館
宮城	東北歴史博物館	鳥取	鳥取市博物館（仮称）
	瑞巖寺宝物館	島根	島根県立美術館
栃木	小杉放菴記念日光美術館	愛媛	愛媛県美術館
東京	国立公文書館貴重書庫	香川	香川県歴史博物館
	北区飛鳥山博物館	高知	高知県立美術館
	世田谷区立郷土資料館	大分	大分県立先哲史料館
愛知	豊田市美術館		大分市美術館
三重	鈴鹿市考古博物館	宮崎	高鍋町美術館
	朝日町歴史博物館		

現地調査は中尊寺新讚衡藏、佐倉市立美術館、松岡美術館、鍋木清方記念美術館、山梨県立美術館、沖縄県埋蔵文化財センターの6館

またアイヌ民族博物館など、全国124館の新設既設美術館・博物館等文化財展示収蔵施設に対して環境改善に関する相談を受け、助言を行った。これらの館については各館ごとに環境調査ファイルを作成して調査を行っている。

北海道	アイヌ民族博物館		神長官守矢史料館
青森	青森県教育庁芸術パーク構想推進室		矢吹記念美術館
岩手	萬鉄五郎記念美術館	岐阜	セラミックパークMINO
	花巻市博物館		美濃加茂市文化の森プラザ市民ミュージアム
	中尊寺新讀衡蔵		光記念館
宮城	宮城県図書館	静岡	上原近代美術館
	東北歴史博物館	愛知	愛知県立美術館
	村田町歴史みらい館		知多市歴史民俗博物館
	瑞巖寺宝物館		豊田市美術館
秋田	秋田市立千秋美術館		豊橋市二川宿本陣資料館
山形	米沢市立博物館		三岸節子記念美術館
福島	福島県立文化財センター白河館		田原町博物館
茨城	国土地理院地図と測量の科学館		東浦町郷土資料館
	国立公文書館つくば分館	三重	名古屋ボストン美術館
	筑波大学図書館		鈴鹿市考古博物館
	茨城県陶芸美術館		朝日町歴史博物館
	(財)彰考館徳川博物館	滋賀	市立長浜城歴史博物館
栃木	宇都宮美術館		曳山博物館
	小杉放菴記念日光美術館		五個荘町歴史博物館
群馬	かみつけの里博物館		能登川町立博物館
	天一美術館	京都	宇治市源氏物語ミュージアム
埼玉	浦和市美術館		みやつ歴史の館
千葉	佐倉市立美術館		八幡市松花堂交流施設博物館(仮称)
東京	国立公文書館貴重書庫		京都服飾文化研究財団
	東京国立近代美術館		細見美術館
	東京芸術大学大学美術館		茶道資料館
	日本銀行金融研究所貨幣博物館		平等院宝物館
	東京都写真美術館	大阪	大阪府立狭山池ダム資料館
	台東区書道博物館		大阪市すまい情報センター展示施設
	北区飛鳥山博物館		大阪市立新博物館・考古資料センター
	世田谷区立郷土資料館		歴史館いずみさの
	府中市美術館		和泉市いずみの国歴史館
	実践女子大学		大阪青山短期大学歴史博物館
	日本刀装具美術館	兵庫	芸術の館
	上野の森美術館		小野市立好古館
	松岡美術館	奈良	万葉ミュージアム
	印刷博物館		新庄町歴史民俗資料館
神奈川	川崎市岡本太郎美術館	和歌山	和歌山県立近代美術館
	平塚市立美術館	鳥取	鳥取市立博物館(仮称)
	鐮木清方記念美術館	島根	島根県立美術館
	国際協力事業団横浜研修センター		浜田市世界子ども美術館
	八剣神社収蔵庫	岡山	笠岡市竹喬美術館
	MOA美術館	広島	蘭東閣美術館
新潟	新潟県立歴史民俗博物館	山口	山口県立萩美術館・浦上記念館
	新潟県立万代島美術館(仮称)		下関市立考古博物館
富山	新湊市立博物館	香川	香川県歴史博物館
石川	石川県立歴史博物館	愛媛	愛媛県美術館
	真脇縄文館		松山市考古館
	宮本三郎美術館	高知	高知県立美術館
	薬師寺収蔵庫(内浦町)		高知県立牧野植物園
福井	織田町文化歴史館		高知市立自由民権記念館
	三方町縄文博物館	福岡	ふるさと館ちくしの
山梨	山梨県立美術館		春日市奴国の丘歴史資料館
長野	松本市立美術館準備室		北九州市自然史・歴史博物館
	辰野美術館	佐賀	佐賀県立名護屋城博物館
	尖石考古博物館		小城町路智歴史資料館

熊本 熊本市立美術館
大分 大分県立先哲史料館
大分市美術館
三浦梅園記念館
宮崎 都城市立美術館

高鍋町美術館
鹿児島 上野原縄文の森
沖縄 沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県立芸術大学
首里城公園管理センター

3) 文化財の虫害等被害に対する調査指導

- (1) 文化財の虫・カビ等の被害について調査し、指導・助言を行った。

(木川りか・山野勝次・佐野千絵・三浦定俊・増田勝彦)

調査先 武蔵野美術大学美術資料図書館、大谷大学図書館、鎌倉市籙木清方記念美術館

4) 文化財の修復および整備に関する調査指導

- (1) 国宝・東大寺金銅八角灯籠の修理指導 (青木繁夫)

灯籠の修復に際して、防錆処理法の指導及び経年変化調査

- (2) 史跡・千葉市加曽利貝塚住居跡保存整備指導 (青木繁夫)

発掘された住居跡を展示保存するために土壌水分を調整する保存処理方法および貝層断面のレーザークリーニング法の指導を行った。

- (3) 史跡・宮崎県西都市西都原古墳保存整備指導 (青木繁夫)

横穴古墳を展示保存するための覆屋および土壌処理方法について指導した。

- (4) 史跡・群馬県矢瀬遺跡の保存整備指導 (青木繁夫)

遺跡の整備方法や石及び土壌処理方法などについて指導した。

- (5) 重文・西都原古墳出土埴輪家修理指導 (青木繁夫)

修復材料などについて指導した。

- (6) 重文・京都府智恩寺鉄湯船の保存指導 (青木繁夫)

電気防食法を行うために準備調査の指導を行った。

- (7) 重文・奈良県天神山古墳出土品修理委員会 (青木繁夫)

天神山古墳出土金属製品の修理方針及び修復材料などについて指導した。

- (8) 重文・京都府湯舟坂古墳出土金属製品の修理指導 (青木繁夫)

脱塩処理や気化性防錆剤の使用方法について指導した。

- (9) 重要文化財西楽寺天井絵の修復処置 (川野邊渉)

重要文化財西楽寺(長野県長野市松代)の天井絵修復のために、非常に劣化した部分の強化のために新規に開発した人工木材を使用した。この人工木材には、無色のモデリング用のエポキシ樹脂(大日本色材H600-M-3、H600-H-3)にセルロースパウダーを高濃度で混入したものを使用している。

- (10) 唐招提寺御影堂の環境調査および改善案の提案 (川野邊渉)

重要文化財唐招提寺御影堂(奈良県奈良市)の東山魁夷筆襖絵に黴の発生が繰り返された。この原因追及のための温度・湿度の測定を行い、除湿方法の指導を行っている。

- (11) 法界寺壁画修復の指導 (川野邊渉)

重要文化財法界寺(京都府京都市)金堂壁画の最終の組み立てと将来における再修理時の対策について指導した。

- (12) 法界寺柱修復方法の調査 (川野邊渉、早川典子)

重要文化財法界寺(京都府京都市)金堂柱絵を赤外線によって残存状況を調査し、そのクリーニングと強化を行うための方法・材料に関する検討を行った。

- (13) 首里城正殿の塗装障害調査 (川野邊渉、加藤寛、早川典子)

首里城正殿(沖縄県那覇市)の建物内外の塗装に障害が発生していることから、その原因の調査を行い、対策について助言した。

- (14) 建築原図の保存 (川野邊渉)

東京大学所蔵の丹下健三建築原図の保存対策について助言した。

(15) 在外日本古美術修復に関する指導（加藤寛）

平成9年度より継続して行っているクリーブランド美術館所蔵の「大般若経厨子」修復事業で、当該館の学芸員および保存担当者を招き、解体状況や組立後の修理について説明および指導を行った。

(16) 尚家資料における保存修復の指導（加藤寛）

尚家の保管する資料には、琉球独自の文化によって作られた漆工品が含まれる。これらは従来の、日本製の工芸品とは違った修理方法が必要であり、新たな保存修復に関しての助言と指導を行った。

(17) トヨタコレクションに関する助言指導（川野邊渉、早川典子、加藤寛）

約1500件におよぶトヨタコレクションは、近世から近代にかけての天文・測量・写真・からくりなどの資料を含んでいる。それらの資料は、従来の文化財には見られないガラス、真鍮、鶏卵紙などの近代的な素材で作られている。これらの保存修復について助言指導を行った。

(18) 長崎螺鈿の修復に関する指導（加藤寛）

近世の輸出工芸品である長崎螺鈿は、国内の漆工品とは異なる手法で作られている。長崎県の美術館・博物館において漆作品の保存修復について指導助言を行った。

(19) マゼランチェストに関する指導（増田勝彦、加藤寛）

イギリス、ビクトリア・アルバーツ美術館の保管するマゼランチェストは近世輸出工芸品を代表する漆塗りの家具で、現在、作品の亀裂や装飾の損傷が指摘されています。修復技術部では当該館の保存部長、保管担当者を日本に招へいし修復の計画立案や日本の修復技術などの指導を行った。

(20) アルゼンチン国立装飾博物館・東洋美術館保管の漆芸品修復に関する指導（加藤寛）

ブエノスアイレス市にある2つの施設に保管されている300点余りの漆芸品について、現地で調査を行い、保管と修復のための技術的指導を行った。

(21) リヨン博物館「鶴の間」の保存修復に関する指導（加藤寛）

フランス、ローヌ県にあるリヨン博物館の展示物について、保存修復の指導を行い、今後の作業計画を立案した。

(22) 小野田セメント徳利窯の保存に関する現地指導（川野邊渉・朽津信明）

(23) 重要文化財・旧岩崎邸の修復に関する材料分析（川野邊渉・朽津信明）

(24) 史跡・フゴッペ洞窟の保存に関する調査（三浦定俊・朽津信明）

(25) 国宝・白杵磨崖仏の保存に関する調査（川野邊渉・朽津信明・早川典子）

(26) 特別史跡・西都原古墳群の保存に関する現地指導（青木繁夫・朽津信明）

3. 研修

(1) 「漆の保存修復」国際研修

趣 旨

近年、海外の美術館・博物館の所蔵している日本工芸品の保存と修復に関する問い合わせが増加している。これらの問い合わせについての対応として、平成11年度に、漆芸品をテーマにした国際研修会「漆の保存と修復」を開催することにした。研修会の内容は、漆芸品に関する基礎知識の学習と作品の取り扱いを含む実習を行った。この研修会で学んだ知識および実習が、海外での漆芸品保存に活用できることを目的としている。

成 果

英文テキスト：「International Course on Conservation for Urushi」を作成し、受講生および関係各機関に配布した。

会 場 東京国立文化財研究所別館会議室

期 間 1999（平成11）年8月16日（月）～28日（土）

（招へい期間）8月15日（日）～29日（日）

参加者数 受講者7名、ICRROMメンバー2名、招へい外国人1名、講師等専門家9名

日 程

	講 義	実 習
8月16日（月）	開講式	木地固め、置目、薄貝貼り (実習担当：加藤 寛、レイモンド・リーベンプルグ)
17日（火）	歴史から見る日本の漆芸について (関西大学教授 高橋隆博)	絵梨地、薄貝貼り、漆掻き (漆掻き 谷口 吏)
18日（水）	漆芸品の修復について (目白漆芸研究所 室瀬和美)	布目擦り、塗り込み
19日（木）	漆芸品の修復について (奈良国立博物館 北村昭齋)	地付け、置目、研ぎ出し
20日（金）	中国漆器の塗膜分析について (ICRROM Mr.Rocco Mazzeo)	切粉付け、平蒔絵、胴擦り
21日（土）	希望者のみ日光見学	
22日（日）	休日	
23日（月）	有機化学から見る漆材料 (修復技術部 川野邊渉)	錆付け、粉固め、摺り漆、漆掻き (漆掻き 谷口 吏)
24日（火）	漆芸品の梱包について (日本通運メンバー)	錆研ぎ、下塗り、磨き
25日（水）	漆の産地同定について (明治大学教授 宮腰哲雄)	下塗り研ぎ、中塗り
26日（木）	参加者によるプレゼンテーション	中塗り研ぎ、上塗り
27日（金）	エクスカージョン 東京→中尊寺→会津若松市 (加藤 寛、レイモンド・リーベンプルグ 随伴)	
28日（土）	会津若松市での漆器製作見学 小椋製作所、大塚工房、鈴孫製作所、義同塗り工房、山本蒔絵工房 会津若松市→東京	

参加者リストおよびプレゼンテーションにおける発表内容

- 1) ドルジ、チョンキョ、ツエリン Mr.DORJI Chenkyo Tshering
パロ国立プータン博物館総合課長「パロ・ナショナルミュージアムの施設および活動内容について」
- 2) アリク、カルマー Mr.ALLIK Kalmer
エストニア国立カスト保存センター家具保存担当官「カスト・コレクションにおける家具修復について」
- 3) ハット、ジュリア Ms.HUTT Julia
ヴィクトリア・アルバーツ美術館学芸員「マリア・ファンデイーメンの箱とマゼラン櫃の蒔絵について」
- 4) ステイブ、チャールズ、フレドリック Mr.STABLE Charles Frederic
国立スコットランド博物館保存担当官「国立スコットランド博物館の日本美術品展示について」
- 5) レンツ、バラツ Mr.LENCZ Balazs
国立ハンガリー博物館美術品修復担当官「国立ハンガリー博物館日本美術コレクションの修復について」
- 6) カリヤ、ヒロコ Ms.KARIYA Hiroko
ブルックリン博物館保存部 立体物保存担当員「ブルックリン博物館における日本美術品の保存について」
- 7) アブリュー、ペドロ Mr.ABREU Pedro ポルトガル国立保存研究所家具保存部長「南蛮美術の保存と修復」

(2) 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修

近年博物館・美術館の数が増加すると共にその施設が近代化し、燻蒸室、保存・修理などの保存に関する設備が整備されて保存部門を担当する職員が配置されつつある。しかし、これらの職員が保存科学の知識や技術を修得しようとしても適当な学習の場がないのが現状である。そのために博物館、美術館などの学芸員の保存担当者を対象に、文化財の科学的保存に関する基本的な知識及び技術について研修を行い、その資質の向上を持って文化財の保護に資することを目的とし、第16回研修会を開催した。

期 間 1999 (平成11) 年7月12日 (月) ~23日 (金)

参加者数 24名

プログラム

7月12日 (月)

開講式・オリエンテーション

保存環境 総論	—文化財の保存と環境—	三 浦 定 俊
保存環境 各論	—温湿度—	石 崎 武 志
保存環境 <実習>	—温湿度機器の取り扱い—	石 崎 武 志

7月13日 (火)

修復技術 総論	—文化財の修復技術—	増 田 勝 彦
保存環境 各論	—展示・梱包ケースの温湿度調節—	東京国立博物館 神 庭 信 幸
保存環境 <実習>	—湿度の制御法—	石 崎 武 志

7月14日 (水)

保存環境 各論	—害虫の生態と被害—	山 野 勝 次
保存環境 各論	—光と劣化—	石 崎 武 志
保存環境 各論	—照度基準—	神 庭 信 幸
保存環境 各論	—これからの生物被害防除法—	木 川 り か

7月15日 (木)

保存環境 各論	—大気汚染とその影響—	平 尾 良 光
保存環境 各論	—室内汚染—	三 浦 定 俊
劣化と保存 各論	—紙—	増 田 勝 彦
調査手法 各論	—画像解析—	三 浦 定 俊
保存環境 各論	—防災—	三 浦 定 俊

7月16日(金)

劣化と保存 各論—油画—

東京芸術大学 歌 田 眞 介

劣化と保存 各論—ガラス—

朽 津 信 明

修復材料 各論 —伝統材料—

増 田 勝 彦

修復材料 各論 —合成樹脂—

川 野 邊 涉

劣化と保存 各論—建造物—

斎 藤 英 俊

7月19日(月)

劣化と保存 各論—木—

西 浦 忠 輝

劣化と保存 各論—石—

西 浦 忠 輝

劣化と保存 各論—漆工品—

加 藤 寛 夫

劣化と保存 各論—考古資料—

青 木 繁 夫

7月21日(水)

調査手法 各論 —化学分析—

平 尾 良 光

劣化と保存 各論—金属—

早 川 泰 弘

保存環境〈実習〉—環境調査—

石 崎 武 志・早 川 泰 弘

7月22日(木)

ケーススタディー—博物館・美術館における収蔵・展示の問題点とその対策—

三 浦 定 俊・石 崎 武 志

7月23日(金)

研修のまとめ —各館での現状発表—

三 浦 定 俊・石 崎 武 志

閉講式

研修参加者名及び所属

- 相 原 一 士 (財)山寺芭蕉記念館
- 池 田 大 助 国立歴史民俗博物館
- 稲 垣 肇 MIHO MUSEUM
- 上 原 ゆかり (財)首里城公園管理センター
- 内 田 雅 之 熱田神宮宝物館
- 大八木 久 子 長崎県立美術館
- 加 藤 かな子 埼玉県立文書館
- 蒲 原 宏 行 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館
- 北 上 あつ子 新潟市美術館
- 北 村 享 一 富士見町高原のミュージアム
- 木 邨 かおり 佐倉市立美術館
- 境 正 雄 出光美術館(大阪)
- 地 主 智 彦 京都府教育庁指導部文化財保護課
- 新 原 正 典 九州歴史資料館
- 杉 浦 美 紀 アサヒビール大山崎山荘美術館
- 鈴 木 あゆみ 下妻市ふるさと博物館
- 鈴 木 勝 雄 東京国立近代美術館
- 高 野 早代子 山梨県立美術館
- 長 島 裕 子 (財)長島美術館
- 星 野 利 幸 三重県立博物館
- 細 萱 禮 子 松本市教育委員会史料館
- 堀 井 靖 枝 滋賀大学経済学部附属史料館
- 宮 里 正 子 那覇市経済文化部歴史資料室

(3) 資料保存地域研修

博物館・美術館などの文化財公開施設における資料の保存は、保存を担当する学芸員の努力によっていることはもちろんであるが、学芸員以外の館長、事務官や警備員、監視員、空調機器の管理・保守作業員など、博物館の様々な業務にたずさわる多くの人々の理解がなければ、円滑に進まない。特に2005年の臭化メチルの全廃へ向け、IPM（総合的害虫管理）を実施するためには、できるだけ多くの館関係者に文化財の保存に関する基礎的な知識を理解してもらう必要がある。本研修は文化財保護に関する基礎的な知識を、文化財公開施設に勤務するできるだけ多くの職員に短い日数で学んでもらうため、各地の博物館協議会などの協力を得て1998年度より開催するものである。

名称 第2回資料保存地域研修
期間 1999（平成11）年10月15日（金）
会場 北海道開拓記念館 講堂
協力機関 北海道開拓の村、北海道開拓記念館
参加者数 47名

プログラム

10：00～11：00	保存環境調査の概要	三浦定俊
11：00～12：00	温湿度の制御と管理	石崎武志
13：30～14：30	照明の制御と管理	石崎武志
14：30～15：30	空気汚染物質の制御と管理	三浦定俊
15：45～16：45	これからの生物被害防除法	三浦定俊
16：45～17：30	質疑応答	

(4) 海外学術調査員および研究者のための保存修復講座（3回目）

日本人研究者による海外学術調査が多くなっている。それらの調査現場では保存の知識が必要不可欠である。欧米の調査隊では、保存の専門家が同行することが常識になっているが、日本の調査隊にはそのような専門家が同行する事が困難である。調査現場では、保存に関わる問題が多くあるが、前述したような事情から調査に参加している保存知識のない調査員によってこれらの問題が解決されなければならない。しかし、専門家でないために返って問題を大きくしてしまうことがよくある。このような状況を改善することを目的に、学術調査に参加している調査員、研究者に対して、現場調査直後に必要な保存修復に関係する事柄について基礎的な知識が得られるための講習会を行っている。

期間 1999（平成11）年5月11日（月）～2000（平成12）年2月14日（月）
場所 別館会議室
担当 青木繁夫（修復技術部）
参加者数 7名

講義内容

第一期 保存修復とは？
保存計画
資料の調査方法
資料の保存方法と保存環境整備
遺跡における応急的保存処理

第二期 金属製品の保存処理
土製品の保存処理
石製品の保存処理

木製品の保存処理
染織品・皮革・そのほかの保存処理

第三期 遺跡の保存整備

参加者および所属

家原 弥生 早稲田大学大学院博士課程
江添 誠 京華高等学校
川島 彩 早稲田大学大学院修士課程
白井 則行 早稲田大学會津八一記念博物館
竹田 多麻子 東海大学研修員
西坂 朗子 早稲田大学修士課程
林屋 華子 上智大学大学院修士課程

(5) 博物館学実習

博物館・美術館の学芸員資格を取るためには、博物館施設での実習が必須とされている。毎年、美術部と情報資料部は、近代美術を主な内容とする博物館学実習を行っている。

日時 1999 (平成11) 9月6日 (月) ~ 9月11日 (土)

会場 東京国立文化財研究所

参加者数 7名

プログラム〈日本近代美術資料を中心とした実習〉

第1日 9月6日 (月)

午前 オリエンテーション

美術館の情報

展示について

午後 東京国立文化財研究所の日本近代美術資料

黒田記念室見学

近・現代美術資料の収集・作成の意義と現状

美術部第二研究室

美術部第二研究室長 田中 淳

美術部第二研究室 塩谷 純

美術部主任研究官 山梨 絵美子

美術部第二研究室

美術部第二研究室

第2日 9月7日 (火)

午前 近・現代美術資料の収集・作成実習

午後 文化財の保存について

近・現代美術資料の収集・作成実習

美術部第二研究室

保存科学部長 三浦 定俊

美術部第二研究室

第3日 9月8日 (水)

全日 近・現代美術資料の収集・作成実習

美術部第二研究室

第4日 9月9日 (木)

午前 近・現代美術資料の収集・作成実習

午後 近・現代美術資料の収集・作成実習

美術品の調査について

美術部第二研究室

美術部第二研究室

美術部第一研究室

第5日 9月10日 (金)

午前 美術文献と情報処理

美術史研究と画像処理

午後 文化財の修復について

美術関係情報処理の実習

実習のまとめ

情報資料部文献資料研究室長 鈴木 廣之

情報資料部写真資料研究室長 島尾 新

修復技術部長 増田 勝彦

情報資料部

美術部第二研究室

第6日 9月11日 (土)

全日 展覧会見学とまとめ

4. 文化財修復協力

(1) 在外日本古美術品修復協力事業

海外の博物館・美術館が所蔵する評価の高い作品の修理に協力し、併せて対象作品を所蔵している博物館等と協力して、保存修復に関連する研究を行う事業である。1991(平成3)年度から絵画を対象に事業を進めてきたが、1997(平成9)年度から工芸品など欧米の修復技術では修理が困難な分野にも協力対象を拡げた。

この事業により修復した作品の公開によってわが国の修復技術に対する理解が深まり、修復技術の交流が促進されている。本事業の立案のために、毎年欧米に出張し、作品調査のほかに修復技術の内容について所蔵博物館と討議し、併せて輸送の手続きについても協議を行っている。当研究所は修理内容の検討、修理作品の写真記録の作成および整理・保存、国内外の輸送手続きに責任をもって当たっている。

この修復協力事業によって修理された作品の公開が増すことは当然であるが、修復協力事業が契機となって所蔵の日本古美術品に対する関心が新たに高まりつつあり、欧米諸国では日本古美術品を所蔵する博物館の間で協力関係を結ぶネットワークが構築されつつある。さらに、文化財保存の専門家の交流も促進され、わが国の文化財修復技術の普及と理解に対し、大きな役割を果たしている。

修復候補作品の調査、絵画

調査国	調査地	件数
アメリカ	日本美術クラークセンター	絵画 17点
	ミシガン大学付属図書館	絵画 3点
イタリア	ベニス東洋美術館	絵画 12点
	ローマ東洋美術館	絵画 6点
ポルトガル	ソアレス・ドス・レイス国立博物館	絵画 1点
	国立古美術館	絵画 5点

修復候補作品の調査、工芸

調査国	調査地	件数
オランダ	フローニンゲン美術館	工芸 11件
	アムステルダム国立博物館	工芸 8件
	ロッテルダム海洋博物館	工芸 3件
ドイツ	ハンブルグ工芸美術館	工芸 9件

協力機関 外務省現地公館、国際交流基金、文化庁、芸術研究振興財団

5. 講座など

(1) 公開学術講座

美術部と情報資料部、そして芸能部はそれぞれ美術史研究と芸能研究の成果を一般に公開することを目的に、毎年1回公開学術講座を開いている。美術部・情報資料部の公開学術講座ではスライドを、また芸能部の場合では演者の実技を通じて、専門性の高い学術研究の内容をわかりやすく解説している。1966年(昭和41)年度に始まった美術部・情報資料部の公開講座は本年度で第33回を数え、また1967(昭和42)年度に始まった芸能部の場合は本年度で第30回を数える。

第33回 美術部・情報資料部公開学術講座

日 時 1999(平成11)年10月22日(金)

会 場 東京都美術館講堂

入場者数 127名

発表者・発表要旨

1) 塩谷 純(美術部第二研究室研究員) “写意”と“理想”と“こゝろもち”—明治中期の日本画と言説—
明治20年代末、日本の美術界は転機を迎えていた。洋画では黒田清輝率いる白馬会、日本画では岡倉天心・橋本雅邦を中心とした日本絵画協会の画家が新派として台頭し、また美術ジャーナリズムの確立するこの時期には、画家の活動が批評家の言説(もしくは画家自身)と密接にからみ合いながらセンセーショナルに増幅されていく。本発表では、そうした明治中期の美術にまつわる言説の中から“写意”“理想”“こゝろもち”をキーワードに、当時の、とくに日本画をめぐる状況を解きほぐす試みを行った。

2) 島尾 新(情報資料部写真資料研究室長) 室町時代の画と詩 —雪舟「破墨山水図」について—
室町時代の絵画には、画の上に詩の書かれたものが多い。題画詩というと画を観た時の感興を詠んだものと思われがちだが、この時代の画と詩は禅僧の社会の中でより多様な機能を持っていた。「破墨山水図」に記された、雪舟自身の言葉と京都の禅僧たちの詩からは、この作品が複数の機能を同時に果たす、いわば多目的の絵画だったことが読みとれる。本講座では、この雪舟画を入り口として、室町時代の画と詩の織りなす様相を概観した。



第30回 芸能部公開学術講座

日 時 1999 (平成11) 年11月16日 (火)

場 所 矢来能楽堂 (神楽坂)

入場者数 275名

発表者・発表要旨

1) 児玉 竜一 (芸能部調査員) 日本舞踊・歌舞伎の能摂取

日本舞踊の母胎となった歌舞伎による能摂取の様態は、概ね三つの段階にわけて考えることができる。

ひとつは、劇術および様式の完成途上にあった新興芸能歌舞伎が、先行する芸能である能に学び、摂取していった元禄歌舞伎以前の段階である。ついで、歌舞伎様式が完成と爛熟を迎える18世紀中盤から19世紀前半の時期が、歌舞伎がもっとも独自に能を消化した期間と思われる。物語の枠組みを借り受けながら換骨奪胎し、近世化した典型は、「京鹿子娘道成寺」などに明らかである。さらに、天保11年(1840)に初演された「勧進帳」以降の、松羽目物を中心とする時代を迎える。意識的に能そのままであることを売り物とし、その権威にも追随しようとした時期である。明治になってからその傾向はより顕著となり、瓦解に伴う大変動によって、能趣味はハイカラな上昇志向の象徴として歌舞伎の中に新たに流入することとなる。

以上のような概観の上で、歌舞伎と能の関係については松羽目物が多く論じられるが、むしろ巧みな換骨奪胎に際して駆使される脚色法に、両者の本質的な相違が見られる点について触れた。

2) 羽田 昶 (芸能部音楽舞踊研究室長) 能と歌舞伎舞踊の囃子

「囃子」とは、能では、笛・小鼓・大鼓・太鼓であり、この四つの楽器編成とその演奏内容とをさす。笛の炸裂するような、あるいはソフトで抒情的な質感、小鼓の柔らかい音色と大鼓の衝撃的な音色との対比、その両者の織りなすリズム、太鼓の規則的なリズムによる安定感と躍動感が、能の囃子の特徴であり、間(ま)と気魂中心の音楽である。これに対し歌舞伎で「囃子」といえば、広義に「唄・三味線・鳴物」を包括する慣わしだったが、最近では「歌舞伎音楽」を「唄・三味線・囃子」と分け、その「囃子」は狭義に「鳴物」を意味する。結果的には能の「囃子」と歌舞伎の「囃子」同義になっている。しかし、歌舞伎で広義に三味線を含めて「囃子」と呼び慣わしてきたことには、それなりの根拠がある。歌舞伎囃子における大鼓・小鼓の技法の基礎には、能楽手法に加えて歌舞伎固有手法であるチカラ拍子があり、それは三味線のリズムとテンポを基本として編み出された軽快な手法だからである。能の囃子が余白を重んじた、森厳な墨絵の趣であるとするれば、歌舞伎の囃子は華麗な色彩を施した錦絵の趣である。

以上のことを踏まえて、囃子の役割と効果、能の囃子事「来序」「早笛」「大ペン」「序ノ舞」などの歌舞伎的用法、「下座」の意味などに触れた。

実 演

〈能と日本舞踊に見る狂乱物〉

日本舞踊と能の演目の中から、主題等に共通性を持つ作品を交互に部分上演して、技法の比較を行った。

能「隅田川」と日本舞踊「賤機帯」には、ともに梅若伝説に取材した母の物狂いという共通性がある。男物の狂乱という共通性をもつ能「芦刈」と日本舞踊「一人椀久」では、「一人椀久」に取り入れられた狂女物の能「桜川」における網の段を併せて上演した。それぞれの上演に先だって、羽田・児玉が曲目と技法に関する解説を行った。

能「隅田川」「桜川」「芦刈」より

観世喜之

(地謡) 観世喜正・古川充・佐久間二郎

(囃子) 松田弘之・幸正昭・安福光雄

舞踊「賤機帯」「一人椀久」より

藤間蘭黄

(「賤機帯」舟長・「椀久」後見) 藤間藤三郎

(唄) 芳村伊知蔵

(三味線) 稀音家助三朗

(囃子) 梅屋福太郎・梅屋雅一・福原清彦



(2) 夏期学術講座

第24回 夏期学術講座

伝統芸能研究の発展と文化財保護に役立てるため、当研究所芸能部の研究員が大学院生を対象に、その分野に関する無形文化財の調査研究の成果を講義する。下記のように1日3コマの講義を4日間にわたって行った。

主 題 「狂言の技法」

期 間 1999 (平成11) 年7月5日 (月) ~ 8日 (木)

10:30~12:00 13:15~14:45 15:00~16:30

場 所 別館会議室

参加大学 東京芸術大学、法政大学、日本大学、明治大学、早稲田大学の各大学院生

参加者数 15名

プログラム

7月5日 (月)

序説 羽 田 昶

狂言の劇構造 羽 田 昶

狂言の音楽演出 高 桑 いづみ

7月6日 (火)

「末広がり」の演出 (I) 羽 田 昶

「末広がり」の演出 (II) 高 桑 いづみ

狂言の面・装束 羽 田 昶

7月7日 (水)

「花子」の演出 (I) 羽 田 昶

「花子」の演出 (II) 高 桑 いづみ

「身替座禅」—狂言と歌舞伎— 羽 田 昶

7月8日 (木)

「朝比奈」の演出 (I) 羽 田 昶

「朝比奈」の演出 (II) 高 桑 いづみ

質疑応答

6. 大学院教育

東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻システム保存学教室

1995年（平成7年）4月より東京芸術大学大学院と連携して大学院教育に従事し、これからの文化財保存を担う人材を育成している。システム保存学は、文化財の保存環境を研究する保存環境学講座と保存修復に用いる材料について研究する修復材料学講座に分かれている。各講座3名ずつ、所員が併任教官として指導に当たっている。

受入学生の定員は修士・博士課程ともに各学年2名である。1999年（平成11年度）は修士課程に4名、博士課程に1名が在籍している。

(1) 併任教官及び担当授業

保存環境学講座

併任教授	三浦 定俊（保存科学部長）	保存環境計画論（前期）
併任教授	石崎 武志（保存科学部物理研究室長）	保存環境学特論Ⅰ（後期）
併任助教授	佐野 千絵（保存科学部主任研究官）	保存環境学特論Ⅱ（前期）

修復材料学講座

併任教授	増田 勝彦（修復技術部長）	修復材料学特論Ⅰ（前期）
併任教授	青木 繁夫（修復技術部第三修復技術研究室長）	修復計画論（後期）
併任助教授	川野邊 渉（修復技術部第二修復技術研究室長）	修復材料学特論Ⅱ（後期）
客員教授	渡邊 明義	
助手	五味 聖（平成10年11月～平成11年8月）	
	谷口 陽子（平成11年9月～）	

(2) 文化財保存学演習

第1回 2000（平成12）年1月11日（火）

「美術館環境調査に関わる温湿度測定について」（実習） 佐野千絵 併任助教授

- 1) 温湿度測定に使用される機器説明と較正
- 2) 芸大美術館館内環境のデータの処理

第2回 2000（平成12）年1月18日（火）

「天然接着材料と新しい接着材料」（実習） 川野邊渉 併任助教授

- 1) 伝統的天然接着材料を作る
- 2) 新しい接着材料としての合成樹脂について

7. 出 版

当研究所は、毎年、学術雑誌・年鑑・国際研究集会プロシーディングス・研究会報告書・東文研ニュースなど、多種多様な出版物を発行している。これらに掲載された研究論文や発表などは文化財の分野において最新の情報を伝えるものである。

(1) 定期刊行物

1) 美術研究

日本・東洋の古美術ならびに日本の近代・現代美術とこれらに関連する西洋美術について、研究論文・解説・資料等を掲載している。

『美術研究』第373号

初唐期の転法輪印阿弥陀図像についての研究

岡田 健

研究資料 見心来復編『澹游集』編目一覧 附、見心来復略年譜

井手 誠之輔

2) 芸能の科学

古典芸能や民俗芸能に関する研究論文・調査報告・資料翻刻等を掲載している。

『芸能の科学』第28号

「恋の祖父」の古演出―「囃子物」の古態とその周辺―

高 桑 いづみ

三信遠地域の〈おこない〉に伝承した翁猿楽の特色

中 村 茂 子

〔資料紹介〕『代伝抄』

羽 田 昶

〔聞き書き〕上方歌舞伎の変遷―中川芳三氏に聞く―

高 桑 いづみ

清元富士太夫氏寄贈 音盤目録

鎌 倉 恵 子

芸 能 部

3) 保存科学

所属研究員による文化財の保存と修復に関する科学的調査、研究、受託研究報告等の論文報告及び修復技処置概報等を掲載している。

『保存科学』第39号

ポータブル蛍光X線分析装置による国宝源氏物語絵巻の顔料分析

早川 泰 弘、平 尾 良 光、三 浦 定 俊、四 辻 秀 紀、徳 川 義 崇

三の丸尚蔵館所蔵 網干図屏風の顔料同定

早川 泰 弘、三 浦 定 俊

九州装飾古墳の緑と「青」について―福岡県下の例―

朽 津 信 明、川 野 邊 渉

大分県下の石仏の彩色について

朽 津 信 明、山 田 拓 伸

タイ国スコータイ遺跡の大仏中の水分移動解析

石 崎 武 志、西 浦 忠 輝、ユッカ・シムネック、マルチネス・ヴァンゲニヒテン

外装用塗塗装技法の耐候性向上に関する試み(Ⅰ)

井 口 智 子、川 野 邊 渉、加 藤 寛、板 垣 義 郎、館 川 修

第五福竜丸エンジンの保存処置について 川 野 邊 渉、宮 尾 健 吾、田 島 弘 之、西 口 裕 泰

鼓胴をめぐる2、3の問題―能楽鼓胴の成立について―

加 藤 寛

輸出漆器の修理材料の分析(Ⅱ)

早 川 典 子、朽 津 信 明

展示公開施設の館内環境調査報告―平成10年度―

石 崎 武 志、佐 野 千 絵、三 浦 定 俊

平成11年度修復処置概報

修復技術部

4) 日本美術年鑑

日本美術年鑑は各年の美術活動と美術研究・批評の状況を記録する刊行物である。美術部では、当研究所の前身である帝国美術院附属美術研究所が昭和11年から始めた「日本美術年鑑」の編集を引継ぎ、刊行を継続してきた。平成11年度版の内容は以下のとおりである。

平成10年美術界年史

平成10年主要美術

展覧会

美術文献目録（定期刊行物所載文献、現代美術・西洋美術・東洋古美術、平成10年）

物故者（平成10年）

(2) シンポジウム等の報告書

1) 国際研究集会プロシーディングス

本書は毎年行われる「文化財保存および修復に関する国際研究集会」の基調講演や発表をまとめた報告書である。

《Conservation of Industrial Collections》

1998年（平成10年）11月に行われた第22回「文化財保存および修復に関する国際研究集会—近代の文化遺産の保存と活用—」の発表内容をまとめた報告書で、以下の基調講演および研究発表が収録されている。

目次

- ・ Preface Akiyoshi Watanabe
- ・ Address by the Director-General of the Tokyo National Research Institute of Cultural Properties Akiyoshi Watanabe
- ・ Address by the Commissioner-General of the Agency for Cultural Affairs Hideki Hayashida
- ・ Conservation of the Modern Scientific and Industrial Heritage: Present Condition and Future Tasks Hideki Otsuka
- ・ Protection of the Heritage of Modernization (Construction and Other Related Objects and Sites): Present Condition and Issues Nobuo Kamei
- ・ Protection of Industrial Construction in Japan Shin'ichi Shimizu
From the Scrapyard to the Showcase Martin Kaufmann
- ・ The Conservation and Care of Scientific and Industrial Collections Hazel Newey
- ・ On the Art of Conserving a Factory Kornelius Głaz
- ・ Survey of the Condition of Deterioration of a Brick Construction Wataru Kawanobe, Nobuaki Kuchitsu
- ・ On the Museum of Industrial Technology of Nippon Institute of Technology Akira Suzuki
- ・ Present Condition of the Conservation and Restoration of Aircraft Shintaro Yokoyama
- ・ Preserving the Maritime Heritage John Kearon
- ・ Old Railway Objects and Museums. A Philosophy of Restoration and Display. Experiences from the Berlin Museums of Transportation and Technology Alfred Gottwaldt
- ・ Transportation Museum and Conservation of the Railway Heritage Michio Sato
- ・ Industrial Heritage in Japan and Current Problems in its Conservation Hoshimi Uchida
- ・ Overall Discussion

2) 在外日本古美術品修復協力事業 (工芸品)

Project for Conservation of Work of Japanese Art in Foreign Collection

平成9年度から、在外日本古美術修復協力事業に加わった漆芸品や武器武具など日本独自の工芸品の修復報告書。

目次

カラー図版解説	加藤 寛	pp.14-18
鶯紋蒔絵螺鈿盆の修復について	田口 義明・五味 聖	pp.19-35
膠と漆による輸出漆器の修復	加藤 寛	pp.36-42
桜蒔絵器局の修復について	奥窪 聖美	pp.43-58
蒔絵平文鞍	山下 好彦	pp.59-76
山水楼閣蒔絵花瓶	山下 好彦	pp.77-92
野郎形兜	加藤 寛	pp.93-102
図および用語集 加藤 寛、山下 好彦、五味 聖、レイモンド・リーベンブルグ		pp.103-128

B 5 版、128頁、カラー図版8頁、モノクロ図版26頁
編集制作 至文堂

3) International Course on Conservation of Urushi 1999

平成11年度、海外の美術館・博物館から多く寄せられていた工芸品の保存と修復に関する問い合わせに対し、当研究所では海外での保存修復の一助になるように、国際研修「漆の保存と修復」を開催した。このテキストは、研修会に先立ち、素材としての漆、漆の歴史、工芸品の修復事例や取り扱い方について英文にまとめたものである。

Organizers	Masumi Yamamura	pp.1-2
Schedule for the International Course	Masumi Yamamura	pp.3-12
Glossary of Urushi Terms	Michiko Matubara	pp.13-23
Explanation of the urushi process	Raymond Leewenburg	pp.24-37
Historical View of Japanese Urushi	Takahiro Takahashi	pp.38-43
Collecting of Urushi	Tutomu Taniguchi	pp.48-50
An Example of Conservation Work	Kazumi Murose	pp.51-58
Similarity between Silver Heidatsu Syosoin and Linden Museum Treasures	Syousai Kitamura	pp.59-64
Nondestructive Testing and Micro-analysis for the Diagnostics Conservation of the Cultural and Environmental Heritage	Rocco Mazzeo	pp.65-94
Packing Urushi art objects	Hiroshi Matsuki	pp.95-99
The Analysis of Urushi by Pyrolysis-Gas Chromatography and Mass Spectrometry	Tetsuo Miyakoshi	pp.100-129
High Polymer World of Urushi	Wataru Kawanobe	pp.130-134
The Conservation of the Sinobukusa Raden Makie San-e Bako	Yoshihiko Yamashita	pp.135-149
Looking for Japanese Lacquerware	Hiroshi Kato	pp.150-153
Abroad The Restriction of Urushiware for Export with Animal Glue and Urushi	Hiroshi Kato	pp.154-161
On the Restoration of the Vases with Design of a Landscape and Pavilions at the Staatliche Kunstsammlungen Dresden	Yoshihiko Yamashita	pp.162-175
Restoration Report	Yoshiaki Taguchi, Hikaru Gomi	pp.176-193

A 4 版、193頁、モノクロ印刷、100部印刷

4) 『産業遺産』未来につなぐ人類の技

目次

はじめに	渡辺明義
産業遺産の保存はなぜ必要か	鈴木一義
日本の産業遺産と保存の問題点	内田星美
日本の近代遺跡の保護	磯村幸男
産業遺産フォトギャラリー（自動車、鉄道、船、航空機、産業施設、建造物、産業機械）	
近代化遺産の保護と現状	亀井伸雄
明治村に見る建造物遺産の保存と活用	西尾雅敏
煉瓦建造物の劣化状況調査	川野邊 渉・朽津信明
産業建造物をどう保護していくか	清水真一
廃品捨て場から博物館へ	マーチン・カウフマン
日本の科学、産業遺産の保存	大塚英明
産業遺産としての自動車の保存と活用	山田耕二
日本の船の保存—「宗谷」の航跡を辿りながら	小堀信幸
航空機の保存と修復、復元	横山晋太郎
文化遺産としての航空機—アメリカの保存活動から見えてくるもの	長島宏行
科学、産業関連コレクションの保存と維持管理	ヘーゼル・ニューイ
ドイツ・ミュラー織物工場の保存	コーネリウス・ゲッツ
ドイツの産業遺産と博物館	アルフレッド・ゴットヴァルト
ヨーロッパの産業博物館	川野邊 渉・井口智子
交通博物館と鉄道文化財の保存	佐藤美智男
イギリスに見る海事遺産の保存	ジョン・キーロン
工業技術博物館と工学教育	鈴木 昭

5) 国際文化財保存修復研究会報告書

国際文化財保存修復研究会で行われた、日本の専門家が海外で行った文化財保存修復国際協力事業に関する事例報告、質疑応答、および総合討議の内容をまとめたものである。平成11年度は第5回、第6回研究会についてそれぞれ作成された。

第5回国際文化財保存修復研究会報告書（1999年10月発行）

プログラム

メキシコ考古学と遺跡の修復・保存—テオテナンゴ遺跡の事例を中心として—	大井邦明（京都外国語大学）…1
カミナルフユ遺跡とチャルチュアバ遺跡の保存修復の経緯、現状、問題点	大井邦明（京都外国語大学）…9
ホンジュラス、エル・プエンテ遺跡及びラス・ピラス遺跡における保存修復の経緯、現状、問題点	中村誠一（ホンジュラス国立人類学歴史学研究所・ラス・ピラス遺跡調査団）…29
イースター島モアイ石像の再建	沢田正昭（奈良国立文化財研究所）…47
総合討議	…59
第5回アジア文化財保存修復研究会アンケート集計結果報告	…75
第5回国際文化財保存修復研究会 出席者名簿	…81

第6回国際文化財保存修復研究会報告書（2000年3月発行）

プログラム

ヴィエトナム・フエ遺跡群の復元的研究とその保存

中 川 武（早稲田大学）…1

ベトナム・フエの保存修復の経緯、現状、問題点—ベトナム・フエにおける明命帝陵修復支援事業について—

重 枝 豊（日本大学）…13

ベトナム・フエの保存修復事業に関する討議……………33

タイ国石（レンガ）造遺跡の保存修復—日・タイ国際共同研究の経緯、現状、問題点—

西 浦 忠 輝（東京国立文化財研究所）…39

総合討議……………55

参加者名簿……………65

6) 民俗芸能協議会報告書

平成10年度に始められた芸能部主催の民俗芸能協議会の成果の報告書で、民俗芸能研究協議会に関係した民俗芸能保護団体、各地の教育委員会、専門研究者等に配布している。

平成11年度には、1999年3月10日・11日に開催した、「第1回民俗芸能協議会—復活と継承—」の報告書（A4版100ページ）を刊行配布した。

8. 公開・出品

(1) 公開

1) 黒田記念室

黒田記念室は当研究所の創立者帝国美術院長子爵故黒田清輝の功績を記念するために設けられた陳列室であり、黒田清輝の油絵・素描・写生帖等を収蔵公開している。

創立当時、主として黒田家から寄贈されたものは、油絵125点、素描170点、写生帖等であるが、その後黒田照子夫人、樺山愛輔、田中良氏等からの寄贈が加わった。収蔵品の主なものは、「湖畔」「智・感・情」「花野」「赤髪の少女」「もるる日影」「温室花壇」などである。なお、平成11年度には「湖畔」が国の重要文化財に指定された。

一般公開（無料） 毎週木曜日 午後1時～4時

特別公開 1999（平成11）年11月1日（月）～11月7日（日）（上野の山文化ゾーンフェスティバル）

年間入場者数 3,848名（平成11年度）

2) 資料閲覧室

当研究所所蔵資料のなかで、各種図書資料・写真資料を中心とする情報資料部が管理するものについては、大学院生、文化財研究者を対象に閲覧に供してきた。原則として祝日・年末年始（12/25～1/7）を除く、毎週月・水・金曜日（10：00～16：30）に、情報資料部において行ってきたが、新営建物への移転と準備のため11月より閉室している。

(2) 黒田清輝巡回展

黒田清輝の遺作を多く所蔵している当研究所は、黒田清輝の功績を記念し、あわせて地方文化の振興に資するため、昭和52年からの事業として「近代日本洋画の巨匠 黒田清輝」展を年1回地方において開催してきた。

平成11年度は次の会場において開催された。

会場	大分市美術館
会期	1999（平成11）年9月1日（水）—10月3日（日）
主催	東京国立文化財研究所、大分市美術館
開館日数	29日間
入場者数	11,878名
陳列点数	油彩・パステル 61点 木炭デッサン 50点 写生帖 17冊 書簡 3点 日記 5冊 参考資料 6点
図録	A4版変型、159頁、原色図版62頁、単色図版77

(3) 所蔵作品等の貸与

本年度の所蔵作品等の貸与は、下記の通り4件66点であった。

「東アジア 絵画の近代—油画の誕生とその展開」展（1999.4.10—5.23 静岡県立美術館）（1999.5.29—7.11 兵庫県立近代美術館）（1999.7.17—8.29 徳島県立近代美術館）（1999.9.12—10.20 宇都宮美術館）（1999.10.30—12.19 福岡アジア美術館）

「婦人肖像」黒田清輝作 油彩・カンバス、「昼寝」黒田清輝作 油彩・カンバス

「黒田清輝 101年目の日光」展 (1999.7.20—8.22 小杉放菴記念日光美術館)

「田舎屋」「虹 (ミレーの模写)」「栗拾い」「裸体・男」「湖畔」「智・感・情」「婦人肖像」「梅林」「羊飼二天女」「郊外構図 (野遊)」「漁舟着岸」「花野下絵」「海辺の遊び」「昔語り」の僧侶」「昔語り下絵 (構図2)」「昔語りの下図」「昔語り下絵 (草刈り娘)」「昔語り下絵 (僧)」「昔語り下絵 (舞妓)」「昔語り下絵 (舞妓)」「昔語り下絵 (仲居)」「昔語り下絵 (男)」「昔語り下絵 (男と舞妓)」「昔語り下絵 (清閑寺景)」「昔語り下絵 (清閑寺門)」「昔語りの下絵 (清閑寺)」以上、黒田清輝作 油彩26点

「昔語り図画稿 (構図)」「昔語り図画稿 (舞妓半身像)」「女の顔」「昔語り図画稿 (手)」「昔語り図画稿 (手)」「昔語り図画稿 (男裸体半身像)」「昔語り図画稿 (男着衣半身像)」「昔語り図画稿 (男の脚)」「昔語り図画稿 (仲居全身像)」「昔語り画稿 (仲居半身像)」「昔語り図画稿 (舞妓全身像)」「昔語り図画稿 (舞妓半身像)」「昔語り図画稿 (僧半身像)」「昔語り図画稿 (僧の手)」「昔語り図画稿 (僧の足)」「昔語り図画稿 (草刈り娘全身像)」「昔語り図画稿 (草刈り娘の足)」「昔語り図画稿 (草刈り娘の顔)」以上、黒田清輝作 素描18点

「写生帖 第10号 (昔語り)」黒田清輝作 (完成図・写真パネル)、「黒田清輝像」高村光太郎作、遺品絵具箱

「ラファエル・コラン展」(1999.9.10-10.24 静岡県立美術館)、(1999.10.30-11.28 福岡市美術館)、(1999.12.4-2000.1.16 島根県立美術館)、(2000.2.9-3.5 千葉そごう美術館)、(2000.4.8-5.7 愛媛県美術館)、(2000.5.27-7.2 東京ステーションギャラリー) 他)

「横臥裸婦」「夏の終わり習作」「オペラ・コミック座壁画『頌歌』のための素描」「オペラ・コミック座天井画のための素描」(1)(2)(3)、「『楽』のための素描」「オート・ヴィエンヌ県庁天井画下絵」「『田園恋愛詩』のための素描」(1)(2)、「パーン像」「『庭の隅』のための素描」「『アフロディテ』のための素描 (処女たち)」「『アフロディテ』のための素描 (クリュシス)」「『アフロディテ』のための素描 (デメトリオスは愛情を込めてそれに眺め入った)」「『アフロディテ』のための素描 (クリュシスの髪)」「『アフロディテ』のための素描 (晩餐会)」「『ピリティスの歌』挿絵原画のための素描 (メナアド)」「芸術」「人類」以上、ラファエル・コラン作

「幕末・明治の横浜展」(2000.1.15—3.26 横浜美術館)

「提灯図」「娘習作」満谷国四郎作 油彩・ボード

9. 年度内主要事業一覧

期 日	事 業 名
1999. 5.11～2000. 2.14	海外学術調査員及び研究者のための保存修復講座
1999. 7. 1	平成11年度運営協力者会議（仮称）
1999. 7. 5～1999. 7. 8	第21回芸能部夏期学術講座
1999. 7.12～1999. 7.23	博物館・美術館等の保存担当学芸員研修
1999. 8.15～1999. 8.29	漆の保存修復国際研修
1999. 9. 1～1999.10. 3	黒田清輝巡回展（大分市立美術館）
1999. 9. 6～1999. 9.11	博物館学実習
1999. 9.27～1999. 9.29	第23回文化財の保存に関する国際研究集会（社会教育研修所）
1999.10.14	第6回国際文化財保存修復研究会（社会教育研修所）
1999.10.22	第33回美術部・情報資料部公開学術講座（東京都美術館）
1999.11. 1～1999.11. 7	上野の山文化ゾーン黒田記念室特別公開
1999.11.16	第30回芸能部公開学術講座（矢来能楽堂）
1999.11.16～1999.11.19	第9回アジア文化財保存セミナー（オリンピック記念青少年センター）
1999.12. 7	第2回民俗芸能研究協議会（江戸東京博物館）
1999.12.10	平成11年度研究評価委員会
2000. 1.14	平成11年度文化財保存修復研究協議会
2000. 3.24	第7回国際文化財保存修復研究会
2000. 3.28	平成11年度運営諮問委員会

5. 研究交流

1. 職員の海外渡航

氏名	渡航先	期間	目的
青木 繁夫	中国	99.06.02～99.06.09	敦煌壁画保存の共同研究打合せ
青木 繁夫	中国	99.09.12～99.09.20	敦煌文化財保存修復協力事業第3期共同研究に関する調査・研究及び打合せ
青木 繁夫	大韓民国	99.10.25～99.10.30	文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究及び文化財保護に関する協議等
石崎 武志	タイ	99.08.23～99.08.28	遺跡保存修復調査、研究、協議
石崎 武志	米国	99.10.20～99.11.07	石造文化財の劣化とその保存対策に関する共同研究
石崎 武志	タイ	99.12.13～99.12.20	遺跡保存日・タイ共同研究
石崎 武志	タイ	00.03.31～00.04.06	遺跡保存日・タイ共同研究
白井 国明	パナマ、米国	00.02.15～00.02.24	パナマ市カスコ・ピエホ街区の保存協力に関する事前調査打合せ及び協議
岡田 健	中国	99.09.02～99.09.18	中国仏教美術の調査
岡田 健	中国	00.01.23～99.01.29	龍門石窟調査及び関係機関との協議
勝木言一郎	中国	99.08.17～99.09.02	中国における迦陵頻伽像の調査研究及びレビュー
勝木言一郎	中国	99.09.12～99.09.20	敦煌文化財保存修復協力事業第3期共同研究に関する調査・研究及び打合せ
加藤 寛	オランダ、ドイツ、スイス	99.09.01～99.09.12	在外日本古美術品修復協力事業に関する事前調査・協議
加藤 寛	アルゼンチン	00.03.15～00.03.22	在外日本古美術品保存修復協力事業に係る調査
鎌倉 恵子	大韓民国	99.10.12～99.10.19	ユネスコ第2回人間国宝制度に関する国際ワークショップにオブザーバーとして出席
河原 脩	オランダ、ドイツ、スイス	99.09.01～99.09.12	在外日本古美術品修復協力事業に関する事前調査・協議
河原 脩	中国	00.01.23～00.01.29	龍門石窟調査及び関係機関との協議
川野邊 涉	中国	99.08.26～99.08.31	文化財保護に関する意見交換及び関係機関の視察
川野邊 涉	インドネシア	99.12.16～99.12.23	木造建造物保存修復に関する研究交流
木川 りか	英国	00.03.12～00.03.17	ロンドンNHM External Course及び研究調査
朽津 信明	タイ	99.08.25～99.08.28	遺跡保存修復調査、研究、協議
朽津 信明	タイ	99.12.13～99.12.17	遺跡保存国際協力事業に関するレビュー
朽津 信明	タイ	00.03.31～00.04.04	遺跡保存日・タイ共同研究
斎藤 英俊	ドイツ	99.12.11～99.12.19	ドイツの歴史的建造物の彩色に用いられている材料と技法に関する調査
斎藤 英俊	中国	00.01.23～00.01.29	龍門石窟調査及び関係機関との協議

氏名	渡航先	期間	目的
斎藤 英俊	パナマ、米国	00.02.15～00.02.24	パナマ市カスコ・ピエホ街区の保存協力に関する事前調査打合せ及び協議
斎藤 英俊	ベトナム	00.03.17～00.03.23	ベトナム・ホイアンの文化財保存修復セミナー及びベトナム木造文化財保存日越シンポジウムへの講演・出席
佐野 千絵	米国、フランス	99.05.17～99.09.24	文部省在外研究員：近現代染織資料の保存に関する研究
津田 徹英	ドイツ	99.07.28～99.08.07	彩色文化財の材料と技法に関する共同研究
津田 徹英	中国	99.08.28～99.09.09	中国仏教美術の調査
西浦 忠輝	タイ、パキスタン	99.08.23～99.09.05	文化財保存修復国際協力事業に関するレビュー
西浦 忠輝	インドネシア	99.09.29～99.10.07	文化財保存修復国際協力事業に関するレビュー
西浦 忠輝	タイ	99.12.13～99.12.20	遺跡保存日タイ共同研究
西浦 忠輝	中国	00.01.23～00.01.29	龍門石窟調査及び関係機関との協議
西浦 忠輝	タイ	00.03.31～00.04.06	遺跡保存日タイ共同研究
長谷川洋一	タイ	99.12.13～99.12.20	日・タイ共同研究に関する関係機関との協議等
早川 泰弘	ドイツ	99.07.28～99.08.07	彩色文化財の材料と技法に関する共同研究
早川 泰弘	中国	99.10.19～99.10.28	早期中国青銅器に関する調査・研究
早川 泰弘	米国	00.03.09～00.03.17	文化財の新しい分析手法に関する調査
早川 典子	中国	99.09.12～99.09.20	敦煌文化財保存修復協力事業第3期共同研究に関する調査・研究及び打合せ
早川 典子	米国	00.03.29～00.04.08	近代の文化財遺産の保存修復に関する調査
平尾 良光	トルコ	99.09.12～99.09.25	アナトリアの遺跡出土の銅、青銅製品の調査
平尾 良光	中国	99.10.19～99.10.28	早期中国青銅器に関する調査・研究
二神 葉子	タイ	99.08.23～99.08.28	遺跡保存修復調査、研究、協議
二神 葉子	タイ	99.12.13～99.12.20	遺跡保存国際協力事業に関するレビュー
二神 葉子	タイ	00.03.31～00.04.06	遺跡保存日・タイ共同研究
星野 紘	大韓民国	99.10.12～99.10.19	ユネスコ第2回人間国宝制度に関する国際ワークショップ出席
星野 紘	中国	99.11.06～99.11.14	平成12年度国際民俗芸能フェスティバル招へい芸能事前調査
星野 紘	中国	00.03.09～00.03.16	2000年無形文化遺産ワークショップ開催準備
増田 勝彦	中国	99.06.02～99.06.09	敦煌莫高窟壁画保存修復共同研究第3期打合せ及び成果発表
増田 勝彦	米国	99.06.13～99.06.19	ボストン美術館保存部門整備長期計画のうち、日本絵画担当修復専門家教育に関する協議
増田 勝彦	米国	99.06.19～99.06.23	在外日本古美術品修復協力事業に関する事前調査・協議
増田 勝彦	中国	99.09.12～99.09.20	敦煌文化財修復協力事業第3期共同研究に関する調査・研究及び打合せ
増田 勝彦	イタリア、ポルトガル	99.10.18～99.10.28	在外日本古美術品修復協力事業に関する事前調査・協議
増田 勝彦	米国、イタリア	00.03.29～00.04.13	近代の文化財遺産の保存修復に関する調査及びイクロムが関与する研修の開発に関する会議出席

氏名	渡航先	期間	目的
松本 修自	ルーマニア	99.10.04～99.10.13	モルダヴィアにおける中世修道院の修復に関する国際会議出席
三浦 定俊	イタリア	99.04.27～99.05.02	イクロム財政事業計画委員会及びFPC・AAB合同委員会出席
三浦 定俊	ドイツ	99.07.28～99.08.07	彩色文化財の材料と技法に関する共同研究
三浦 定俊	フランス	99.08.24～99.09.05	彩色文化財の材料と技法に関する研究
三浦 定俊	イタリア	99.10.25～99.10.29	イクロム財政事業計画委員会及びFPC・AAB合同委員会出席
三浦 定俊	イタリア	99.11.25～99.11.29	イクロム国際セミナー講師出席
三浦 定俊	イタリア	00.02.13～00.02.17	イクロムへの日本人文化財専門家派遣に関する打合せ
三浦 定俊	イタリア	00.03.31～00.04.09	イクロム財政事業計画委員会、理事会及び総会出席
山岸 智幸	タイ	99.12.13～99.12.20	日・タイ共同研究に関する関係機関との協議等
米倉 迪夫	大韓民国	00.03.19～00.03.23	国立中央博物館における中国絵画調査
吉野 貴子	大韓民国	99.10.12～99.10.19	ユネスコ第2回人間国宝制度に関する国際ワークショップにオブザーバーとして出席
渡邊 明義	大韓民国	99.10.25～99.10.30	文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究及び文化財保護に関する協議等

2. 招へい研究員等

(1) 海外

今年度における海外からの招へいは下記のとおりである。

招へい期間	氏名	国籍	所属	招へい理由
99. 8.15～ 8.29	カリヤ・ヒロコ	日本	ブルックリン博物館保存部立 体物保存担当員	国際研修漆の保存修復参加
99. 8.15～ 8.29	Dorji Chenkyo Tshering	ブータン	国立ブータン博物館統合課長	国際研修漆の保存修復参加
99. 8.15～ 8.29	Allik Kalmer	エストニア	カヌト保存センター家具保存 担当官	国際研修漆の保存修復参加
99. 8.15～ 8.29	Hutt Julia	イギリス	ビクトリア&アルバート博物 館極東部アシスタントキュ レーター	国際研修漆の保存修復参加
99. 8.15～ 8.29	Stable Charles Frederick	イギリス	国立スコットランド博物館保 存担当官	国際研修漆の保存修復参加
99. 8.15～ 8.29	Balazs Lencz	ハンガリー	国立ハンガリー博物館美術品 修復担当官	国際研修漆の保存修復参加
99. 8.15～ 8.29	Abrew Pedro	ポルトガル	国立保存研究所家具保存部長	国際研修漆の保存修復参加
99. 9.10～ 9.20	Peter Fetchko	アメリカ	ピーボディ・エセックス美術 館員	在外日本美術修復協力事業の ため
99. 9.16～ 9.29	Robert C.Mikesh	アメリカ	スミソニアン研究機構名誉研 究員	航空機の保存修復について講 演及び研究交流
99. 9.19～ 9.25	Bas Kreuger	オランダ	オランダ空軍航空博物館資料 部長	航空機の保存修復についての 講演及び研究交流
99. 9.25～10. 1	前川 信	日本	ゲティ文化財保存研究所環境 研究室長	第23回文化財の保存・修復に 関する国際シンポジウム出席
99. 9.25～10. 1	Gerhard Binker	ドイツ	保存コンサルタント	第23回文化財の保存・修復に 関する国際シンポジウム出席
99. 9.25～10. 3	David Pinniger	イギリス	保存コンサルタント	第23回文化財の保存・修復に 関する国際シンポジウム出席
99. 9.26～10. 1	Chiraporn Aranyanark	タイ	タイ国芸術総局考古博物館局 修復科学課長	第23回文化財の保存・修復に 関する国際シンポジウム出席
99. 9.26～10. 1	韓成熙	大韓民国	文化財管理局	第23回文化財の保存・修復に 関する国際シンポジウム出席
99. 9.26～10. 1	李午憲	大韓民国	湖巖美術館	第23回文化財の保存・修復に 関する国際シンポジウム出席
99. 9.26～10. 3	Loh Heng Noi	シンガポ ール	文化財局修復部長	第23回文化財の保存・修復に 関する国際シンポジウム出席
99.10.19～10.28	金正燿	中国	中国社会科学院世界宗教研究 所助教授	早期中国青銅器に関する調 査・研究

招へい期間	氏名	国籍	所属	招へい理由
99.10.19～10.28	王増林	中国	中国社会科学院考古研究所助理研究員	早期中国青銅器に関する調査・研究
99.10.23～10.29	Niels Gutschow	ドイツ	ドイツ建築家	歴史的建造物の保存手法に関する調査・研究
99.10.23～11. 3	Christoph Henrichsen	ドイツ	ドイツ建築家	歴史的建造物の保存手法に関する調査・研究
99.10.25～11. 3	Siegfried RCT Enders	ドイツ	ドイツヘッセン州文化財保護局監督官	歴史的建造物の保存手法に関する調査・研究
99.10.28～ 1.11	樊再軒	中国	敦煌研究院文物保護研究所研究員	敦煌壁画保存の研修・共同研究
99.10.28～ 1.11	王進玉	中国	敦煌研究院文物保護研究所研究員	敦煌壁画保存の研修・共同研究
99.11.11～11.21	Gem Tshering	ブータン	パロ国立博物館保存担当官	第9回アジア文化財保存セミナー参加
99.11.12～11.20	Gunadi M Hum	インドネシア	インドネシア南、南東スラウェシ地域歴史考古遺産事務所長	第9回アジア文化財保存セミナー参加
99.11.12～11.20	Virachai Virasuksawdi	タイ	タイ芸術総局保存担当官	第9回アジア文化財保存セミナー参加
99.11.12～11.20	Sanim B Ahmad	マレーシア	マレーシア博物館考古局学芸員補	第9回アジア文化財保存セミナー参加
99.11.12～11.21	Bounhom Chanthanmat	ラオス	ラオス博物館考古局次長	第9回アジア文化財保存セミナー参加
99.11.12～11.21	Mauro Matteini	イタリア	オピフィティオ・デレ・ピエトロデューレ科学修復研究所保存科学者	第9回アジア文化財保存セミナー参加
99.11.12～11.21	Showkatuzzaman	バングラディッシュ	ダッカ大学美術研究所助教授	第9回アジア文化財保存セミナー参加
99.11.12～11.21	Atul Kumar Yadav	インド	インド国立文化財研究所研究員	第9回アジア文化財保存セミナー参加
99.11.12～11.21	Om Prakash Yadav	ネパール	ネパール中央文化財修復研究所研究員	第9回アジア文化財保存セミナー参加
99.11.12～11.22	Roland Silva	スリランカ	イコモス議長	第9回アジア文化財保存セミナー参加
99.11.13～11.20	蘇伯民	中国	敦煌研究院研究専門官	第9回アジア文化財保存セミナー参加
99.11.13～11.20	金恩惠	大韓民国	韓国国立文化財研究所研究員	第9回アジア文化財保存セミナー参加
99.11.13～11.20	Le Thanh Vinh	ベトナム	ベトナム文化財保存センター副所長	第9回アジア文化財保存セミナー参加
99.11.14～11.19	Wesley Foell	アメリカ	リソース・マネジメント・アソシエイツ代表	第9回アジア文化財保存セミナー参加
99.11.15～11.19	胡偉	中国	中央美術学院中国画材料技法工作室主任教授	第9回アジア文化財保存セミナー参加

招へい期間	氏名	国籍	所属	招へい理由
99.11.14～11.28	張中学	中国	四川省川劇学会長	講演及び日中民俗芸能の比較・保存振興方策の研究
99.11.15～11.24	王世和	中国	西北大学教授	報告書作成の打合せ及び関連仏教考古資料の調査
99.11.15～11.24	王建新	中国	西北大学副教授	報告書作成の打合せ及び関連仏教考古資料の調査
99.11.29～12. 5	趙善美	大韓民国	成均館大学校教授	東アジアにおける肖像画の研究
99.11.30～12. 8	Jacques Brunet	フランス	フランス歴史記念物研究所	洞窟・古墳壁画の保存に関する研究
99.12. 1～12. 8	徐萬哲	大韓民国	公州大学助教授	石造文化財、古墳、洞窟遺跡の劣化と保存に関する研究
99.12. 1～12. 8	Peter Haupl	ドイツ	ドレスデン工科大学教授	石造文化財、古墳、洞窟遺跡の劣化と保存に関する研究
99.12. 1～12. 8	Rudolf Plagge	ドイツ	ドレスデン工科大学研究員	石造文化財、古墳、洞窟遺跡の劣化と保存に関する研究
99.12. 1～12. 8	John Grunewald	ドイツ	ドレスデン工科大学研究員	石造文化財、古墳、洞窟遺跡の劣化と保存に関する研究
99.12.15～12.24	姜大一	大韓民国	韓国国立文化財研究所研究官	文化財の環境汚染被害の研究打合せ
99.12.15～12.24	金恩惠	大韓民国	韓国国立文化財研究所研究官	文化財の環境汚染被害の研究打合せ
00. 1.21～ 1.28	劉清波	中国	河北省古代建築保護研究所工 程師	壁画保存修復協力に関する協 議
00. 1.21～ 1.28	崔群福	中国	河北省石家荘市文物局長	壁画保存修復協力に関する協 議
00. 1.21～ 1.28	王輝	中国	河北省文物局工 程師	壁画保存修復協力に関する協 議
00. 1.21～ 1.28	劉智敏	中国	河北省古代建築保護研究所副 所長	壁画保存修復協力に関する協 議
00. 1.27～ 3.27	金正耀	中国	中国社会科学院世界宗教研究 所助教授	古代中国青銅器の産地推定
00. 1.28～ 3. 2	Shayne Lang	イギリス	ピクトリア&アルバート博物 館家具保存主任	在外日本古美術品に係る博物 館・美術館研究協力事業
00. 2. 1～ 2. 8	Uralvan Tanit- iwongse	タイ	教育省芸術総局保存修復鑑査 官	日タイ共同研究
00. 2. 1～ 2. 8	Nuttapol Moun- gaomkheaw	タイ	教育省芸術総局考古博物館局 第三地域事務所次長	日タイ共同研究
00. 2. 1～ 2. 8	Jeetheng Piyakarn	タイ	教育省芸術総局考古博物館局 保存修復部主任技術員	日タイ共同研究
00. 2. 1～ 2. 8	Nittaya Phusi	タイ	教育省芸術総局考古博物館局 第五地域事務所技術員	日タイ共同研究
00. 2. 5～ 2.13	Menzies Jacqueline Anne	オーストラ リア	ニューサウスウェールズ美術 館アジア美術学芸部長	在外日本古美術品に係る博物 館・美術館研究協力事業

招へい期間	氏名	国籍	所属	招へい理由
00. 2. 9～ 2.22	小林 祐里	日本	ミュンスター塗物美術博物館 学芸員	ヨーロッパラッカーと日本 輸出漆器に関する比較研究
00. 3. 3～ 3.12	Barbara Bridgers	アメリカ	メトロポリタン美術館写真部 長	在外日本古美術品に係る博物 館・美術館研究協力事業
00. 3. 3～ 3.13	Filip Suchomel	チェコスロ ヴァキア	ブラハ国立美術館東洋部工芸 部長	日本工芸品に関する基礎的研 究
00. 3.13～ 3.17	李榮勲	大韓民国	国立中央博物館考古部長	文化財の展示・修復・保存・ 管理に関する研究
00. 3.13～ 3.17	李炳国	大韓民国	大韓民国文化観光部公演芸術 課	文化財の展示・修復・保存・ 管理に関する研究
00. 3.13～ 3.17	金洛中	大韓民国	大韓民国文化観光部文化交流 課	文化財の展示・修復・保存・ 管理に関する研究
00. 3.15～ 3.22	Peter Burman	イギリス	ヨーク大学保存センター教授	歴史的建造物の保存修復手法 についての協議
00. 3.15～ 3.22	Philippe Oudin	フランス	フランス文化省公認修復建築 家	歴史的建造物の保存修復手法 についての協議
00. 3.18～ 3.25	Kozlova Irina Bladimirovna	ロシア	ロシア国立民俗芸術の家伝統 芸術部長	無形文化遺産の保存に関する 国際ワークショップ事前協議
00. 3.19～ 3.24	愛川 紀子	日本	ユネスコ本部無形文化遺産課 長	無形文化遺産の保存に関する 国際ワークショップ事前協議
00. 3.19～ 3.25	梁鐘承	大韓民国	国立民俗博物館専門委員	無形文化遺産の保存に関する 国際ワークショップ事前協議
00. 3.19～ 3.25	金濤	中国	中国舞踊家協会専門学術委員	無形文化遺産の保存に関する 国際ワークショップ事前協議
00. 3.18～ 3.29	マルティン・ヘス	ドイツ	バイエルン州立文化財研究所 室長	彩色文化財の保存に関する研 究調査
00. 3.18～ 3.29	エルヴィン・エマー リン	ドイツ	ミュンヘン工科大学教授	彩色文化財の保存に関する研 究調査
00. 3.18～ 3.29	Michael Kuhlenth- al	ドイツ	バイエルン州立文化財研究所 部長	彩色文化財の保存に関する研 究調査
00. 3.20～ 3.27	David Carson	アメリカ	ゲティ保存研究所科学研究部 環境科学研究室研究員	文化財の保存修復国際協力に 関する研究協議
00. 3.20～ 3.29	前川 信	日本	ゲティ保存研究所科学研究部 環境科学研究室長	文化財の保存修復国際協力に 関する研究協議
00. 3.23～ 3.31	Vanessa Spadafora	パナマ	カスコビエホ修復保存委員会 委員長	文化財保存に関する研究協議
00. 3.23～ 3.31	Almyr M Alba R	パナマ	パナマ文化庁文化遺産部長	文化財保存に関する研究協議
00. 3.24～ 3.29	趙由典	大韓民国	韓国国立文化財研究所長	環境共同研究打合せ
00. 3.24～ 3.29	姜大一	大韓民国	韓国国立文化財研究所研究官	環境共同研究打合せ
00. 3.22～ 3.31	Bruno Pedretti	イタリア	トリノ工科大学教授	文化財の多様性についての協 議
00. 3.23～ 3.31	Jonathan Ashley Smith	イギリス	ピクトリア&アルバート博物 館修復部長	日本工芸品に関する基礎研究

招へい期間	氏名	国籍	所属	招へい理由
00. 3.26～ 3.31	Menno Fitski	オランダ	アムステルダム国立博物館東洋部学芸員	日本工芸品に関する基礎研究
00. 3.26～ 3.31	Anne C MaCombs	アメリカ	スミソニアン研究機構国立航空宇宙博物館ガーバー施設修復専門官	近代化遺産の保存修復に関する協議
00. 3.27～ 3.31	野口 英雄	日本	ユネスコ文化遺産部アジア太平洋欧米地域首席	文化財の多様性についての協議
00. 3.27～ 3.31	Dinu Bumbaru	フランス	ヘリテッジモントリオール事業部長	文化財の多様性についての協議
00. 3.27～ 3.31	Joan Domiceij	オーストラリア	修復コンサルタント	文化財の多様性についての協議
00. 3.27～ 3.31	Said Zulficar	フランス	国境なき遺産事務局長	文化財の多様性についての協議
00. 3.29～ 3.31	Antoine Gournay	フランス	ソルボンヌ大学講師	文化財の多様性についての協議

(2) 国内

今年度における国内からの招へいは下記のとおりである。

期間	氏名	所属	招へい理由
99. 4.14	湯山 賢一	京都国立博物館学芸課長	在外日本古美術品保存修復指導委員会出席
99. 4.19～ 4.20	服部 等作	神戸芸術工科大学助教授	インド西北部の鳥人に関する資料の収集
99. 4.22～ 4.23	樋口 昭	埼玉大学教授	四天王寺聖霊会における舞楽迦陵頻の調査
99. 5. 7～ 5. 8	長屋奈津子	愛知芸術文化センター愛知県美術館保存担当学芸員	無公害な文化財生物劣化防除法の研究会出席
99. 5. 7～ 5. 8	長谷川孝徳	石川県立歴史博物館学芸主査	無公害な文化財生物劣化防除法の研究会出席
99. 5. 7～ 5. 8	佐々木麻子	羽村市郷土博物館嘱託学芸員	無公害な文化財生物劣化防除法の研究会出席
99. 5. 7～ 5. 8	石川登志雄	京都府教育庁指導部文化財保護課主査	無公害な文化財生物劣化防除法の研究会出席
99. 5.12	山田 繁男	(株)ホンマ・アーキライフ	下野煉化製造構造調査
99. 5.17	湯山 賢一	京都国立博物館学芸課長	在外日本古美術品保存修復指導委員会出席
99. 6.28～ 6.29	木村 勉	奈良国立文化財研究所建造物研究室長	彩色文化財の材料と技法に関する研究打合せ
99. 6.28～ 6.29	中村 康	京都国立博物館京都文化資料研究センター室長	彩色文化財の材料と技法に関する研究打合せ
99. 7. 1	石井 米雄	神田外語大学長	平成11年度運営協力者会議出席
99. 7. 1～ 7. 2	北野 康	名古屋大学名誉教授	平成11年度運営協力者会議出席
99. 7. 1	関口 正之	財団法人遠山記念館長	平成11年度運営協力者会議出席
99. 7. 1～ 7. 2	町田 章	奈良国立文化財研究所長	平成11年度運営協力者会議出席
99. 7.12	湯山 賢一	京都国立博物館学芸課長	在外日本古美術品保存修復指導委員会出席
99. 7.12	樋口 昭	埼玉大学教授	雅楽古楽器の調査

期 間	氏 名	所 属	招 へ い 理 由
99. 7.26～ 7.29	水野敬三郎	東京芸術大学名誉教授	中国仏教彫塑作品の調査
99. 7.27～ 7.29	高木 博志	京都大学人文科学研究所助教授	研究分担者連絡会議及び研究会出席
99. 8. 2～ 8. 4	桜井 弘人	飯田市美術博物館学芸員	花祭り資料調査
99. 8.16～ 8.17	高橋 隆博	関西大学文学部教授	漆の保存修復国際研修にて講演
99. 8.17と 8.23	谷口 吏	漆芸作家	漆の保存修復国際研修にて講演
99. 8.18～ 8.19	北村 昭斎	重要無形文化財保持者	漆の保存修復国際研修にて講演
99. 8.25	宮腰 哲雄	明治大学文学部教授	漆の保存修復国際研修にて講演
99. 9. 9	宗田 好史	京都府立大学人間環境学部助教授	第9回アジア文化財保存セミナー・ワーキンググループ会合出席
99. 9. 9	窪寺 茂	勸文化財建造物保存技術協会正法寺修理設計管理事務所長	第9回アジア文化財保存セミナー・ワーキンググループ会合出席
99. 9. 9	田村 洋一	勸日光社寺文化財保存会技術員	第9回アジア文化財保存セミナー・ワーキンググループ会合出席
99. 9.20	登尾 浩助	岩手大学農学部講師	石造文化財の劣化研究打合せ
99. 9.20～ 9.22	永島 明子	京都国立博物館学芸部工芸室文部技官	第3回在外日本古美術修復技術研究会出席
99. 9.20～ 9.22	田川真千子	漆芸修復家	第3回在外日本古美術修復技術研究会出席
99. 9.20～ 9.22	勝盛 典子	神戸市立博物館学芸員	第3回在外日本古美術修復技術研究会出席
99. 9.20～ 9.22	石川 充宏	高知大学教育学部教授	第3回在外日本古美術修復技術研究会出席
99. 9.20～ 9.22	下川 達弥	長崎県美術博物館次長	第3回在外日本古美術修復技術研究会出席
99. 9.20～ 9.22	岡 泰正	神戸市立博物館学芸員	第3回在外日本古美術修復技術研究会出席
99. 9.20～ 9.22	高橋 隆博	関西大学教授	第3回在外日本古美術修復技術研究会出席
99. 9.20～ 9.22	小林 和香	安芸市立歴史民俗資料館学芸員	第3回在外日本古美術修復技術研究会出席
99. 9.20～ 9.22	小野田一幸	神戸市教育委員会学芸員	第3回在外日本古美術修復技術研究会出席
99. 9.20～ 9.22	赤石 敦子	足立美術館学芸員	第3回在外日本古美術修復技術研究会出席
99. 9.21～ 9.23	横山晋太郎	かかみがはら航空宇宙博物館参事	近代文化遺産の保存修復に関する研究交流
99. 9.21～ 9.23	石田 正治	愛知県立豊橋工業高等学校教諭	近代文化遺産の保存修復に関する研究交流
99. 9.21～ 9.23	早川 博康	三菱自動車主任	近代文化遺産の保存修復に関する研究交流
99. 9.24	早川 博康	三菱自動車主任	修復現場視察と研究交流
99. 9.27～ 9.29	川越 和四	イカリ消毒・部長	国際シンポジウム出席
99. 9.27～ 9.29	規矩地耕一郎	イカリ消毒・次長	国際シンポジウム出席
99. 9.27～ 9.29	長谷川孝徳	石川県立歴史博物館	国際シンポジウム出席
99. 9.27～ 9.29	石川登志雄	京都府教育庁文化財保護課主査	国際シンポジウム出席
99. 9.27～ 9.29	新井 英夫	東京国立文化財研究所名誉研究員	国際シンポジウム出席
99. 9.27～ 9.29	長屋菜津子	愛知県美術館保存担当学芸員	国際シンポジウム出席
99.10.12～10.13	千田 敬一	勸碌山美術館学芸員	日本近代美術に関する基礎資料のデータ化についての研究協議会出席

期 間	氏 名	所 属	招 へ い 理 由
99.10.12～10.13	田中 正史	小杉放菴記念日光美術館学芸課 学芸主任	日本近代美術に関する基礎資料のデータ化について の研究協議会出席
99.10.12～10.13	金子 一夫	茨城大学教育学部教授	日本近代美術に関する基礎資料のデータ化について の研究協議会出席
99.10.13～10.14	宗田 好史	京都府立大学人間環境学部助教授	第6回国際文化財保存修復研究会出席
99.10.13～10.14	大西國太郎	京都芸術短期大学造形芸術学科 客員教授	第6回国際文化財保存修復研究会出席
99.10.13～10.14	森田 恒之	国立民族学博物館教授	第6回国際文化財保存修復研究会出席
99.10.13～10.14	西藤 清秀	奈良県立橿原考古学研究所主任 研究員	第6回国際文化財保存修復研究会出席
99.10.13～10.14	海老澤孝雄	㈱ぎ・エトス代表取締役	第6回国際文化財保存修復研究会出席
99.10.13～10.14	森本 晋	奈良国立文化財研究所埋蔵文化 財センター主任研究官	第6回国際文化財保存修復研究会出席
99.10.13～10.14	松田 泰典	東北芸術工科大学芸術学部教授	第6回国際文化財保存修復研究会出席
99.10.13～10.14	松田 真一	㈱なら・シルクロード博記念 国際交流財団シルクロード学 研究センター	第6回国際文化財保存修復研究会出席
99.10.13～10.14	増井 正哉	奈良女子大学生活環境学部助 教授	第6回国際文化財保存修復研究会出席
99.10.13～10.14	西村 康	奈良国立文化財研究所測量研 究室長	第6回国際文化財保存修復研究会出席
99.10.13～10.14	鈴木 稔	㈱山梨文化財研究所	第6回国際文化財保存修復研究会出席
99.10.13～10.14	菅谷 文則	滋賀県立大学人間文化学部教授	第6回国際文化財保存修復研究会出席
99.10.13～10.14	沢田 正昭	奈良国立文化財研究所埋蔵文化 財センター長	第6回国際文化財保存修復研究会出席
99.10.13～10.14	佐々木達夫	金沢大学文学部考古学講座教授	第6回国際文化財保存修復研究会出席
99.10.13～10.14	坂井 隆	㈱群馬県埋蔵文化財調査事業団	第6回国際文化財保存修復研究会出席
99.10.13～10.14	工業 善通	㈱ユネスコ・アジア文化セン ター文化遺産保護部建造物課 研修事業部長	第6回国際文化財保存修復研究会出席
99.10.13～10.14	木村 勉	奈良国立文化財研究所建造物 研究室長	第6回国際文化財保存修復研究会出席
99.10.13～10.14	内田 昭人	奈良国立文化財研究所埋蔵文化 財センター保存工学研究室主任 研究官	第6回国際文化財保存修復研究会出席
99.10.13～10.14	泉田 英雄	豊橋技術科学大学助教授	第6回国際文化財保存修復研究会出席
99.10.13～10.14	上野 邦一	奈良女子大学生活環境学部教授	第6回国際文化財保存修復研究会出席
99.10.14	宮川 朝一	東洋大学国際地域学部教授	第6回国際文化財保存修復研究会出席
99.10.14	常木 晃	筑波大学歴史人類学系助教授	第6回国際文化財保存修復研究会出席
99.10.18～10.19	宮本長二郎	東北芸術工科大学芸術学部教授	国際文化財保存修復協力センターの運営に関する 打合せ

期 間	氏 名	所 属	招 へ い 理 由
99.10.22	村上 裕道	兵庫県教育委員会	第1回台湾中部地震被災文化財研究会参加
99.10.22	坂本 勇	TRCC東京修復保存センター社長	第1回台湾中部地震被災文化財研究会参加
99.10.22	内田 俊秀	京都造形芸術大学教授	第1回台湾中部地震被災文化財研究会参加
99.10.22	百橋 明穂	神戸大学文学部教授	第1回台湾中部地震被災文化財研究会参加
99.10.26～10.28	山下 好彦	漆芸研究家	雅楽・能楽の古楽器調査
99.10.26～10.28	高橋 美都	東京音楽大学非常勤講師	雅楽・能楽の古楽器調査
99.10.26～10.28	樋口 昭	埼玉大学教授	雅楽・能楽の古楽器調査
99.10.27～11. 1	小林 純子	沖縄県立芸術大学美術工芸学部講師	近代における古美術展観の基礎資料調査
99.10.28～10.30	勝盛 典子	神戸市立博物館学芸員	第3回在外日本古美術の修復技術に関する文献調査
99.11. 1	宗田 好史	京都府立大学人間環境学部助教授	第9回アジア文化財保存セミナー・ワーキンググループ出席
99.11. 1	岡 岩太郎	(株)岡墨光堂代表取締役	第9回アジア文化財保存セミナー・ワーキンググループ出席
99.11. 1	田村 洋一	(財)日光社寺文化財保存会技術員	第9回アジア文化財保存セミナー・ワーキンググループ出席
99.11. 1	窪寺 茂	(財)文化財建造物保存技術協会正法寺修理設計管理事務所長	第9回アジア文化財保存セミナー・ワーキンググループ出席
99.11. 3～11. 5	田邊 尚征	大分工業高等専門学校事務部長	黒田清輝巡回展事務報告
99.11. 3～11. 5	佐倉 敦	大分工業高等専門学校事務部出納係長	黒田清輝巡回展事務報告
99.11. 3～11. 5	本井 義彦	大分工業高等専門学校事務部会計課長	黒田清輝巡回展事務報告
99.11. 3～11. 5	武井 正弘	宗教民俗芸能研究家	花祭り資料調査
99.11.11～11.12	吉川 美穂	徳川美術館学芸員	源氏物語絵巻の共同調査・研究
99.11.11～11.12	四辻 秀紀	徳川美術館主任学芸員	源氏物語絵巻の共同調査・研究
99.11.13～11.19	宗田 好史	京都府立大学人間環境学部助教授	第9回アジア文化財保存セミナー出席
99.11.14	伊藤 延男	文化財建造物保存技術協会会長	第9回アジア文化財保存セミナー出席
99.11.14～11.15	神庭 信幸	東京国立博物館保存修復管理官	第9回アジア文化財保存セミナー出席
99.11.14～11.15	桜田 方子	通訳	第9回アジア文化財保存セミナー通訳
99.11.15～11.18	岡 岩太郎	(株)岡墨光堂代表取締役	第9回アジア文化財保存セミナー出席
99.11.16～11.19	田村 洋一	(財)日光社寺文化財保存会技術員	第9回アジア文化財保存セミナー出席
99.11.16～11.19	沢田 正昭	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長	第9回アジア文化財保存セミナー出席
99.11.16～11.19	窪寺 茂	(財)文化財建造物保存技術協会正法寺修理設計管理事務所長	第9回アジア文化財保存セミナー出席
99.11.18～11.20	古田 浩俊	愛知県美術館学芸員	日本における外来美術の受容についての研究に関する研究発表及び協議

期 間	氏 名	所 属	招 へ い 理 由
99.11.18～11.20	加藤 哲弘	関西学院大学教授	日本における外来美術の受容についての研究に関する研究発表及び協議
99.11.18～11.20	永井 隆則	京都工芸繊維大学助教授	日本における外来美術の受容についての研究に関する研究発表及び協議
99.11.19～11.20	長岡 龍作	東北大学文学部助教授	日本における外来美術の受容についての研究に関する会議出席
99.11.20～11.25	小林 純子	沖縄県立芸術大学美術工芸学部講師	近代における古美術展観の基礎資料調査
99.11.24～11.26	三木 哲夫	国立国際美術館学芸課長	大正期美術展覧会出品目録の収集調査のための研究協議会出席
99.11.24～11.26	植野 健造	石橋財団石橋美術館学芸員	大正期美術展覧会出品目録の収集調査のための研究協議会出席
99.11.24～11.26	島田 康寛	京都国立近代美術館学芸課長	大正期美術展覧会出品目録の収集調査のための研究協議会出席
99.11.24～11.26	菊屋 吉生	山口大学教育学部助教授	大正期美術展覧会出品目録の収集調査のための研究協議会出席
99.11.25～11.26	青木 弘治	（財）文化財建造物保存技術協会修理事務所長	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	飯田喜四郎	名古屋大学名誉教授	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	今井 成亨	（財）文化財建造物保存技術協会修理事務所長	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	今西 良男	奈良県教育委員会奈良文化財保存事務所唐招提寺出張所	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	内田 昭人	奈良国立文化財研究所保存工学研究室主任研究官	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	賀古 唯義	（財）文化財建造物保存技術協会修理事務所長	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	鴨 昌和	（財）建築研究協会研究員	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	木村 和夫	（財）文化財建造物保存技術協会修理事務所長	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	中尾 正治	京都府教育委員会専門技術員	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	塚原十三雄	京都府教育委員会専門員	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	立石 一	（株）立石構造設計	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	高木裕雄樹	（財）文化財建造物保存技術協会修理事務所長	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	鈴木 雅文	文化財建造物保存技術協会修理事務所長	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	鈴木 嘉吉	（財）文化財建造物保存技術協会顧問	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	本田 巖	（財）文化財建造物保存技術協会修理事務所長	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	細川 道夫	（財）文化財保存計画協会	文化財建造物耐震補強研究会に出席

期 間	氏 名	所 属	招 へ い 理 由
99.11.25～11.26	福本 都治	(財)文化財建造物保存技術協会大阪事務所長	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	福田 敏朗	京都府教育委員会係長	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	林 義久	大阪府教育委員会主査	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	長谷川良夫	(財)博物館明治村主任技師	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	長谷川哲也	日本診断設計・代表取締役	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	西澤 英和	京都大学工学部講師	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	永井 規男	関西大学教授	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	山田 繁男	(株)ホンマ・アーキライフ常務取締役	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	矢野 昭洋	(財)文化財建造物保存技術協会修理事務所長	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	安田 一男	(財)文化財建造物保存技術協会広島事務所副所長	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	村田 信夫	滋賀県教育委員会専門員	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	村田 健一	奈良国立文化財研究所建造物研究室主任研究官	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	村上 裕道	兵庫県教育委員会主査	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	木村 勉	奈良国立文化財研究所室長	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	窪寺 茂	(財)文化財建造物保存技術協会修理事務所長	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	後藤 玉樹	(財)文化財建造物保存技術協会大阪事務所副所長	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	後藤 哲郎	建設省建築研究所第四研究部住宅建設研究室主任研究員	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.25～11.26	大野 敏	横浜国立大学助教授	文化財建造物耐震補強研究会に出席
99.11.26～11.27	佐々木利和	東京国立博物館資料部技官	銅製品の資料調査研究
99.11.26～11.27	斎藤亜三子	東京理科大学大学院生	銅製品の資料調査補助
99.11.29	村上 裕道	兵庫県教育委員会主査	第2回台湾中部地震被災文化財研究会参加
99.11.29	西澤 英和	京都大学工学部講師	第2回台湾中部地震被災文化財研究会参加
99.11.29	百橋 明穂	神戸大学文学部教授	第2回台湾中部地震被災文化財研究会参加
99.11.29	内田 俊秀	京都造形芸術大学教授	第2回台湾中部地震被災文化財研究会参加
99.11.29	足立 裕司	神戸大学工学部教授	第2回台湾中部地震被災文化財研究会参加
99.12. 1～12. 3	勝盛 典子	神戸市立博物館学芸員	在外日本古美術品修復協力事業に関わる関連調査
99.12. 1～12. 4	井上 光弘	鳥取大学乾燥地域センター助教授	石造文化財、古墳、洞窟遺跡の劣化と保存対策研究会出席
99.12. 1～12. 4	藤巻 晴行	鳥取大学乾燥地域センター特別研究員	石造文化財、古墳、洞窟遺跡の劣化と保存対策研究会出席
99.12. 1～12. 4	森 也寸志	島根大学生物資源科学部助手	石造文化財、古墳、洞窟遺跡の劣化と保存対策研究会出席

期 間	氏 名	所 属	招 へ い 理 由
99.12. 1～12. 4	ク リ ス ・ ダークセン	鳥取大学乾燥地域センター外国人研究員	石造文化財、古墳、洞窟遺跡の劣化と保存対策研究会出席
99.12. 2～12. 3	渡辺 一正	建設省建築研究所第4研究部技官	石造文化財、古墳、洞窟遺跡の劣化と保存対策研究会出席
99.12. 2～12. 4	登尾 浩助	岩手大学農学部講師	石造文化財、古墳、洞窟遺跡の劣化と保存対策研究会出席
99.12. 2～12. 4	武田 一夫	(株)鴻池組技術研究所主任研究員	石造文化財、古墳、洞窟遺跡の劣化と保存対策研究会出席
99.12. 6～12. 8	池田 哲夫	新潟大学人文学部助教授	第2回民俗芸能研究協議会出席
99.12. 6～12. 8	山路 興造	民俗芸能学会代表理事	第2回民俗芸能研究協議会出席
99.12. 6～12. 8	本龍 顕真	高知県立儂原高等学校教頭	第2回民俗芸能研究協議会出席
99.12. 6～12. 8	東嵩西のり子	石垣市立平保育所保育士	第2回民俗芸能研究協議会出席
99.12. 6～12. 8	濱田 毅	小木町立小木小学校長	第2回民俗芸能研究協議会出席
99.12. 6～12. 8	永松 敦	椎葉村立椎葉民俗芸能博物館学芸員	第2回民俗芸能研究協議会出席
99.12. 6～12. 8	中西 英夫	兵庫県立三原高等学校教諭	第2回民俗芸能研究協議会出席
99.12. 6～12. 8	経種 松義	出雲大社神代神楽薦沢社中代表	第2回民俗芸能研究協議会出席
99.12. 6～12. 8	高橋 建	鳥海町役場総務課庶務係長	第2回民俗芸能研究協議会出席
99.12. 6～12. 8	佐賀 明子	盛岡市立乙部中学校教諭	第2回民俗芸能研究協議会出席
99.12. 6～12. 8	懸田 弘訓	会津大学講師	第2回民俗芸能研究協議会出席
99.12. 6～12. 8	門屋 光昭	北上市立鬼の館館長	第2回民俗芸能研究協議会出席
99.12. 6～12. 8	尾前 亀蔵	椎葉村尾前神楽保存会長	第2回民俗芸能研究協議会出席
99.12. 6～12. 8	大西 一則	奈良県立山辺高等学校教諭	第2回民俗芸能研究協議会出席
99.12. 6～12. 8	大友 義助	新庄市立雪の里情報館長	第2回民俗芸能研究協議会出席
99.12. 6～12. 8	及川 彰	札幌市立北海道開成高等学校教諭	第2回民俗芸能研究協議会出席
99.12. 6～12. 8	石井 一躬	神奈川県立愛川高等学校長	第2回民俗芸能研究協議会出席
99.12. 9～12.10	増澤 文武	(財)元興寺文化財研究所保存科学センター長	平成11年度研究評価委員会出席
99.12. 9～12.10	馬淵 久夫	くらしき作陽大学食文化学部学部長	平成11年度研究評価委員会出席
99.12.10	大河 直躬	千葉大学名誉教授	平成11年度研究評価委員会出席
99.12.10	陰里 鐵郎	横浜美術館長	平成11年度研究評価委員会出席
99.12.10	坂本 満	聖徳大学人文学部教授	平成11年度研究評価委員会出席
99.12.10	小林 責	武蔵野女子大学文学部教授	平成11年度研究評価委員会出席
99.12.12～12.14	亀井 修	千葉県立現代産業科学館学芸員	近代化遺産の調査
99.12.12～12.14	長島 宏行	日本航空協会副主事	近代化遺産の調査
99.12.12～12.14	百瀬 晴男	日本航空協会調査部長	近代化遺産の調査
99.12.12～12.15	石田 正治	豊橋工業高等学校教諭	近代化遺産の調査

期 間	氏 名	所 属	招 へ い 理 由
99.12.12～12.15	横山晋太郎	かかみがはら航空宇宙博物館参事	近代化遺産の調査
99.12.12～12.15	青木 典夫	かかみがはら航空宇宙博物館嘱託職員	近代化遺産の調査
99.12.12～12.15	岡野 充俊	三菱重工業・資料室	近代化遺産の調査
99.12.13	河口 公生	国立西洋美術館主任研究官	在外日本古美術修復協力に関してポルトガル南蛮屏風調査
99.12.13	塚田 全彦	国立西洋美術館研究員	在外日本古美術修復協力に関してポルトガル南蛮屏風調査
99.12.15～12.18	山下 好彦	漆芸修復家	在外日本古美術修復協力事業に関わる関連調査
99.12.15～12.18	小池 富雄	徳川美術館普及課長	在外日本古美術修復協力事業に関わる関連調査
99.12.15～12.18	五味 聖	宮内庁三の丸尚蔵館学芸員	在外日本古美術修復協力事業に関わる関連調査
99.12.15～12.18	勝又 智志	漆芸修復家	在外日本古美術修復協力事業に関わる関連調査
99.12.15～12.18	高橋 隆博	関西大学教授	第3回在外日本古美術修復技術研究会関連調査
99.12.15～12.18	田口 善明	漆芸修復家	在外日本古美術修復協力事業に関わる関連調査
99.12.15～12.18	永島 明子	京都国立博物館学芸員	在外日本古美術修復協力事業に関わる関連調査
99.12.15～12.18	松本 達弥	漆芸修復家	在外日本古美術修復協力事業に関わる関連調査
99.12.15～12.18	室瀬 和美	漆芸修復家	在外日本古美術修復協力事業に関わる関連調査
99.12.15～12.18	北村 繁	漆芸修復家	在外日本古美術修復協力事業に関わる関連調査
99.12.15～12.18	金子 皓彦	東京女学館短期大学教授	在外日本古美術修復協力事業に関わる関連調査
99.12.15～12.18	勝盛 典子	神戸市立博物館学芸員	在外日本古美術修復協力事業に関わる関連調査
99.12.17～12.18	赤石 敦子	足立美術館学芸員	在外日本古美術修復協力事業に関わる関連調査
99.12.17～12.18	北村 昭斎	漆芸修復家	在外日本古美術修復協力事業に関わる関連調査
99.12.17～12.19	島谷 弘幸	東京国立博物館学芸部文部技官	第3回在外日本古美術の修復技術に関する文献調査
99.12.17～12.18	福島 恒徳	山口県立美術館学芸員	情報システム協議会出席
99.12.17～12.18	八重樫純樹	静岡大学教授	情報システム協議会出席
99.12.17～12.18	長岡 龍作	東北大学文学部助教授	情報システム協議会出席
99.12.20	岡部 央	群馬県教育委員会文化財保護課長補佐	無公害な文化財生物劣化防除法の研究平成11年度第2回研究会出席
99.12.20～12.21	石川登志雄	京都府教育庁指導部文化財保護課主査	無公害な文化財生物劣化防除法の研究平成11年度第2回研究会出席
99.12.20～12.21	長谷川孝徳	石川県立歴史博物館学芸主任	無公害な文化財生物劣化防除法の研究平成11年度第2回研究会出席
99.12.20～12.21	日高 真吾	勅元興寺文化財研究所保存科学センター研究員	無公害な文化財生物劣化防除法の研究平成11年度第2回研究会出席
99.12.20～12.21	長屋菜津子	愛知芸術文化センター愛知県美術館学芸員	無公害な文化財生物劣化防除法の研究平成11年度第2回研究会出席
99.12.20～12.21	尾立 和則	修復家	紙の保存修復国際研修平成12年度開催予定のための企画打合せ
99.12.21～12.23	千葉 秀夫	奈良国立文化財研究所庶務部長	独立行政法人化に関する打合せ

期 間	氏 名	所 属	招 へ い 理 由
99.12.21～12.23	小山 浩幸	奈良国立文化財研究所会計課長	独立行政法人化に関する打合せ
99.12.21～12.23	多 昭彦	奈良国立文化財研究所庶務課長	独立行政法人化に関する打合せ
99.12.24～12.26	山口 俊浩	東京芸術大学大学院美術研究科 大学院生	調査・研究打合せ及び宮城県立図書館所蔵建築 指図の調査
00. 1. 8～ 1. 9	井上 洋一	東京国立博物館学芸部考古課先 史室長	青銅資料の採取
00. 1.11～ 1.15	田川真千子	漆芸修復家	在外日本美術修復協力事業の関連史料調査
00. 1.11～ 1.15	謝敷真起子	浦添市美術館学芸員	在外日本美術修復協力事業の関連史料調査
00. 1.12～ 1.15	尾形 善郎	多久市郷土資料館長	在外日本美術修復協力事業の関連史料調査
00. 1.13～ 1.15	永島 明子	京都国立博物館学芸員	在外日本美術修復協力事業の関連史料調査
00. 1.13～ 1.15	門田 由紀	安芸市歴史民俗資料館学芸主任	在外日本美術修復協力事業の関連史料調査
00. 1.13～ 1.15	下川 達弥	長崎県立美術博物館次長	在外日本美術修復協力事業の関連史料調査
00. 1.12	西山 要一	奈良大学教授	文化財における環境の影響研究会出席
00. 1.12	辻野 喜夫	大阪府公害監視センター室長	文化財における環境の影響研究会出席
00. 1.12	二宮 修治	東京学芸大学助教授	文化財における環境の影響研究会出席
00. 1.12～ 1.13	土谷富士夫	帯広畜産大学教授	石造・レンガ建造物の劣化に関する調査
00. 1.12～ 1.14	武田 一夫	鴻池組技術研究所研究員	石造・レンガ建造物の劣化に関する調査
00. 1.13～ 1.15	北村 昭齋	漆芸修復家・重要無形文化財保 持者	文化財保存修復研究協議会の講演
00. 1.13～ 1.15	勝盛 典子	神戸市立博物館学芸員	文化財保存修復研究協議会の講演
00. 1.14	田口 善明	漆芸修復家・重要無形文化財保 持者	文化財保存修復研究協議会の講演
00. 1.21～ 1.22	木村 圭司	愛知県立大学情報科学部助手	石造・レンガ建造物の劣化に関する研究打合せ
00. 1.24～ 1.25	樋口 昭	埼玉大学教授	古楽器調査
00. 1.24～ 1.25	高橋 美都	東京音楽大学講師	古楽器調査
00. 1.31～ 2. 2	武田 一夫	鴻池組技術研究所研究員	屋外環境下での遺跡保存調査
00. 2. 4～ 2. 5	佐々木利和	東京国立博物館資料部技官	アイヌガラスの調査
00. 2. 4～ 2. 5	斎藤亜三子	東京理科大学大学院生	アイヌガラスの調査補助・資料収集
00. 2.11～ 2.12	小林 祐里	ミュンスター塗物美術博物館学 芸員	ヨーロッパラッカーと日本輸出漆器に関する 比較研究
00. 2.13～ 2.14	古田 亮	東京国立近代美術館研究員	岡倉天心資料調査
00. 2.15	小林 祐里	ミュンスター塗物美術博物館学 芸員	ヨーロッパラッカーと日本輸出漆器に関する 比較研究
00. 2.16～ 2.21	小林 祐里	ミュンスター塗物美術博物館学 芸員	ヨーロッパラッカーと日本輸出漆器に関する 比較研究
00. 2.22～ 2.24	伊興田光宏	千葉工業大学情報工学科教授	デジタルイメージングシステムに関する研究 協議
00. 2.25～ 2.26	木村 圭司	愛知県立大学情報科学部助手	石・レンガ材料の劣化に関する研究打合せ
00. 2.25～ 2.27	島谷 弘幸	東京国立博物館書跡室長	在外日本古美術品保存修復協力事業の関連資料 の調査

期 間	氏 名	所 属	招 へ い 理 由
00. 2.25～ 2.29	長岡 龍作	東北大学文学部助教授	明治期における仏像展観に関する調査研究
00. 2.26～ 2.28	佐藤 道信	東京芸術大学助教授	歴史と神話に関する調査・資料収集
00. 3. 3～ 3. 4	木村 圭司	愛知県立大学情報科学部助手	石・レンガ材料の劣化に関する研究打合せ
00. 3. 8～ 3. 9	木村 圭司	愛知県立大学情報科学部助手	石・レンガ材料の劣化に関する研究打合せ
00. 3. 9～ 3.10	三宅 敦気	群馬県月夜野町教育委員会主事	遺跡保存研究会出席
00. 3. 9～ 3.10	白沢 勝彦	長野県立歴史館主事	遺跡保存研究会出席
00. 3. 9～ 3.10	石井 克己	群馬県子持村教育委員会文化財室長	遺跡保存研究会出席
00. 3. 9～ 3.10	西尾太加二	静岡県埋蔵文化財調査事務所	遺跡保存研究会出席
00. 3. 9～ 3.11	武田 幸司	仙台市教育委員会教諭	遺跡保存研究会出席
00. 3. 9～ 3.11	池崎 譲二	福岡市教育委員会主査	遺跡保存研究会出席
00. 3. 9～ 3.11	飯田 博之	宮崎県教育委員会主任主事	遺跡保存研究会出席
00. 3. 9～ 3.11	大久保浩二	鹿児島県立埋蔵文化センター文化財主事	遺跡保存研究会出席
00. 3. 9～ 3.11	駒形 敏朗	長岡市立科学博物館副主幹	遺跡保存研究会出席
00. 3. 9～ 3.11	七田 忠昭	佐賀県教育委員会企画主査	遺跡保存研究会出席
00. 3. 9～ 3.11	中村 美杉	青森県三内丸山遺跡研究室文化財保護主査	遺跡保存研究会出席
00. 3. 9～ 3.11	山田 拓伸	大分県立歴史博物館主幹研究員	遺跡保存研究会出席
00. 3.10	今井 康博	横浜市教育委員会主事	遺跡保存研究会出席
00. 3.10	野中 仁	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	遺跡保存研究会出席
00. 3.13～ 3.17	玉蟲 敏子	静嘉堂文庫美術館	近代における光琳受容に関する資料蒐集
00. 3.13～ 3.14	中村 康	京都国立博物館文化財保存修理管理指導室長	文化財施設の保存環境に関する研究会出席
00. 3.14	高野早代子	山梨県立美術館学芸員	文化財施設の保存環境に関する研究会出席
00. 3.14～ 3.15	長屋菜津子	愛知県美術館学芸員	文化財施設の保存環境に関する研究会出席
00. 3.14～ 3.15	小林 幸雄	北海道開拓記念館業務部展示課学芸員	文化財施設の保存環境に関する研究会出席
00. 3.14～ 3.15	松田 隆嗣	福島県立博物館学芸員	文化財施設の保存環境に関する研究会出席
00. 3.14～ 3.15	田中 善明	三重県立美術館学芸員	文化財施設の保存環境に関する研究会出席
00. 3.14～ 3.15	宇治谷 恵	国立民族学博物館情報管理施設情報企画課標本資料係長	文化財施設の保存環境に関する研究会出席
00. 3.20～ 3.23	菊屋 吉生	山口大学教育学部助教授	日本近代美術の発達に関する明治後期から昭和初期の基礎資料集のための調査
0. 3.21	宗田 好史	京都府立大学人間環境学部環境デザイン学科助教授	センター保存計画研究会出席
00. 3.21	木村 勉	奈良国立文化財研究所建造物研究室長	センター保存計画研究会出席
00. 3.23～ 3.24	千葉 秀夫	奈良国立文化財研究所庶務部長	独立行政法人化に関する打合せ
00. 3.23～ 3.24	多 昭彦	奈良国立文化財研究所庶務課長	独立行政法人化に関する打合せ

期 間	氏 名	所 属	招 へ い 理 由
00. 3.24	川崎 了	大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻助手	第7回国際文化財保存修復研究会出席
00. 3.24	海老澤孝雄	㈱ざ・エトス代表取締役	第7回国際文化財保存修復研究会出席
00. 3.24	大西國太郎	京都芸術短期大学造形芸術学科客員教授	第7回国際文化財保存修復研究会出席
00. 3.24	内田 昭人	奈良国立文化財研究所埋蔵文化センター主任研究官	第7回国際文化財保存修復研究会出席
00. 3.24	伊藤 重剛	熊本大学工学部環境システム工学科助教授	第7回国際文化財保存修復研究会出席
00. 3.24	泉田 英雄	豊橋技術科学大学助教授	第7回国際文化財保存修復研究会出席
00. 3.24	浅野 和生	愛知教育大学教育学部助教授	第7回国際文化財保存修復研究会出席
00. 3.24	森本 晋	奈良国立文化財研究所埋蔵文化センター主任研究官	第7回国際文化財保存修復研究会出席
00. 3.24	宗田 好史	京都府立大学人間環境学部環境デザイン学科助教授	第7回国際文化財保存修復研究会出席
00. 3.24	木村 勉	奈良国立文化財研究所建造物研究室長	第7回国際文化財保存修復研究会出席
00. 3.24	西藤 清秀	奈良県立橿原考古学研究所主任研究員	第7回国際文化財保存修復研究会出席
00. 3.24	坂井 隆	㈱群馬県埋蔵文化財調査事業団主幹専門員	第7回国際文化財保存修復研究会出席
00. 3.24	佐々木達夫	金沢大学文学部史学科教授	第7回国際文化財保存修復研究会出席
00. 3.24	園田 直子	国立民族学博物館助教授	第7回国際文化財保存修復研究会出席
00. 3.24	伊達 仁美	㈱元興寺文化財研究所保存科学センター室長	第7回国際文化財保存修復研究会出席
00. 3.24	西田 一彦	関西大学工学部土木工学教室教授	第7回国際文化財保存修復研究会出席
00. 3.24	西山 要一	奈良大学文学部文化財学教授	第7回国際文化財保存修復研究会出席
00. 3.24	日高健一郎	筑波大学芸術学系教授	第7回国際文化財保存修復研究会出席
00. 3.24	増澤 文武	㈱元興寺文化財研究所保存科学センター長	第7回国際文化財保存修復研究会出席
00. 3.24	松田 真一	㈱なら・シルクロード博記念国際交流財団研究交流課補佐	第7回国際文化財保存修復研究会出席
00. 3.24	宮本長二郎	東北芸術工科大学教授	第7回国際文化財保存修復研究会出席
00. 3.27～ 3.30	宗田 好史	京都府立大学人間環境学部環境デザイン学科助教授	招聘研究員（パナマ政府文化庁部長他1名）の現場視察案内・説明
00. 3.28	関口 正之	㈱遠山記念館長	平成11年度運営諮問委員会出席
00. 3.28	石井 米雄	神田外語大学長	平成11年度運営諮問委員会出席
00. 3.28～ 3.29	町田 章	奈良国立文化財研究所長	平成11年度運営諮問委員会出席
00. 3.28～ 3.29	北野 康	名古屋大学名誉教授	平成11年度運営諮問委員会出席
00. 3.28～ 3.29	石田 正治	愛知県立豊橋工業高等学校教諭	近代文化遺産の保存修復に関する研究交流

期 間	氏 名	所 属	招 へ い 理 由
00. 3.28～ 3.29	青木 典夫	かかみがはら航空宇宙博物館嘱託職員	近代文化遺産の保存修復に関する研究交流
00. 3.28～ 3.29	野口 英雄	ユネスコ文化遺産部招へい研究員	文化財の多様性の調査
00. 3.28～ 3.30	土谷富士夫	帯広畜産大学畜産環境学科教授	寒冷な環境下での遺跡、石造文化財の劣化と保存研究会出席
00. 3.29	登尾 浩助	岩手大学農学部農業生産環境師工学科講	寒冷な環境下での遺跡、石造文化財の劣化と保存研究会出席
00. 3.29	松田 隆嗣	福島県立博物館専門学芸員	寒冷な環境下での遺跡、石造文化財の劣化と保存研究会出席
00. 3.29～ 3.30	小林 幸雄	北海道開拓記念館学芸主査	寒冷な環境下での遺跡、石造文化財の劣化と保存研究会出席
00. 3.29～ 3.30	小林 孝二	北海道開拓記念館学芸主査	寒冷な環境下での遺跡、石造文化財の劣化と保存研究会出席
00. 3.29～ 3.30	高田 忠彦	(株)シリックス研究員	寒冷な環境下での遺跡、石造文化財の劣化と保存研究会出席
00. 3.29～ 3.30	武田 一夫	(株)鴻池組技術研究所研究員	寒冷な環境下での遺跡、石造文化財の劣化と保存研究会出席
00. 3.29～ 3.30	似内 啓邦	盛岡市教育委員会文化財主査	寒冷な環境下での遺跡、石造文化財の劣化と保存研究会出席
00. 3.29～ 3.30	福田 正己	北海道大学低温科学研究所教授	寒冷な環境下での遺跡、石造文化財の劣化と保存研究会出席
00. 3.29～ 3.30	津嶋 知弘	盛岡市教育委員会文化財主査	寒冷な環境下での遺跡、石造文化財の劣化と保存研究会出席
00. 3.29～ 3.30	中島 宏一	(財)北海道開拓の村学芸員	寒冷な環境下での遺跡、石造文化財の劣化と保存研究会出席
00. 3.29～ 3.30	山田 拓伸	大分県立博物館主幹研究員	寒冷な環境下での遺跡、石造文化財の劣化と保存研究会出席

3. 海外研究者等の来訪

(1) 来訪研究員

氏名	国籍	所属等
レイモンド・リーヴェンバーグ	オランダ	家具修復専門家
ウルゼル・ガスナー	ドイツ	家具修復専門家
シルヴィア・クラヴェーロ	イタリア	修復建築家

(2) 表敬訪問

日時	氏名	国籍	所属等	目的
1999年9月	魏 佐国	中国	江西省博物館主任	視察
1999年10月	アーサー・ピール	アメリカ	ボストン美術館保存修理管理総括官	日本美術品保存修復に係る懇談
1999年11月	ヌヌス・スパルディ	インドネシア	インドネシア教育文化省文化総局遺跡保護振興局長	視察
1999年11月	ロバート・レイン ウォーター	アメリカ	ニューヨーク公立図書館キュレーター	在外日本古美術品の修理打合せ
1999年12月	クラウス・J. プラント	ドイツ	シュトゥットガルトリンデン民族学博物館キュレーター	在外日本古美術品の修理打合せ
1999年12月	オマーク・アパング 他1名	インド	前インド観光大臣、日印芸術協会会長	視察
2000年2月	モニカ・コプリン	ドイツ	ミュンスター塗物美術博物館長	視察
2000年3月	W. F. ファイト	ドイツ	ベルリン東洋美術館長	在外日本古美術品の修理打合せ

6. 主な所蔵資料

1. 図書資料

(1) 美術関係図書

日本・東洋・欧米の美術に関する書籍を中心に、各地方公共団体編集の文化財関係調査報告書、展覧会の図録・目録類、売立目録、美術関係雑誌（和文2,015種・韓文37種・中文102種・欧文397種）等を所蔵している。

特色としては江戸期の写本版本や明治大正期刊行の大型図録・明治期開催博覧会関係資料・明治から昭和初期にかけて発行された和文美術雑誌など、多くの貴重書を所蔵している。

(2) 芸能関係図書

雅楽・寺後と・能・歌舞伎・文楽・邦楽・邦舞・民俗芸能・寄席芸、その他わが国のでんとうげいのうの研究に必要な図書11,628冊を所蔵する。演芸画報・歌舞伎新報・歌舞伎（第1次）・テアトロ（第1次）・新劇・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説などの雑誌、また声明本・謡本・囃子手付本・丸本などの台本・譜本も収集している。

(3) 保存科学・修復技術関係図書

伝統的生産および工芸技術書、技術史またはそれらの科学的究明を試みたもの、修理工事報告書および化学・物理学・生物学部門の保存科学の関連和洋書、合わせて3,717冊を所蔵している。

本年度における収集数と総計は次表の通りである。

区分（1999年度）	美術関係	芸能関係	保存科学・修復技術関係	計
和漢書	623冊	1,286冊	29冊	2,005冊
洋書	36冊	8冊	23冊	

2. その他

(1) 美術関係資料

実物よりの直接撮影を主にした写真資料の作成と、購入写真・複写写真による補足整備に加えて、印刷物中の図版をおさめるという方式で、当研究所設立当初より一貫して力を注いできた写真資料を有する。それらは日本東洋古美術、日本近代・現代美術、西洋美術の全般にわたり、それぞれ絵画・書籍・彫刻・工芸・建築等の諸部門に及ぶ。特別大型のものから小型のものまで総数およそ26万点、原板保有量はほぼ3分の1にあたり、別にマイクロ・フィルム255巻がある。写真資料のほか、拓本、作家伝記資料、落款印章資料、近代・現代の作家・団体・作品資料、資料スクラップ等と図書カード・図版カード・各種索引類など多数。

(2) 芸能関係資料

シネフィルム、ビデオテープ、レコード、写真等による芸能資料を数多く備えている。レコードには、毎年各社から発売される伝統芸能関係レコードのほか、1960（昭和35）年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションは、明治・大正・昭和3代にわたって発売された各種邦楽レコードを網羅したもので、近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。ビデオテープおよび写真等は、雅楽・能・歌舞伎・邦楽・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能を対象に記録してきたもので、演奏法の解析を中心とした写真、テープ、あるいは各種文書の記録写真等も含んでいる。資料別の所蔵数は、次の通りである。

区 分	シネフィルム		ビデオテープ			
	8 mm	16mm	β ・VHS方式	8 mm	B・C	D 6
1999年度	0本	0本	373本	46本	3本	78本
合 計	198本	4本	922本	151本	34本	78本

区 分	音 盤		
	SP・LP	CD	VHD・LD
1999年度	190枚	106枚	0枚
合 計	7309枚	910枚	16枚

(3) 保存科学・修復技術資料

考古遺物や美術工芸品など、諸部門の文化財を撮影したX線フィルム多数を所蔵する。X線透視撮影は昭和20年代から力を注いで行っており、近年それらのデータをデジタル化し、整理する作業を進めている。

7. 研究所関係資料

1. 設立の経緯

東京国立文化財研究所は、昭和27年4月1日に発足したが、その前身であり母体となったものは、昭和5年に創設された政府機関の帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は、大正13年7月、帝国美術院長子爵故黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために寄附出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志にしたがってこの資金で行うべき事業の選択を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原隼二郎及び東京美術学校長正木直彦とはかつて諸方面の意見を徴し、またわが国美術研究の必要に照らして次の事業を行うこととした。

- (1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
- (2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
- (3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。
- (4) 事業成立の上は一切これを政府に寄附すること。

2. 年代別重要事項

期 日	事 項
昭和元年12月	前記の事業を遂行するため委員会が組織され、東京美術学校長正木直彦が委員長に就任し、美術研究所事業については東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列については東京美術学校教授久米桂一郎・同岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二及び大給近清、建物造営については東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務については遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。
昭和2年2月	美術研究所準備事業を開始した。
同 年10月	東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1,192m ² の建物1棟を起工した(本館)。
昭和3年9月	前記の建物が竣工したので、黒田記念館と名付け、美術研究所開設のため必要な備品・図書・写真等の研究資料を設備し、また館内に黒田子爵記念室を設け、黒田清輝の作品を陳列した。
昭和4年5月	遺言執行人代表者樺山愛輔は、建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願ひ出た。
昭和5年6月28日	勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ、東京美術学校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。
同 年10月17日	美術研究所開所式を挙行した。
昭和7年1月	美術研究所の研究成果発表機関誌として、定期刊行物『美術研究』を創刊した。
同 年4月18日	株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う5か年間毎年5千円、合計2万5千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。
同 年5月26日	帝国美術院はこの申出を受理した。 明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行うことになった。
昭和9年10月18日	毎年10月18日を開所記念日と定めた。
昭和10年1月28日	鉄筋コンクリート造、2階建、延面積129m ² の書庫が竣工した。

期 日	事 項
昭和10年 4月	『日本美術年鑑』の編纂事務を開始した。
同 年 6月 1日	勅令第148号により美術研究所官制が公布された。 研究資料閲覧規定を制定し、閲覧事務を開始した。
昭和12年 6月24日	勅令第281号により美術研究所官制中改正の件が公布され、従来、帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。
同 年11月29日	美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。
昭和13年 2月12日	木造、平屋建、延面積97m ² の写真室1棟が竣工した。
昭和19年 8月10日	黒田清輝の作品、並びに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。
昭和20年 5月28日	美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町1丁目日本間家倉庫3棟に疎開した。
同 年 7～ 8月	酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため、さらに酒田市外牧曾根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之丞家倉庫にそれぞれ分散疎開した。
昭和21年 3月29日	酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。
同 年 4月 4日	酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し、引揚げを完了した。
同 年 4月16日	東京都西多摩郡に疎開中の黒田清輝作品並びに写真原版の引揚げを完了した。
昭和22年 5月 1日	美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。 国立博物館に保存修理課発足。同課内に保存技術研究室を置いた(保存科学部の前身)。昭和23年度より専任の職員を配置し、研究を開始した。研究室は国立博物館本館地下の修理室の一室(66m ²)に設けた。
昭和25年 8月29日	文化財保護法の制定にともない、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。
同 年 8月29日	文化財保護委員会事務局設置にともない、保存科学研究室は国立博物館保存修理課から文化財保護委員会事務局保存部建造物課に所属換えとなった。
昭和26年 1月31日	美術研究所組織規程が定められ第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。
昭和27年 4月 1日	文化財保護法の一部が改正、東京文化財研究所組織規程が定められ、美術部・芸能部・保存科学部・庶務室の3部1室が置かれ、美術研究所組織規程が廃止された。 また文化財保護委員会事務局保存部建造物課保存科学研究室も廃止された。
同 年 7月 1日	芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室2室を同大学から借用し、研究を開始した。
昭和28年 4月26日	保存科学部研究室として、東京国立博物館構内の倉庫132m ² を改造のうえ移転した。
昭和29年 7月 1日	東京文化財研究所組織規程の一部が改正され、東京国立文化財研究所となった。
昭和32年 3月22日	東京国立博物館構内に木造、外部鉄網モルタル塗、平屋建、8m ² の保存科学部の薬品庫が竣工した。
同 年11月30日	従来2階建書庫の上にさらに1階を増築3階建とし、増築分延面積71m ² が竣工した。
昭和34年 4月30日	東京国立文化財研究所研究受託規程が定められ、この年度から受託研究が開始された。
昭和36年 9月16日	東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、従来の庶務室は庶務課となった。
昭和37年 3月31日	東京国立博物館内に保存科学部庁舎(保存科学部実験室)として、鉄筋コンクリート造、2階建、延面積663m ² の建物1棟が竣工した。
同 年 7月 1日	東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。
同 年 7月20日	芸能部研究室は、保存科学部庁舎の竣工にともない、旧保存科学部庁舎に移転した。
昭和43年 6月15日	文部省設置法の一部が改正され、本研究所は文化庁附属機関となった。
昭和44年 8月23日	保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎(延1,950.41m ²)の起工式が行われた。
昭和45年 3月25日	前記の別館が竣工したので、同年5月26日竣工式が行われた。
同 年 3月25日	芸能部は、別館3階に移転した。

期 日	事 項
昭和45年 5月 8日	保存科学部は別館の地階～2階に実験用機械類の移転据付を完了した。
同 年 6月29日	保存科学部庁舎の1階の模様替工事に着手し、同年10月15日工事が完了した。
同 年11月 2日	所長及び庶務課は、本館から保存科学部庁舎の1階に移転した（本館は、美術部庁舎となる）。 これにより研究所の所在地表示は「12番53号」が「13番27号」に変更された。
昭和46年 4月 1日	保存科学部庁舎及び別館の敷地2,658m ² を東京国立博物館から所管換された。
昭和48年 4月12日	文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部が設けられ4部1課となり、修復技術部に第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室が置かれ、保存科学部修理技術研究室は廃止された。
昭和52年 4月18日	文部省設置法施行規則の一部が改正され、情報資料部の新設により5部1課となり、情報資料部に文献資料研究室及び写真資料研究室が置かれ、美術部資料室は廃止された。
昭和53年 3月20日	本館構内の写場等（木造、平屋建、延面積144m ² ）を取りこわし、情報資料部研究棟として、鉄筋コンクリート造、地下1階、地上3階、延面積569.95m ² の建物が竣工した。
昭和53年 4月 5日	文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部に第三修復技術研究室が置かれた。
昭和59年 6月28日	文部省組織令が改正され、本研究所は文化庁施設等機関となった。
平成 2年10月 1日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、新たにアジア文化財保存研究室が置かれ、5部1室1課となった。
平成 5年 4月 1日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、アジア文化財保存研究室は、国際文化財保存修復協力室となった。
平成 7年 4月 1日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、国際文化財保存修復協力室が廃止され、新たに国際文化財保存修復協力センターが設置された。同センターには、企画室及び環境解析研究指導室が置かれ、1センター5部1課となった。
平成 7年 4月 1日	東京芸術大学と「東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻の教育研究に対する連携・協力に関する協定書」が交わされ、連携併任分野として独立専攻大学院文化財保存学専攻（システム保存学）が設置された。
平成 9年10月 1日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、国際文化財保存修復協力センターに保存計画研究指導室が置かれた。
平成12年 2月 4日	新営庁舎として、鉄筋コンクリート造、地上4階地下1階、延面積10,557.99m ² （建築面積2,258.48m ² ）が竣工した。
平成12年 2月21日	新営庁舎の竣工にともない、別館（庶務課・芸能部・保存科学部・修復技術部・国際文化財保存修復協力センター）部分の移転が開始された。
平成12年 3月 6日	新営庁舎の竣工にともない、本館（美術部・情報資料部）の移転が開始された。
平成12年 3月22日	建設省関東地方建設局営繕部より、新営庁舎の外構工事、植栽等の引き渡しを受け、新営庁舎関係の工事が完了した。

3. 歴代所長（昭和5年～平成11年）

役 職	氏 名	期 間
主事	正 木 直 彦	昭和 5. 6.28～昭和 6.11.24
主事	矢 代 幸 雄	昭和 6.11.25～昭和10. 5.31
所長事務取扱	和 田 英 作	昭和10. 6. 1～昭和11. 6.21
所長	矢 代 幸 雄	昭和11. 6.22～昭和17. 6.28
所長事務取扱	田 中 豊 蔵	昭和17. 6.29～昭和22. 8.15
所長	田 中 豊 蔵	昭和22. 8.16～昭和23. 5.10
所長代理	福 山 敏 男	昭和23. 5.11～昭和24. 8.30
所長	松 本 栄 一	昭和24. 8.31～昭和27. 3.31
所長事務代理	矢 代 幸 雄	昭和27. 4. 1～昭和28.10.31
所長	田 中 一 松	昭和28.11. 1～昭和40. 3.31
所長	関 野 克	昭和40. 4. 1～昭和53. 4. 1
所長	伊 藤 延 男	昭和53. 4. 1～昭和62. 3.31
所長	濱 田 隆	昭和62. 4. 1～平成 3. 3.31
所長	西 川 杏太郎	平成 3. 4. 1～平成 8. 3.31
所長	渡 邊 明 義	平成 8. 4. 1～現在

4. 名誉研究員

氏 名	退職時官職名	在所期間	名誉研究員 発令年月日
白 畑 よ し		昭和 5. 6.30～昭和27. 8. 1	昭和53.10.18
高 田 修	美術部長	昭和27.12. 1～昭和44. 3.31	昭和53.10.18
登 石 健 三	保存科学部長	昭和27.10. 1～昭和50. 4. 1	昭和53.10.18
岡 畏 三 郎	美術部長	昭和20. 5.15～昭和51. 4. 1	昭和53.10.18
関 野 克	所長	昭和40. 4. 1～昭和53. 4. 1	昭和53.10.18
秋 山 光 和	美術部第一研究室長	昭和16.10. 1～昭和42. 2. 1	昭和54.10.18
久 野 健	情報資料部長	昭和20. 5.31～昭和57. 4. 1	昭和57.10.18
川 上 涇	美術部長	昭和21. 2.28～昭和57. 4. 1	昭和57.10.18
関 千 代	美術部第二研究室長	昭和18.12.15～昭和58. 4. 1	昭和58.10.18
横 道 萬里雄	芸能部長	昭和28. 3.16～昭和51. 4. 1	昭和59.10.18
上 野 ア キ	情報資料部文献資料研究室長	昭和17.11. 3～昭和59. 4. 1	昭和59.10.18
江 上 綏	情報資料部主任研究官	昭和38. 5.18～昭和59. 3.31	昭和59.10.18
田 村 悦 子	美術部主任研究官	昭和22. 6.16～昭和60. 3.31	昭和60.10.18
猪 川 和 子	情報資料部文献資料研究室長	昭和22. 6.27～昭和60. 3.31	昭和60.10.18
伊 藤 延 男	所長	昭和53. 4. 1～昭和62. 3.31	昭和62.10.18
柳 澤 孝	美術部長	昭和21. 9.30～昭和62. 3.31	昭和62.10.18
三 隅 治 雄	芸能部長	昭和27.10. 1～昭和63. 3.31	昭和63.10.18
樋 口 清 治	修復技術部長	昭和37.11. 1～昭和63. 3.31	昭和63.10.18
田 實 栄 子	美術部主任研究官	昭和23. 3.31～平成元. 3.31	平成元.10.18
見 城 敏 子	保存科学部物理研究室長	昭和34. 4. 1～平成元. 3.31	平成元.10.18
濱 田 隆	所長	昭和62. 4. 1～平成 3. 3.31	平成 3.10.18
関 口 正 之	美術部長	昭和42. 2. 1～平成 3. 3.31	平成 3.10.18
佐 藤 道 子	芸能部長	昭和34. 4. 1～平成 4. 3.31	平成 4.10.18
馬 淵 久 夫	保存科学部長	昭和50.10. 1～平成 4. 3.31	平成 4.10.18
新 井 英 夫	保存科学部長	昭和45. 9. 1～平成 5. 3.31	平成 5. 4. 1
西 川 杏 太 郎	所長	平成 3. 4. 1～平成 8. 3.31	平成 8. 4. 1
門 倉 武 夫	保存科学部生物研究室長	昭和32. 4. 1～平成 8. 3.31	平成 8. 4. 1
三 輪 英 夫	美術部第二研究室長	昭和53. 8. 1～平成 8. 3.31	平成 8. 4. 1
蒲 生 郷 昭	芸能部長	昭和56. 4. 1～平成10. 3.31	平成10. 4. 1
中 里 壽 克	修復技術部第一修復技術研究室長	昭和39. 4. 1～平成10. 3.31	平成10. 4. 1
宮 本 長 二 郎	国際文化財保存修復協力センター長	平成 6. 4. 1～平成11. 3.31	平成11. 4. 1

5. 1999（平成11）年度予算等

(1) 予 算

（単位：千円）

事 項	予 算 額
1. 人件費	422,613
2. 運営費	42,511
管理運営経費	42,511
3. 研究事業費	507,192
一般研究	66,876
受託研究	2,417
事業経費	243,414
国際研究協力経費	87,314
調査研究等特別推進経費	107,171
4. 文化財情報総合システムの整備	44,993
合 計	1,017,309

(2) 調査研究等特別推進経費一覧

（単位：千円）

事 項	予 算 額
外来美術の伝承と受容に関する調査研究	
日本近代美術の形成と発展に関する調査研究	
無形文化財の伝承に関する調査研究	
文化財施設の保存環境に関する調査研究	
現代環境下における文化財の保存・修復処置方法に関する調査研究	
近代の文化遺産の保存・修復に関する調査研究	
文化財保存修復の国際協力に関する調査研究	
合 計	107,171

(3) 科学研究費補助金交付一覧

(単位：千円)

研究種目	研究課題	研究代表者	交付額
基盤研究(A)	日本における美術史学の成立と展開	米倉 迪夫	2,900
〃	中国陝西省唐代石窟造像の調査研究 —慈善寺石窟と麟溪橋摩崖仏を中心として—	岡田 健	7,700
〃	世界の文化財の保存 —わが国による国際協力体制構築のための調査・研究—	西浦 忠輝	5,200
〃	彩色文化財の材料と技法に関する科学研究	渡邊 明義	7,000
〃	早期中国青銅器の原料産地に関する研究	平尾 良光	4,600
〃	文化財の新たな総合的虫菌害防除対策 (IPM) のシステム構築に関する研究	三浦 定俊	7,000
基盤研究(B)	タイ国・アユタヤ遺跡の保存修復に関する研究	西浦 忠輝	2,100
〃	古代日本の動物遺体のDNA解析および免疫学的分析	木川 りか	3,600
〃	石造文化財の劣化機構と保存対策手法の研究	石崎 武志	2,400
〃	下張り文書剝離のための澱粉糊の老化技術	増田 勝彦	900
〃	屋外環境下での遺跡、石造文化財の保存対策手法の開発	石崎 武志	5,900
基盤研究(C)	極楽浄土を表象するモチーフとしての迦陵頻伽の諸相とその文化的特質—鳥と人からなる動物を通してみた東西文化の交流とその中国的受容—	勝木言一郎	1,300
〃	地方に残る雅楽・能楽の古楽器研究に関する研究	高桑いづみ	800
〃	新史料翻刻による花祭りの芸能史的位置づけ —大神楽から花祭りへ—	中村 茂子	500
〃	石造、レンガ建造物の劣化にかかる材料物性の研究	石崎 武志	2,000
〃	地方に残る雅楽・能楽の古楽器研究に関する研究	高桑いづみ	3,100
奨励研究(A)	菊池容斎についての基礎的研究	塩谷 純	700
合計			54,600

(4) 受託研究一覧

(単位：千円)

研究課題	受入額
武者塚古墳出土遺物の保存修復研究	399
江戸期銀貨の品位と保存に関する研究—銀貨表面の濃化層の分析を中心として—	420
花籠車蒔絵の修復処置研究	530
装幀材料の物性研究	300
国宝「源氏物語絵巻」及び平安時代絵画資料等の調査研究	268
国宝「源氏物語絵巻」の調査研究	150
金唐革紙分析調査	350
合計	2,417

6. 関係法規

◎文部省組織令（抄）（昭59.6.28 政令第227号）
（最終改正 平9.8.22）

第2章 文化庁

第3章 施設等機関

（施設等機関）

第108条 文化庁長官の所轄の下に、文化庁に国語研究所を置く。

2 前項に定めるもののほか、文化庁に次の施設等機関を置く。

国立博物館

国立近代美術館

国立西洋美術館

国立国際美術館

国立文化財研究所

（国立文化財研究所）

第144条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

3 国立文化財研究所及びその支所の名称、位置及び内部組織は、文部省令で定める。

（研究施設の指定）

第115条 国立国語研究所及び国立文化財研究所は、法第5条第37条に規定する政令で定める研究施設とする。

◎文部省設置法施行規則（抄）（昭28.1.13 文部省令第2号）
（最終改正 平9.10.1）

第5章 文化庁の施設等機関

第4節 国立文化財研究所

第1款 名称及び位置

（名称及び位置）

第116条の9 国立文化財研究所の名称及び位置は、次の表に掲げるとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東京都台東区
奈良国立文化財研究所	奈良県奈良市

第1款の2 東京国立文化財研究所

（所 長）

第117条 東京国立文化財研究所に、所長を置く。

2 所長は、所務を掌理する。

（内部組織）

第118条 東京国立文化財研究所に、庶務課次の5部を置く。

一 美術部

二 芸能部

三 保存科学部

四 修復技術部

五 情報資料部

2 前項に定めるもののほか、東京国立文化財研究所に、国際文化財保存修復協力センターを置く。

(庶務課の事務)

第119条 庶務課においては、次の事務をつかさどる。

- 一 職員の人事に関する事務を処理すること。
- 二 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。
- 三 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。
- 四 経費及び収入の予算、決算その他会計に関する事務を処理すること。
- 五 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。
- 六 庁内の取締まりに関すること。
- 七 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属さない事務を処理すること。

(美術部の二室及び事務)

第120条 美術部に、第一研究室及び第二研究室を置く。

- 2 第一研究室においては、わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術に関する調査を行い、及びその結果の公表を行う。
- 3 第二研究室においては、わが国近代及び現代の美術並びに西洋美術に関する調査研究を行い、及びその結果の公表を行うとともに黒田記念室に関する事務をつかさどる。

(芸能部の三室及び事務)

第121条 芸能部に、演劇研究室、音楽舞踊研究室及び民俗芸能研究室を置く。

- 2 演劇研究室においては、演劇及びその保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 3 音楽舞踊研究室においては、音楽及び舞踊並びにこれらの保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 4 民俗芸能研究室においては、民俗芸能及び保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(保存科学部の三室及び事務)

第122条 保存科学部に、化学研究室、物理研究室及び生物研究室を置く。

- 2 化学研究室においては、文化財及びその保存に関する化学的調査研究(分析化学的調査研究を含む。)を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 3 物理研究室においては、文化財及びその保存に関する物理学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
- 4 生物研究室においては、文化財及びその保存に関する生物学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(修復技術部の三室及び事務)

第122条の2 修復技術部に、第一修復技術研究室、第二修復技術研究室及び第三修復技術研究室を置く。

- 2 第一修復技術研究室においては、木、漆その他次項及び第4項の材料以外のものを材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
- 3 第二修復技術研究室においては、紙、布又は草を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
- 4 第三修復技術研究室においては、石、土又は金属を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。

(情報資料部の二室及び事務)

第122条の3 情報資料部に、文献資料研究室及び写真資料研究室を置く。

- 2 文献資料研究室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る文献資料その他の資料(写真資料を除く)の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行う。
- 3 写真資料室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る写真資料その他の資料の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行う。

(国際文化財保存修復協力センター)

第122条の4 国際文化財保存修復協力センターにおいては、文化財の分野における国際的な貢献に資するため、世界の文化財の保存修復に関する国際協力、資料収集、調査研究及びその結果の公表並びに専門的、技術的な研修を行

う。

(国際文化財保存修復協力センターの長)

第122条の5 国際文化財保存修復協力センターに長を置く。

2 前項の長は、国際文化財保存修復協力センターの事務を掌理する。

(国際文化財保存修復協力センターの三室及び事務)

第122条の6 国際文化財保存修復協力センターに、企画室、環境解析研究指導室及び保存計画研究指導室を置く。

2 企画室においては、世界の文化財の保存修復に関する国際協力及び研修について、企画及び実施に係る事務を処理する。

3 環境解析研究指導室においては、世界の文化財の保存環境の解析に関する資料収集、調査研究及びその結果の公表並びに専門的、技術的な研修を行う。

4 保存計画研究指導室においては、世界の文化財の保存計画に関する資料収集、調査研究及びその結果の公表並びに専門的及び技術的な研修を行う。

(客員研究員)

第122条の7 東京国立文化財研究所に客員研究員を置くことができる。

2 客員研究員は、所長の命を受け、東京国立文化財研究所において行う調査研究に参画する。

3 客員研究員は、非常勤とする。

7. 施設（新館）の概要

(1) 土 地

位 置 東京都台東区上野公園13-43

当館は台東区上野公園北西部の一隅に位置している。南側は東京国立博物館の平成館に接し、東側は東京国立博物館本館裏手の日本庭園よりつづく樹高20mに及ぶ緑により覆われている。北側隣地は一方通行の道路をはさんで寛永寺霊園、西側は台東区立上野中学校に面している。

地域地区 第2種住居専用地域、準防火地域、第3種高度地域、第1種文教地区、第2種風致地区、都市計画公園、日影規制区域（3時間、2時間）

敷地面積 4,181m²

(2) 建 物

設 計 建築 建築研究所アーキヴィジョン

構造 構造計画研究所

設備 総合設備計画

監 理 建設省関東地方建設局営繕部

建築研究所アーキヴィジョン

施 工 建築 大林・ナカノ特定建設工事共同企業体

空調 東芝空調

衛生 経塚工業

電力 千歳電気工業

通信 北陸電気工事

昇降機 ダイコー

書架 日本ファイリング

構造規模 鉄骨鉄筋コンクリート造地上4階・地下1階建て

建物高さ 21.53m

建築面積 2,258.48m²

延床面積 10,557.99m²

階数	各階延床面積	主室内内訳
塔屋	147.95m ²	E V機械室他
4階	1,833.48m ²	国際文化財保存修復協力センター研究室
3階	2,056.18m ²	保存科学部研究室、修復技術部研究室、書庫
2階	2,015.98m ²	所長室、美術部研究室、情報資料部研究室、資料閲覧室、書庫
1階	2,067.02m ²	庶務課事務室、センター事務室、収蔵庫、芸能部研究室、写場・調査室
地階	2,437.38m ²	会議室、セミナー室、実演記録室

(3) 設備の概要

主要な設備、装置、機器の概要は下記のとおりである。

電気設備

- 1) 受変電設備 東京電力の普通高圧6.6KV配電線より、建物内に地中管路にて引き込み、地下1階電気室内の高圧キュービクル受電盤にて受電する。
- 受電電圧 3相3線 6.6KV 50HZ 1回線受電
- 設備容量 1,700KVA
- 機器仕様 高圧遮断器 真空遮断器 変圧器 乾式モールド型
- 電灯用 単相3線 6.6KV/210V-105V
- 動力用 3相3線 6.6KV/210V
- 非常用 単相3線 6.6KV/105V 2回線
- 2) 自家発電設備 商用電力の停電時において、防災用（排煙ファン・屋内消火栓ポンプ・非常用照明）及び保安用（揚水ポンプ・排水ポンプの一部・保安用照明）負荷の運転に備えて非常用自家発電機を設置する。
- 装置仕様 水冷式ディーゼルエンジン発電機
- 機器仕様 3相3線 6.6KV 375KVA 50HZ
- 3) 直流電源設備 非常用照明及び受変電機器の操作用直流電源として、自動充電式蓄電池を設置する。非常照明用負荷への供給は自家発電機電源と併用方式のため、10分間容量である。
- 装置仕様 蓄電池 陰極吸収式シール形据置 鉛蓄電池
- 整流器 自動定電圧装置付サイリスタ式整流器

空気調和設備

- 1) 空気調和設備 冷温水機、チラーユニットの熱源機器より個別又は共用の空調機、ファンコイル、パネルヒーターへ冷温水、冷水を供給して冷暖房を行う。また、一部の部屋にはパッケージエアコンにより単独空調を行っている。
- 機器仕様 冷温水機 ガス焚吸収式冷温水機 冷凍能力 635,000kcal/h 2台
- 加熱能力 531,300kcal/h
- 冷凍機 空冷ヒートポンプチラー 冷凍能力 137,600kcal/h 2台
- (チラー) 加熱能力 129,860kcal/h
- 〃 空冷冷専チラー 冷凍能力 57,620kcal/h 3台
- 2) 換気設備 ユニット型空気調和機で空調している部屋や特殊空調室（1階収蔵庫他）を除く部屋は各々単独（一部共用）で換気設備を有する。室内排気設備としては主に天井換気扇、ダクトファン、有圧扇により単独で排気を行っている。室内給気設備は、外調機により熱処理（冷・暖房）された外気を各室へ送っている。また、中間期（春・秋）など外調機停止時には廊下とのパスダクトを通り、共用部の空気が室内へ流入する。
- 3) 排煙設備 原則自然排煙方式とするが、消防法、建築基準法に基づき地下1階居室部分や各階廊下ホール等に機械排煙設備を設けている。
- 装置仕様 排煙機 片吸込遠心送風機 32,000m²/h
- 排煙口 パネル型、排煙ダンパー併用電気室

給排水設備

- 1) 一般給水 都水道より、西側道路給水管から75ミリの量水器を経由して、地下受水槽に貯水し、圧力給水ポンプユニットで各所へ給水。このポンプは、2台あり最大700L/minの能力があり、インバーター制御により対応している。

- 2) 排水設備 建物内には、雑排水・汚水・実験排水・雨水の4系統の排水管があり、建物内は分流配管、屋外で合流配管になり、北側・西側より雨水配管と合流し、公設枡より都下水管に放流する。実験排水は、全て地下主機械室Aの実験排水槽に集まり、pH管理のもとに排水水中ポンプで北側屋外排水枡へ排水する。

昇降機設備

乗用エレベーター及び荷物用エレベーターには、地震時管制装置、火災時管制装置、自家発管制装置有り。

- | | | | | | |
|--------------|----|--------|------------|------|-------------|
| 1) 乗用エレベーター | 1基 | 積載荷重 | 13人乗り900kg | 定格速度 | 60m/min |
| | | 運転操作方式 | 乗合全自動方式 | 停止階数 | B 1階～4階 5個所 |
| 2) 荷物用エレベーター | 1基 | 積載荷重 | 1,200kg | 定格速度 | 45m/min |
| | | 運転操作方式 | 全自動方式 | 停止階数 | B 1階～4階 5個所 |
| 3) ダムウエーター | 1基 | 積載荷重 | 200kg | 定格速度 | 30m/min |
| | | 運転操作方式 | 相互階制御 | 停止階数 | 2階～3階 2個所 |
| 4) テーブルリフト装置 | 1基 | 積載荷重 | 1,500kg | 定格速度 | 500mm/min |

通信設備

- 1) 構内交換設備 全館の電話システムは、構内交換装置とし電子交換機を設置する。
 設備仕様 デジタル電子交換機 1台
 アナログ局線 20/16 一般アナログ内線 80/80 多機能内線 16/16
 PHS基地局 30/28 PHS子機 20/10
- 2) 火災報知設備 消防法、建築基準法に基づく自動火災報知設備及び防火戸・排煙制御設備を設置する。
 設備仕様 複合受信盤 GR型 1式
- 3) 拡声放送設備 消防法に基づき、非常用防災アンプを設置して火災発生時の告知・避難・誘導のための非常放送と館内呼び出し等の一般放送業務を行う。

以上のほか、インターホン設備、テレビ共同受信設備、防犯設備、避雷針設備、舞台音響・照明設備、セミナー室映像・音響設備、LAN機器設備等が設置されている。

東京国立文化財研究所年報 1999年度

2000 (平成12) 年11月30日 発行

発行所 東京国立文化財研究所

〒110-8713 東京都台東区上野公園13-43

TEL 03-3823-2241 (番号案内)

FAX 03-3828-2434

<http://www.tobunken.go.jp>
